

江戸期から平成期の

鹿角人物事典

鹿角市先人顕彰館研究員編

鹿角市教育委員会

発 刊 に 寄 せ て

先人顕彰館は、郷土の豊かな文化を築いた優れた先人を顕彰し、その遺徳を偲ぶとともに、それぞれの偉大な人間形成の過程を学ぶため、先人の関わりのある資料の収集・保存と調査研究を通じて展示の充実を図りながら、広く市民などに紹介し、あわせて教育文化の向上に寄与することとしております。

この度、昭和 63 年に先人顕彰館の開館と同時に発足した先人顕彰館研究員によって長期にわたり調査研究してきた郷土の先人について、調査研究の成果として鹿角人物事典を発刊することといたしました。

本書は、各分野において優れた事績があり本市にゆかりのある先人を知ることができる資料として、これからの調査研究の一助となると確信しております。

結びにあたり、先人顕彰館研究員並びに調査研究にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます、発刊のあいさつといたします。

2020年3月

鹿角市教育委員会 教育長 畠山 義孝

『鹿角人物事典』編さんにあたって

『鹿角人物事典』をここに発刊することになりました。

1988（昭和63）年10月開館した鹿角市先人顕彰館は、内藤湖南と和井内貞行の常設展示と、二人の他の鹿角のゆかりのすぐれた先人を顕彰する特別展示を併設して一般公開してきました。2011（平成23）年、顕彰者が50人に達したところで、先人顕彰館研究員を中心に委員会を作って『鹿角市先人顕彰集成』を発刊いたしました。

その後、この鹿角の地で、あるいはこの地から外に出て、それぞれの分野で活躍した先人をもっと広く顕彰する「人物事典」を作ろうということになりました。幸い鹿角市も、厳しい財政事情のなか、事典の発刊を決断してくれました。準備にとりかかったのが2013年、先人顕彰館研究員10名による作業が続けられ、ようやく2020年を迎えた今、発刊することになりました。

この事典で取り上げた人物は、江戸期から現在（2019年末）までの故人約500名で、政治・経済・産業・社会福祉・学術・教育・文化・スポーツの諸分野で顕著な功績のあった人です。人選にあたっては、①鹿角市で生まれた人または父祖が鹿角市にゆかりの人、②市外出身でも鹿角市に住み、あるいは鹿角市に往来して鹿角市と深く関わる仕事をした人、を対象にしました。市内全域を網羅したつもりですが、洩れた人がありましたらご容赦ください。調査に快く協力して下さったご遺族や関係者の方々に感謝申し上げます。

かつて日本有数の鉱山地帯を誇り、日本海側と太平洋側を結ぶ交通の要衝でもあった鹿角は、多くの人と文化が交流する独特の地域として発展してきました。南部領としての300年、秋田県としての150年の歴史の中で、その時々を生きた先人たちが残した足跡を辿ることによって、少子高齢化の進む郷土鹿角の明日への展望を見出したいものです。また、本書が小中高の児童・生徒のふるさと学習の一助となり、郷土の先人の意思を継がんとする若い人に勇気と指針を与えてくれることを願ってやみません。

2020年3月

鹿角市先人顕彰館研究員代表 高木英子

凡 例

◇ 本事典の構成と内容

第一部・人物編、第二部・資料編の二部門をもって構成した。

第一部〔人物編〕について

第一部では現在の鹿角市の江戸期から平成期までの先人について各分野で活躍、功績を残した人物を取り上げた。

1. 人物の配列は、①人物名・生没年②功績のタイトル③本文④参考文献、の配列で、50音順とした。
2. 人物の選定の基準は、戦国期に誕生した人物であっても江戸期に活躍した場合は取り上げることとし、2019年末日までに亡くなった人物までとした。
3. 江戸期から平成期までの現在の鹿角市全域の出身者・在住者、鹿角市に関わりの深い人物、当時鹿角を往来して大きな影響を与えた人物などを取り上げたが、その総数は約500名に及ぶ。
4. 生没年の表記は西暦・元号の順とし、本文では逆に元号を基準とした。なお、必要に応じて元号の後に西暦を付し、同じ元号が続く場合はできるだけ省略した。
5. 没年の享年については、他の文献に数え年で記されている場合であっても、満年齢に訂正して表記した。
6. 人物の参考文献については、本文の末尾に記した。

第二部〔資料編〕について

第二部では鹿角の人物に関わりの深い姓氏・名字や元号・干支表、幕末期の御給人表、鹿角市の歴代被表彰者一覧表（一般表彰者を除く）などを収録した。

目 次

発刊に寄せて

『鹿角人物事典』編さんにあたって

凡例

目次

第1部 人物編

人物総索引	(1) ~ (12)
人物事典	1~193

第2部 資料編

鹿角中世館跡所在図	195
鹿角42郷村から現在までの合併一覧	196~197
盛岡藩における行政区(通制)	198
鹿角に多い名字100	199
南部氏の分流名字一覧	200~201
盛岡南部氏藩主表	202
盛岡藩中野氏・桜庭氏・北氏家臣一覧	203
花輪・毛馬内両通り御給人表	204
鹿角選出県会議員一覧	205
郡長/市町村長一覧	206~211
鹿角市功労者・文化功労者一覧	212~215
鹿角市芸術文化協会表彰者一覧	216
鹿角郡市内小・中・高校変遷図	217~225
西暦・年号早見表・干支順位表	226~228

あとがき	229
------	-----

人
物
編

人 物 総 索 引

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
あ		
相川善一郎	秋田県を代表する彫塑・彫刻家	1
相川積	文化財保護・内藤湖南の顕彰に尽力	1
青山イト	民生安定と女性の地位向上に貢献	1
青山金右衛門昌周	白根・尾去沢鉱山で活躍した山先	2
青山金弥	足尾銅山の兵站基地草倉銅山を経営した山相家	2
青山七三郎	日本で初めて坑内に電力を導入した鉱山技術者	2
青山庄左衛門昌良	白根金山を見立てたとされる青山家の初代	3
青山庄蔵榮重	足尾銅山興隆の基礎を築いた山相家	3
青山忠七金貞	青山長者と言われた絵師	4
青山倭	県議会議員として地方行政に尽力した政治家	4
青山芳得	海軍大佐、日露戦争時の日本海海戦における魚雷隊長	4
赤尾卓頼（又兵衛）	毛馬内氏に代わって大湯城預かり	5
赤坂文弥	『赤い鳥』文芸教育運動を推進した歌人・教育者	5
浅井末吉（小魚）	郷土史研究家・俳人	6
浅沼郷左衛門	幕末の毛馬内の山口流剣道指南	6
浅利悦造	少年剣士育成に生涯をかけた剣道教士	6
浅利佐助	醤油醸造業の基礎を築く	7
浅利成和	剣道・居合道の振興、俳人	7
浅利忠	県内のスポーツ振興に尽力した教育者	8
浅利民彌	分析化学の権威者、原水爆の放射能分析をした理学博士	8
阿部新	鹿角市初代市長として新体制の構築に尽力	9
阿部義平	考古学者、国立歴史民俗博物館教授	9
阿部恭助	鉱山日記・『阿津免草』の著者	9
阿部小平治	白根・尾去沢鉱山を稼行した仙台の豪商・山相家	10
阿部繁治	鹿角の社会科教育振興及び市史編纂に尽力	10
阿部甚七（甚正）	維新の動乱を生き抜いた初代宮川村村長	11
阿部甚之助	文化財保護、『大日堂舞楽』の刊行に貢献	11
阿部真平	『世界の奇蹟・玉川温泉』を発刊した地元記者	11
阿部征司	仮面ライダーを産んだ東映の敏腕プロデューサー	12
阿部仙藏	県営ほ場整備事業の完成に尽力	12
阿部善之助	夏井村の耕地区画整理事業を完遂	12
阿部貞一	農村電化と観光事業の先覚者	13
阿部藤助	八幡平地区の興隆に生涯をささぐ	13
阿部壽	私学教育の振興に尽力	14
阿部廣吉	中小企業の育成振興に尽力	14
阿部牧郎	鹿角初の直木賞作家	15
阿部安子	杉の下保育園の創始者	15
阿部隆之介	地方自治・産業・観光の振興に尽力	16
阿部六郎	大正・昭和期の教育者、文化人	16
安倍悦人	「大日堂舞楽」を復興した名村長	16
安倍多喜恵	村人に慕われた学校長	17
安部洋直	陸上競技・スキートの振興に尽力	17

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
い		
池田吉兵衛	花輪大堰の開削に尽力	18
池田左五右衛門	戊辰戦争で勇戦した濁川村御境古人	18
石井功	中学校の音楽教育と吹奏楽演奏に指導力を発揮した教育者	18
石井照光	ノルディックスキーの選手・指導者として活躍	19
石垣柯山	花輪で有為の人材を育てた漢学者	19
石川儀平	社会有用の一族	20
石川伍一	中国での軍事情報収集で活躍した志士	20
石川啄木	「鹿角の國を憶ふ歌」「錦木塚」を詠んだ歌人・俳人	21
石川達三	反骨・信念を貫いた第一回芥川賞作家	21
石川理紀之助	鹿角の農政指導、柴内村の「適産調」に尽力	22
石川漣平	陸軍大学校卒業の陸軍中將	22
石木田新太郎	大正～昭和初期の政治家・文化住宅の建設	23
石木田八弥	宮沢賢治の自然農法の実践者の一人	23
石田英一郎	日本における文化人類学の創始者	24
石田儀左衛門	白根近隣諸鉱山を稼行した山師	24
石田幸四郎	細川内閣の実現、自公連立などに活躍した政治家、宗教家	24
石田収蔵	北方民俗研究の草分け	25
石田八弥	日本の鉱山学の近代化に貢献	25
泉澤織太	私塾を開いた鹿角学統のさきがけ	26
泉澤恭助（修斎）	内藤十湾などを育てた鹿角第一の儒学者	26
泉澤牧太（履斎）	江戸で学び、亀山藩儒となった折衷学者	26
板橋並治	日米親善に貢献した日米会話学院長	27
一徳庵於曾此一	幕末から明治初め鹿角俳人の指導者	27
伊藤為憲	鹿角学統の祖、初の郷土史『鹿角縁記』の著者	28
伊藤良三	初代十和田町長で郷土史家	28
井上尹人	日中戦争で名誉の戦死を遂げた陸軍中佐	29
井上長左衛門	花輪大堰を完成させた宿老	29
岩尾勝右衛門	蝦夷地の鉱山調査に従事した尾去沢銅山山先	30
岩館雨香	鹿角の俳壇の隆起に貢献した俳人	30
岩館知義	郷土鹿角が生んだ風景面の詩人	30
う		
ウィルヘルム・プール	慈栄私塾を創設した毛馬内カトリック教会の神父	31
上山守古	盛岡藩主の鹿角巡視に随った藩士	31
白井仁右衛門	江戸前期の鹿角金山奉行、御境奉行	31
内田慎吾	外国人から鉱山技術を学んだ山相家、尾去沢名誉村長	32
内田慎蔵	昭和期の洋画家	32
内田清太郎	ドイツのフライブルク鉱山大学校で学んだ鉱山技師	33
内田大蔵	戊辰戦争の勇士	33
内田武志	民俗学と菅江真澄の研究者	34
内田ハチ	兄・内田武志の真澄研究を支えた理科教育者	34
内田平三郎	産業振興に尽力した明治・大正期の地方政治家	35
え		
江刺家其太	明治初め鹿角に布教したハリストス正教会伝教師	35

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
お		
呉徳洙	在日史を描いた映画監督	35
大里克三	毛馬内盆踊りの継承者育成など伝承活動に尽力	36
大里健治	郷土の音楽普及活動と毛馬内盆踊りの保存と指導に尽力	36
大里周蔵	町政に尽力した文化人医師	37
大里寿	花輪町初代町長	37
大里武八郎	名著『鹿角方言集』の著者	37
大里文五郎	名利を捨て医療一筋に生きた医師	38
大里令三	宝生流謡曲「花輪宝生会」を主宰	38
大下八重子	花輪俳壇会で活躍、遺稿句集『花まるめろ』を出版	39
大湯五兵衛昌光	大湯氏、奈良氏の惣領鹿倉城主	39
大湯四郎左衛門昌次	九戸政実に加担した大湯鹿倉城主	39
小笠原達	温泉医療に生涯を捧げた医師	40
岡本孝太郎	半導体研究と教育に捧げた生涯	40
奥山潤	鹿角の遺跡を調査した考古学者・詩人	41
小田切猪太郎	鹿角を代表する茜染・紫根染の染物屋	41
小田島邦夫	鹿角の教育行政・文化の振興に尽力した教育者	42
小田島治右衛門	酒造業のかたわら小田島道場を開いた剣術士	42
小田島樹人	気品に富んだ作曲家・俳人	42
小田島昌蔵	鹿角最初の銀行の経営者	43
小田島信一郎	大正期、護憲・社会運動を進めた法学士	43
小田島徳蔵	花輪俳談会の創立者	44
小田島徳兵衛	藩内の分限番附にのった江戸末期の酒造家	44
小田島富四郎	花輪図書館の初代館長	44
小田島ハツ	婦人運動の先覚者	45
小田島由義	鹿角振興の基礎を築いた郡長	45
小田島由男	花輪俳談会や鹿角芸文協の発展に寄与	45
折戸亀太郎	鹿角の青年達を支援した教育家	46
か		
鍵屋茂兵衛	尾去沢銅山事件で没落させられた盛岡藩の豪商	46
勝平得之	郷土秋田を愛し大日堂舞楽図を遺した木版画家	47
勝又啓一	僻地教育で日本最初の複式学級を实践した教育家	47
勝又定八	易学をきわめ、浄瑠璃をたしなむ趣味人	48
勝又周治	山口流剣術の師範と荻野流砲術の師範	48
勝又清毅	十和田湖と観光の振興及び鹿角工業学校設立に尽力	49
勝又善左衛門	毛馬内における山口流剣術の師範	49
勝又平太郎	地域社会の近代化と県政の発展に貢献	49
金栗四三	日本マラソンの父、十和田八幡平記念駅伝の創立を提唱	50
金沢玄龍	花輪役医で俳人	51
可児義男	小坂鉱山の煙害をめぐる農民運動の指導者、労働運動家	51
狩野林泉/林流	盛岡藩の石川狩野家の画家（絵師）	51
鎌田倉蔵（露山）	毛馬内俳句会を指導した俳人	52
鎌田露谷	毛馬内の俳匠、『狭布集』の編者	52
川口月村	盛岡で活躍した明治の画家	52

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
川口月嶺	幕末期の盛岡藩御抱え絵師	53
川口富教	鉾山の水抜き樋を発明した山相家	53
川口理仲太	幕末から明治期の鉾山技術者	53
川村晃	芥川賞作家	54
川村薫	郷土新聞の草分け	54
川村才太郎	近代教育の発展に貢献	55
川村左学	鹿角の近代教育の大先達	55
川村四郎	「音感オルガン」を創出した音楽教育家	55
川村竹治	犬養毅内閣の司法大臣	56
川村直哉	鳳鳴堂寮歌の作詞者	56
川村秀文	社会保険制度の創設に関わった官僚	57
観心坊	江戸中期の仏師	57
神田庄司	かづの農業協同組合の発展に寄与	57
き		
菊池久左衛門	白根銅山の初期の山先	58
北九兵衛	毛馬内氏のあとを継いだ大湯館主	58
北信景（十左衛門）	白根金山発見時の金山奉行	58
北信愛	田子信直を盛岡藩主に擁立した功労者	59
北畠昌教	伊勢国司北畠氏の末裔にして鹿角折戸氏の祖	59
木村大作	毛馬内諸家の系譜研究に尽力	60
木村博	毛馬内出身の医学博士で郷土に貢献	60
木村平作	大正・昭和期に商工業と地方自治の発展に尽力	61
木村裕太郎	昭和時代の毛馬内の俳人	61
く		
工藤伊助（玄良）	江戸後期の盛岡藩の侍医	61
工藤栄子（鈴蘭女）	鹿角女流俳人の一人、『十和田』の同人	62
工藤治六	大正時代に柳行李を特産化	62
工藤利栄	『狼が遺したもの』を著した郷土史家	62
工藤寿夫	俳句・絵など文化活動に励んだ教育者	63
工藤政志	日本建築の技を撮り続けたカメラマン	63
熊谷助右衛門（月郷）	南部一の勤王論者と称えられる	64
熊谷忠三郎	国内外の諸鉾山を調査・開発した技術者	64
熊谷チヨ	小学校特殊学級教育の先駆者	65
汲川隆景	郷土の史跡保存に尽力した教育者	65
栗山新兵衛	十和田湖開拓の先覚者	66
栗山文一郎	文次郎の跡を継いで古代紫根染・茜染を発展	66
栗山文次郎	鹿角の古代紫根染・茜染技術で人間国宝となった染色家	67
黒沢覚平	代々幕府巡見使を錦木塚に案内した錦木古人	67
黒沢其石	錦木塚別当で『錦木塚歌句帳』を編んだ俳人	67
黒澤小二郎	毛馬内小学校の校歌の作詩、小蓉と号した俳人	68
黒澤秀齋	歯科医、子どもの口腔衛生にとりくんだ学校医	68
黒沢晟幸	十和田短歌会を育んだ教育者	68
黒沢隆朝	音楽教育と音楽起源の研究者	69
黒沢輝夫	石井漢門下の舞踏家	69

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
け		
毛馬内長次	藩政全般の発展に貢献した花輪城主	70
毛馬内直次	江戸創生期、要衝の地鹿角を治めた盛岡藩の重鎮	70
毛馬内信次（秀範）	初代毛馬内城主、安東愛季に内通した智略家	70
毛馬内政次	利直の命により柏崎館に築城した2代毛馬内城主	71
こ		
小泉隆二	小坂の画家で鹿角の文化芸術振興に尽力	71
小枝指又左衛門	隆昌寺を白根から小枝指村に移転した鹿角の地侍	71
児玉高慶	日本一の武道家、武道を奨励して青少年を指導	72
児玉作左衛門	アイヌ民族研究者	72
児玉政吉	地方行政の確立と地域の発展に貢献、鹿角市の誕生に尽力	73
小林久仁郎	花輪高校吹奏楽部を全国一に導いた指導者	73
駒ヶ嶺兵右衛門	松山・土深井御境目番所の番人	74
駒ヶ嶺政功	十和田高等学校の興隆に尽力	74
駒ヶ嶺政相	錦木史跡保存会を創立した教育者	75
駒ヶ嶺政則（八兵衛）	松山街道を整備した錦木村村長	75
小松五平	鳴子旧系こけしを継承した名工	75
籠屋留太郎	両生類などの生物学研究者、高校の生物教育に貢献	76
さ		
斎藤長八	鹿角の歴史・民俗の調査研究に尽力した郷土史家	76
斎藤松五郎	社会福祉の向上に尽力	77
斎藤麟道	花輪学校の設立、鹿角の教育文化の振興に貢献	77
坂牛新五左衛門	尾去沢銅山の藩直営時の役人	77
坂田祐	関東学院創立に尽力した教育者	78
坂本昌行	『赤い鳥』で活躍した童謡詩人	78
佐川新蔵（宗研）	裏千家秀麗会創始者	79
櫻田宇一郎	農業基盤整備、鹿角木炭生産・改良に貢献	79
桜庭兵庫（綱寛）	桜庭家支配から代官制へ	79
桜庭光英（重綱）	毛馬内に入部した桜庭氏の初代	80
桜庭祐橘	最後の毛馬内城主	80
左五兵衛	白根金山の山師・検断役	81
佐々木幸助	日本棋院囲碁6段	81
佐々木辰太郎	馬産改良に尽力した獣医	81
佐々木彦一郎	人文地理学・民俗学者	82
左多六	伝説のマタギ	82
佐藤三郎	教育家で郷土史家	83
佐藤修一	花輪高校吹奏楽部を全国一に導いた指導者	83
佐藤祥二	「かづの商工会」の振興に尽力	84
佐藤正二	昭和期の鹿角を代表する歌人、百人一首の振興に尽力	84
佐藤新之助	寸陰館に屋敷を提供した御給人	84
佐藤忠弥	鉄工業界で活躍した実業家	85
佐藤秀雄	昭和初期の鹿角の歌人	85
佐藤福得	京都の手描染・織物業界で活躍	85
佐藤政治	教育者、花輪の町の歴史を掘り起こす	86

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
佐藤与一	教育者、柴平村史を著わす	86
佐藤洋輔	鹿角市の自治行政に貢献	86
佐藤要之助	鹿角りんごの礎を築いた功労者	87
佐藤良雄	カザルスの芸術を日本に広めたチェリスト	87
佐藤良太郎	温床栽培など農法の革新者	88
佐藤録太郎	鹿角の馬産改良に尽力	88
沢出源佐久（椿庵）	内藤天爵門の折衷学者	88
沢出善右衛門	尾去沢西道金山の山先	89
沢出速水	明治期のハリストス正教の伝教者	89
澤口大教	社会福祉に貢献した仁叟寺の住職	90
沢田政治	日本社会党代議士、鹿角郡初の国会議員	90
し		
市中庵芝菌	鹿角の俳諧を指導した行脚俳人	90
柴田春光	才能をうたわれた日本画家	90
柴内作右衛門（久武）	松山村の松寿庵の創設者	91
柴内与五右衛門（久政）	柴内村の万松寺の開基に尽力	91
渋谷豊次郎	「日本短角種」の育成に尽力	92
治兵衛	尾去沢三沢の山師・金主	92
下田初雄	老人クラブの育成に尽力	92
春滝坊	盲目の花輪ばやし芸人	93
春珍坊	盲目の大湯ばやし芸人	93
す		
菅江真澄	鹿角に足跡を残した江戸後期の紀行家	93
杉江宗祐	文化・スポーツの振興と国際交流を推進	94
杉山新吉	小・中学校長、鹿角市教育長を歴任した教育者	94
杉山万喜蔵	地域医療に貢献	94
諏訪音治	県議・郡議などを歴任した大湯の大地主	95
諏訪駒次郎	大湯村長として耕地整理などに尽力	95
諏訪綱毅	市議会議長を長年務めた地方自治功労者	96
諏訪綱俊	馬産及び中等学校設立に尽力した大湯町長	96
諏訪富多	地域産業、観光振興に貢献した東北有数の文化人	97
諏訪巳代治	明治初期の大湯村戸長	97
諏訪善綱	秋田県スキー界発展の功労者	98
諏訪諒平	北氏の開拓奉行にして大湯村の基礎作りに貢献	98
せ		
清兵衛	白根や尾去沢の銅山師	98
瀬川清子	女性民俗学の先駆者で第一人者	99
瀬川三郎	瀬川文庫の寄贈者で、ギリシャ哲学研究者	99
関右平太（小田島改め）	山口流剣術指南の花輪御給人	99
関久兵衛（三代）	鹿角郡初代の県会議員、産業の振興と文化の発展に寄与	100
関享士郎	磁気応用分野学における第一人者	100
関金兵衛	義民、幕末の百姓一揆の主謀者	101
関孝三	鹿角市誕生と産業振興に貢献	101
関威	産業振興と囲碁の普及に務めた地方政治家	102

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
関達三	後藤新平市長のもとで東京市政刷新に尽力	102
関常重	幕末～明治の算数家	103
関直右衛門	鹿角の観光に新時代を築いた実業家	103
関久	郷土史家、郷土芸能の振興、かるたの普及等に尽力	103
関浩	果樹園芸の技術者、全国の果樹産地で技術指導	104
関昌子	鹿角の歌人	104
関峰太郎	鹿角の音楽教育の嚆矢となり、歌人としても活躍	105
関隆達	尾去沢の御銅山医師	105
関良助（良輔）	相馬大作に共鳴して津軽藩を襲撃	105
瀬田石喜代治 （浜田村）千次郎	鹿角におけるりんご袋掛け栽培を始めた一人 大湯南部家に召し抱えられた刀鍛冶	106 106
そ		
相馬大作	津軽藩主暗殺未遂事件の首謀者	106
た		
大光寺正親	花輪の初代館主	107
高木新助	文化・教育・産業振興に尽力したクリスチャン	107
高杉重右衛門	地方行政農事に尽力・歌人	108
高杉新一郎	秋田県樹苗同業組合の設立総会発起人の一人	108
高杉善松	花輪ばやしなどの三味線の盲目の達人	109
高杉洋介	孤高のアイヌ画家	109
高瀬吉五郎	教育者・郷土の歴史解明に尽力	109
高瀬博	鹿角の歴史や伝説を書き続けた郷土史愛好家	110
高橋右平	小真木を初めて試掘した稼行人	110
高橋栄治	村長30年、十和田湖の境界を画定	110
高橋克三	内藤湖南研究と地域先人の顕彰に尽力	111
高橋嘉六	馬耕法の普及と鹿角りんご確立に貢献した勸農指導者	111
高橋熊太郎	小真木を初めて試掘した稼行人	112
高橋七郎兵衛	毛馬内カトリック教会設立と毛馬内焼の創業に尽力	112
高橋シホ	郡内第一号の女子師範卒の教育者	112
高橋節夫	鹿角の民話、昔話の研究者、語り部	113
高橋忠	十和田町長・鹿角市議員として地方自治に尽力	113
高橋道人	「みずうみ俳句会」を指導した俳人の一人	113
高谷愛二郎	勤労青年に対し情熱を燃やした教育者、歌人	114
滝儀太郎	大正・昭和前期の郷土教育の先覚者	114
瀧玄積	三代にわたる医家で、毛馬内俳壇の指導者	115
田口修一	地方自治とスポーツ振興に尽力	115
田口伝七郎	根市戸の急坂を整備・改良した浜田の篤志家	115
田口廣治	農林行政に尽くした十和田高校PTA20年会長	116
田口誠	鹿角市政と県政の発展に尽力	116
武石壮美	明治～大正期の画家・彫刻家	117
竹澤英次	学校教育及び社会教育の振興に尽力	117
武村立元	天保の飢饉のとき医療奉仕した仁医	117
立山弟四郎	郷土の産業・教育文化に尽力し、立山文庫を創設	118
立山平吉	鹿角を代表する俳人・歌人の一人	118

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
立山林平	将来を囑望された天才数学者	119
立山廉吉	立山文庫を継承した十和田図書館の初代館長	119
田中賢造	鹿角果樹産業の牽引役として活躍、「北限の桃」の栽培にも貢献	120
田中正造	江刺県役人として鹿角で農民救済、足尾鉾山事件運動の指導者	120
田中伝吉	花輪駅の場所選定を現在地に決定	120
田中正勝	秋田の自然や歴史などにこだわった作曲家	121
種市靈山	スケールの大きい気骨の書家	121
田原東太	「みずうみ俳句会」会長として後進の指導に尽力	122
太兵衛と与惣兵衛	元禄の大飢饉のとき地頭愁訴した鶴田村肝入	122
田村唯志	教育者、内藤湖南先生顕彰会幹事長	122
田村徳治	日本の行政学の創始者	123
田村政四郎	花輪ばやしの由来を解説	123
田山真悦	縄文焼から世界へ飛翔した「二層透かし陶芸」作家	124
ち		
近内一人	俳人で勤皇家	124
千葉佐惣治	大湯ハリストス正教会の草分け	125
千葉重郎	大湯の剣術・砲術師範	125
千葉祐右衛門	幕末盛岡藩のエトロフ警備隊長	125
長左衛門	江戸初期の白根金山のきりしたん	126
長兵衛	新鍋座を興した毛馬内の鋳物師	126
つ		
槻本幸八郎	尾去沢鉾山の基礎を作った目代	126
辻金五郎	明治前期の小真木鉾山の経営者	127
土館イサ	俳人であり、町踊りの復興や幼児教育に尽力	127
土館一郎	花輪魚市場の創業者	128
土館市蔵	鹿角の生鮮食品業界を刷新	128
て		
寺崎広業	鹿角郡役所で勤務、のち東京美術学校再建に貢献	129
寺田隆信	先人顕彰館名誉館長を20年務めた東北大学名誉教授	129
と		
富樫正一	昭和後期から平成期の鹿角を記録した写真家	130
兎沢千代治	錦果園で鹿角りんごを栽培し、りんご業界の発展に寄与	130
兎沢徳蔵	明治・大正・昭和前半に鹿角りんごの栽培に尽力した篤農家	130
戸館安太郎	八幡平地区の基盤整備・土地改良に尽力	131
豊口鋭太郎	秋田県特殊教育の先駆者	131
豊口克平	世界を駆けた工業デザイナー	132
豊口清志	「どじょっこふなっこ」の採録者	132
豊口甚平	酒造家、地方自治・中小企業の振興に尽力	133
豊口竹五郎	県行政及び来満街道・花輪線開通に尽力	133
豊口唯志	真田太古に共鳴した毛馬内人	133
豊口辨司	明治の鹿角の代表的書家で俳人	134
豊田一雄	数多くの歌謡曲を作詞・作曲	134
な		
内藤市郎太	盛岡に習字塾を開いた書道家、帰郷して寺子屋師匠	134

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
内藤仙蔵（天爵）	多くの人材を育てた鹿角を代表する儒学者	135
内藤調一（十湾）	『鹿角志』の著者で頼山陽を信奉した儒学者	135
内藤虎次郎（湖南）	東洋学の世界的権威	136
内藤練八郎	小坂鉦山鉦毒問題に取り組んだ社会派運動家・教育者	136
那珂（江幡） 梧楼	藩校作人館教授として鹿角人らを育成	137
那珂童春	毛馬内田口家出身の盛岡藩奥医師	137
中島耕一	花輪短歌会の発端を作った県歌壇の指導者	138
中津山延賢	鹿角りんご栽培の勸農指導者、県議	138
中野吉兵衛	大光寺氏の跡を受けた花輪館主	139
中村七之丞	不老倉銅山奉行を務め大徳寺伽藍建立	139
生子屋（伊藤） 長治	尾去沢銅山を稼行した盛岡の商人	139
奈良市之丞	大正期にバスケット合資会社を設立した蔓細工師	140
奈良円蔵（讓山）	山本北山に学び、銅山の吟味役にもなった盛岡藩儒	140
奈良省三（裕功）	大正、昭和期に活躍した日本画家・俳人	140
奈良庄兵衛	りんご農家で憲政会の地元幹部	141
奈良真志	秋田県人最初の渡米留学者、明治時代の海軍軍人	141
奈良真令	漢詩の詩人として活躍	141
奈良清四郎	尾去沢出身の反骨・情念の洋画家	142
奈良徳太郎	駅の切符自動販売機の発明者	142
奈良農夫也	明治後期、北海道でアイヌ教育に従事	143
奈良寿	教育者、鹿角を代表する郷土史家の一人	143
奈良正路	労農運動の指導者で、『入会権論』の著者	143
奈良正敬	郡役所職員として教育会を設立した文化人、教育者	144
奈良宮司	盛岡藩の侍医、鉦山・勘定奉行を歴任した儒学者	144
奈良靖規	新教育運動の先覚者	145
榎山佐渡	盛岡藩の家老、戊辰戦争において鹿角隊を指揮	145
成田一穂	スポーツの振興、教育の向上に尽力	146
成田正吉/庄司	菅江真澄の宿泊先／彫刻師	146
成田助綱	鎌倉初期の鹿角郡最初の地頭職	147
成田元吉	宮川村村長から八幡平村初代村長	147
南部利直	毛馬内の町づくりを推進した南部氏27代・盛岡藩2代藩主	147
南部信直	盛岡藩の基礎を作った初代藩主	148
南部（屋） 八十治	尾去沢銅山を経営した江戸の商人	148
に		
西田天香	田の沢鉦山を経営した曙一燈園の修養家	149
二所之関軍右衛門	角界の第1人者「沢風」	149
乳井義博	多くの日本一の剣道家を育成した剣道家	150
ぬ		
糠塚英次郎	戦後、新制毛馬内中学校の基礎を作った初代校長	150
ね		
根本五郎	学務委員、畜産委員、初代曙村村長	151
の		
野尻左京	「三ヶ田堰」水路開削で開田	151
能登屋（西村） 清左衛門	毛馬内の味噌醸造家で、槇山金山の山師	152

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
は		
橋本運吉	教育文化の向上・「大日堂舞楽」の保存に尽力	152
長谷川龍嵩	盛岡藩の儒学者で鹿角人に俳句、短歌、漢詩を指導した文化人	153
畠山喜一	地方自治に貢献、鹿角交通協会初代会長	153
畠山誠一	歴史文化の振興に寄与	153
花田栄太郎	明治期鹿角唯一の文芸誌『かづの』の編集発行者・俳人	153
花輪（伯耆守）親行	鹿角の有力国人で後の円子氏	154
晴澤直見	教育・社会福祉の向上に寄与	154
晴澤久	青少年保護育成教育・社会福祉の向上に寄与	154
ふ		
福田光山	戦後「鹿角焼」を指導した陶工	155
福永光子	地域住民の保健医療に尽力	155
福本晴男	毛馬内のために多くの作品を造った彫刻家	156
船越月江	川口月嶺の高弟で、盛岡藩の画家	156
麓三郎	尾去沢鉦山史、白根鉦山史の研究者	156
古河古松軒	江戸後期巡見使に随行し『東遊雑記』を著わす	157
ほ		
本田鋭之助	地域医療に貢献した仁医	157
本田延司	初代毛馬内町長	158
本間喜代松	山ごぼう栽培の基盤を築く	158
ま		
米田博	鹿角の植物誌を著した教育者	158
曲田慶吉	『鹿角郷土誌』『伝説の鹿角』などを著した教育者	159
牧大介（下村信一）	洋画家で、『花岡ものがたり』の作者の一人	159
増田手古奈	大鱈で『十和田』を主宰し鹿角俳人を指導	160
又四郎	幕末花輪を代表する酒屋「小浜屋（小又）」	160
町井勝太郎	鉄道省で全国の鉄道の測量設計に携わる	160
町井吉之助	酒屋「鹿都屋」を創業、御給人で佐庄事件に連座	161
町井佐助	佐庄の手代で、毛馬内の大商人	161
町井長九郎	南部・秋田境界論争時の鹿角山見	162
町井正路	ゲート「ファウスト」の翻訳者・肥料研究者	162
松浦武四郎	幕末鹿角を訪れた蝦夷探検家・旅行家、『鹿角日誌』の著者	162
松岡八左衛門	土深井の米代川藩境を画定した鹿角郡御境奉行	163
松岡隆一	看板業と画家として町づくりに貢献	163
馬淵乙次郎	藩主利剛に文武を上覧、月嶺門下の画家	164
馬淵貫右衛門	寛政・文化期の毛馬内俳壇の俳匠、『錦木集』の編者	164
馬淵テフ子	大空駆けた女流飛行家	164
み		
三日市淡路	稻荷神社の社家	165
三日市猪代治	鹿角果樹協会の初代会長	165
蓑虫山人	幕末から明治期の放浪画人	165
宮城佐次郎	八幡平を世に紹介、尾去沢町長・『花輪町史』の著者	166
む		
武藤晃	第七次南極観測越冬隊長として活躍	166

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
武藤治三郎	鹿角市社会福祉協議会初代事務局長で教育者	166
村木武司	藩校作人館の医学句読師	167
村屋六助 (関村六十郎)	花輪の豪商の一人	167
村山喜四郎	地方行政と学校教育に貢献した花輪町長	168
村山義和	馬産やりんご栽培に尽力	168
村山健三郎	花輪愛友団幹事長として民主的な活動に尽力	168
村山貞治	鹿角医療組合設立、八幡平の国立公園編入に尽力	169
村山守太郎	昭和期の鹿角りんごの代表的な栽培家	169
も		
望月長兵衛	切支丹改めや南部・秋田の藩境決定に関わった盛岡藩の横目	170
望月松太郎	教育者で剣道練達の士	170
守田栄	鹿角市初代収入役	171
森 (盛) 田屋六右衛門	尾去沢銅山を稼行した盛岡の商人・山師	171
や		
八重樫喜作	八重樫建設創始者でこけし収集家	172
安村金之助	公共利益の向上に貢献した司法書士	172
安村二郎	鹿角市史編纂の統括者・鹿角を代表する昭和期の郷土史家	172
谷地政民	大湯の初代町長	173
柳沢源一	鹿角市初期の教育長	173
柳沢源太郎 (初代)	名品「花輪酢」の醸造を業として味噌醸造に拡大	174
柳沢兌衛	『鹿角市史』編纂事務を総括	174
柳沢ヒメ	牛飼いの歌を詠み続けた歌人	174
柳館計一	「からめ節金山踊り」の保存・伝承に尽力	175
山口猪祐	幼児教育の発展に尽力	175
山口栄助	バスケット合資会社を設立したつる細工師	176
山口庄次郎	入会争論の調停にあたった北家の家士	176
山口松三郎	山口電機工業(株)の創始者	177
山口林治 (雪操)	幕末・明治前期の狩野派の大湯村画人	177
山崎市五郎	鹿角花輪鍛冶の元締め	177
山崎順二	花輪の私設託児所の創設者	178
山崎与左衛門	槇山金山で銅を吹き出した山師	178
山崎六右衛門	毛馬内山崎鍛冶の祖	178
山本喜七	毛馬内代々の大地主で、上野平に勸業場を開く	179
山本喜七郎	秋田県陸上競技の振興と農業技術向上に貢献	179
山本儀助	新しい「秋田犬標準」審査基準を確立	180
山本九一郎	苗字帯刀を許され、御給人となる	180
山本九郎	第二代十和田町長として町政の発展に尽力	180
山本九郎左衛門	町宿老で白根銅山の請負師	181
山本幸蔵	山本道場で多くの剣士を育てた毛馬内町長	181
山本修太郎	県会議長として県政発展に寄与した政治家	182
山本寅雄	「あきたこまち」を開発した育成グループの一員	182
ゆ		
湯瀬謙吾	幕末の鹿角を代表する算術家	183
湯瀬哲太郎	地域社会の振興に尽力、県政で活躍した改進黨の県議	183

人 物 名	タ イ ト ル	ペー ジ
湯瀬弥五郎	大湯堀内の「マタギ免状」所有者	183
湯瀬勇七	鹿角厚生病院の前々身、私立花輪病院の設立者	184
よ		
横田正行	範士の称号を受けた剣道家	184
吉田育次郎	鹿角市福祉事務所初代所長	184
吉田五郎	花輪郵便局長、花輪「果樹協会」初代会長	185
吉田俊道	民政の安定と社会福祉の向上に尽力	185
吉田俊龍	民政の安定と社会福祉の向上に尽力	186
吉田新六	自費で稲村橋を架橋した花輪御給人	186
吉田清兵衛	明治初めの産業全般の振興に尽力した名士	186
米沢岩吉	農民のために尽くした社会運動家にして農業技術者	187
米沢万陸	黒鉱自溶製錬法の開発者、日立鉱業の基礎を築く	187
米山彦郎	鹿角郡医師会設立に尽力、「国の華会」初代会長	188
ろ		
ローゼン神父	毛馬内カトリック教会を創設、鹿角で最初に幼稚園を開設	188
わ		
和井内恭子	日本を代表する創作舞踏家	188
和井内貞行	十和田湖で養魚・観光の礎を築く	189
若松屋（高橋）市右衛門	「天山堂若松屋」を称した毛馬内の大商人	189
上関富治	徳富蘇峰と交流した文化人	190
渡辺一治郎	鹿角の代表的俳人の一人	190
渡部斧松	毛馬内の山崎鍛冶に弟子入りした秋田の鍛冶師・新田開拓者	191
渡部幸三郎	鹿角市史編纂資料の解明にあたった花輪の郷土史家	191
渡部コヨ（こよ女）	花輪俳壇会を代表する俳人の一人	191
渡部繁雄	鹿角農業協同組合の基盤をつくった初代組合長	191
渡部全次雄	声良鶏、秋田犬、郷土民謡の保存・普及に尽力	192
渡部トミ（森女）	鹿角を代表する女流俳人	192
和田芳恵	直木賞を受賞した戦後の作家	193

あいかわ ぜんいちろう

相川 善一郎 1893（明治26年）～1986（昭和61年）

秋田県を代表する彫塑・彫刻家

明治26年12月23日、善次郎とサタの長男として花輪に生まれる。小学校卒業後父について大工修業をしていたが、新進の彫刻家朝倉文夫の活躍を伝えた新聞記事を読んで感動し、入門希望の血書を送り2年後の明治44年許されて上京し書生となる。

大正12年（1923）東京美術学校（現・東京藝術大学）卒。文展・帝展に11回入選、昭和16年（1941）に日本美術展無鑑査。代表作に神戸市湊川神社の「後醍醐天皇像」、大館駅前の「秋田犬」、鹿角花輪駅前の「声良鶏」（2019年鹿角市歴史民俗資料館前庭に移転）の銅像など。また、自宅に陶芸教室を開いたり、花輪史談会結成に参画するなど、地域文化活動に貢献したとして、昭和50年秋田県文化功労者、同59年鹿角市功労者として表彰される。昭和61年1月13日没、享年92歳。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』、『秋田人名大事典』。

あいかわ つもる

相川 積 1926（大正15年）～2010（平成22年）

文化財保護・内藤湖南の顕彰に尽力

大正15年7月29日、彫刻家・善一郎と保葉^{やすば}の長男として東京に生まれる。東京府立の中学校卒業。大戦末期の昭和19年花輪に転居、花輪小学校臨時教員として教職第一歩を踏み出す。その後、秋田大学の小学校教員臨時養成課や、玉川大学の通信教育などで教員資格を取り、郡内諸小学校の教員や校長として教員生活を全うした。

退職後、鹿角市史編纂委員を長きにわたり務めたほか、先人顕彰館協議会・内藤湖南先生顕彰会・花輪図書館協議会・鹿角市文化財保護審議会・鹿角市文化財保護協会等の会長の要職を務め、文化財保護及び教育文化の向上に貢献した。特に、内藤湖南の事績顕彰にあたっては、湖南の書簡の解説と、市民対象の「内藤湖南を知る会」の運営に、先人顕彰館研究員を指導しつつ率先して取り組んだ功績は大きい。平成11年鹿角市文化功労者表彰。同22年1月12日死去。享年83歳。

<参考>『湖南20号・30号』、『広報かづの（平成11年11月）』、『創立100年史（秋田大学教育学部創立百年記念会編）』。

あおやま いと

青山 イト 1907（明治40年）？～1994（平成6年）

民生安定と女性の地位向上に貢献

明治40年？12月30日、中村友吉とサナの長女として大湯村関上に生まれる。一家は仕事のため小坂に転居、イトは小坂実科高等女学校を卒業して秋田県女子師範学校に進学。大湯小や小坂小など郡内小学校教師を歴任し、その間に青山倭^{やまと}と結婚して青山姓となる。

昭和22年（1947）夫の倭が県議員になったのを機に、教職を退き、以後錦木村教育委員長、錦木公民館長、十和田町社教委員などを歴任した。また民生委員、家庭裁判所調

停委員として、生活困窮者の保護指導、住民の紛争解決にあたった。さらに、婦人会会長、農協婦人部長、赤十字奉仕団委員長、結核予防婦人会長などを長年兼務して、婦人の地位向上と社会奉仕精神の涵養に努めた。昭和51年、鹿角市文化功勞者表彰。平成6年3月26日死去。享年86歳。

<参考>『広報かづの（昭和51年）』

あおやま きんうえもんまさかね
青山 金右衛門昌周 1711（正徳元年）？～1783（天明3年）

白根・尾去沢鉦山で活躍した山先

初名を市之助と言ひ、白根金山開発に功のあった尾張屋の生まれだが、白根山先青山家の養子に入り、6代目金右衛門昌周（昌國）となる。この頃、白根は既に銅山に移行していたが、年々出銅が減って鉦況不振の状態が続いていた。追い打ちをかけたのが、宝暦5年（1755）の大ききん（盛岡藩四大ききの1つ）であった。白根銅山衰微の中、昌周は尾去沢銅山御山先を仰せ付けられ、金山開始以来代々白根山先として続いて来た青山家は宝暦9年7月、尾去沢の田郡へ引き移ることになった。

尾去沢山先の足場を築いた昌周は、天明3年3月16日、72歳でこの世を去った。続く7代から9代まで、金右衛門が襲名されていく。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『青山家談叢』。

あおやま きんや
青山 金弥 1855（安政2年）～1910（明治43年）

足尾銅山の兵站基地草倉銅山を経営した山相家

安政2年5月、青山家11代庄蔵榮重を父、こまを母として尾去沢に生まれる。幼名金作。幼少より文武の道に励み、花輪寸陰館に学ぶ。青山本家12代として、父庄蔵より家伝の山相学を学び、父と同行して東北地方各鉦山の実地を見聞し、探鉦・選鉦・製鍊の真髓を体得する。

明治10年（1877）、古河市兵衛が福島県八総鉦山の経営を始めるにあたり、奥羽各地の坑夫を集めてはじめて古河へ入る。そして八総銅山詰を経て新潟県下の草倉銅山へ転じ、その経営にあたること14年、鉦長・所長として手腕を発揮し、後年古河グループ形成の基礎となる足尾銅山開発の一大兵站基地としての草倉銅山を確固たるものにした。その後各地鉦山を経営し、古河財閥の元勲として重きをなした。明治43年没、享年55歳。

<参考>『秋田人名大事典』、『青山家談叢』。

あおやま しちさぶろう
青山 七三郎 1854（嘉永7年）～1919（大正8年）

日本で初めて坑内に電力を導入した鉦山技術者

嘉永7年6月、主一郎（青山家10代金右衛門羊我の弟）を父、スミを母として、尾去沢

田郡に生まれる。幼名銑之助。

花輪寸陰館に学んだ七三郎は、尾去沢銅山・生野鉦山などで採鉦に従事した後、従兄の庄蔵の招きで足尾に来山、銅山測量の任についた。明治10年(1877)のことである。以来、寝食を忘れて採鉦に没頭し、長年放置されていたため荒廃していた本口坑^{ほんぐち}の開発に成功して足尾銅山隆盛の基を築いた。さらに、鉦山の発展にともない坑道が深くなって湧水が大問題になると、排水のために電力の利用を考え、明治23年水力発電所を建設した。坑内で電力を利用したのは、これが日本で最初である。

明治31年重役会議員となった七三郎は、坑内巡視中に眼を負傷し、34年退職した。退職までの24年間は採鉦部門一筋の生活であった。大正8年5月11日没。享年64歳。

<参考>『青山家談叢』、『鹿角人物誌(奈良寿著)』、『鹿角市史第三卷上』、『鹿友会誌第二十一冊』。

あおやま しょうざえもんまさよし

青山 庄左衛門昌良 1580(天正8年)?~1652(承応元年)

白根金山を見立てたとされる青山家の初代

昌良は承応元年に72歳で没しているので、生年は天正8年かと考えられる。天正13年の越中国(富山県)阿尾城^{あお}の戦いで父庄蔵昌隆を亡くした後、滑川を経て白根に来住(慶長年間)、鹿角青山家の初代となる。

白根で良質の金脈を発見し、金山奉行の次座を占める山先役として、白根金山の開発、経営と白根惣沢の行政にあたるようになる。さらに御境目通吟味役、切支丹宗門改役などにも任命され、この後の鹿角における鉦山山先としての一族の確固たる地位の基礎を築いた。信仰深かった昌良は、山内に父昌隆の菩提を弔って一字を建立して隆昌寺と称し、その開基となった。白根の衰微により、隆昌寺はその後花輪字小枝指に移されて現在に至る。

<参考>『青山家談叢』、『尾去沢・白根鉦山史(麓三郎著)』、『鹿角市史第二卷上』。

あおやま しょうぞうながしげ

青山 庄蔵榮重 1830(文政13年)~1892(明治25年)

足尾銅山興隆の基礎を築いた山相家

文政13年11月19日、青山家10代金右衛門羊我を父、美喜を母として、尾去沢の田郡に生まれる。幼名保太郎。庄蔵は父在世中に山先役となったが、戊辰戦争では花輪二番隊大砲方として従軍した。その後鉦山の探鉦・開発にあたる山相家として活躍、古河市兵衛の要請で足尾へ移住し、不能率な鉦山経営の改革にあたる一方、長男金弥^{くまぐら}を草倉銅山に、分家の従弟七三郎を足尾に配し、一族の長として探鉦開発の総指揮をとった。

一時予想した鉦脈が発見されず、市兵衛が廃山を決定した時、庄蔵は一族の報酬を辞退して山相家の名誉と家運をかけて6か月の猶予を願い、数か月後、一大富鉦を発見、市兵衛は一躍銅山王となった。晩年尾去沢に隠栖してからも、古河市兵衛とは終生水魚の交わりを結んだと言われる。明治25年5月2日、田郡で没、享年61歳。

<参考>『青山家談叢』、『鹿角人物誌(奈良寿著)』、『尾去沢・白根鉦山史(麓三郎著)』。

あおやま ちゅうしちきんさだ

青山 忠七金貞 1783(天明3年)～1855(安政2年)

青山長者と言われた絵師

天明3年、吉右衛門留五郎を父として毛馬内に生まれる。毛馬内館主桜庭家臣青山吉郎兵衛家の3代目。号仙流。初代吉郎兵衛が山師として巨利を積み、2代目の父吉右衛門は墾田により数百町歩の資産を積んで「青山長者」と呼ばれた。文墨を好んだ金貞は、盛岡で画を湯川玉流に、書を圓子清親に学び、家事を家人に委せてしばしば江戸に上る一方、奥羽中を遊歴してはその実況を描写してまわった。江戸で大燈籠を描くことを頼まれた金貞は、20日を費やし高価な絵具で丹念に描き上げたにもかかわらず、絵具代にも足りない1両しか請求しなかったという。葦名神社に桜庭家中7名が奉納した絵馬「飛翔ノ鶴と松」は、1枚が林流、同じ絵柄のもう1枚が仙流の手になっている。安政2年没、享年72歳。

<参考>『秋田人名大事典』、『青山家談叢』、『秋田人物伝』、『鹿角志(内藤十湾著)』、『鹿角市史第二巻下』。

あおやま やまと

青山 倭 1902(明治35年)～1987(昭和62年)

県議会議員として地方行政に尽力した政治家

明治35年10月10日、文太郎とヨネ(和井内貞行長女)の長男として、錦木村^{しんた}神田に生まれる。青山家は、尾去沢山先青山家の一族で、毛馬内館主桜庭家家臣の青山吉郎兵衛の分家筋とみられる。父文太郎は長年錦木村々長を務めた。倭は大正9年(1920)秋田県立農林学校(鷹巣農林学校)を卒業後、東京農業大学高等科専修科を1年半で卒業。はじめ青森県に採用されるが、昭和5年から毛馬内営林署に、さらに小坂鉦山に移って終戦を迎える。22年、県会議員に初当選、以降46年まで6期24年間、県会議員として地方自治推進に活躍した。その間副議長を1期務めている。

道路などインフラ整備を最大の課題とし、国道103号及び282号線の昇格・舗装化につとめた。特に高速道路開通に際しては、ルート決定までの数か月上京を続けて、建設省などへの陳情を繰り返したり、鹿角ルート実現のために奔走した。また、十和田八幡平観光協会会長、鹿角共同職業訓練校長など歴任して産業の振興に貢献した。52年市の功労者表彰を受ける。昭和62年1月26日死去、享年85歳。

<参考>『青山家談叢』、『広報かづの(昭和52年12月)』、『鹿角市史第三巻下』。

あおやま よしえ

青山 芳得 1869(明治2年)～1942(昭和17年)

海軍大佐、日露戦争時の日本海海戦における魚雷隊長

明治2年3月17日、尾去沢山先青山家の分家・吉郎兵衛家につながる青山正次郎を父、レキを母として毛馬内に生まれる。号梧堂。

毛馬内小学校で和井内貞行と同級であった芳得は、はじめ同族の青山金弥を頼って足尾銅山に勤めたが、先輩石川伍一のすすめもあって上京、苦学して海軍兵学校を卒業した。日清戦争には水雷隊の一員として威海衛の水雷攻撃に参加。明治33年(1900)海軍兵学校水雷術教官となり、後の米内・及川両提督など多くの教え子を育てた。日露戦争では少佐として日本海海戦の主力部隊第17艦隊司令として活躍、功四級金鷄勲章を賜った。のち海軍大佐・秋津洲艦長となる。

同期生の秋山真之少佐とは義兄弟となり、真之の次男固^{かたし}を養子に迎えている。また、内藤湖南、川村竹治らと親交を結び、在京中は鹿友会の父として若い学生らを励ました。昭和17年9月11日、持病の胆石に肝臓ガンを併発して没。享年73歳。

<参考>『秋田人名大事典』、『十和田町の先輩』、『鹿友会誌』、『鹿角市史第三卷上下』。

あかお たくより

赤尾 卓頼 (又兵衛) 生没年不詳、江戸前期の人

毛馬内氏に代わって大湯城預かり

赤尾氏は佐々木氏族浅井氏流と伝え、近江国浅井郡赤尾村の在名によって赤尾氏に改めたという。卓頼は赤尾伊織頼賢^{よりかた}の子で、明暦3年(1657)江戸において弟伊兵衛頼茂^{よりしげ}とともに南部重直に召し抱えられた。花輪村へ毛馬内九左衛門、九左衛門跡地毛馬内村へ桜庭兵助、毛馬内鞆負^{ゆげい}の知行所大湯村へ赤尾又兵衛・伊兵衛の兄弟が知行替えとなった。同年兄又兵衛は花巻城代にも任用されているが、大湯城預かりはそのままであった。しかし赤尾氏の大湯支配の期間は短く、寛文5年(1665)北九兵衛宣継^{のりつぐ}が九戸郡小軽米から知行替えにより大湯へ移るまでの8年間であった。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』。

あかさか ふみや

赤坂 文弥 1900(明治33年)～1956(昭和31年)

『赤い鳥』文芸教育運動を推進した歌人・教育者

明治33年11月23日、徳太郎とタカの長男として花輪に生まれる。秋田師範学校を卒業後、花輪小学校に勤務。

大正後期に開花した自由教育は、片山伸の文芸教育論から鈴木三重吉の『赤い鳥』運動に発展したが、三重吉はこの雑誌によって、子供のために純麗な読み物を提供し真の芸術にふれさせようとした。鹿角郡においても、赤い鳥文芸教育運動の信奉者が多く、その信奉者で推進者の一人が赤坂文弥であった。

文弥は、赤城文治、または赤城鹿人とも号した。『草の実』時代から作歌し、花輪短歌会の草創の昭和3年(1928)アララギ入会。小坂高女教頭を経て15年から弘前に住み、戦後の21年弘前アララギ会を結成し指導した。晩年は弘前高等学校教諭。29年に歌集『秋燕』刊行、序を結城哀草果が記している。『青森アララギ』は第78集を赤城文治追悼号とした。49年、花輪短歌会によって長福寺境内に盟友中島耕一とともに歌碑が建てられ

た。花輪小学校校歌は文弥の作詞である。昭和31年没、享年56歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『秋燕』。

あさい すえきち しょうぎよ

浅井 末吉（小魚） 1875（明治8年）～1947（昭和22年）

郷土史研究家・俳人

明治8年大湯丁内瀬川子之の末子として生まれ、明治29年浅井家の養子となる。幼少のころから学問を好み、大湯小学校に進んでからは、大湯におけるハリストス正教の先覚千葉佐惣治の訓導を受け、後年そのもとで研さんを重ね、熱心なハリストス教徒となり布教にも従事している。また河東碧梧桐に師事し句作に精魂をかたむけ、作句は俳誌『ホトトギス』や『俳星』『海紅』に投句し、中央俳壇からも秋田大湯に小魚ありと高い評価を受けている。碧梧桐、露月、井泉水、和風、桂月など著名な俳人文人が大湯を訪れ交友を深めており、句会を組織して後輩の指導にも当たっている。

小魚はまれに見る鋸鍛冶のこぎりかじの名工と言うが、生活を支えるにとどめ、郷土史研究に没頭した。昭和7年、大湯環状列石が出土するやその重要性に着目。大湯郷土研究会の創立に参加し主査となって調査研究、保存活動の中心となった。晩年は郷土史資料の蒐集にあたり、その資料価値は高く多くの歴史資料の原典となっている。更に俳画・スケッチを描き、郷土人形を作って観光開発にも力を注いだ。大円寺参道の門杉の下に、「秋立つや 大樹のこずえ おのづから」の句碑がある。昭和22年9月9日没、享年72歳。

<参考>『鹿角人物誌』、『鹿角市先人顕彰集成』、『秋田人名大事典』、『鹿角市史第一巻・第二巻上下・第三巻上下』。

あさぬま ごうざえもん

浅沼 郷左衛門 生年不詳～1862（文久2年）

幕末の毛馬内の山口流剣道指南

尾去沢銅山の川口与右衛門の二男定吉（諱は安慶）は、毛馬内浅沼郷左衛門の養子となり、養父没後その名を継いだ。幼少の頃から武芸を好み、たまたま銅山見学がてら川口家に逗留中の西田猪助の門に入って山口流剣術を修め、免許皆伝を得た。友人で共に山口流を修めた勝又善左衛門と二人、勝又は主として御給人に、浅沼は桜庭氏の家中に教えた。風雲急を告げ武芸が奨励された幕末期、門人数百人に及んだという浅沼道場は、山本九一郎道場の東軍流と共に毛馬内剣道の隆盛期を迎えることとなる。鹿角一の剣士と言われた浅沼郷左衛門は、文久2年8月14日、病のため没した。

<参考>『鹿角志（内藤十湾著）』、『鹿角市史第二巻下』、『十和田町の先輩』。

あさり えつぞう

浅利 悦造 1928（昭和3年）～2015（平成27年）

少年剣士育成に生涯をかけた剣道教士

昭和3年4月11日、庄司とツヤの三男として花輪に生まれる。兄2人が夭折したため、

旧制大館中学校卒業後家業（洋品店）に従事する。幼年期より剣道の稽古に励んでいたが、長じて一層精進し、昭和44年には剣道教士を授与され、同54年に剣道七段を取得。同年の宮崎国体から連続4回国体に出場した。平成に入って、剣道仲間の高杉五郎、栗山五郎らと「花輪幼少年剣道教室」を開き、多くの少年剣士を育てた。また、鹿角剣道連盟会長も務め、武道場建設をめざした。これらの活動に対し、平成3年、秋田県剣道連盟より功労賞、平成13年には全日本剣道連盟より剣道有功賞を授与された。

浅利家は昭和30年代初め頃、谷地田町で浅利書店を開店、教科書供給を一手に担うようになった。この功で平成12年に文部大臣賞、同22年には黄綬褒章を授与されるに至った。平成27年10月4日、11月予定の武道場落成式を目前に死去。享年87歳。

あさり さすけ

浅利 佐助 1844（天保15年）～1920（大正9年）

醤油醸造業の基礎を築く

天保15年10月5日、重太郎とタケの長男として花輪新町に生まれる。幼名重次郎。イサバ屋（魚屋）を稼業としていた浅利家3代の佐助は、少年のころ袋町の川村寛平の私塾に学んだ。明治5年（1872）、29歳の時、これからの時代は一般家庭でも醤油を使用するに違いないと、成田の不動山へ参詣し、銚子の醤油工場を視察して一人の職人を連れて帰り、50石の仕込みをしたのが始まりといわれている。

当初順調に発展した事業だったが、明治10年の西南戦争を契機とした不況で借財の山をかかえることになる。佐助は朝早くから大八車を引いて、郡内の村々に醤油を売り歩き、苦境を乗り越えた。やがて岩手県二戸郡、さらに北秋田郡、山本郡、青森県の一部、遠く函館へも販路を広げ、秋田県一の業者になって行く。事業拡大に伴い倉庫を次々と建て替えるが、土蔵の取り壊しはホコリが近所迷惑にならないよう、朝2時から5時までとした。

生涯成田山参詣を欠かさなかったが、5代目佐助（久吾）を山形の阿部家から迎えたのも、成田山参詣の車中で話が決まったという。この5代佐助は長いこと花輪町長を務めるが、醤油醸造でも東北一と言われる出荷数3千石の飛躍を遂げ、今日の浅利佐助商店に至る道を開いた。大正9年7月28日、3代佐助は苦闘76年の生涯を閉じた。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『鹿角市史第二巻上・第三巻上』。

あさり しげかず

浅利 成和 1919（大正8年）～2002（平成14年）

剣道・居合道の振興、俳人

大正8年2月10日、成一とキワの三男として毛馬内に生まれる。小学校3年生より剣道を学ぶ。教員として小学校・中学校の剣道の普及・競技力向上に尽力するとともに、県剣道連盟理事、鹿角剣道連盟副会長として組織の充実・強化に努め、特に居合道の底辺拡大・普及・振興に大きな功績を残した。自宅敷地内に居合道場「夢想館」を建設し武道の指導・普及と青少年育成に貢献。昭和49年から平成11年までの25年間、夢想館主催の東北三県

中学校虎旗戦剣道大会が開催されたが、その規模は最大500人超に及んだ。なお、昭和47年から国学院大学が夢想館にて毎年居合道の合宿を行っているという。のちに東北居合道高段者会会長、平成4年5月居合道範士号を授与。また、俳人として俳句をたしなみ、毛馬内俳句会の理事としても活躍。号は水香・湖麓。平成14年2月21日没、享年83歳。

あさり ただし

浅利 忠 1931（昭和6年）～2009（平成21年）

県内のスポーツ振興に尽力した教育者

昭和6年8月30日、佐藤寿吉とヒメの次男として仙北郡大沢郷（現大仙市）に生まれる。秋田工業学校を経て秋田師範学校入学、学制改革により昭和24年、秋田大学卒業。県南の高校で講師をした後、昭和29年4月花輪高校へ赴任、浅利家の養子となる。

花輪高校在職21年と小坂高校4年はバレーボール一筋で、生徒の競技力向上に尽力した。平成4年花輪高校校長を最後に退職すると同時に、鹿角市教育長として教育行政に携わること8年、総合学習の導入など教育現場の解決に取り組んだ。また、市バレーボール協会々長、市体育協会々長、さらに県バレーボール協会副会長、県高体連バレーボール専門委員長などを歴任し、日本バレーボール協会々長表彰、秋田県スポーツ賞栄誉賞、鹿角市功労者などを受賞している。平成21年1月4日死去、享年78歳。

<参考>『広報かづの（2008年）』。

あさり たみや

浅利 民彌 1912（明治45年）～1999（平成11年）

分析化学の権威者、原水爆の放射能分析をした理学博士

明治45年1月1日、惣治とキノの四男として大湯川原の湯に生まれる。昭和2年（1927）3月秋田鉱山専門付属養成所卒業後、14年4月から東京大学農学部地質学教室で地質研究をテーマとしていた。たまたま岩石の分析をする必要が生じて、理学部化学教室を訪れたときに木村健二郎教授に出会い、非常に温厚な人柄に惹かれながら教えを受けているうちに、益々先生の人格に心から尊敬の念を覚え、傍らで一生勉強できたらと熱望するようになった。16年から東大理学部化学教室助手で木村健二郎博士に教えを受け、ストロンチウム地球化学分布、温泉水中のリチウム分析、ジルコニウム分析法研究に取り組み、25年理学博士号（東京大学）を取得する。

20年以降、広島・長崎の放射能の分析を始め、第五福龍丸・ビキニ島の水爆実験の降下物を分析して、核実験が水爆であることを確認。外国の各大学及び地質調査所より依頼を受けるなど、日本分析化学研究所の代表理事として、一貫して環境放射能調査・公害関係・残留農薬・岩石・大気拡散実験などの分析調査、分析法の研究を行なった。分析化学の功績により41年9月紫綬褒章を受章。平成11年9月3日没。享年88歳。

あべ あらた

阿部 新 1918（大正7年）～2009（平成21年）

鹿角市初代市長として新体制の構築に尽力

大正7年8月17日、六郎とエツの長男として花輪町に生まれる。九州帝国大学を卒業後、秋田県庁に就職する。後に農林水産大臣を務める大河原太一郎農政課長に仕える。昭和31年、花輪町長に就任し、花輪町の都市計画などに取り組み、花輪駅前広場の整備などに尽力し、また東山スキー場の開発に取り組み、全国高校スキー大会を招致した。40年代前半、鹿角全体では東北自動車道の開通による地域経済の発展が見込まれたが、一方、鉾山の縮小に伴う過疎化の激化が予想され、これらへの対応には広域行政が必要との気運が高まった。42年設立の鹿角郡広域行政調査会理事となり合併に取り組む。鹿角市の初代市長として職員の先頭に立って、旧町村の垣根を低くし、山積した課題の解消に鋭意取り組んだ。3代、4代の市長の時は、尾去沢鉾山や各鉾山の閉山による過疎化への対応として各種事業の振興を図った。55年の大冷害では鹿角の農家の救済のため、農林水産省、東北農政局、秋田県庁などへの陳情などで東奔西走する。鹿角市史の発刊に取り組み、鹿角先人顕彰館の建設に尽力する。昭和40年から長年、花輪福社会の理事長を務めた。平成2年、地方自治の振興・社会福祉の向上で旭日中綬章を受章、同年鹿角市功労者表彰。平成21年1月8日死去。享年90歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『広報かづの』。

あべ ぎへい

阿部 義平 1942（昭和17年）～2011（平成23年）

考古学者、国立歴史民俗博物館教授

昭和17年9月16日、義栄の二男として宮川村長嶺に生まれる。花輪高校から東北大学文学部国史学科に進学し、考古学を専攻した。昭和40年同大学卒業後、奈良国立文化財研究所に勤務し、平城宮跡の発掘に関わった。43年大湯環状列石調査以降に各地で発見される環状列石・配石遺構についての論考を、「配石墓の成立」と題して『考古学雑誌』に発表した。その中で「八幡平玉内配石遺構」を縄文晩期の配石遺構として紹介し、同種遺構に関する変遷に一つのポイントを与えた。56年から国立歴史民俗博物館に転任し、助教授、教授となり、考古学研究部長も歴任した。平成20年定年退職し、同名誉教授となる。平成23年9月17日死去。享年69歳。『蝦夷と倭人』、『日本古代都城制と城柵の研究』等の著書がある。

<参考>『鹿角市史第一巻』。

あべ きょうすけ

阿部 恭助 1822（文政5年）～1902（明治35年）

鉾山日記・『阿津免草』の著者

尾去沢銅山の外方主役の阿部権八の長男として尾去沢の鹿沢ししきわに生まれる。幼少から俊才の誉れ高く、銅山御役方の一条基定に従い江戸に遊学した。佐藤信淵の子の昇庵に師事し、

経済学・冶金学^{やきんがく}を学んだという。帰郷後、長く尾去沢銅山の（精錬の一切を取り仕切る）床屋主役などを歴任し、後年銅山の（経理輸送の一切を取り仕切る）日払主役の要職を務めた。さらに、明治5年（1872）銅山が新政府に接収されたのちも、（資材・日用物資の管理、公事を取り仕切る）御役方として長く鉾山の振興・発展に尽力した。

また、文筆・博学の人で雅号を好正堂の筆名で著した文久3年（1863）から明治4年（1871）までの銅山の諸事記録『阿津免草』をはじめ、見聞雑誌・公武風聞集・御銅山御定目・飲食物調整法・応急薬方など多くを残した。これらの諸記録は、当時の世相や鉾山史解明のための貴重な資料となっている。

恭助はまた、清風亭東月の号で俳句の膨大な句集や和歌を残し、版画や錦絵にも造詣深く数多くを収集している。別名を茂郷^{もきょう}と称したが、長年の功績により藩主より「逸通^{いつつう}」の号を与えられ逸通恭助と呼ばれたという。明治35年8月25日尾去沢軽井沢で死去、享年80歳。

<参考>『鹿角市史第二卷上・下、第三卷上』、『尾去沢・白根鉾山史』。

あべ こへいじ
阿部 小平治 1619（元和5年）～ 1691（元禄4年）

白根・尾去沢鉾山を稼行した仙台の豪商・山相家

出身地の山ノ目村にちなんで、通称山ノ目小平治と称した。小平治を称したものは数代にわたったようで、白根・尾去沢を稼行したのは初代小平治重貞と二代小平治重頼である。

初代小平治が最も傑出し晩年「随波」と号したので、郷里においては随波の名で知られる。代々仙台領磐井郡山ノ目村に住む。小平治はきわめて商才に長じ、すでに年少にして木材を商って大利を博したという。鉾業に携わったのはいつの年であるか詳らかでないが、白根・永松のほかには仙台領の金山、南部領の水沢銅山も稼行した。鉾業・木材業のほか多くの事業を経営し、一代にして一国の大分限者となった。元禄4年6月没、享年72歳。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』、『尾去沢・白根鉾山史』、『川口家文書』。

あべ しげはる
阿部 繁治 1928（昭和3年）～1991（平成3年）

鹿角の社会科教育振興及び市史編纂に尽力

昭和3年、吉郎とヨネの子として、青森市に生まれる。21年下川原小学校を皮切りに、平成元年3月の定年退職まで、42年間鹿角の学校教育に奉職した。校長としては、小坂町立十和田小・中学校、鹿角市立花輪北小学校、鹿角市立十和田小学校を歴任した。

若い時から社会科教育に精通し、社会科フィールドワーク計画や小・中学校の副読本編集に携わり、常に鹿角の社会科教育を牽引した。58年度から5年間、鹿角社会科教育研究会長を務めている。さらに、郷土史研究に秀でており、鹿角市史第一巻・第二巻上・第二巻下の編纂においては、学校に奉職しながら市史編纂委員として携わった。退職後も市史編纂室嘱託員として第三巻上の編纂に関わったが、途中で病に倒れた。平成3年7月27日没、享

年63歳。

あべ じんしち じんせい
阿部 甚七（甚正） 1848（嘉永元年）～1928（昭和3年）

維新の動乱を生き抜いた初代宮川村村長

甚七は嘉永元年、阿部甚五平の次男として長嶺に生まれる。17歳の時、盛岡藩用人、目時隆之進の知行地で従僕として見出され盛岡へ上った。

戊辰時、目時隆之進の供をして入京する。勤王者であった目時は従僕甚七を長州屋敷に遣わし檜山佐渡の説得を試みたが失敗に終わり、甚七と共に長州屋敷に身を投じた。終戦後、目時は盛岡へ帰り戦後処理を行うが、売国奴との非難をうけて進退きわまり割腹自刃して果てた。終始、目時と行動を共にしていた甚七は、維新の動乱を生き抜き長嶺に戻り、名を甚正と改め甚正正光と名乗った。その後、明治22年（1889）町村制施行とともに初代宮川村村長に推された。昭和3年10月18日死去。享年80歳。

<参考> 『鹿角人物誌』、『鹿角市史第三巻上』。

あべ じんのすけ
阿部 甚之助 1924（大正13年）～2006（平成18年）

文化財保護、『大日堂舞楽』の刊行に貢献

大正13年4月27日、甚之丞とチャの長男として宮川村長嶺に生まれる。代用教員を務めた。地域の歴史や文化に造詣が深く、鹿角市芸術文化協会設立の当初から25年間にわたり理事を務め、その発展に尽力。また国の重要無形文化財大日堂舞楽の記録保存事業では、編集委員長として貴重な文献をとりまとめ、昭和55年（1980）『大日堂舞楽』の刊行に貢献した。

鹿角市文化財審議会会長、文化財保護協会会長、鹿角市史編集委員を歴任して、文化の振興に寄与した。60年鹿角市芸術文化協会功労者表彰、平成3年（1991）秋田県文化財保護協会表彰、9年秋田県民俗芸能協会表彰。平成18年9月20日没、享年82歳。

<参考> 『大日堂舞楽』。

あべ しんぺい
阿部 真平 1906（明治39年）～1986（昭和61年）

『世界の奇蹟・玉川温泉』を発刊した地元記者

明治39年4月10日、喜佐とタカの長男として宮川村谷内に生まれる。旧制成蹊中学（現成蹊大学）卒。東京で朝日新聞の嘱託記者を長年勤めた。帰郷後、八幡平蒸の湯温泉の支配人を引き継ぎながら、登山道の整備や高山植物の紹介また冬季スキー客の案内人として活動した。昭和23年（1948）、戦後は自由主義や共産主義に対する誤解も少なくなく、思想混乱のなかで郡民に中正な思想を持ってもらうことが必要と考え『鹿角タイムス』を発刊した。主筆として記事を取材して詳細に報道、人々の支持を得て地域の豆新聞として親しまれた。また、玉川温泉は「^{しんがゆ}酸湯」といわれる独特の質で知られていたが、46年湯治

客や自身の温浴体験から玉川温泉の病気療法効能を確信、『世界の奇蹟・玉川温泉』を発売して注目を浴びた。これによって、玉川温泉が「ガンに効く」との評判が日本中に広まったと言われる。昭和61年5月4日没、享年80歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角市史第三巻下・第四巻』。

あべ せいじ
阿部 征司 1937（昭和12年）～2012（平成24年）

仮面ライダーを産んだ東映の敏腕プロデューサー

昭和12年8月1日、花輪劇場の重吉とハツエの二男として生まれる。実家が映画館だったこともあり、幼い頃から映画業界を志し、早稲田大学教育学部社会科学科在学中にはシナリオ研究会に所属する。同期には、フジテレビジョン代表取締役会長の日枝久がいる。作詞家としてのペンネームは中瀬当一、田中守。脚本家としてのペンネームとして、東映プロデューサーの平山亨との共同筆名「^{かいどうほじめ}海堂肇」がある。

大学卒業後の36年に東映入社し東映東京撮影所に配属され、進行助手・進行主任などを務めた。43年にテレビ部へ異動し、44年に『プレイガール』で初めてプロデューサーに就任した。『仮面ライダー』の誕生には阿部の敏腕があつてこそ、との評価がある。仮面ライダー1号を演じた藤岡弘は阿部の訃報に際し「子供が好きで、子供のための番組を真剣に作り、何度も現場に足を運んでいたこと」、「その遺志を受け継ぎ、子供たちを失望させることなく、夢を与える責任を持って生きていきたい」とコメントを寄せている。そのほか、『暴れん坊将軍シリーズ』（テレビ朝日）、『特捜最前線』など、数々の作品にプロデューサーとして携わった。平成24年12月29日死去。享年75歳。

あべ せんぞう
阿部 仙藏 1917（大正6年）～2007（平成19年）

県営ほ場整備事業の完成に尽力

大正6年3月6日、勇太郎とマミの長男として鹿角郡宮川村谷内に生まれる。昭和40年（1965）推されて八幡平村議会議員、引き続き47年鹿角市議会議員に就任、誕生間もない鹿角市の行財政の確立や地域産業経済の振興、生活基盤の整備など、一貫して地方自治の発展に貢献した。さらに、八幡平土地改良区副理事長として、農業生産基盤の整備のため、昭和47年から土地改良区の替地処分協議（土地・道路・灌漑）を推進し数多くの協議を経て、58年八幡平地区約800町歩の県営ほ場整備事業の完成を見た。51年東北市議会議長会表彰、63年地方自治功労者として秋田県知事表彰、平成2年全国市議会議長会表彰、また5年鹿角市功労者表彰。平成19年4月23日死去、享年90歳。

<参考>『鹿角市広報（平成5年）』。

あべ ぜんのすけ
阿部 善之助 1873（明治6年）～1922（大正11年）

夏井村の耕地区画整理事業を完遂

明治6年2月24日、治助の長男として夏井村に生まれる。幼名は一郎。東京明治学校で官用簿記学を修め同25年卒業。

帰郷して夏井の殆んど未利用の村有地の活用に思いをはせ、村民を説いて杉の大造林計画をたてた。5年間この植林事業は継続され、のちに大美林となり村の財産となった。また集落の田は湿地の悪田が多く、暗渠排水による乾田化に着目して先進地を視察、青年会が耕作する四反歩を乾田とし、改良された田からは湿地の2倍もの収穫があった。明治45年（1912）「夏井村耕地整理組合」の結成をみた。乾田化の成果や耕地区画整理による土地の交換分合や資金の問題を克服して、大正11年夏井耕地整理27町歩の事業が竣工した。村民は事業の功績に報い頌徳碑を建立した。大正11年12月29日没、享年49歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角人物誌（奈良寿）』、『鹿角市史第三卷上下』。

あべ ていいち

阿部 貞一 1895（明治28年）～1950（昭和25年）

農村電化と観光事業の先覚者

明治28年5月12日、阿部重剛の長男として宮川村の長嶺和田に生まれる。東京の電気学校を卒業、日本電灯会社に就職したが、帰郷して三菱金属尾去沢鉱業所に勤務した。

当時、八幡平地区の家庭には電気は無くランプを灯して生活をしていた。電気主任として電気を導入することを考え、本社の碓・永田両発電所の夜間余剰電力の無料送電の約束を取り付けた。そして、宮川・曙両村長に村の電化計画の協力を相談、協力を得て資金の目途もつけ苦闘1年、大正11（1922）年南麓電気株式会社を設立した。この年初めて村に待望の電灯が灯った。その後日本電研工業会社を設立の傍ら、花輪線開通を見通して観光事業にも力を入れ、昭和3年（1928）湯瀬に姫の湯ホテルを創設。また十和田国立公園指定を踏まえ、将来の国立公園編入を見据えて、八幡平に藤七温泉を開業した。昭和25年7月6日没、享年55歳。

<参考>『鹿角人物誌』、『鹿角市史第三卷下』。

あべ どうすけ

阿部 藤助 1886（明治19年）～1928（昭和3年）

八幡平地区の興隆に生涯をささぐ

明治19年1月21日、孫四郎とマスの長男として長谷川村谷内に生まれる。幼名は清。19歳の時、父の急死により大館中学を中退して家業を継ぎ、翌年20歳の若さで村の助役に登用された。当時、長谷川地区の米収量反当3俵弱の湿地を暗渠排水と乾田化により収量増加を計画し、44年耕地整理組合を結成して55町歩余の土地改良に成功した。大正初期の冷害による凶作に際しては、村民を指導して宮川信用購買販売組合を結成し、6集落に販売所や農業倉庫を設置して日用品や肥料の安定供給をはかった。組合は年々発展し全国有数の優良組合となった。大正3年（1914）宮川村村長に就任、三菱金属発電所電気主任阿部貞一の提言で、隣村曙村と共に南麓電気会社を設立、初めて村に電灯を灯した。また八幡平登山の起点の谷内集落から、蒸の湯温泉を経由して山頂に至る登山道を整備した。さら

に山スキーの開発に努め、通年の八幡平観光を促進させた。これにより後世、山スキーの起点が「藤助森」と呼ばれるようになった。昭和2年（1927）植物学者牧野富太郎博士の「八幡平の植物調査」に案内同行した逸話がある。助役村長合わせて23年間無報酬で村の振興に尽力した。大正14年産業組合功労者として緑綬有功章、農事功労者として大日本農会総裁章。昭和3年5月20日没、享年42歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角人物誌』、『鹿角市史第二卷上下・第三卷上下・第四巻』、『秋田人名大事典』、『国立公園八幡平風土記』、『秋田八幡平総合案内2016・十和田八幡平国立公園八幡平地域指定60周年記念誌』。

あべ ひさし
阿部 壽 1921（大正10年）～2015（平成27年）

私学教育の振興に尽力

大正10年12月5日、政五郎とイトの次女として鹿角郡宮川村谷内に生まれる。長谷川尋常高等小学校高等科、私立花輪和洋裁縫塾卒業。曙村青年学校指導員、同夏井小学校助教員となる。昭和30年（1955）和洋裁縫研究所を花輪町船場に生徒数約20名で開設した。34年に大館文化服装学院花輪分院（生徒数約70名）となるが、38年新たに花輪女子学院として出発し、校舎を八正寺に移し生徒数150名以上を数えるに至った。49年花輪字柳田に校舎を新築し、51年に校名を学校法人花輪学園花輪服装専門学校と改称した。生徒たちが自作品を身にまとい、ファッションショーを公開するなど幅広い活動をした。また併設された学校法人花輪学園花輪幼稚園は平成3年には3・4・5歳児学級とも各2クラスで102名を数えた。花輪服装専門学校理事長・校長及び花輪幼稚園理事長・園長を長年に渡り務め、子女の職業、生活能力の育成と教養の向上、幼児の育成など私学教育の振興に尽力した。花輪図書館協議会会長、秋田県公共図書館協議会副会長の職にあって、読書教育の推進に貢献した。さらに花輪短歌会に属し『野の花を訪ねて』などの歌集を残している。4年鹿角市文化功労者表彰、私学教育振興功労者表彰。平成27年7月16日没、享年93歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『鹿角市広報（平成4年）』、『野の花を訪ねて』。

あべ ひろきち
阿部 廣吉 1920（大正9年）～2006（平成18年）

中小企業の育成振興に尽力

大正9年2月10日、政五郎とイトの次男として宮川村谷内に生まれる。秋田県工業講習所（現・能代工業高校）に学ぶ。八幡平木材工業を設立、戦後の混乱期に小学校の机・椅子の製作に貢献した。その後、複合フローリングの特許を得て業界に名を知られる。昭和30年（1955）宮川村議会議員に当選、将来の発展のため宮川村と曙村を合併し八幡平村の発足に尽力、小豆沢駅を八幡平駅と改称。以来通算30年余にわたり八幡平村議会議員、鹿角市議会議員を歴任し、都市計画の推進、同市監査委員を務めるなど地方自治の進展に尽力した。36年に初代八幡平商工会長、39年から鹿角信用組合理事、また医療法人恵愛会鹿角中央病院常務理事、八幡平高原ホテル社長として鹿角郡の中小企業の振興に貢献した。5

2年全国市議会議長会、55年には秋田県知事から地方自治功労者表彰、60年春の叙勲で藍綬褒章を受章。平成2年鹿角市功労者表彰。平成18年6月12日死去、享年86歳。

<参考>『鹿角市広報（平成2年11月号）』。

あべ まきお

阿部 牧郎 1933（昭和8年）～2019（令和元年）

鹿角初の直木賞作家

昭和8年9月4日、京都府庁勤務の吉郎と安子の長男として京都市に生まれる。20年（1945）3月、戦争の激化により父の郷里鹿角へ疎開した。大館中学（旧制）と花輪高校を経て、28年、京都大学文学部フランス文学科へ入学した。32年、民間会社に就職しながら小説を書き始める。42年、文学界新人賞の最終選考に残ってから小説家専業となる。43年に『蛸と精鋭』が候補となって以来7回直木賞候補となり、62年『それぞれの終楽章』で第98回直木賞を受賞。翌年3月、鹿角市初の市民栄誉賞を受賞した。苦難の時代に官能小説として多くの作品があるが、野球に関する小説も多く『焦土の野球連盟』など秀作がある。『危機の外相 東郷茂徳』などの評伝小説も多く、戊辰戦争における盛岡藩の鹿角での戦いを書いた『静かなる凱旋』がある。

音楽にも造詣が深く、50代になってから正規のレッスンによりオーボエ演奏を習得した。昭和45年（1970）にはラジオ番組のパーソナリティを務め、KBS京都放送で担当していたラジオ番組『話のターミナル』で第27回（平成元年度）ギャラクシー賞を受賞している。大館中学、花輪高校の同級生との交流は深く、晩年まで続いた。令和元年5月11日没、享年85歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

あべ やすこ

阿部 安子 1910（明治43年）～2005（平成17年）

杉の下保育園の創設者

明治43年3月13日、信太成六とイキの一人娘として山本郡金岡（現・三種町金岡）に生まれる。秋田北高等女学校を卒業後、阿部吉郎と結婚し京都に住んでいたが、太平洋戦争末期に八幡平の谷内に転居した。

昭和34年（1959）児童憲章を基本とした幼児教育の向上を図るとして、私立谷内幼稚園を創設。当初は近隣農家の幼児の世話を引き受け、家族労働で対応し保育した。その後51年5月1日社会福祉法人八幡平愛慈会を創設、同法人を主体とする杉の下保育園を開設し幼児教育の向上と発展充実に寄与した。また、36年から一期八幡平村議会議員、さらに八幡平地区老人クラブ副会長、鹿角市社会教育委員等を歴任。農村婦人の労働過重の軽減や地位向上、役立つ老人を目指し高齢者教育の向上に尽力した。57年鹿角市文化功労者表彰。長男が直木賞作家の阿部牧郎である。平成17年11月11日没、享年95歳。

<参考>『鹿角市広報（昭和57年11月号）』。

あべ りゅうのすけ

阿部 隆之介 1934（昭和9年）～1994（平成6年）

地方自治・産業・観光の振興に尽力

昭和9年6月26日、嘉平とキチの長男として宮川村に生まれる。上智大学卒業後、元労働大臣石田博英の秘書を務める。

八幡平村議会議員に就任後、八幡平村助役として広域行政体制の実現に尽力。50年、市議会議員から県議会議員に初当選し、通算4期15年余りの間、県議会副議長を2度、商工労働委員長、議会運営委員として、県政の発展と民生の安定など地方自治の振興に貢献した。42年には八幡平・花輪・十和田の3森林組合が解散統合して鹿角森林組合が発足。54年鹿角森林組合長及び秋田県森林組合連合会理事・秋田県林業普及協会会長に就任し、林業生産基盤整備や木材産業の振興に寄与した。また八幡平観光開発社長として切留平温泉付き別荘地の開発販売を促進、サンスポーツランドなどの国民休暇村休養施設の誘致や、県道比内宮川線の金山・黒沢トンネルの貫通など観光開発振興に生涯をかけた。61年から秋田県スキー連盟副会長として八幡平スキー場の整備などに尽力した。平成6年8月30日急逝、享年60歳。同年、正六位勲四等瑞宝章受章。鹿角市功労者表彰。

<参考>『鹿角市広報（平成6年）』。

あべ ろくろう

阿部 六郎 1893（明治26年）～ 1974（昭和49年）

大正・昭和期の教育者、文化人

明治26年6月9日、当時の鹿角郡長小田島由義とハツの六男として花輪町に生まれる。大正5年、青山学院高等科卒業。阿部エツと結婚して阿部家に入った。同7年から静岡県立韮山中学校を皮切りに各地で教鞭をとる。

多趣多才の文化人で、特に音楽への造詣が深く、兄樹人から作曲の手ほどきも受け、大館中学校（現・大館鳳鳴高校）奉職中音楽を指導し、多くの応援歌を作曲した。戦後の24年（1949）、大里健治（毛馬内）、小泉隆二（小坂）と共に鹿角合唱連盟を創設。また、私費を投じて著名音楽家を招聘し、地域の情操教育に貢献した。俳句一家の一員で、俳誌『十和田』の同人。長兄艸干とともに花輪俳談会の指導・発展に尽力した。俳号は胡六。また、宝生流謡曲をたしなみ、民謡の振興にも尽力し、日本一の唄手を生んだ。さらに各種のスポーツをも好み、花輪高女でスキー登山を実施した。昭和21年、花輪高女校長時代に進駐軍対応の秋田県知事の通訳として活躍し、この年退職した。初代鹿角市長阿部新は長男である。昭和49年、『胡六句集』刊行。同年6月17日没、享年81歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『鹿友会誌』、『鹿角人物誌（奈良寿）』、『鹿角市先人顕彰集成』。

あんべ えつと

安倍 悦人 1858（安政5年）～1941（昭和16年）

「大日堂舞楽」を復興した名村長

安政5年11月18日、大日別当妙光院貫義（現大日靈貴神社宮司）嘉津馬とサタの長男として小豆沢に生まれる。盛岡藩校に学ぶ。鹿角郡の発展興隆は交通網の整備にあるとして、玉内から大里に至る山路を廃し、花輪から田山に至る道路を計画した郡役所の構想に賛同し、村人を説得して大里田面を南北に縦貫する2キロ余の通称「長道」の完成に協力した。この道路は花輪から盛岡まで馬車が通れる直線基幹道路となった。その後公選学務委員、秋田県畜産会郡選出の畜産委員となった。

明治25年（1892）、長い間途絶していた「大日堂舞楽」の復興のため、大里・小豆沢・長嶺・谷内の古老を集めて、散逸していた古文書の収集に取り組んだ。その結果、昭和8年（1933）には完全な復興がなされ、以後毎年続いている。

明治26年には宮川村村長に推され、また花輪から盛岡間に郵便取次所の要望があり、誘致に奔走して44年宮川郵便局を開局させ、初代郵便局長として昭和11年まで在職した。昭和16年12月20日死去、享年83歳。

<参考>『秋田人名大事典（第二版）』、『鹿角人物誌』、『鹿角市史第三卷上下』。

あんべ たきえ

安倍 多喜恵 1868（明治元年）～1920（大正9年）

村人に慕われた学校長

明治元年10月29日、嘉津馬とサタの次男として小豆沢村宮麓みやふもとに生まれる。明治22年秋田師範高等科（現秋田大学）を卒業。同年宮麓小学校訓導兼校長を拝命、大正7年の退職まで30年にわたって地域の青少年教育、社会教育に尽力した。この間、青少年教育の重要性に着目、各集落に夜学の学習グループ歎善会を組織してその指導にあたった。当時宮麓地区は小作農が多く、自費で新種の鶏を取り寄せて子どもたちに育てさせ、卵を売って学用品の足しにしたり、大発生したテントウ虫をビン一杯とって来るとノート一冊を与えたという逸話が残っている。退任後、北海道で造材事業を行っていた同級生関直右衛門の懇請で空知郡三笠村の小学校長として再就職したが、大正9年2月4日現職のまま教育一筋の生涯を閉じた。享年51歳。

<参考>『秋田県人名大事典』、『鹿角人物誌（奈良寿著）』。

あんべ ひろただ

安倍 洋直 1928（昭和3年）～2011（平成23年）

陸上競技・スキーの振興に尽力

昭和3年1月20日、大友武三郎とシナの次男として、現横手市大森町に生まれる。日本体育専門学校（現日本体育大学）を卒業。

十和田高校・花輪高校の教員として陸上競技・スキーの選手育成と指導に手腕を発揮するとともに、秋田県陸上競技協会理事及び鹿角陸上競技協会理事長・会長、鹿角市体育協会理事長を長年歴任した。特に、選手の競技力向上のために科学的トレーニング法を開発、8ミリカメラやビデオを駆使した映像による指導法は、斬新であり好効果をあげた。また、不足

がちな審判員の養成にも尽力し、鹿角市のスポーツ振興に多大な貢献をした。また安倍家は代々^{おおひるめむち}大日靈貴神社の神職を引き継いできたことから、大日堂舞楽の伝承発展に尽力した。平成22年秋田県民俗芸能功労者表彰。平成23年12月25日死去、享年83歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

いけだ きちべえ
池田 吉兵衛 生没年不詳、江戸前期の人

花輪大堰の開削に尽力

鹿角郡花輪の大堰の掘進工事は、浄土真宗専正寺建立に尽力のあった当時の勢力家池田吉兵衛の掘進工事によって始まった。その開削年代は不明で伝承の域を出ていないが、おそらく天正初期に堰根川原から上中島辺りまで引水し開田したのが始まりとされる。それが次第に八正寺林まで延長され、やがて福士川と合して延長8キロに及ぶ大用水路となったのである。また、吉兵衛は貞享5年（1688）に「親鸞上人絵伝」（市文化財指定）を専正寺に寄贈している。

<参考>『鹿角市史第二卷下』、『花輪町史』。

いけだ さごうえもん
池田 左五右衛門 1811（文化8年）～1868（慶応4年）

戊辰戦争で勇戦した濁川村御境古人

慶応4年9月24日、停戦によって盛岡兵が全戦線からの撤収をすべて完了した翌日早朝、思いも寄らぬ事件が勃発した。津軽兵250人ばかりが不意に濁川村へ侵入し、鉄砲を放った上放火したのである。開戦以来濁川口の警衛に当たっていた大湯の南部監物手勢が、遊撃隊陣所まで引き揚げた直後のことであったという。

この合戦で、58歳の老齢ながら、ただ一人槍を振るって防戦し、敵に突入して討死したのが、濁川村御境古人の池田左五右衛門であった。この津軽兵による濁川村攻撃は戊辰戦最後の戦いであったとともに、全期間を通して鹿角郡内における唯一の戦闘であったとされる。

<参考>『濁川出陣日記』、『鹿角市史第二卷上下』。

いしい いさお
石井 功 1942（昭和17年）～1991（平成3年）

中学校の音楽教育と吹奏楽演奏に指導力を発揮した教育者

昭和17年7月7日、渡辺長之進とカツエの三男として能代市に生まれる。40年、秋田大学教育学部を卒業。44年、鹿角郡花輪町の石井善子と結婚、石井家の女婿となる。

功は42年に鹿角郡内の花輪第一中学校に赴任するや、音楽教育と吹奏楽演奏の指導に情熱を傾けた。その指導方法は、郡内中学・高校のレベルアップを図るため合同練習という形を取り、各指導教官のもと楽器ごとのパートに分けて練習を繰り返すという徹底したものであった。その努力の成果は、全日本吹奏楽コンクールにおいて、功の在任中、花輪第一

中学校が45年に県北大会優勝、その後、県大会に連続出場して常に上位入賞、53年にはついに県大会金賞という快挙を成し遂げる。こうして、功は尾去沢中学校の木次谷茂郎や花輪高校の佐藤修一・小林久仁郎等とともに、鹿角郡内の吹奏楽演奏のレベルを県内トップクラスにまで押し上げたのである。なお、功は和楽の演奏会などにも声楽者として積極的に参加した。その独唱力は、品のある声量の響きといい、声の艶や美しさといい、何度でも聞きたくなるほどの見事さであったという。しかし、惜しむらくも病魔に冒され、平成3年7月24日、ついに帰らぬ人となった。享年49歳。

<参考>『花輪第一中学校60周年記念誌』、『生田流箏曲・清弦会、山崎社中プログラム』。

いしい てるみつ

石井 照光 1939（昭和14年）～1998（平成10年）

ノルディックスキーの選手・指導者として活躍

昭和14年6月22日、弥太郎とサツの長男として花輪狐平に生まれる。徒競走では1位以外許さないという厳しい父のもと運動が得意な少年だった。逆立ち競争では片腕で立ってみせたり、水泳では75mの潜水も当たり前。その身体能力で米代川の激流に溺れる少女を助けたというエピソードもある。父の勧めで鷹巣農林高等学校、明治大学法学部へと進む。

37年大学卒業後に帰郷、花輪町役場に勤める。仕事の傍らマラソンやスキーの大会に出場していくつも好成績を残す。特に38～40年の県体冬季スキー大会では、距離全種目において3年連続優勝という快挙がある。その後は後進の育成指導にあたり、42・43年国体秋田県スキー男子リレー高校チーム監督、45年ラハチ国際大会コーチ、47年第11回札幌オリンピック冬季大会JOC女子距離コーチを務めた。さらに地域の小学校のスキー授業でも指導するなど鹿角のスキー強化に尽力した。平成7年鹿角市役所を退職、9年鹿角市議会議員に当選するも同年、視察中のドイツで病に倒れる。鍛錬を続け50代にして20代とも30代とも言われた若い身体ゆえか病の進行もはやく、平成10年2月24日、志半ばにして死去。享年58歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

いしがき かざん

石垣 柯山 1828（文政11年）～1898（明治31年）

花輪で有為の人材を育てた漢学者

沼田順六（号は櫟齋）の三男として文政11年大館に生まれ、のち十二所の郷校博文書院の教授石垣成美の養子となる。

藩校明德館に学び、帰郷後は郷校の教授見習となり、明治初期、白沢・扇田・釈迦内・鹿角に招かれて教授。花輪寸陰館では泉沢恭助に頼まれ句読を担当したという。郷校廃止後、大里寿はその学才を惜しみ、盆坂の自宅に漢学塾を開かせ、学殖を慕う入門者が多く、のち長福寺に塾を移した。7年（1874）尾去沢・又新学校の初代校長大森武七に招かれ、高学年生に四書を講じ、17年修身科の免許状を取得し花輪を去っている。経史、国史、地誌、

和算などにも通じ、しかも新しい学問を説く進歩主義者で、博覧強記のうへ漢詩や書をよくし、多くの有為の教え子に影響をあたえた教育者でもあった。晩年は秋田市在住の孫の有造のもとに身をよせ、明治31年1月24日没、享年70歳。

昭和9年門人達によって秋田市榎山の弘願寺に関善次郎が発起人となって彰徳碑が建てられた。協賛の鹿角人は、川村竹治、内藤虎次郎、大里武八郎、吉田継道ら8名が名を連ねている。また、漢詩集に有造が9年に刊行した『石垣柯山先生遺稿』がある。

<参考>『鹿角市史第三卷上』、『秋田人名大事典』。

いしかわ ぎへい

石川 儀平（儀兵衛） 1842（天保13年）～1916（大正5年）

社会有用の一族

毛馬内の素封家豊口伝^{つと}の二男貢の長男として天保13年7月10日生まれる。盛岡藩の家老東次郎^{ひがし}に仕え、文武の道をきわめた。明治維新後、東が外交官として中国その他に赴任すると、これに従って外遊。数年後、一時帰郷して毛馬内戸長を務める。明治25年（1892）一家あげて東京へ移住し、東と共同して貿易事業などに着手したが失敗して家産をかたむけた。しかし、儀平はつねに経倫の志をいだき、子供らもその志を継ぎ、社会有用の材が育った。長男伍一は、中国へ渡り重要任務を遂行したが国難に殉じた。二男寿次郎は海軍中佐、四男祐助は秋田中学の教頭となり、祐助の子達三は芥川賞作家として著名。五男漣平は陸軍中将、六男六郎は朝日新聞学芸部長を務め、長女ミキは書家の種市靈山に嫁した。東京にて大正5年4月30日没、享年73歳。

<参考>『十和田町の先輩』。

いしかわ ごいち

石川 伍一 1866（慶応2年）～1894（明治27年）

中国での軍事情報収集等で活躍した志士

慶応2年5月23日、儀平・そめの長男として、毛馬内に生まれる。父の厳格な教育を受けて成長し、明治7年（1874）毛馬内小学校に入学したが、のち盛岡の仁王小学校に転校、11年東京に出て攻玉社に学ぶ。また島田篁村^{ゑう}の塾で漢学を修め、興亜校で中国語を修めた。中国との貿易に着眼して19歳で上海に渡り、海軍大尉曾根俊虎に従い清朝治下の国内事情を調査した。次いで売薬を業とする楽善堂上海支店を拠点に活動する荒尾精の下で、上海・漢口・天津・北京はもちろん四川省の奥地まで深く入り込み、軍事関係はもとより、山川の形勢と人情風俗をくまなく調査して、精密な地図日記類を陸軍当局に提出した。これを基に参謀本部最初の「清国兵要地誌」が作られた。その後も売薬商人として中国各地に足跡を残す一方、遼東沿岸偵察の必要を説いて井上海軍少佐と共に、朝鮮沿岸各地の潮流や深淺などを調査した。明治27年8月1日の日清戦争開戦後も独り留まるが、天津城内に潜伏中捕われ、9月20日、天津城西門外で銃殺刑。享年28歳。

<参考>『十和田町の先輩』、『秋田人名大事典』、『鹿角市史第三卷上下』、『湖南博士・伍

一大人（高橋克三）』。

いしかわ たくぼく

石川 啄木 1886（明治19年）～1912（明治45年）

「鹿角の國を憶ふ歌」「錦木塚」を詠んだ歌人・詩人

明治19年2月20日、一禎・カツの長男として岩手郡日戸村（現盛岡市）の常光寺（父が住職）に生まれ、翌年渋民村宝徳寺へ移る。本名一^{はじめ}。母方の曾祖母熊谷エイは毛馬内の常照寺生まれである。

啄木は10代で『明星』に37年「錦木塚」を発表、「涙川つきざる水澄みわたれど、往きにしは世のとしへと手にかへらず」と詠み、さらに39年、『明星』に「鹿角の國を憶ふ歌」を発表した。「青垣山を繞らせる 天さかる鹿角の國をしのぶれば…神代のまを^ま目のあたり見ると思へば涙し流る」と「涙し流る」を5回繰り返す「鹿角の國を憶ふ歌」の詩碑は、昭和60年に市役所前庭に建立されて市民に親しまれている。錦木塚悲恋物語や大日堂ダンブリ長者物語、十和田湖伝説など伝承文化が香るまほろばの里は多感期の啄木を魅了し、また曾祖母と姉サダを思う憧憬の地として啄木の心をとらえていた。

啄木が鹿角・十和田湖を訪れたかについては論争があるが、最近の研究では可能性が高いと言われている。花輪出身の作曲家小田島樹人は盛岡中学校で一学年下で、啄木と交友があったという。最も頼りにしていた姉サダは、小坂で39年2月25日、肺結核で5人の子女を残して31歳で没した。その6年後啄木も貧窮のなか、45年4月13日肺結核のため26歳2か月の生涯を終えた。代表歌集に『一握の砂』、評論に『時代閉塞の現状』がある。

<参考>『芸文かづの41号・43号』、『石川啄木・小田島樹人鹿角ゆかりの地ガイドマップ』。

いしかわ たつぞう

石川 達三 1905（明治38年）～1985（昭和60年）

反骨・信念を貫いた第一回芥川賞作家

明治38年7月2日、祐助・うんの三男として横手に生まれる。原籍地は「鹿角郡毛馬内字城の下51番地の1」通称菅町の「石川伍一君誕生之地」碑のある家で、大正14年（1925）徴兵検査を毛馬内で受けたという。

昭和2年（1927）早稲田大学英文科に入学、一年で中退後、移民船でブラジルへ渡り、その体験をもとに国民の窮乏をブラジルの移民集団を通して描いた『蒼氓』^{そうぼう}で、10年第1回芥川賞を受け、作家活動に入った。13年中央公論社特派員として中国戦線の兵士の実態を訴えた報告文学『生きてゐる兵隊』が新聞紙法違反に問われ、執行猶予つき禁固四カ月を受けた。戦後は、『風にそよぐ葦』『四十八歳の抵抗』『人間の壁』『金環蝕』など、政治や権力に対する抵抗、腐敗や汚職事件の告発、浮薄な流行への批判、社会問題を題材にした話題作を数多く発表、映画化された作品もある。「言論表現の自由には、譲ることができない自由と、社会秩序や国家秩序との協調のためには、譲ってもよい自由の二種類がある」とする

鋭敏な時代感覚は、一貫した批判精神があり、「個人の自由」を問うものであった。終生、毛馬内石川家の出身であることに誇りを持っていた。

27年日本文芸家協会理事長、36年日本著作者団体協議会初代会長、44年菊池寛賞受賞。50年日本ペンクラブ第7代会長などを歴任。芸術院会員。昭和60年1月31日没、享年79歳。

<参考>『あきた青年広論第20号』、『鹿角市史第三卷上下』。

いしかわ りきのすけ

石川 理紀之助 1845（弘化2年）～1915（大正4年）

鹿角の農政指導、柴内村の「適産調」に尽力

弘化2年4月1日（2月25日）、奈良周喜治とトクの三男として秋田郡小泉村（現秋田市金足小泉）に生まれる。21歳の時に婿養子先の石川家を回復させる。その後、卓越した農業知識を請われ県の農業行政に従事し、以来、米質改善指導、種子交換会（種苗交換会の前身）創設、歴観農話連の結成など地域に即した農業指導に努めた。明治16年（1883）に帰村し村民と山田村経済会を組織し農業の効率的経営を奨め、5年間で村の借金を完済した。一躍話題となり農商務省や山梨県、千葉県等で講演するようになった。28年、秋田県農会の会長となり農村の土地や土壌などの総合調査である「適産調」をもとに各地の農村の指導にあたり実績を挙げた。

鹿角郡柴平村の適産調では門下生の兎沢徳蔵らの要請により石川ほか43名が、延べ日数431日を要したが、このうち鹿角郡より20名が参加している。柴平村「適産調」は村の地勢、土質、土地所有者の類別、労働年齢別、農産物、果樹などから古今風俗など村の実態を精密に調査し、将来の村の展望を描くものであった。その調査書は、①平元部落絵図、②平元土質図面、③平元部落適産調、④柴内部落適産調、⑤柴内部落適産調全図、⑥柴平村適産調総覧村是之部（乾坤雑の三冊）、⑨柴内部落絵図、⑩柴平村適産調将来（柴内部落、平元部落）などである。当時の農業の実態や農村の暮らし、民俗などの貴重な資料となっている。生涯を農村の更生、農家の救済、農業の振興のために捧げ、秋田の二宮尊徳と呼ばれた。大正4年9月8日没、享年70歳。

<参考>『鹿角市史第二卷下・第三卷上下・第四巻』、『鹿角郷土誌（曲田慶吉著）』、『北鹿地方史論考集（庄司博信著）』。

いしかわ れんぺい

石川 漣平 1879（明治12年）～1946（昭和21年）

陸軍大学校卒業の陸軍中将

儀平とそめの五男として明治12年2月21日に毛馬内に生まれる。長兄は伍一、毛馬内小学校高等科卒業後は軍人を志し、士官学校などを経て、42年陸軍大学校を卒業した。佐官になってからは、母校の砲工学校、射撃学校の教官や第13師団参謀長を務めた。大正13年（1924）陸軍少将のとき野戦重砲兵第4旅団長となり、昭和4年（1929）陸軍中将として陸軍砲兵学校長や砲工学校長に任ぜられた。その後10年から北白川宮家の別

当として10年間勤務した。晩年は長兄の伍一の遺稿の整理や資料の収集にあたり、18年12月『東亜の先覚 石川伍一と其の遺稿』を出版。退職後はよく墓参のため帰郷、高等科の卒業生に銀時計を贈ったり、時には書籍を寄贈した。その堂々たる風格と義理人情に徹した生き方は武人の典型として世人を感動させた。昭和21年3月6日病のため死去。享年67歳。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角市史第三卷上』。

いしきだ しんたろう

石木田 新太郎 1869（明治2年）～1933（昭和8年）

大正～昭和初期の政治家・文化住宅の建設

明治2年、由五郎とヨシの長男として花輪六日町に生まれる。木綿を中心にたばこや塩など手広く商売を営み、尾去沢・不老倉鉦山ふろうくらに販路を広げて財をなした。大正元年（1912）東北線の盛岡駅と奥羽線の大館駅を結ぶ鉄道の開通を目指した秋田鉄道株式会社設立に参画、8年秋田県議会議員、米代川水電株式会社監査、10年12月～12年8月花輪町町長を務める。12年に花輪駅舎の設置場所について上中島と合ノ野が予定地として花輪町民を二分する論争となったが、後の町長田中伝吉とともに尾去沢鉦山の強い要望もあり、現在地の上中島に決定した。昭和6年（1931）不老倉鉦山役員住宅の資材を買い取り、六日町裏通りに1棟二戸建て住居14戸を建設、花輪で最初の住宅団地ができた。住人はサラリーマンが多く、町内名を「文化」と名づけ35年独立した自治会となる。文化の一角はその後花輪を南北に貫く「高井田通り」となった。昭和8年1月24日没、享年64歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角市史第三卷下・第四卷』。

いしきだ はちや

石木田 八弥 1921（大正10年）～1997（平成9年）

宮沢賢治の自然農法の実践者の一人

大正10年6月20日、善太郎とナヲの長男として甘露村に生まれる。高等小学校卒業後まもなく出征し、シベリア抑留を経て帰還する。

八弥は、宮沢賢治の弟の清六を通じて、賢治の自然農法を実践した隠れた継承者の一人である。彼は賢治の宇宙観や人間としての生き様に深い感銘を受け、花輪の甘露村において、農薬や化学肥料を一切用いない有機栽培による自然農法を追求し実践した。八弥が育てた野菜や果実のきめ細かさは、包丁を入れただけで全く別物と分かるほどで、それらを食した人々は、そのあまりの美味で自然な味に驚嘆したという。賢治の人生観と自然農法の信奉者であった八弥は、生涯その研究と実践に身をささげた人物であった。また、賢治を通じて高村光太郎とも交流があり、特に賢治の弟宮沢清六とは深い親交があったという。賢治没後、弟清六を通じて賢治の100部の遺言書の1部を受けている。平成9年8月27日没、享年76歳。

いしだ えいいちろう

石田 英一郎 1903（明治36年）～1968（昭和43年）

日本における文化人類学の創始者

明治36年6月30日、花輪出身の石田（旧姓奈良）八弥と裕子の長男として、大阪に生まれる。第一高等学校文科入学と同時に鹿友会員となり、鹿角の人士と親しく交流した。

大正13年（1924）京都大学経済学部に入學（内藤湖南が身元保証人）、社会科学研究会に入って唯物史観に共鳴する一方、ニコライ・ネフスキーの講義で民俗学に関心を持つ。昭和2年（1927）日本共産党入党、翌年の3・15事件で検挙起訴され、5年の禁固刑に処されるが転向せず、唯物史観にもとづく歴史研究を志す。釈放後、無文字社会の歴史にも関心を広め、柳田国男の研究会に参加する。

昭和11年ウィーン大学に留学、歴史民族学派の薫陶を受ける。後の『河童駒引考』『桃太郎の母』はこの時代の研究成果である。戦後法政大教授を経て26年、東大教授。29年教養学部にはわが国最初の文化人類学講座を開設する。第一次東大アンデス学術調査団々長として、新大陸の古代文明研究の新分野も開いた。

退官後、東北大教授、多摩美大学長を歴任。昭和43年11月9日死去。享年65歳。

<参考>『朝日人物辞典』、『鹿友会誌』、『石田英一郎全集』。

いしだ ぎざえもん

石田 儀左衛門 1635（寛永12年）？～没年不詳

白根近隣諸鉦山を稼行した山師

寛永12年、石田儀兵衛勝正を父に白根金山で生まれる。実名は勝永。父儀兵衛は石田三成の遺児とも伝えられ、慶長11年（1606）18歳にして白根に下り、毛馬内石田家の初代となった。山師として修業を積んだ儀左衛門は、天和2年（1682）に白根の北東の立石銅山を見立てて稼行し、後に弟又市が見立てた駒木銅山も一時稼行するなど、請人として活躍した。また、御境古人も務めている。

はじめ白根にあった誓願寺が、白根の衰微により毛馬内に移転する際に、旦中（檀家）筆頭に儀左衛門の名のある願書が誓願寺より出されている。

<参考>『鹿角市史第二巻上』、『白根談叢（浅井小魚）』、『尾去沢・白根鉦山史』。

いしだ こうしろう

石田 幸四郎 1930（昭和5年）～2006（平成18年）

細川内閣の実現、自公連立などに活躍した政治家、宗教家

昭和5年8月22日、清志とツカの四男として札幌市で生まれる。その後、毛馬内小学校に入学して四年生まで在学。明治大学商学部を卒業後、聖教新聞広告部に勤める。創価学会青年部長などを務め、ホープとして期待されていた。公明党の組織作りのため愛知県に派遣され、昭和42年（1967）、旧愛知六区より衆議院議員に当選、通算10期を務める。平成元年（1989）、公明党委員長に就任、平成5年、非自民連合政権の実現に尽力する。細川内閣、羽田内閣で総務庁長官（国務大臣）に就任する。平成5年、新進党の副党首に就

任し、平成9年、公明党の再結成により最高顧問に就任する。平成11年、「鳥獣の狩猟及び保護の法律」の改正に際し、野党であったが、地方のためには政府案がベターであるとして公明党内の賛成のとりまとめに尽力した。平成12年、政界を引退後、鹿角市のふるさと大使として東京鹿角会等に出席し、「毛馬内の石田です。ふるさと鹿角の発展に尽力します。」と挨拶をして、多くの鹿角人を感激させた。平成18年9月18日没、享年76歳。

いしだ しゅうぞう

石田 収 蔵 1879（明治12年）～1940（昭和15年）

北方民族研究の草分け

明治12年3月6日、実継とキヨの4男として柴内村に生まれる。白根から毛馬内に移った石田家の一族である。花輪小学校、八戸中学校、第四高等学校を経て東京帝国大学理科大学動物学科・同大学院に進む。日本の人類学の創始者坪井正五郎のもとで、人類学、動物学の研究に励んだ。明治40年、坪井正五郎の樺太調査に随行し、以降、複数の大学で教鞭をとる傍ら、昭和14年（1939）までに5回にわたる現地調査を重ね、北方民族文化研究のさきがけをなす貴重な記録を残した。

大正4年（1915）からは『人類学雑誌』の発行兼編集者として、日本の人類学発展に大きく寄与する一方、東京農業大学教授として後進の指導に一生を捧げた。昭和15年1月31日死去、享年60歳。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』、『上津野第26号』、『石田収蔵展図録（東京都板橋区教委）』。

いしだ はちや

石田 八 弥 1863（文久3年）～1925（大正14年）

日本の鉱山学の近代化に貢献

文久3年8月21日、豪商佐庄の分家「佐幸」の奈良又助の五男として花輪今泉に生まれる。幼少の頃川村左学に漢学、さらに町井勝太郎に代数学を学んだ俊才であった。明治9年（1876）秋田中学に入学、同15年県令（今の知事）石田英吉の養子となる。その後帝国大学採鉱冶金科を卒業、一時鹿角の三菱金属小真木鉱山勤務を経て、ドイツのフライブルク鉱山大学に留学し、同24年帰国。その後直ちに宮内省御料局技師に任官し、硫化鉄鉱の含有硫黄から硫酸を製出する方法を案出して、化学肥料生産を容易にした。後、官を辞して三菱に入社、大阪支店副長として大阪製錬所の経営に当たる一方、電気分銅法の完成、硫酸銅ポルドー液の原料となるタンパク製造、金銀精製の電気分解法の発見など、わが国の鉱山学の近代化に大きな業績を果たした。

明治34年養父の死により男爵を襲爵、39年には大阪製錬所長、大正4年工学博士、同6年三菱鉱業研究所初代所長となる。大正14年3月10日没、享年61歳。3男3女に恵まれた情の人であった。文化人類学者石田英一郎は長男。

<参考>『秋田人名大事典』、『鹿角のあゆみ』、『鹿角人物誌』、『鹿友会誌』、『鹿角市史第二巻上・第三巻下・第四巻』。

いづみさわ おりた

泉澤 織太 1777 (安永6年) ~ 1840 (天保11年)

私塾を開いた鹿角学統のさきがけ

安永6年、和右衛門と志和の長男として毛馬内に生まれる。字は子廉、号は緑泉。大館人黒沢源吾に学び、さらに盛岡の長谷川龍嵩に経学、宮杜箕山きざんに詩を学ぶ。やがて毛馬内に家塾を開いて子弟の教育に励み、子の恭助(修斎)、孫の熊之助三代にわたる「毛馬内のお師匠さま」の道を開いて、鹿角学統のさきがけをなした。

壮年になって主君桜庭氏の家宰を数十年つとめ、事にあたって進言する所も多かったという。詩文が巧みであったが、原稿を留めることを喜ばず、多くが散逸して残っていない。天保11年12月16日没、享年63歳。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角志(内藤十湾著)』、『秋田人名大事典』、『鹿角市史第二卷下』。

いづみさわ きょうすけ しゅうさい

泉澤 恭助(修斎) 1806 (文化3年) ~ 1870 (明治3年)

内藤十湾などを育てた鹿角第一の儒学者

文化3年10月、桜庭氏家臣織太と由恵の長男として、毛馬内に生まれる。号は修斎。

父の庭訓を受けて幼少より神童と称され、長じて学問を好み、父の家塾を継いで師匠様として尊敬された。門人は毛馬内だけでなく花輪などからも集まり、内藤十湾、田中茂八郎、栗山新兵衛、川村左学、大里寿ら優秀な人材を輩出した。また、長沼流兵法や荻野流砲術を体得して後進を指導した。大館の中田錦江、高橋松園、石垣柯山、盛岡の江幡梧楼、川上東巖ら近隣の学者とも交流し、鹿角第一の儒学者と言われた。修斎はまた絵画を好んで、盛岡の田鎖蘭室に学び、花輪出身の川口月嶺とも親交があったという。

維新後花輪に置かれた江刺県の寸陰館の舎長(館長)となったが、ほどなく明治3年10月13日、病のため死去。享年64歳。修斎の30年祭に門人らが碑を建て、『修斎先生遺稿』を出版した。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角人物誌(奈良寿著)』、『鹿角志(内藤十湾著)』。

いづみさわ まきた りさい

泉澤 牧太(履斎) 1778 (安永7年) ~ 1855 (安政2年)

江戸で学び、亀山藩儒となった折衷学者

安永7年、和右衛門と志和の二男として毛馬内に生まれる。本名充、号を履斎という。若くして学を志し、母の弟伊藤為憲を頼って江戸に出奔。その世話で折衷学者朝川善庵の学僕となり、雑用のかたわら辛苦勉強して入門を許され、やがて塾頭となった。

文化13年(1816)、清国人邱有斌ていゆうぶんの水戸漂着に際し、幕命を受けた善庵から長崎護送の大任を任せられ、天下にその名を知らしめた。それから間もなく伊勢亀山藩から招かれて藩儒となり、150石の祿を給される身となった。盛岡藩世子信侯のぶともも弟子の礼をとって、江

戸藩邸で経書を聴講した。信侯^{きせい}帰盛に際して同伴した牧太は、家老、諸役人、諸士など一門中を集めて3時間に及ぶ「御前講釈」を行って、耳目を集めた。また、毛馬内に帰省した時には、教を乞う者が引きも切らなかったという。

安政2年7月の江戸大地震で負傷したのがもとで、10月、その生涯を閉じた。享年77歳。著書に『真山民詩集』、『善庵随筆』。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角志（内藤十湾著）』、『秋田人名大事典』、『鹿角市史第二巻下』。

いたばし なみじ

板橋 並治 1908（明治41年）～1998（平成10年）

日米親善に貢献した日米会話学院長

自ら「太平洋に板の橋を架けた男」と称した板橋並治は、明治41年錦木末広に生まれる。後に一家は小坂町古館に転居、並治は小坂尋常高等小学校を卒業後、明治大学経済学部に入學、その間に外交官を夢見て英語学校で学んだ。昭和8年（1933）満州国が建国され、日米関係が悪化していく危機感のなか、英談会に所属する並治ら学生たちは、日米学生間での友好会議を企画、翌年「第1回日米学生会議」が開催された。この歴史的会議を転機にして、並治は南カルフォルニア大学へ奨学生として留学、その後、コロンビア大学大学院へ転入した並治は、在ニューヨーク日本総領事館の嘱託として勤務のかたわら勉学に励んだが、平和への願いもむなしく日米は開戦、帰国を余儀なくされた。

終戦後の昭和20年（1945）10月、開設されたばかりの日米会話学院の教授部長に招かれ、翌年学院長に就任した。その生涯を日米会話学院と国際教育振興会に捧げ、日米交流親善の歴史に深くその名を刻んでいる。平成10年4月14日没、享年90歳。

<参考>『小坂町町報—小坂にゆかりの先人たち』、『あきた（秋田県広報・昭和56年8月号）』。

いっとくあん おそしいち

一徳庵 於曾此一 1823（文政6年）？～1878（明治11年）

幕末から明治初めの鹿角俳人の指導者

文政6年（？）甲斐国（現・山梨県）に生まれる。本名於曾啓之丞、加々美氏とも称した。辻嵐外の門で学び、江戸に出て儒家に入門。安政期に南部侯に仕え、盛岡に移って禄100石を与えられる。此一は、盛岡に来るや瞬く間に勢力を広げ、盛岡俳壇の中心的存在となり、その名は中央まで知られるようになった。おおらかで明るさのある句風で、盛岡藩のみならず秋田藩にも多くの門人を擁した。鹿角でも、鎌田落谷をはじめとする多くの俳人たちが此一に師事し、慶応3年（1867）此一が撰した『花のちり』には、落谷や滝麟趾^{りんし}など毛馬内の俳人が10人、草山^{そうざん}（金沢玄龍）など花輪の俳人5人が入集している。

慶応2年7月、此一は鹿角を訪れて毛馬内、大湯、花輪に滞在するが、この時終始付き添って案内したのが、翌5月割腹自殺する近内一人（王民）であった。明治7年秋来訪の時は、

2週間滞在した後、阿仁前田、能代から秋田まで足をのぼしている。明治11年9月5日死去。享年56歳。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』、『岩手俳諧史上下（小林文夫著）』、『文芸かづの15号』、『鹿角志（内藤十湾著）』。

いとう いけん

伊藤 為憲 1767（明和4年）～1839（天保10年）？

鹿角学統の祖、初の郷土史『鹿角縁記』の著者

名は惣兵衛（宗兵衛）。桜庭家の家臣喜三右衛門の三男として明和4年毛馬内に生まれ、幼少から神童といわれた。青年期の為憲は、漢詩・和歌・俳諧をたしなみ、その秀作は菅江真澄の『十曲湖』や毛馬内の馬淵里夕の『錦木集』、さらに『錦木塚歌句帳』などに収められている。文芸に異彩を放った為憲が学問への志を抱いて江戸に出奔したのは、寛政8年（1796）30歳のときである。家庭教師として仕えた竹本氏が長崎奉行になるやその公用人にあげられ長崎に赴き、対外貿易や異国文化にふれ見聞を広める機会をえた。江戸での為憲は、山本北山の門下の折衷学者として重んじられた。泉沢履齋が朝川善庵の学僕になったのは、叔父為憲の斡旋によるものである。

文政10年（1827）為憲は子供のころ聞いた昔話を『鹿角縁記』にまとめて、故郷に遺している。のちに竹馬の友の内藤官蔵（十湾の祖父）が訪ね、けふの細布に『錦木塚縁記』を添えて贈った。久し振にその本を見て望郷の念にかられた為憲は、証拠となる歴史資料をあつめて、天保7年註釈本の『鹿角縁記』を著述、最初の鹿角郷土史を完成させた。為憲は鹿角では江戸遊学の魁で、これを先達として奈良讓山、泉沢履齋らが次々と江戸にのぼり、鹿角学統の祖となった。

<参考>『近世鹿角学統考（高橋克三）』、『十和田町の先輩』、『鹿角縁記（『秋田叢書第八巻』）』、『鹿角市史第二巻下・第四巻』、『鹿角志（内藤十湾）』。

いとう りょうぞう

伊藤 良三 1883（明治16年）～1964（昭和39年）

初代十和田町長で郷土史家

明治16年1月20日、文七の長男として毛馬内古町に生まれる。父について漢籍の素読を学び、神童の誉れが高かった。32年秋田師範学校に入学したが病気のため中退、青雲の志をいだいて上京、井上円了の哲学館に学んだが学資が続かず退学し、帝国学士院雇いとなった。40年帰郷して毛馬内小学校の代用教員となり、文検に合格して45年八戸中学校教員となる。当時の教え子に農林大臣三浦一男、立教大学長松下正寿、青森県知事山崎岩男らがいる。

帰郷後は、恩師和田喜八郎の懇請により秋田師範学校に勤め、昭和6年（1931）県立盲啞学校長となり、盲啞教育の基礎を確立した。9年町議会の満場一致で毛馬内町長に就任し、町政の改革に尽力。18年鹿角工業学校の開校にあたっては、工業学校誘致のため創立

委員長となり、募金活動の先頭に立った。30年には毛馬内、錦木、山根の町内合併を敢行し、翌31年十和田町と大湯町を合併し、新たに初代十和田町長に当選した。晩年は郷土資料の収集とその編述につとめ、在職中発行の『毛馬内郷土史稿』の続編として『毛馬内郷土史資料・明治時代の部上・中・下、旧藩時代の部』等を執筆。昭和39年4月16日、81歳の生涯を閉じた。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角市史第一巻・第三巻上下・第四巻』。

いのうえ ただと

井上 尹人 1895（明治28年）～1937（昭和12年）

日中戦争で名誉の戦死を遂げた陸軍中佐

明治28年6月26日、伊太郎とノブの長男として毛馬内に生まれる。明治35年（1902）毛馬内小学校卒業後、盛岡中学校、仙台中央幼年学校を経て、大正6年（1917）5月陸軍士官学校を卒業して少尉に任官した。10年シベリア東端サガレン州に派遣されてチャイオ守備となり、昭和2年（1927）歩兵大尉に。同7年には満州駐在となり長春勤務を終えて11年8月陸軍少佐に昇任した。翌年歩兵第104連隊を新編成して上海戦線に出動し、12年10月18日江蘇省櫓網湾付近の戦争で名誉の戦死を遂げた。同月従5位、勲3等、功4級陸軍中佐に補された。資性温厚、山口流の剣士として祖父新十郎の血をひいた剣道の達人でもあった。享年42歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『十和田町の先輩』。

いのうえ ちょうざえもん

井上 長左衛門 生没年不詳、江戸中期の人

花輪大堰を完成させた宿老

井上長左衛門家の初代・井上味兵衛^{もろまさ}専正は、信州高井郡城主井上隠岐守源満実の末孫とされる。父専忠は近江国司北畠具教に仕えていたが、信長に主君ともども滅ぼされ、専正は母と近江の中西村に隠住。母の死後、弟らと天正17年（1589）花輪に来住して商人となる。専正はこの地に浄土真宗の寺がないことから、西本願寺顕如上人の許しを得て専正寺を創立、開祖となり、大坂から来た浄心に分家の形にして跡を継がせて今日に至る。

長左衛門家は二代専勝（専正の長男）から「長左衛門」を襲名するが、三代目専重の代に中野家から苗字帯刀を許され、その後代々町老（のち宿老）を世襲する。また崎山銅山見立てや尾去沢銅山の輸送業などで財をなし、朝日長者と呼ばれた。宝永2年（1705）専正寺が火災で焼失、直ちに再建にとりかかった長左衛門と門徒らは、八正寺林を伐採して建立したという。その時に林を伐り払った跡を開田することにし、その灌漑用水として長年寺角下まで来ていた大堰を掘削して福士川とつなぎ、現在の形にした。大堰は、天正（1573～92）の終り頃専正寺建立に尽力のあった池田吉兵衛の掘推工事から実に百数十年かかって完成したことになる。

<参考>『鹿角市史第二巻上下』、『井上家系図・過去帳』。

いわお かつうえもん

岩尾 勝右衛門 生没年不詳、幕末から明治期の人

蝦夷地の鉱山調査に従事した尾去沢銅山山先

尾去沢銅山山先五家の一つ岩尾家の当主。山先の勝右衛門が箱館奉行の要請によって蝦夷地に渡ったのは、安政3年（1856）のこととされる。『新撰北海道史』には、奉行竹内保徳が盛岡藩に鉱山熟練者の派遣を命じ、同藩は鉱山山先の岩尾勝右衛門・手代青山伝作・工藤市右衛門及び鉱夫等8名を箱館に派し、付近の鉱山を巡検調査、その後命によって川汲・市渡の二山が官業として開坑した、と記されている。その後岩尾は再三渡島を繰り返し鉱山調査に従事、この時期幕府直轄の蝦夷地におけるお雇い技術者としての立場にあった。安政4年2月、その功によって勝右衛門は花輪御給人となった。

<参考>『鹿角市史第二卷上下・第三卷上』、『尾去沢・白根鉱山史』、『新撰北海道史』。

いわだて うこう

岩 館 雨香 生年不詳～1954（昭和29年）

鹿角の俳壇の興隆に貢献した俳人

花輪の恩徳寺住職21世の天英洞扇で、昭和初期に鹿角の俳壇を支えた俳人。昭和6年（1931）11月、花輪で種苗交換会が開催され、尾花吟社主催で秋田、岩手、青森三県合同の句会が催され俳句熱が盛り上がり、7年12月、小田島徳蔵（艸子）らにより「花輪俳談会」が創設された。岩館は創設者の一人で、その運営に尽力する。9年3月発行の花輪俳談会句集『俳味』では共同編集人となり、18年まで約十年、ほぼ独力で発行し続けた。この間、11年小田嶋徳蔵の妹の渡部トミ（森女）の森女句碑が、恩徳寺に建立されたのを記念して編まれた追悼句集『花卯つ木』には、岩館の「山峽の辛夷は咲けり去年のまゝ」が収録されている。12年、俳人高浜虚子の来鹿に際してはその労を執る。14年、『俳味』の5周年を期に花輪俳談会が発行した合同句集『句聚』でも岩館は久保田晋也とともに編集発行人となった。この句集には岩館の「末っ子は裸御免の昼餉かな」が収録されている。昭和29年、死去。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

いわだて ともよし

岩 館 知 義 1925（大正14年）～2016（平成28年）

郷土鹿角が生んだ風景面の詩人

大正14年、弥次郎とフサの長男として大湯に生まれる。小学校の頃より聡明で絵を描くのも上手く、周囲の人や学友は皆早くからその才能を認めていた。大湯小学校大清水分校、大湯小学校で教員をし、昭和24年（1949）退職。絵の道を志し27年上京、木下孝則先生に師事した。30年一水会展に初出品し入選。31年日展入選。32年一水会賞受賞、翌年同会員となり、以来会員佳作賞を多数受賞。41年、43年神奈川県展議長賞受賞。46年には石田博英氏の薦めで渡欧。仏国サロン・ドートンヌ入選、帰国後滞欧作展開催。また神奈川美術展実行委員も務めていた。平成3年（1991）から東京、秋田、酒田などに

て個展を開催。暇をみては郷里に来て、十和田湖や鹿角の風景を多く描き、「風景画の詩人」と称された。平成28年3月18日没。享年91歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

ういるへるむ ぶーる
ウィルヘルム・プーラー 1890（明治23年）～1979（昭和54年）

慈栄私塾を創設した毛馬内カトリック教会の神父

ウィルヘルム・プーラー神父は、明治23年10月26日ドイツに生まれ、大学で哲学と神学を学び、大正10年（1921）1月カトリック教会の司祭として来日、翌11年小坂に来た。この年大館町で発生した多くのチフス患者看護のため、プーラー神父は献身的医療活動を行った。13年過労で倒れたローゼン神父と交替して毛馬内カトリック教会の二代目神父となり、在職は昭和20年（1945）11月まで21年の長きにわたった。赴任して間もなくの同年9月、私立毛馬内マリア園を創設して自ら園長となる。昭和5年毛馬内下小路（現住所）に幼稚園を建設し、仮の聖堂と司祭館も兼ねた。翌6年新教会堂を経費1万円で建立した。当時、日本は満州事変、東北の大凶作で不況のどん底にあって中学進学者は激減。プーラー神父はこんな時こそ教育を振興し恵まれない青少年に短期間で中等教育以上の教育を身につけさせるべきであると、昭和7年慈栄私塾の開設を決意、講師も無報酬で奉仕、神父自らもドイツ語・英語・仏語を教えた。

昭和13年秋田県教育会は、プーラー神父を教育功労者として表彰、私財を投じて慈栄塾を創設し多くの人材を育成した功績を称えた。昭和54年没、享年89歳。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角市史第三巻下』。

うえやま もりこ
上山 守古 生年不詳～1878（明治11年）

盛岡藩主の鹿角巡視に随った藩士

盛岡藩士上山半右衛門の嫡子。本名は広崇^{ひろたか}。万延元年（1860）盛岡藩主利剛^{としひさ}が鹿角を巡視した時、中奥小姓^{なかおくこしやう}として仕えた上山守古は約1ヶ月に及ぶ事項を『両鹿角扈從日記』にまとめた。尾去沢銅山では働く女性たちの民謡「からめ節」を聞いて取りあげている。また大湯温泉では、藩主の湯治の様子や大湯川での魚取り、武芸上覧、御前講釈^{ごしやう}などについてふれており、大湯下ノ湯での二週間にわたる藩主湯治の例は他には見当たらない。戊辰の役では野辺地警衛、風雲隊隊長となり、白石転封に際しては亘理詰^{わたりにづめ}として活躍した。

<参考>『鹿角市史第二巻上下・第四巻』、『南部藩・参考諸家系図』。

うすい じんうえもん
白井 仁右衛門 生年不詳～1699（元禄12年）

江戸前期の鹿角金山奉行、御境奉行

本名を今方^{こんまん}、実名を景元あるいは景綱という。仁右衛門は数代にわたる通称名で、初代景元、三代景則、四代景雄が称した。初代仁右衛門は生国備後（現・広島県）福山の人で江戸

に住んでいたが、寛文3年(1663)南部重直の代に江戸で召抱えられ、鹿角郡小平村などに200石を賜わったという。寛文中に鹿角金山奉行を務めたが、のち御物頭・鹿角古人頭などを兼帯して、南部・秋田境界争論にてしばしば江戸に登り、境界裁定のために尽力したといわれる。延宝6年(1678)3月、その功により100石を加増され、合せて300石となった。幕府裁定の南部・秋田の境界お墨引線のうち土深井川は、その後たびたび洪水によって流路の変化があったので、元禄6年(1693)御境奉行の仁右衛門と松岡八左衛門が現地において相談し、10本の御境柱を立てることを決めたという。仁右衛門に対する藩の厚い信頼は、晩年急病を得て死の床にあった際、家老桜庭十郎右衛門らが心配して駆けつけ、その症状を尋ねたことにも表れている。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『南部藩・参考諸家系図』。

うちだ しんご
内田 慎吾 1838(天保9年)～1921(大正10年)

外国人から鉱山技術を学んだ山相家、尾去沢名誉村長

尾去沢銅山支配人内田九兵衛とみきお富学の四男として後妻かねとの間に生まれる。幼名は武八郎と称した。少年時代、盛岡に出て文武を修め、16歳にして銅山御用見習いとなった。元治2年(1865)同役川口理仲太とともに江戸登りを命ぜられ、横浜においてアメリカ人、フランス人、ポルトガル人と接触した。外国人より鉱山学を学ぶ許可を得て、横浜運上所にてアメリカ彦蔵の伝習を受けることになったという。翌年4月、川口理仲太と二人で松田甚兵衛に同行し、公儀役人の資格をもって足尾銅山見分の役を果たした。帰国後の同年10月より、尾去沢銅山もとやま元山山先岩尾勝右衛門の加勢を命ぜられている。

慶応4年(1868)、戊辰戦争の討ち入りの際は、花輪二番隊大砲方頭取として奮戦した。明治27年(1894)、尾去沢名誉村長。妻は毛馬内御給人の岩泉和平娘たい・泰。手記に『山用私記』などがある。大正10年没、享年83歳。

<参考>『鹿角市史第二卷下・第三卷上』、『内田家系譜録』、『尾去沢・白根鉱山史』。

うちだ しんぞう
内田 慎蔵 1912(大正元年)～1993(平成5年)

昭和期の洋画家

戊辰戦争の勇士内田大蔵の継嗣となった守蔵の子。父守蔵は尾去沢名誉村長内田慎吾の四男で、龍山司令部法務官を経て、京城弁護士会々長や検事などを歴任した。

慎蔵は、大館中学在学中から白壺会を結んで校外で展覧会を開くなどしていたが、卒業の翌昭和7年(1932)には「病舎」が第1回独立展に入選するという早熟ぶりを見せた。同年上京して帝国美術学校(現・武蔵野美大)に入るが、一年足らずで退学、独立美術研究所に通い福沢一郎に師事する。21年、後輩の長谷川善四郎の世話で扇田に復員引き上げ、47年の定年まで扇田を中心に中学校の美術教師を務めた。22年、第1回秋田県総合美術展の「雪中運材」で文部大臣賞、以後中央展では国画会1回、独立美術3回、美術文化2回

の入選を果たし、秋田県と大館市から文化功労者表彰も受けている。一方、心象美術の創立に参加し、風土に根ざした心象風景を「雪女」シリーズに描くなど、心象展には死の前年まで35回連続で出品し続けた。平成5年没、享年81歳。没後、青蔵ら三兄弟によって『内田慎蔵作品集』が刊行された。

<参考>『内田家系譜録』、『大館の人・事典』、『鹿角市史第三巻下』。

うちだ せいたろう

内田 清太郎 1864（元治元年）～1923（大正12年）

ドイツのフライブルク鉱山大学校で学んだ鉱山技師

尾去沢名誉村長となった内田慎吾と毛馬内御給人岩泉和平娘泰の長男として、元治元年4月10日に生まれる。明治21年（1888）工部大学校の工学士となり、同年生野鉱山局工師補となったが、翌22年宮内省御料局生野支庁在勤の技師試補を命ぜられた。24年御料局技師、25年鉱場課太盛主任となり、26年欧州行請願を許されドイツへ向けて出帆した。27年鹿角郡の先輩石田八弥の在学したドイツのフライブルク鉱山大学校へ入学し、在学中学術研究のためドイツ国内をはじめオーストリア・ハンガリー等の諸鉱山・工場を視察した。29年7月帰国の途につきベルギー・フランス・イギリスを経てアメリカに渡り、9月サンフランシスコを出帆し横浜に帰った。

30年台湾に渡り台湾総督府技師となったが、32年以降宝得鉱山（島根県山美郡）・日平銅山等の技師として鉱業の開発に努めた。39年尾去沢に帰省してからは尾去沢鉱山技師を嘱託されていたが、大正4年退職し、村会議員、村長を務めている。大正12年7月15日没、享年59歳。

<参考>『内田家系譜録』、『尾去沢・白根鉱山史』、『日本鉱山史の研究』、『鹿角市史第三巻上下』。

うちだ だいぞう

内田 大蔵 1837（天保8年）～1868（明治元年）

戊辰戦争の勇士

尾去沢銅山支配人内田久兵衛とみきわ富学三男として後妻千代との間に生まれる。幼名は富次郎と称した。11歳のとき盛岡の藩医三浦氏の養子となって、江戸へ出て医学に従事。ところが、盛岡より再三脱藩して遍歴を重ね、維新の志士たちと交わり、斎藤弥九郎道場に入入りしていたという。約10年後盛岡に帰り、謹慎許されて花輪に戻ると、まもなく関村家の養子となった。戊辰戦争が起こると、花輪御給人隊一番手剣槍武者として従軍。このとき、弟の慎吾・平八郎・由義の三人も、それぞれ大砲方頭取・御使番・二番手惣締役として従軍した。大蔵は十二所より扇田に奮戦し、単身孤剣をふるい敵兵を200メートル近く後退させたが、8名に取り囲まれ4名を倒すもついに討ち死にした。だが、その勇戦ぶりは、後年に至るまで人々に賛嘆されたという。妻子なきゆえ両家協議のうえ関村家と離縁、内田家において守蔵をその継嗣と定めた。明治元年8月12日没、享年31歳。

<参考>『鹿角市史第二卷下』、『内田家系譜録』。

うちだ たけし

内田 武志 1909（明治42年）～1980（昭和55年）

民俗学と菅江真澄の研究者

明治42年10月25日、尾去沢鉦山の修三とサトの二男として八幡平宮川村に生まれる。本名は武。内田家の先祖は尾去沢鉦山が盛岡藩直営となった際の山内支配人の内田九平衛とみなみ富涛である。武は幼少の頃、父修三の勤務地・碓発電所社宅に住んでいた。

大正12年（1923）鎌倉に転居するが、関東大震災で家が全壊し、1年後に静岡へ移転した。まもなく静岡商業学校に入学するも血友病を発病して退学、この頃詩人の蒲原有明の知遇を得て、柳田国男・渋沢敬三の指導の下に民俗学の研究を続ける。昭和5年（1930）『民俗学』に「年中行事・鹿角郡宮川村地方」を初めて発表し、11年『鹿角方言集』を刊行した。20年戦争の激化により、母方の大叔母の嫁ぎ先である郷里毛馬内の高橋家に疎開、毛馬内町長の伊藤良三と出会い、菅江真澄研究に没頭したという。昭和21年妹ハチとともに秋田市に転居、柳田国男・渋沢敬三の賛助を得て「菅江真澄研究会」を設立した。のち真澄研究の集大成ともいわれる『菅江真澄全集』（全13巻）、『菅江真澄遊覧記』などを出版、真澄研究の第一人者と評される。

武志が病床に伏したまま研究を続けられたのは、妹ハチの献身的援助によるところが大きいといわれる。昭和29年ハチとともに秋田市文化章、42年県の文化功労章、50年柳田国男賞を受賞。昭和55年12月3日没、享年71歳。

<参考>『鹿角市史第四巻』、『鹿角市先人顕彰集成』、『内田家系譜録』、『秋田人名大事典』。

うちだ はち

内田 ハチ 1913（大正2年）～1998（平成10年）

兄・内田武志の真澄研究を支えた理科教育者

大正2年2月2日、修三とサトの二女として八幡平碓に生まれる。内田武志の妹。東京女子師範学校（現・御茶ノ水女子大学）を卒業し、秋田県立女子医学専門学校、秋田師範学校、秋田大学で教鞭を執った。血友病で動けなかった兄・武志の「菅江真澄研究」を手足や目となって支えた。特に大館の栗盛家にある真澄の資料を書き写すため、何十回となく通い続けた。生物学を専攻したハチは、真澄の紀行文から自然科学の記録に着目し記録の科学性を証明しようとした。また真澄の記録方法を理科教育の実践に応用し、秋田大学の学生に真澄の実践を教え、学生が教師になって教育の現場に生かした様子を報告し、「真澄は教育の中に生きており、そこでは博物学を広めたシーボルトを引き合いに、真澄は半世紀も早くこうした分野に携わっていた」と評価した（『日本理科教育学会研究紀要』所収「理科教員養成における科学史教材の役割—菅江真澄と彼の科学的業績—」より）。昭和50年（1975）鹿角市文化財保護協会設立総会で「菅江真澄と鹿角」（『上津野第1号』所収）と題して講演している。平成10年没、享年85歳。

<参考>『菅江真澄が見た日本』、『鹿角市史第四巻』。

うちだ へいぎぶろう

内田 平三郎 1873（明治6年）～没年不詳

産業振興に尽力した明治・大正期の地方政治家

明治6年6月3日、尾去沢銅山の山相家内田慎吾と毛馬内御給人岩泉和平娘泰の三男として生まれる。平三郎の祖父九兵衛は尾去沢銅山山内取締役、兄清太郎はドイツのフライブルク鉱山大学校で学んだ鉱山技師であった。

秋田県内の自動車の営業は秋田市が最も早く、45年（1912）、鹿角選出の県議員であった内田平三郎が営業許可を得て、秋田市内、秋田市・土崎間、秋田市・本荘間を路線としたのが始まりという。また、平三郎は鹿角の産業振興にも大いに尽力したが、その中で大正元年（1912）に免許が下った鹿角地方への鉄道計画において、大館・花輪間の軽便鉄道を計画、毛馬内の豊口竹五郎等とともに、その実現に向けて奔走したとされる。尾去沢村村長・県議員・県議会副議長などを歴任。

<参考>『秋田県警察史』、『内田家系譜録』、『鹿角市史第三巻上下・第四巻』。

えさしか そのた

江刺家 其太 生没年不詳

明治初め鹿角に布教したハリストス正教会伝教師

生没年不詳。幕末から明治期の人。江刺家善八とヨツの長男として青森県三戸郡相内村（現・南部町）に生まれる。明治5年（1872）、幕末に箱館に来たロシア人ニコライの伝えたハリストス正教の洗礼を受ける。洗礼名ステファン。因みにニコライが洗礼を授けた最初の日本人は、神官の澤邊琢磨（坂本竜馬の従兄弟）、仙台藩の医師酒井篤礼、盛岡藩金浜出身の浦野大蔵の3人で、明治元年のことである。やがて、箱館と仙台とを結ぶ東北地方で活発な布教活動が展開されてゆく。

鹿角で最初に布教を行ったのが、当時副伝教師だった江刺家である。10年1月から、毛馬内高田の湯瀬哲太郎家の二階を借りて説教を始め、20代の相川善六、沢出速水、大森龍太の3人が特に熱心に聴教した。沢出が荒川村の士族目時藤次郎の家の井戸の傍に小屋を建てて住んでいたことから、目時も正教に傾倒していった。こうして11年9月19日、鹿角における第1回の洗礼が司祭マツフィ影田孫一郎によって行われた。受洗者23名。その後も北秋田郡曲田村（現・大館市）畠山市之助、大湯の千葉佐惣治らが目時家で受洗して行く。こうして、江刺家の蒔いた種が北鹿地方で結実することになった。

<参考>『大日本正教会議事録』、『三戸聖母守護会記録』、『上津野No.1』、『鹿角市史第三巻上』。

お どくす

呉 徳洙 1941（昭和16年）～2015（平成27年）

在日史を描いた映画監督

1941（昭和16年）、花輪町組丁に在日韓国人2世として生まれる。日本名・清水徳三。庶民にとって映画が最高の娯楽であった時代、実家のある尾去沢の蟹沢から協和館へ足しげく通う映画少年であった。花輪高等学校から早稲田大学文学部演劇科に進み、1965年卒業、翌年大島渚監督の助監督となる。68年東映東京製作所に入り、11年間数多くのテレビ番組制作に携わる。79年独立して映画制作プロダクション「OH企画」を設立、以後ドキュメンタリー映画の製作に励む。

戦後50年の節目として取り組んだ「在日」（1997年完成）は、在日朝鮮人が歩んできた軌跡を、証言と記録映像で真正面から描いた4時間余の大作である。外国人登録や指紋押捺制度の問題、さらには北朝鮮への帰還運動など、在日史のみならず、戦後日本史とも評される作品で、日本映画ペンクラブノンシアトリカル部門第1位、1998年キネマ旬報文化映画ベストテン第2位となる。2015年12月13日肺がんのため死去。「人間はみな平等」の信念を貫いた74年の生涯であった。

<参考>『芸文かづの第41号』。

おおさと かつぞう

大里 克三 1916（大正5年）～2005（平成17年）

毛馬内盆踊りの継承者育成など伝承活動に尽力

大正5年7月13日、藤治郎とナカの二男として毛馬内に生まれる。旧制大館中学校卒業。

昭和30年に毛馬内盆踊振興会（毛馬内盆踊保存会の前身）が発足して以来、毛馬内盆踊りの保存・伝承に尽力して47年6月の秋田県無形民俗文化財指定に貢献した。52年から毛馬内盆踊り保存会会長として後継者の育成と普及、組織の強化を図り、特に地元の十和田小学校では37年間にわたり盆踊りの指導に努めた。平成10年に毛馬内盆踊りが国の重要無形民俗文化財に指定されたのは、大里氏の献身的努力に負うところが大きい。

11年に勲7等青色桐葉章、13年に秋田県民俗芸能功労者表彰、15年に全日本郷土芸能協会特別表彰を受賞した。平成17年10月18日没、享年89歳。

<参考>『広報（平成15年11月）』。

おおさと けんじ

大里 健治 1898（明治31年）～1978（昭和53年）

郷土の音楽普及活動と毛馬内盆踊りの保存と指導に尽力

明治31年9月2日、巳代治とミツの二男として生まれる。大正2年（1913）毛馬内小学校卒業、8年東京真砂音楽教室で音楽理論を学び、自宅に音楽教室を開いた。

大正2年成田為三が毛馬内小学校に赴任、大里家と親交を結び、5年為三は名曲『浜辺の歌』の楽譜を贈った。昭和2年毛馬内小学校で為三の演奏会を開き、当時800円もする高価なピアノ（ヤマハ2号機）を購入した。戦後の昭和21年毛馬内音楽同好会を設立し会長となり、音楽鑑賞やコーラスを指導、24年花輪の阿部六郎らと鹿角合唱連盟を設立し初代会長となり、花輪・小坂・毛馬内での音楽発表会を10年間続けて開催、29年には佐藤良雄のチェロの演奏会などを催した。

また、昭和12年には秩父宮・同妃両殿下がご巡遊のとき毛馬内盆踊りを披露、35年には毛馬内盆踊保存会を設立して会長となり、47年県の重要無形民俗文化財の指定をうけ、盆踊りの継保存と指導に尽くした。さらに、45年には十和田芸術文化協会の設立に尽力し、十和田音楽祭の開催とともに『芸文とわだ』を発刊した。昭和50年(1975)鹿角市文化功労章、秋田県芸術文化功労章を受章。昭和53年1月没、享年79歳。

<参考>『芸文とわだ第2号』、『毛馬内盆踊(柳沢兌衛)』、『鹿角市史第三卷下』。

おおさと しゅうぞう

大里 周 蔵 1884(明治17年)～1965(昭和40年)

町政に尽力した文化人医師

明治17年1月30日、町長大里寿とカクの五男として生まれる。花輪小学校、東京郁文館中学校を卒業後、大阪府立高等医学校大学部に入学し同学部を卒業した。45年、28歳で花輪の兄文五郎亡き跡の大里医院を引き継ぎ、まもなく小学校医を委嘱され、以来長年、町民と学童の健康を守った。

大正12年(1923)には県会議員に当選し、山本修太郎県議と協力して発荷峠から和井内までの十和田顕彰道路開発整備に尽力した。昭和20年(1945)、戦後初の花輪町町長に推薦され、以後28年まで三期に渡り町政を担当した。晩年は保健所長や信用組合理事長にも就任し、経済界発展にも貢献した。32年花輪町自治功労者表彰、34年には文化功労者表彰を受賞し、さらに40年には勲五等瑞宝章を受章している。昭和40年8月30日没、享年81歳。

おおさと ひさし

大里 寿 1833(天保4年)～1906(明治39年)

花輪町初代町長

天保4年7月20日、武助の長男として花輪盆坂に生まれる。子息に文五郎・武八郎・周蔵らがある。花輪南部氏(中野氏)の側役用人として幕末の激動期に活動し、その難局を先頭に立って切り抜けた人物で、明治維新後は花輪の行政及び文化の進展にも尽くした。文武両道、趣味多才にして、一眺の俳号で俳句を嗜んだり、謡曲にも造詣が深かった。

明治3年(1870)寸陰館訓導補、同5年秋田県学校主簿となり、次いで戸長・区長などを歴任し、花輪学校の創設に尽くした。その後県会議員を2期務め、明治22年町村制施行と共に花輪町の初代町長となり、高い業績を残した。25年に藍綬褒章を受章。明治39年12月30日没、享年73歳。桜山公園には功労碑が建てられている。

<参考>『鹿角市史第二卷下・第三卷上下』。

おおさと ぶはちろう

大里 武八郎 1872(明治5年)～1972(昭和47年)

名著『鹿角方言考』の著者

明治5年1月5日、花輪町長大里寿の四男として生まれる。花輪小学校卒業後上京、一高、

東京帝大に進み法学士となった。一高時代、民俗学者柳田国男と同窓で、親交があった。

38年、39年、41年の3回、内藤湖南に随行し清国調査に当たった。42年臨時台湾旧慣調査員となり台湾に渡り、大正元年には台湾総督府法院判官に任ぜられ、台湾の各地方法院を歴任した。昭和8年（1933）には台北地方法院長になり、10年に退官した。退官後は花輪に帰郷し、若年より関心の高かった鹿角方言の研究に没頭した。そして、28年花輪を中心とする鹿角地方の方言の意味・語源等を調べて、学術的・民俗的に評価の高い『鹿角方言考』を発刊した。小学館の『日本国語大辞典』には『鹿角方言考』から多くが収録されている。昭和42年3月24日没、享年100歳。花輪町名誉町民第一号の榮譽を受けた。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿）』、『鹿角市史第三巻上・第四巻』。

おおさと ぶんごろう

大里 文五郎 1864（元治元年）～1911（明治44年）

名利を捨て医療一筋に生きた医師

元治元年3月1日、大里寿の三男として生まれる。秋田中学から東京帝大医学部に進み、医学士となった。有名な北里柴三郎と同級生で、机を並べ共に研究を競い合った仲であった。明治20年、石田八弥・佐藤健次郎と3人で鹿友会を発足させた。以後鹿友会は鹿角の親睦と育英の会として発展した。当時大学出の医師は極めて少なく、希望すればどんな栄達の道も開かれていたが、花輪に良医がないことを憂いていた父寿に呼ばれて帰郷した。初めは生家で開業したが、後に中堰向に移転し大里医院とした。誠実な文五郎は、求められればどんなへき地にも気軽に往診し、名医として町民に信頼された。

26年鹿角郡医師会を組織し、推されて会長となり、以後20余年に渡り鹿角郡の医療活動の改善に努めた。また、看護婦養成所の創設にも尽力し、本郡の看護婦養成の先駆けとなった。42年郡会議員に当選し、町有志に呼びかけて花輪町の将来を考える懇談会を組織するなど地域振興にも尽くしたが、明治44年11月29日47歳の若さで死去した。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿）』、『鹿角市史第三巻上』。

おおさと れいぞう

大里 令三 1918（大正7年）～2009（平成21年）

宝生流謡曲「花輪宝生会」を主宰

大正7年4月14日、平治とミヨの次男として花輪に生まれる。鹿角の謡曲は、初め宝生流がさかんであった。明治初期に、花輪の大里寿、田村観西、関久兵衛の三人が藩のお抱え能役者山瀬悦人を招いて指導を受け、「宝生会」を創設した。その後寿の孫の平治が引継ぐが、平治の命を受けた令三は昭和10年に上京、世阿弥以来の名人とうたわれた野口兼資に内弟子として入門。19年、職分（能楽師）として宝生会会員・能楽協会会員となる。当時職分は東北で令三一人だけだった。疎開のため帰郷したのち、「花輪宝生会」を主宰して精力的に後進の指導に当たった。令三の指導を受けた会員からは、宗家から謡曲指導囑託免状を受ける者が続出した。

「花輪宝生会」は現在も令三の教えを受けついで、花輪文化祭や関善賑わい屋敷での公演

のほか、万葉人が歌枕の地として希求した錦木塚に謡曲「錦木」を奉納することを、会の目標として研鑽を積んでいる。平成21年4月6日没、享年90歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『錦木村郷土史（曲田慶吉先生遺稿）』。

おおした やえこ

大下 八重子 1910（明治43年）～1959（昭和34年）

花輪俳談会で活躍、遺稿句集『花まるめろ』を出版

明治43年4月6日、花輪町に生まれる。旧姓は吉田ヤエ。若いときから俳句を学び、八重女、岸女と号す。昭和10年（1935）12月17日に、25歳で結婚して大下となり東京西巢鴨に住む。13年、『婦人朝日』に応募した俳句「石清水 こんこんとして 昼しづか」が特選に選ばれる。空襲のため花輪に疎開する。その後、花輪俳談会で活躍し、各句集に、その名を刻む。28年頃、家族の住む八戸へ移住するが、34年8月1日、八戸市で死去。享年49歳。遺言により八重女のそれまでの俳句1025句より426句を選び、句集『花まるめろ』が発行される。句集の巻頭は八重女のもっとも好きな句「ゆかしさや 花まるめろの 故郷（さと）の人」が飾る。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『花まるめろ』。

おおゆ ごへえまさみつ

大湯 五兵衛昌光 生没年不詳、戦国末期の人

大湯氏、奈良氏の惣領鹿倉城主

大湯氏は大湯村の在名により大湯氏を称したもので、鹿角四姓奈良氏の惣領大湯館城主二千石といわれた。永禄・天正の戦国期には反南部勢力の一中心となり活躍。五兵衛（昌光・昌忠父子）は南部信直・利直に仕え、九戸争乱に出陣し軍役を果たしている。大湯村はのちに五兵衛領知となる。この九戸争乱に際しては昌光の次男四郎左衛門昌次が九戸方（政実方）につき、昌光自身と長男昌忠は三戸信直方についたのは、家名保持の苦肉の策とも考えられている。九戸争乱終焉の後、三戸南部信直に仕えた五兵衛昌光の子彦六昌忠（五兵衛）は、大湯に戻り和町の新城・大湯城に入る。

<参考>『鹿角市史第一卷・第二卷下』。

おおゆ しろうさえもんまさつぐ

大湯 四郎左衛門昌次 生年不詳～1591（天正19年）

九戸政実に加担した大湯鹿倉城主

五兵衛昌光の子彦六昌忠の弟。天正19年奥州仕置最後の合戦となった九戸一揆と言われた政実の乱が、直接的軍事行動によって開始され、大湯鹿倉城主四郎左衛門が九戸方に加担し、三戸南部信直方の猛攻撃を受ける。鹿角郡における三戸方の花輪城主大光寺左衛門正親の軍勢が攻撃し、激しい攻防戦を繰り返して鹿倉城は落城。脱出して九戸城に入城し、すでに入城していた鹿角大里城主大里修理親基、花輪城から先年九戸円子村に移されていた円子右馬允光種等と合流。九戸落城後主謀者8人の一人として栗原郡（現宮城県）三迫へ送

られて斬首された。華々しくも潔い殉難ぶりは、まさしく中世的鹿角の完全な終焉を告げる挽歌であったと言えよう。

昌次の次男大湯彦右衛門昌致は津軽に逃れて、津軽二代藩主信牧に仕え、現西津軽郡木造町にある亀ヶ岡城の築城奉行を命じられ、大規模な普請のために開いた基地が今の大湯町であり、その工事中に多数の亀ヶ岡式土器が出たという。現在同地に大湯彦右衛門の開発記念碑が建てられている。

<参考>『鹿角市史第一巻・第二巻下』、『大湯鹿倉城落城四百年記念誌』。

おがさわら とおる

小笠原 達 1923（大正12年）～1990（平成2年）

温泉医療に生涯を捧げた医師

大正12年4月1日、三春とツルヨの二男として大湯川原の湯に生まれる。大館中、二高を経て東北大学医学部に進み、黒川利雄博士の下で学ぶ。卒業後、大館公立病院内科に勤務。昭和28年（1953）東北大学附属病院鳴子分院に勤務。ここで同大学名誉教授杉山尚と運命的な出会いがあり、杉山教授の秘蔵弟子として温泉医療の道に進み、30年7月には鳴子病院内科医長となる。31年医学博士となり専門の道を極めようとしていた時、大湯で開業医を続けていた父三春が死去。思い悩んだ末、地域住民を安心させ、さらに大湯温泉の特性を活かしたこれからの社会に必要な医療や保養の研究を続けようとして決心し、郷里に戻り32年に大湯医院を引き継ぎ院長となった。

53年杉山教授と共に西ドイツなど施設の完備したヨーロッパの保養温泉を視察。その報告会では、大湯の地でこのような温泉医院、温泉療法の施設、保養館、保養公園を実現したいとの情熱的発言があった。日本ではまだ温泉医療に健康保険が適用にならないなど立ち遅れていたが、院長の努力はすさまじく、各方面の折衝、認可申請、資金の調達等々、精力的に動き個人の力で、54年大湯リハビリ温泉病院を創立。全国的にもまれに見る大病院に成長させたが、不幸病魔に侵され、平成2年9月28日、惜しまれて67歳の生涯を閉じた。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『大湯郷土研究シリーズ2（ふるさとの先人たち）』。

おかもと こうたろう

岡本 孝太郎 1938（昭和13年）～1995（平成7年）

半導体研究と教育に捧げた生涯

昭和13年5月11日、武二郎とミホの長男として花輪に生まれる。33年県立大館鳳鳴高等学校卒業後、東北大学工学部へ進む。「ミスター半導体」と言われた西澤潤一教授のもとで電気及び通信工学を専攻し、大学院博士課程を修了。「強電界中のキャリアの拡散係数の測定」で工学博士号を取得する。半導体研究所の研究員を経て44年、電気通信大学電気通信学部通信工学科講師に就任し、46年から助教授、57年教授となる。その間、55年3月から1年間、米国コーネル大学に文部省から客員研究員として派遣される。朝の9時か

ら夜の10時すぎまで、研究と教育に没頭する日々を送り、80編以上の研究論文を学術雑誌等に発表した。平成7年1月30日死去、享年56歳。そのあまりに早い死を惜しんだ同窓生たちによって、『岡本孝太郎博士論文集』が半年後に刊行された。「先生は常に半導体分野の将来ビジョンをしっかりと描かれておられ、そのビジョンを実現するために先駆けて研究や指導をされ、多くの御功績を残されました。先生を失ったことは半導体分野及び教育分野の大きな損失」と、その「はしがき」は述べている。

<参考>『岡本孝太郎博士論文集』。

おくやま じゅん

奥山 潤 1919（大正8年）～1988（昭和63年）

鹿角の遺跡を調査した考古学者・詩人

大正8年2月11日、秋田市に生まれる。秋田中学を出て東京府水道局に勤務しながら、アテネフランセに学ぶ。帰郷して秋田鉱山専門学校の助手の後、各地の地質調査に携わって終戦を迎える。

昭和25年頃大館に移り住み、旧早口町の開拓地の分校教師のかたわら、考古研究と発掘の指導にあたった。大館市周辺の発掘のほとんどに関わったとされるが、大湯環状列石の調査も彼に負うところが大きかった。昭和48年から50年にかけて県が行った発掘調査は、奥山をリーダーとし、大里勝蔵らの他に十和田・大館鳳鳴・大館桂各高校の社会部員らを動員したものであるが、遺跡の分布範囲確定の基準となる重要な調査であった。考古研究のかたわら詩作にも励み、県詩壇では最高峰に列せられる一人で、多くの詩を遺している。個人詩集に『石ころ道』『土器編年』、創刊詩誌に『アン・コタン』『密造者』がある。昭和63年3月10日没、享年69歳。

<参考>『大館の人・事典』、『大湯環状列石一周辺遺跡分布調査概報1975・76』、『鹿角市史第一巻』。

おだぎり いたろう

小田切 猪太郎（静雨） 生没年不詳、明治から昭和期の人

鹿角を代表する茜染・紫根染の染物屋

幕末期に花輪で茜染・紫根染を営業していた小田切由兵衛とは分家筋にあたり、大正から昭和初期にかけて花輪坂ノ上で茜染、紫根染を生業としていた。

大正5年（1916）に行われた大正天皇の御大礼で、明治神宮に奉納された「大鑑よろいの紐・緒」を茜染で染色を依頼される。同年、盛岡の糸治呉服店（「糸屋」）に招かれ、南部紫根染めの技術指導に赴いている。昭和2年（1927）夏に八幡平を訪れた植物学者の牧野富太郎が小田切家より絹地に染めた茜染を買い求めている。

<参考>『総合郷土研究 秋田県』、『鹿角市史第三巻上下』、『植物随筆集（牧野富太郎）』。

おだしま くにお

小田島 邦夫 1919（大正8年）～2001（平成13年）

鹿角の教育行政・文化の振興に尽力した教育者

大正8年5月24日、加賀谷修三・きゑの二男として、秋田市に生まれる。旧制住吉中学校から同浪速高等学校を経て、京都帝国大学文学部国史学科を昭和18年卒業。太平洋戦争中、愛知や静岡の中学校で英語教師をし、戦後秋田に戻って旧制大館中学校、花輪高等学校に勤務。以来県立大館桂・大館鳳鳴高等学校長、秋田県教育センター所長などを歴任し、昭和55年3月秋田高等学校長を退任するまで、高等学校教育と教育行政の振興につとめた。

この間に花輪の小田島治右衛門家の人となり、昭和31年12月から7年間花輪町教育長、昭和56年から8年間鹿角市教育委員会委員長を務めた。また、内藤湖南先生顕彰会2代目会長として、昭和60年から平成6年まで5期10年間、先人顕彰館の開設、関西大学との交流・事業提携、湖南顕彰会のあり方などの道筋をつけた。昭和54年文部大臣教育功労者表彰、平成元年勲四等瑞宝章受章。平成13年10月1日没、享年82歳。

<参考>『広報かづの（平成3年11月16日号）』、『湖南22号』。

おだしま じうえもん

小田島 治右衛門 1840（天保11年）～1914（大正3年）

酒造業のかたわら小田島道場を開いた剣術士

天保11年12月12日、小田島治兵衛定直を父として花輪に生まれる。

酒屋大和屋の家政一切を取りし切っていた父治兵衛は、大和屋初代小田島右平太が武士になったのを契機に、酒造業を譲られた。また二代目右平太から山口流剣法を学び、子の治右衛門にも伝えた。治右衛門は江戸に登り、北辰一刀流の千葉周作に入門して4年、帰郷すると酒造業のかたわら、邸内に道場を建てて熱心に門人の指導にあたった。道場は有段者から一般青年、学童も稽古に通う盛況ぶりで、門下生には児玉道場で名をとどろかせた児玉高慶もいた。明治に入ってから道場は実績を上げ、明治43年（1910）、時の県知事森正隆から名誉師範の称号を贈られた。また42年8月には、推されて花輪町長となり、町民の信望を集めた。大正3年1月没、享年73歳。

<参考>『秋田人名大事典』、『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『鹿角市史第三卷上下・第四卷』。

おだしま じゅじん

小田島 樹人 1885（明治18年）～1959（昭和34年）

気品に富んだ作曲家・俳人

明治18年3月19日、鹿角郡長だった小田島由義とハツの次男として花輪に生まれる。本名は次郎、樹人は俳号である。

盛岡中学校から鹿児島七高理科に進むも中退、41年東京音楽学校（現東京芸大）へ入学する。大正3年器楽科を卒業して、東京芝の三光小学校に音楽教師として奉職。この頃から俳句に熱中し、俳句仲間として11歳年下の海野厚と運命的な出会いをし、渡辺水巴の『曲水』の中心的存在となった。一方音楽学校同窓の中山晋平、外山国彦、それに海野、樹人の

4人で新童謡運動を起こし、「鳩の笛同人会」と称して新しい童謡楽譜シリーズ（第一集…大正11年12月を皮切りに第三集…12年5月）を発売した。樹人の代表作「山は夕焼け」「おもちゃのマーチ」「赤いソリ」はこのシリーズから生まれた。

昭和11年郷里に帰った樹人は、花輪高女次いで15年から秋田中学校へ移り、20年には、「秋田学生音楽連盟」を結成して秋田県の音楽振興に尽くした。「花輪俳談会」を創立した兄の徳蔵（^{そうろう}艸子）が俳句の道に入るのも樹人の影響である。昭和34年10月11日没、享年74歳。

<参考>『秋田人名大事典』、『秋田のうたと音楽家（井上隆明編著）』、『鹿角市史三卷下』。

おだしま しょうぞう
小田島 昌蔵 生没年不詳、明治期の人

鹿角最初の銀行の経営者

花輪の酒造業井桁屋の^{いけたや}小田島家3代徳之助の養子となって、酒造業を継承するかたわら、金融業に携わった。

明治12年（1879）、第一国立銀行盛岡支店が秋田県内8カ所に出張所を設けることになり、鹿角にも出張所が開設された。13年春と考えられている。この出張所の責任者となったのが昌蔵である。昌蔵は、息子源太郎と2代にわたって銀行を経営し、小田島家は別号「銀行」とも呼ばれた。第一国立銀行閉鎖後は安田銀行の代理店を兼ねていたが、38年の花輪大火で銀行も昌蔵宅も類焼し、紙幣1万5千円以上が烏有に帰した。この災難に際し、小田島家当主の由義は私財を投じて預金者の弁償に当てたとされている。昌蔵の子孫にシェイクスピア研究の第一人者小田島雄志がある。

<参考>『鹿角市史第三卷上』。

おだしま しんいちろう
小田島 信一郎 1884（明治17年）～1942（昭和17年）

大正期、護憲・社会運動を進めた法学士

明治17年、徳治（旧姓奈良）とミツ（治右衛門長女）の長男として花輪に生まれる。岡山の第六高等学校から東京帝国大学法科大学を卒業し、関東大震災の被災者のための住宅供給を目的に内務省が設立した同潤会に勤務した。一方鹿友会の幹事長としてよく鹿角の子弟の面倒をみた。

大正5年（1916）、花輪小学校卒業生有志が作った「愛友団」に郷外団友として名を連ね、機関誌『愛友』を通して社会・農民運動への関心を高めた。関東大震災で一時帰郷した時には、護憲三派の革新倶楽部に所属し秋田支部幹事を務めた。また、^{ひょうひょう}飄々（のち十四郎）の俳号で、俳句もよくした。昭和17年没、享年58歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下・第四卷』、『鹿友会誌第30冊』。

おだしま とくぞう

小田島 徳蔵 1882（明治15年）～1969（昭和44年）

花輪俳談会の創立者

明治15年4月3日、後に鹿角郡長・花輪町長になる由義とハツの長男として花輪に生まれる。俳号は艸子。明治の教育者杉浦重剛の日本中学に学ぶ。日本画家梶田半古に入門、画家を志す。同門に小林古径、前田青邨らがあり、特に古径とは終生親しかった。古径・前田らが画業で大成する一方、徳蔵は雑誌のさし絵など描いて趣味の域を脱しなかった。

弟樹人の影響で俳句を始め、渡辺水巴の『曲水』初出句。増田手古奈の『十和田』『馬酔木』『ホトトギス』に出句し、『ホトトギス』で昭和8年（1933）初入選。前年の昭和7年に「花輪俳談会」を創立し、『ホトトギス』同人として鹿角俳壇の指導にあたる。人事句を得意とし、句集『春水』には滑稽風雅に遊ぶ俳風が示されている。昭和17年より21年まで尾去沢町長を務めた。また、晩年ひまわり幼稚園の園長を長年務めた。桜山公園に句碑「籬結わずただ春水をめぐらして」がある。昭和44年5月7日死去、享年87歳。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』、『芸文かづの1号』、『鹿角市史第三卷上下』。

おだしま とくべえ

小田島 徳兵衛 生没年不詳、江戸末期の人

藩内の分限番附にのった江戸末期の酒造家

花輪の酒造家井桁屋^{いげがや}4代目。先代徳之助の頃から営業が確認されるが、徳兵衛の代には、盛岡藩中の分限番附（天保六年未十月）に大関・佐藤屋庄六、前頭・村屋六助と共に前頭・小田島徳兵衛が上げられている。鹿角からはこの3人だけである。

尾去沢の内田九兵衛^{とみきわ}富孚の末子由義（13歳）を養子に迎えていつくしんだ。天保14年（1843）から嘉永1年（1848）まで花輪通代官所の下役を務めている。

<参考>『鹿角市史第二卷上下・第三卷上』。

おだしま とみしろう

小田島 富四郎 1890（明治23年）？～1942（昭和17年）

花輪図書館の初代館長

明治23年（？）、小田島徳治（旧姓奈良）とミツの四男として花輪に生まれる。父徳治は石田八弥の兄、母ミツは小田島治右衛門の長女である。俳号水鳥子。

スポーツマンで、盛岡中学校時代には野球部・撃剣部で活躍、応援団長も務めた。宮沢賢治に大きな影響を与えた親友藤原健次郎が野球部の秋田遠征から帰盛した直後に腸チフスで急逝した時、遠征隊の監督であった富四郎（5年生）がその死を惜しみ、校友会誌に追悼文を寄せている。

中学卒業後朝鮮に渡り、銀行員を振出しにさまざまな経験を経て帰郷、後に花輪町の助役として多忙な中推されて郷土芸術保存会顧問となった。また昭和7年（1932）県立秋田図書館花輪分館が町立花輪図書館になった時の初代館長を3年間兼任している。昭和17年11月19日没。享年52（？）歳。

<参考>『鹿友会誌第33冊』、『鹿角市史第三卷下』。

おだしま はつ

小田島 ハツ 1853（嘉永6年）～1934（昭和9年）

婦人運動の先覚者

嘉永6年、杉江与茂吉の長女として花輪に生まれる。少女時代から才色兼備をうたわれ、18歳で小田島由義に嫁ぐ。

由義と共に各地を転々とする中で、広い視野と高い教養を身につけたハツは、明治21年（1888）、自ら提唱して「鹿角婦人会」を創立した。県内第一号であった。夫由義の助言が大きかったようである。会長ハツの卓越した指導力のもと、鹿角婦人会は日清日露の両戦争では軍資金献納、出征軍人の慰問を行い、また花輪の大火や県内外の災害などに幅広い救援活動を展開した。さらに、月例会における教養講座、伝統手工芸品の製作・保存など活動は多方面に及んだ。38年愛国婦人会の組織と合併するが、ハツは大正14年（1925）まで前後37年間、会長として鹿角の婦人運動を牽引した。昭和9年12月没。享年81歳。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『鹿角市史第三卷上下』。

おだしま ゆうぎ

小田島 由義 1845（弘化2年）～1920（大正9年）

鹿角振興の基礎を築いた郡長

弘化2年12月12日、尾去沢銅山支配人内田九兵衛^{とみきお}富孚の末子として尾去沢に生まれる。幼名丑太郎、13歳で花輪井桁屋4代目小田島徳兵衛の養子となり、名を徳弥由義と改めた。明治以後は由義、俳号は雲楼と号した。

早くから盛岡に出て文武の道に励み、19歳で藩校作人館に入学。戊辰戦争では花輪御給人隊の総締役として活躍した。花輪寸陰館長を務めた後、工部省鉱山局に任官し国内の諸鉱山を視察してまわった。明治15年（1882）帰郷して家業を継ぐが、2年後鹿角郡長となり、一時雄勝郡長に転じた後、再び明治21年～30年鹿角郡長を務めた。前後約11年半にわたる郡長在職中、花輪～田山の道路網整備、養蚕やあけびつる細工の奨励、十和田湖養魚や醸造業の援助など多方面にわたる殖産興業策を発案・実行した。また史実の解明や保存に意を用い、猿賀神社の昇格や、盛岡の桜山神社の分社建立に尽力した。雲楼と号して俳句をたしなむ文化人でもあった。晩年の8年間は花輪町長に推されている。大正9年7月29日没、享年74歳。著書『遺烈余芳』。

<参考>『鹿角市史第二卷上下・第三卷上下』、『鹿角市先人顕彰集成』、『芸文かづの1号』、『鹿角人物誌（奈良寿著）』。

おだしま よしお

小田島 由男 1910（明治43年）～1996（平成8年）

花輪俳談会や鹿角芸文協の発展に寄与

明治43年9月29日、徳蔵とタネの長男として、花輪に生まれる。早稲田大学高等師範

部国漢科に入学、演劇研究会に属して戯曲や演出を試みたり、青蛾の俳号で俳句に親しんだ。昭和12年(1937)応召して北支戦線に送られるが、病を得て帰還する。その後花輪高女を皮切りに、能代・大館鳳鳴高校などの教師、十和田高校長などを歴任した。

父徳蔵(艸于)の後をうけて花輪俳談会を指導する一方、カレル会々員として油絵もたしなむ文化人で、花輪町の芸術文化協会の会長を務めていたが、鹿角市誕生により昭和49年、鹿角市芸術文化協会が設立されると、その初代会長に推され、平成2年まで17年間、会長として市の芸術文化の発展につとめた。また秋田県芸術文化協会副会長を務め、秋田県芸術文化章を受章している。句集に『静かなる陣地』がある。平成8年3月30日没、享年85歳。

<参考>『芸文かづの8号・31号』、『鹿角市史第三巻下』。

おりと かめたろう
折戸 亀太郎 1853(嘉永6年)?~1901(明治34年)

鹿角の青年達を支援した教育家

嘉永6年(?)花輪の南部吉兵衛(中野氏)家臣の家に生まれる。17歳で寸陰館に学ぶ。明治6年(1873)県が開校した教員養成のための「伝習学校」に、川村左学、斎藤麟道と共に入学して下等小学校卒業仮免状を受け、花輪学校の教員となる。その後秋田の太平学校(師範学校の前身)教員、土崎学校学務御用掛などを経て、文部省勤務となり上京する。

秋田時代から東京時代を通じて郷里の学徒たちのパトロンの存在となり、自宅を開放してよく彼らの面倒を見た。明治20年大里文五郎や石田八弥らが中心となって創立した鹿友会は、在京学生間の相互扶助と後輩先導を目的とした親睦の会で、きちんとした会則を作って運営され、やがて同24年には『鹿友会誌第一冊』を発行する。この活動の根城となったのが折戸宅である。しかし家計の逼迫もあり、再起を図って北海道に転居する(明治29年頃か)も、思うように行かず、悲愴の遺言状を書いて自死する。時に明治34年3月23日。折戸亡きあと、鹿友会は長年夫人に金品を贈り続けた。

<参考>『上津野No.32』、『鹿友会第一・六・十二~十五・十七冊』、『鹿角市史第三巻上』。

かぎや むらい もへえ
鍵屋(村井) 茂兵衛 1821(文政4年)~1873(明治6年)

尾去沢銅山事件で没落させられた盛岡藩の豪商

文政4年5月11日、二代目村井茂兵衛とトクの長男として盛岡紺屋町に生まれる。本名を村井茂兵衛(四代目)、又は村井茂右衛門といい、通称鍵屋茂兵衛と称した。その人となりは「剛毅にして胆力があり、識見超邁、交わるところ当代の名士なりき」と評された。

明治元年(1868)、盛岡藩は戊辰戦争謝罪のため、献納を許された軍資金7万両を薩長から請求された。ところが、藩はこれを鍵屋に納めさせ、代わりに尾去沢鉦山の採掘権を鍵屋に移譲した。江戸末期から財政危機にあった藩は、鍵屋から多額の借財をなしていたが、当時の身分制に基づく習慣から証文は、藩から商人たる鍵屋に貸し付けた文面に形式上な

っていた。つまり、盛岡藩が鍵屋茂兵衛に対して尾去沢銅山の経営権を移譲したのは、初めから意図的なものであった。明治4年、尾去沢鉦山を見分した明治新政権の大蔵大輔の井上馨は、この証文を元に返済を求め、その不能をもって大蔵省は尾去沢鉦山を差し押さえ、鍵屋を破産に至らしめた。井上はさらに尾去沢鉦山を競売に付し、同郷人の岡田平蔵に買い取らせた上で「従四位井上馨所有」という高札を掲げさせ私物化を図った。明治6年2月、鍵屋は司法省に訴え出たが、5月失意のうちに52歳で病没した。訴訟は子息の茂兵衛が次ぎ、井上らの行動に疑惑を深めた司法卿の江藤新平がこの事件を追求したが、結局、真相は明らかにされることなく、うやむやのうちに裁判は終わった。これがいわゆる鍵屋茂兵衛疑獄事件あるいは尾去沢銅山官没事件と呼ばれるもので、以後、尾去沢銅山の経営は、岡田平蔵から、のち三菱財閥へと移行した。

<参考>『鹿角市史第二卷上下・第三卷上』、『尾去沢・白根鉦山史』、『南部藩・雑書』。

かつひら とくし

勝平 得之 1904（明治37年）～1971（昭和46年）

郷土秋田を愛し大日堂舞楽図を遺した木版画家

明治37年4月6日、秋田市本町（現在の大町）で三代続く紙漉き業の長男として生まれる。本名徳治。小学校では毛馬内出身の瀧儀太郎に学ぶ。昭和元年（1926）、家業を手伝いながら竹久夢二の絵に惹かれ独学で版画の絵・彫り・摺りの3つの工程を学ぶ。昭和3年（1928）大湯で行われた農民美術講習会を踏まえて結成された「大湯農民美術生産組合」へ参加し「木彫大湯風俗人形」の製作を行っている。大湯温泉、八幡平温泉、十和田湖の絵葉書も作成している。この時期、自画、自刻、自刷の彩色技法を完成させ、以後郷土秋田の自然や風俗をテーマにしたあたたかな作風で創作に励む。「秋田二十四景」、「秋田風俗十態」、「花四題」、「大日堂舞楽図」、「米作四題」が代表作である。

昭和4年日本版画協会展に「外濠夜景」、「八橋街道」が入選。その後、数々の展覧会に多数入選し国内に名を轟かせた。10年秋田県を訪れたブルーノ・タウトや藤田嗣治に激賞されて秋田風俗版画の作家として世界的に知られるようになる。特に大日堂舞楽図は八幡平登山の際に舞楽の素晴らしさに感銘し、11年以降度々小豆沢を訪問して作成したもので、シカゴの展覧会に出品され大日堂を世界に最初に発進したものとなった。タウトの『日本美の再発見』（岩波新書）にはタウトと対応する勝平の誠実な人柄が描かれている。秋田県文化功労章、秋田市文化章、河北文化賞を受賞。昭和46年1月4日没。享年66歳。

<参考>『日本美の再発見（ブルーノ・タウト著）』、『鹿角市史第三卷下』。

かつまた けいいち

勝又 啓一 1916（大正5年）～1994（平成6年）

僻地教育で日本最初の複式学級を実践した教育家

大正5年9月1日、勝又啓司とヨシの長男として毛馬内に生まれる。昭和31年、啓一は独立校となった尾去沢の三ツ矢沢小学校の初代校長として赴任した。僻地と呼ばれた三ツ

矢沢は尾去沢鉾山のさきがけとなった落人集落であった。3年目の10月、三ツ矢沢小学校において、複式学習指導法などを含めた全県公開研究会が開催され、子供たちの教育と学校生活が披露された。百名近い参会者があったが、わずか児童80名の三ツ矢沢小学校において、啓一が指導実践した複式学級が僻地教育における日本最初の複式学級となった。数年後、三ツ矢沢から大館市十二所の成章中学校に越境入学した6人の生徒のうち、3人が第一回中間テストにおいて、167名中1番から3番までを独占するという快挙を成し遂げ、周囲を驚かした。後日、学校関係者が連日のごとく授業風景を参観に訪れるほどだったという。

昭和50年、僻地における複式教育に光明をもたらしたとして文部大臣から教育功労賞、昭和63年には勲五等双光旭日章を受章している。同年、鹿角市文化功労者表彰。平成6年6月11日没、享年77歳。

<参考>『鹿角市広報』、『みつやざわ学校史』。

かつまた さだはち

勝又 定八 1798（寛政10年）～1873（明治6年）

易学をきわめ、浄瑠璃をたしなむ趣味人

号は廣運堂。幼少の頃から泉澤織太（緑泉）に学ぶ。祖父の六郎次は、曾祖父の善兵衛の三男で別家となり麴と濁酒を醸造して生業とする。父の民右衛門は理財に敏く、商売を拡張し家産を殖やし、定八が壮年に及んで富巨万といわれた。

定八は、俗務を喜ばず、ただ読書にふけり算術を得意とした。父に倣って^{しょう}箆をこのみ、内藤天爵について『周易』を学び、奥義をきわめ易理の道では奥羽一と評された。浄瑠璃を演じ、その声は朗々とし、客人は老若男女のへだてなく歓待し、説話を淡々と話しユーモアをまじえ聴く者をあきさせなかったという。男子が生まれず、娘のスマを大稲坪の太田新太郎に嫁し、家業を弟の周治にまかせ後継ぎとした。定八の代には墾田800町歩、200石となり、鹿角第一の大地主といわれ、世人は弟の周治の采配にあったというが、その実はみな定八が区画整理したことにあった。

健康のため毎朝早起きし町を散歩した。明治6年6月4日没、享年75歳。

<参考>『鹿角志（内藤十湾）』、『鹿角市史第二卷上下』。

かつまた しゅうじ

勝又 周治 1813（文化10年）ころ～1878（明治11年）

山口流剣術の師範と荻野流砲術の師範

毛馬内剣術を発展させた勝又周治は、民右衛門の次男にして、兄定八に男子がいなかったのでその嗣子となり安政4年（1857）家督を継ぐ。剣撃を好み、宗家の勝又善左衛門が山口流剣術の師範であったことからその門下となり、鍛錬してその剣術に精達した。善左衛門は晩年、その流派をすべて実弟の花輪御給人の関右平太に譲ったが、その後、周治は山口流剣術を関右平太より譲りうけ遂に一派の師範となり、多くの門人を指導し毛馬内剣術を発展させた。明治11年9月9日没、享年65歳。

<参考>『鹿角志（内藤十湾）』、『鹿角市史第二卷上下』。

かつまた せいぎ

勝又 清毅 1882（明治15年）～1947（昭和22年）

十和田湖と観光の振興及び鹿角工業学校設立に尽力

明治15年7月28日庄司とクニの子として宮城県鳴子温泉に生まれ、毛馬内の勝又清時の養子に迎えられる。大正9年（1920）立山弟四郎らと「鹿角乗合自動車営業組合」を組織して6人乗り自動車を購入、秋田鉄道毛馬内駅の開業を見込んで主要地点の運行を実施したのが鹿角の自動車営業の始まりである。翌10年6人乗り4台で毛馬内駅を起点とし、十和田湖行き中滝までの運行も始めた。昭和5年12月産業道路の改修として八戸大湯連絡道路改修の請願を行い、8年5月「十和田湖国立公園」指定のため立山弟四郎、諏訪富多、勝又清毅、木村次郎らが発足人となって東北観光協会を設立、11年2月1日第3次の国立公園の指定をうけた。

16年には鹿角中学校設立実行委員会が組織され、実行委員長の伊藤良三のもと、幹事長として町有力者の寄付金13万7千円の基金を集めた。しかし県側の技術者養成の観点から、県北鉾山地帯の採鉱冶金を主体とする鹿角工業学校（現・十和田高等学校）の設立に転換し、文部省の認可をえて18年4月開校した。昭和22年10月13日没、享年65歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

かつまた ぜんざえもん

勝又 善左衛門 生没年不詳、江戸後期の人

毛馬内における山口流剣術の師範

勝又家大本家の善左衛門は毛馬内の人。身長6尺、剣術を好み、山口流剣術の師範となる。山口流剣術が鹿角に入った経緯は、その流派8代目の富山藩士の西田猪助が、文化年間武者修行行脚の途次尾去沢銅山にあって子弟に教え、山相家の川口与右衛門家に逗留したのに始まる。川口家から毛馬内へ養子に入った浅沼郷左衛門と友人の勝又善左衛門は西田の門に入り、やがて奥義皆伝の免許をうけ、浅沼は桜庭家中の門弟を、勝又は御給人・与力層を指導した。

勝又善左衛門は山口流剣術のほか、民谷流居合、不変流柔術を研究し、大いにその技に精通し、ついに一派の師範となり、門人数十百人に至った。晩年に及びその芸術流派をすべて実弟である久米之助こと花輪御給人の関右平太に譲渡した。

<参考>『鹿角志（内藤十湾）』、『鹿角のあゆみ（近世鹿角の剣術）』、『鹿角市史第二卷上下』。

かつまた へいたろう

勝又 平太郎 1852（嘉永5年）～1912（大正元年）

地域社会の近代化と県政の発展に貢献

嘉永5年5月29日、周治とチヨ（山本喜七の二女）の長男として毛馬内下小路に生まれ

る。幼少から泉沢修齋の塾に学び、有為の逸材として囑望された。明治7年（1874）有志とはかり率先出資して毛馬内小学校を創設。12年第1回県会議員に初当選、22年2月11日の憲法発布の盛典に祝賀会参列と奉祝文を県代表として奉呈した。20年頃、士族救済の勸業場を設け山本喜七と毛馬内上野平にりんご、梨の果樹、茶の栽培をおこなう。24年郡制の施行により、地価金18,619円余の大地主であった勝又は郡会議員に当選、25年9月西郷従道が来郡の際には快く歓待し、ついで28年毛馬内町長に推された。

30年頃日清戦争後の不況が農村を襲い、これを救済するため34年毛馬内森崎耕地整理組合を設立、大部分の経費を負担して自ら組合長となり産米改良と増収のため本郡初の耕地整理事業として範を示した。34年小坂鉦山の煙害問題では、平太郎ら8名の代表地主が運動費基金を拠出し、農民や地主をささえた。毛馬内の徳望ある政治家として地域社会の近代化の諸政策に貢献し、また大地主のトップリーダーとしての使命と責務を果たした。大正元年9月9日没、享年60歳。

<参考>『鹿角市史第三巻上』、『鹿角人物誌（奈良寿）』。

かなくり しそう

金栗 四三 1891年（明治24年）～1983年（昭和58年）

日本マラソンの父、十和田八幡平記念駅伝の創立を提唱

明治24年8月20日、熊本県玉名郡春富村（現・和水町）に生まれる。東京高等師範学校在学中の45年（1912）7月ストックホルム・オリンピック競技大会に初の日本選手として三島弥彦とともに出場した。大正9年（1920）アントワープ大会、13年パリ大会にも参加した。12年の日本選手権マラソン第1回大会から3連覇した。昭和2年（1947）金栗のマラソンの指導と普及に対する功績を記念して、金栗賞朝日マラソン（後の福岡国際マラソン）が設けられた。また裏方としても各マラソン大会や東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）の開催に尽力し、日本に高地トレーニングを導入したりするなど、日本マラソン界の発展に大きく寄与したことから「日本マラソンの父」と称される。

金栗は「日本人選手が国際的なマラソンレースで勝利するためには厳しい真夏の時期にトレーニングを行い、体力をつけることが必要」と提唱していた。これを受けて、鹿角地区青年会の有志が、戦後混迷していた地域の活気をスポーツで取り戻そうと、士気高揚と観光PRを目的に23年十和田八幡平駅伝を創立した。大会を継続するうちに全国レベルで活躍する選手を輩出するまでになり、平成30年度（2018）から女子の部が創設されている。当時、花輪町の代表選手で、後のポストンマラソン優勝者の山田敬蔵は、この大会の縁で金栗の指導を受けるようになったと言われている。全国マラソン連盟会長や日本陸上競技連盟顧問を務める。昭和30年（1955）紫綬褒章、33年朝日文化賞を受けた。昭和58年11月13日死去。享年92歳。

<参考>『鹿角市HP』、『ブリタリカ百科事典』。

かなざわ げんりゅう

金沢 玄龍 生没年不詳、幕末から明治期の人

花輪役医で俳人

嘉永4年(1851)、父金澤昌倫の跡目を継いで、花輪役医となった。俳句をたしなみ、俳号を草山、朝暮庵と言い、多くの門下を育てた。息子の元祐が明治25年(1892)編纂した草山の『専正寺追善付帯記録面影集』は、草山の交友の広さを物語っている。菩提寺である専正寺の金澤家墓域にある墓碑は、「書筆師範」でもあった草山の門下30余人の名を刻んだ石柵に囲まれて立つ。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

かに よしお

可児 義雄 1894(明治27年)～1935(昭和10年)

小坂鉦山の煙害をめぐる農民運動の指導者、労働運動家

明治27年9月10日、東京浅草に生まれ、岐阜県で成長する。本名は吉雄。大正8年(1919)大日本鉦山労働同盟会創立に参加。同年足尾銅山争議で投獄される。保釈後、麻生久らと全日本鉦夫総連合会を組織し、小坂・別子などの鉦山争議や秋田県阿仁前田村(現・北秋田市)の小作争議を指導した。大正12年からの小坂鉦山争議は当初、煙害賠償要求運動として起こり、のちに農民と鉦山労働者の共同闘争の形をとったもので具体的には日本農民組合、日本鉦夫組合の連携による。可児は日本農民組合小坂支部の結成を指導し煙害賠償折衝にあたった。大正13年、藤田鉦業本社での直接交渉の結果、有利な賠償金を得ることとなった。小坂鉦山煙害運動歌は可児の作という。小坂支部の結成後、郡内では次々に日本農民組合の支部が結成され、可児は「農民の父」と言われた。昭和10年(1935)1月9日没、享年40歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『入会権論(奈良正路著)』、『講談社日本人名大辞典』。

かのう りんせん

狩野 林泉(父) 生没年不詳、江戸中期の人

りんりゅう

林 流(子) 1764(明和元年)?～1834(天保5年)

盛岡藩の石川狩野家の画家(絵師)

盛岡藩では初期以来、狩野派が絵師の主流を占め、藤田と石川の二家が狩野を名のっていた。石川狩野家の初代と二代ともに林泉と号し、林流は初代林泉の息子である。

林流は2点の絵馬を鹿角に残している。1点は花輪神明社の額絵馬「牛若と弁慶図」(享和4年武藤正兵衛奉納)、もう1点は葦名神社の額絵馬「飛翔ノ鶴と松」(文化4年桜庭綱豊他同家内役人4名奉納)である。

また、鹿角の画人で狩野派の影響を受けた人に、近内織右衛門と葦名神社に林流の「飛翔ノ鶴と松」と全く同じ額絵馬を描いた青山忠七(号仙流)の2人があげられる。

<参考>『鹿角市史第二巻下』。

かまた くらぞう ろざん
鎌田 倉蔵（露山） 1891（明治24年）～1966（昭和41年）

毛馬内俳句会を指導した俳人

明治24年3月6日、安太郎とナカの長男として毛馬内に生まれる。路谷の分家筋で俳号は露山。毛馬内小学校卒業後、岩手県の福岡中学校を経て東京獣医学校を中退した。

昭和6年ごろから十和田湖畔でヒメマスの養殖を手伝いながら、文人墨客と交わり句作に精進した。若いころから碧梧桐^{へきごとう}の新傾向俳句に親しみ、さらに「ホトトギズ」系に転じ、15年大鱈の増田手古奈の『十和田』へ投句をはじめ、23年林大馬に師事して連句を学んだ。25年毛馬内に帰郷して「毛馬内俳句会」を設立、小田島艸子^{そうじ}の「花輪俳談会」とともに、昭和中期の鹿角俳壇の隆盛を築く。

35年素朴堅実にして写生道に徹した句集『みずうみ』を刊行、また浪漫的美的連想をいざなう句風を打ち立てた。昭和41年10月21日75歳にして急逝の朝、熊谷草と沢桔梗の植物を通じての昭和の皇后との不思議な縁を「咲きのこる紫淡し沢桔梗」と詠んだ。錦木塚に「旅人にはたおる虫や姫の塚」、昭和54年仁叟寺境内に「山国の月に踊りのいつまでも」の句碑がある。

<参考>『十和田町の先輩』、『郷土植物方言考(立山廉吉遺稿集)』、『鹿角市史第三巻下』。

かまた ろこく
鎌田 落谷 1829（文政12年）～1895（明治28年）

毛馬内の俳匠、『狭布集』の編者

文政12年2月20日、毛馬内に生まれる。名は忠太郎、十湾亭、迎陽舎と号した。鎌田家は祖先から商売を業としたが、落谷は幼少のころから文墨をたしなみ士族や文人と交際した。落谷や月郷ら毛馬内の多くの俳人は、幕末期の地方俳壇に活躍した医師の瀧麟趾について学び、また落谷は盛岡の俳人の貫洞卓堂^{かんどう}や於曾此一^{おそ}に従学して学問が進んだといわれ、俳匠として多くの後進を指導した。

秋田の文人の安藤和風は、内藤湖南や十湾との縁故により明治25年より俳諧を通した誼^{よし}を結び、「落谷の俳風は寂しきと親しきとに富み、実情がこもっている」と述べている。同25年湖南は自ら編集する『亜細亜』誌上で「其の高渾古雅、実に天機の奥妙を道破せる」とたたえた。落谷はまた、幕末の俳人仲間の『狭布集』を編纂している。明治28年3月2日没、享年66歳。

<参考>『鹿角志』、『内藤湖南全集第二巻』。

かわぐち げっそん
川口 月村 1845（弘化2年）～1904（明治37年）

盛岡で活躍した明治の画家

弘化2年3月、花輪出身の川口月嶺と静の子として生まれる。本名は亀次郎。幼少にして絵を好み、父に師事して進境著しかった。特に花鳥画に秀で、その華麗な画は父を凌ぐとも

云われた。その画才を認められて、内国勸業博覧会、内国絵画共進会、帝国美術展覧会に出品して多くの褒状を受けた。奈良博覧会出品作は宮内省買上げ、御大典25年記念では絵画嘉納の栄を受けた。

花輪の円徳寺の「思山・廬川追善句額」、専正寺の「千友追善句額」、長年寺の「吐璋・蕪城追悼額」に蜂窠の署名があり、月村の作と思われる。他にも代表作「和漢十傑図」など、十数点が花輪に蔵されている。明治37年10月17日没、享年59歳。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

かわぐち げつれい

川口 月嶺 1811（文化8年）～1871（明治4年）

幕末期の盛岡藩御抱え絵師

文化8年、麴屋を営む七之助の次男として花輪に生まれる。名は七之助、画号は月嶺。18歳で画業を志し、江戸で四条派鈴木南嶺に師事し、同門の柴田是真と技術を競い門下の双壁と称された。弘化2年（1845）花輪に戻り、翌年藩主利済により召しかかえられた。

大日堂に奉納された牛の大絵馬額は、大きな杉板に牡牛1頭を特製のわら筆を用いて墨一色で描きあげたものであったが、残念ながら昭和24年11月大日堂炎上と共に灰燼に帰してしまった。その迫真の作品はいろいろな伝説を生じ、「画牛が夜な夜な出歩いて田畑を荒らしまわるので、朝に額を見ると、足と鼻先が露でぬれていた。やむを得ず綱で縛り付けると、夜歩きが止まった」という伝説さえある。月嶺の画がいかに写生に優れ、卓抜した描写力を示していたかの証拠であった。

月嶺の作品は、鹿角市内に多く残っており、「双鶴図」と「鶏と牡丹」は市の文化財指定となっている。明治4年7月21日没、享年60歳。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上下』。

かわぐち とみのり

川口 富教 生没年不詳、江戸中・後期の人

鉾山の水抜き樋を発明した山相家

尾去沢銅山山先の川口家に、与六の子として生まれる。富教は実名で、通称富十郎と称した。子に与十郎、孫に理仲太がいる。川口家は代々尾去沢銅山の山先をつとめた。

川口家には、膨大な山相図が残されていて、当時の鉾山を知る資料としてきわめて貴重である。また、坑道の水抜きのための樋といは富教の発明と伝えられる。さらに富教は、『天保十年日日集書記』などを著している。

<参考>『尾去沢・白根鉾山史』、『鹿角市史第二巻上』。

かわぐち りちゅうた

川口 理仲太 1841（天保12年）～1919（大正8年）

幕末から明治期の鉾山技術者

尾去沢銅山山先5家の一つ川口家に、与十郎の子として生まれる。祖父は鉾山の水抜き

樋を発明した冨十郎冨教である。川口家は代々山先として尾去沢鉦山の開発・経営にかかわり、青山家と並ぶ山相家としての名声を得ていたといわれる。

元治2年（1865）、理仲太は藩命により鉦山学習得のため横浜運行所に留学し、アメリカ人に学んだ後、公儀の用人松田甚兵衛の随員として、内田慎吾とともに足尾銅山など関東北越の諸鉦山を巡検し採鉦の設計に当たったという。のち小野組に招かれ、奥羽諸山を見分して30余の鉦山を開いたと伝えられる。尾去沢鉦山に帰ってからは、技術者としての中心的存在で、明治14年（1881）鉦業会社が各課の主務者を諸役員の投票によって選挙した際、理仲太は高得点をもって採鉦方主務に当選し発令されている。与十郎・理仲太父子の山相学に対する研鑽ぶりに感動した銅山方役人帷子繁治が、秘蔵の『山相秘録』他を父子に与えたと伝えられている。また、理仲太は儒学の造詣深く、漢学にも優れたという。大正8年死去、享年78歳。

<参考>『尾去沢・白根鉦山史』、『鹿角市史第三卷上』、『鹿友会誌・第21冊』。

かわむら あきら

川村 晃 1927（昭和2年）～1996（平成8年）

芥川賞作家

昭和2年12月3日川村左学の四男川村四郎の長男として日本統治時代の台湾嘉義市に生まれる。静岡県立沼津中学校より陸軍航空通信学校に入学した。その後小説執筆を行い、35年「まぼろしの足」で、新潮同人雑誌賞に入選した。37年には「美談の出発」で、第47回芥川賞を受賞した。受賞においては、井上靖の強い推薦があったことが記録されている。さらに、56年に『斑鳩に日が昇るとき』、59年には『宮本武蔵』などを出版した。杉原千叡の部下であった川村秀は実弟である。平成8年1月4日没、享年68歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

かわむら かおる

川村 薫 1897（明治30年）～1976（昭和51年）

郷土新聞の草分け

明治30年10月6日、教育者川村才太郎の四男として花輪町に生まれる。千葉の園芸学校を卒業し、帰郷後は鹿角果樹組合の指導員を委嘱され、以来30年の長きにわたってりんご改良・栽培技術の向上に貢献した。

薫が新聞に関係したのは、大里周蔵がスポーツ振興と言論発表の機関紙として発刊していた『花輪青年』編集を担当してからである。同紙は大正9年『青年の鹿角』と改題され月刊となり、また14年にタブロイド判の週刊新聞となり、『鹿角時報』と改名した。薫はその主幹・社主として、地元の世論形成の大きな力となった。

さらに、鹿角の景勝・民俗・伝統文化をこよなく愛し、その顕彰保存にも尽力している。広く愛唱された鹿角小唄や多くの小唄類は薫の作詞である。昭和8年毎日新聞が日本の12秘勝を募集した時、「奥羽アルプス八幡平の秘勝」という名文を寄せ、一等賞に選ばれた。

これが後に、八幡平が国立公園に編入される大きな推進力となっている。昭和4年から14年まで花輪町議として、地方自治にも貢献した。昭和51年4月21日没、享年78歳。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『鹿角市史第三巻下』。

かわむら さいたろう

川村 才太郎 1863（文久3年）～1930（昭和5年）

近代教育の発展に貢献

文久3年10月16日、川村左学の長男として花輪横町に生まれる。明治9年（1876）秋田に中学校が設置されるや、石田八弥、大里文五郎等と共に入学し、その後師範学校に転じた。14年明治天皇の東北巡幸に際しては、御前において生財論を講じ、賞詞を賜った。15年花輪小学校訓導となった。のち、本荘の鶴舞等に転じ、由利教育会の創立などに貢献した。当時の教え子、真田幸憲（後の奈良女子高等師範教授）は、その学徳を慕い生涯音信を欠かさなかったという。明治19年から同37年まで通算16年間花輪小学校長をつとめた。花輪小学校に顕彰碑がある。昭和5年2月2日没、享年66歳。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『鹿角市史第三巻上』。

かわむら さがく

川村 左学 1841（天保12年）～1913（大正2年）

鹿角の近代教育の大先達

天保12年11月30日、花輪南部氏家老川村右学の長男として、花輪横町に生まれる。花輪南部氏家老となり、幼君のお守り役を兼ねた。更に盛岡に出て作人館の塾頭・江幡梧楼に儒学や兵法を学び、帰郷後は私塾を開き子弟の教育に専念した。

明治7年（1874）、近代学校創立に備えて秋田伝習学校に学び、鹿角の教員の養成にあたった。花輪学校創立とともに初めての教員となった。10年の西南戦争においては、率先して同志を募り出陣している。帰郷後一等訓導に任ぜられ、花輪学校校長となった。以後郡内の教員養成にあたり、大里、谷内、三ヶ田、尾去沢、柴内学校長を兼務して多忙をきわめた。19年、学区制が廃止されて兼務校長の職を解かれ、46歳の若さで退職した。

その後は町議として政治に貢献し、晩年は詩歌俳句を楽しんだ。花輪桜山の戊辰戦争招魂碑の漢詩は、左学の作である。大正2年9月23日没、享年71歳。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿）』、『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

かわむら しろう

川村 四郎 1886（明治19年）～1971（昭和46年）

「音感オルガン」を創出した音楽教育家

明治19年、川村左学の四男として花輪に生まれる。東京音楽学校師範科卒業後、朝鮮、上海、台湾で教鞭をとり、昭和5年帰国後は静岡の沼津中の教師となった。昭和20年に教職を退いた後は、楽器会社で音楽器材の改良に当たった。戦時中に音感教育の研究を進め、戦後はオルガンの鍵盤を押すと反射的に音譜になって現れる仕組みの音感オルガンを創出

したのである。子は、芥川賞作家の川村晁である。昭和46年没、享年85歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

かわむら たけじ

川村 竹治 1871（明治4年）～1955（昭和30年）

犬養毅内閣の司法大臣

明治4年7月17日、川村俊治とクニの長男として花輪横町に生まれる。幼少のころ身体が弱かったため武士気質の父は乗馬で竹治を鍛えたが、21年一家をあげて東京に移り住み子弟の教育に専念した。

明治30年に東京帝国大学法科大学を卒業後、内務省に入り、のち通信省に移り、台湾総督府内務局長となった。44年から和歌山・香川・青森各県知事を歴任、ついで大正11年貴族院議員、南満州鉄道総裁、昭和3年台湾総督に就任している。7年には犬養毅内閣の司法大臣に就任したが、五・一五事件の勃発によりわずか三ヶ月足らずで辞任した。その後は政官界を退いて、夫人フミが創設した川村学園の私学教育の支援と青少年の教育に尽くした。21年の新憲法起草にあり、帝国憲法改正案特別委員小委員会のメンバーとして、「文民」条項の挿入を要求した。

鹿友会の第1回の学資貸与を受けた竹治は、その恩に報いるため大正5年鹿友会育英資金に多額の基金を寄付、その恩恵に浴した者は70余名に及んだ。「亜洲」と号し、漢詩を詠み書をよくした文化人でもあった。昭和30年9月8日東京で没、享年84歳。

<参考>『国史大辞典第三巻』、『秋田の先覚4』、『鹿角市史第三巻上下』。

かわむら なおや

川村 直哉 1887（明治20年）～1923（大正12年）

鳳鳴堂寮歌の作詞者

明治20年4月26日、才太郎とカツの次男として花輪横町に生まれる。祖父は左学、弟に薫がいる。33年、秋田県立第二尋常中学校（後の秋田県立大館鳳鳴高等学校）の第2期生として入学する。在学中、「鳳鳴堂寮歌」の作詞を行う。この寮歌の一番は「見よや桂の城の跡 氷雪凌ぐ寒梅の 花の香りぞ身にしみる 鳳鳴堂裡の輩よ」で、後の鳳鳴の名を記していた歌として注目されている。この作曲者は不明であるが、当中学校の応援歌3曲を作曲している小田島次郎（樹人）か小田島（阿部）六郎と推量されている。34年当中学校は大館中学と改称される。38年大館中学を卒業して、40年単身アメリカ西海岸に渡る。大正9年（1920）病気の静養のため帰国。鹿友会誌に掲載された小田島興三の川村の追悼文には「危険思想の宣伝に帰国したのではないかと、警察の監視を受けた」ことが記されている。物質文明の極致のアメリカ合衆国で精神文明の重要性を訴えていたことが、誤解されていたと言われている。大正12年2月4日、花輪で死去。享年35歳。

<参考>『鳳鳴堂寮歌の作曲者（宮越堯著）』、『鹿友会誌（第23冊）』。

かわむら ひでふみ

川村 秀文 1898（明治31年）～1981（昭和56年）

社会保険制度の創設に関わった官僚

明治31年9月18日、竹治とフミの長男として生まれる。東京帝国大学法学部政治学科を卒業後、内務省に採用され、地方を歴任した後、昭和3年内務省に戻り、社会局保険部事務官として、地方の健康保険署の会計監査にあたった。さらに、内務省社会局保険部企画課長を経て、厚生省並びに保険院の創設に伴い、保険院総務局企画課長、同総務局長を歴任し、国民健康保険をはじめ船員保険、職員健康保険、労働者年金保険等一連の社会保険制度の創設に関わり、我が国の社会保険の基礎を築いた。

昭和17年千葉県知事に就任、戦時下の体制整備、本土決戦への対応に尽力したが、昭和20年知事を退任した後、公職追放となった。昭和50年から、学校法人川村学園理事長、学園長などを務めている。昭和56年3月2日没、享年82歳。

かんしんぼう

観心坊 生年不詳～1733（享保18年）

江戸中期の仏師

現存する観心坊作の仏像としては、花輪高屋村橋場家の持仏堂にある「弘法大師座像」「釈迦牟尼仏座像」（享保18年作）石野男神社の「金剛界大日如来像」、松山松寿庵の「千手観音像」がある。高屋の北側台地突端に「かしぼ山」と地元で呼ばれている場所がある。その由来は、観心坊がこの山の中腹に庵を結んで修行したことによる。盛岡藩記録『雑書』には、享保18年2月に観心坊の最後の作品である「釈迦牟尼仏座像」を奉納した後、観心坊の願いによりかしぼ山（朝日山）に同年3月17日入定（即身仏になる）したと伝わっている。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第五巻（年表）』。

かんだ しょうじ

神田 庄司 1942（昭和17年）～2003（平成15年）

かづの農業協同組合の発展に寄与

昭和17年2月10日、藤次郎とアサの二男として八幡平川部に生まれる。48年鹿角郡農業協同組合理事、52年に同組合長に就任、「かづの農業協同組合」に名称を変更し、25年間にわたり地域農業の発展に努めた。地域の主要な農畜産物となっている夏秋キュウリ、夏秋トマト、SPF豚などの開発・導入は強力な指導力のもとに実践された。また組合員の農業生産を支援するために、農業技術拠点センターや野菜及び水稲の育苗センターの整備を行ったほか、集出荷施設や貯蔵及び加工施設の整備、流通体制の確立に努めた。平成5年全国農業協同組合中央会から優良組合表彰の栄誉をうけた。8年には子会社(株)ミートランドを創業させた。また秋田県農業協同組合中央会など県内関係団体の理事を歴任、14年からは秋田県厚生農業協同組合連合会副会長を務めた。

平成15年1月16日死去、享年60歳。没後、平成15年鹿角市功労者表彰、全国農業協同組合中央会農協功労者表彰、従六位勲五等瑞宝章受章。昭和62年建築のかづの農業会

館前庭には「共存同栄」の石碑が建立された。

<参考>『鹿角市広報（平成15年）』。

きくち きゅうざえもん
菊池 久左衛門 生没年不詳、江戸前期の人

白根銅山の初期の山先

金山として最も栄えた白根が銅山に転じたのは、一般に寛文9年（1669）のこととされている。その白根銅山として初めに『雑書』に見えるのは、菊池久左衛門にかかわる次の記事で、「白根の掘り出し銅は金1両につき25貫目と申し付けていたが、白根の久左衛門が寛文10年に米100駄を借用し、その返済を掘り出し銅で代納することを願い出たので、その間1両に銅20貫目の割合で返上させることを許した。代銅皆済したのちは改めて直段を申し付けるであろう」と記している。

銅山山先の菊池久左衛門は銅間歩の稼行のみならず、床を立てて銅の吹方も行い、白根銅山初期の段階で幅広く活動していたことが知られる。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『尾去沢・白根鉦山史』、『南部藩雑書』。

きた きゅうべえ
北 九兵衛（宜継）1620（元和6年）？～1696（元禄9年）

毛馬内氏のあとを継いだ大湯館主

寛文5年（1665）北信愛孫の九兵衛は小軽米村から大湯へ知行替えとなり、毛馬内氏、赤尾卓頼（又兵衛）のあと大湯館主となる。九戸郡小軽米村他の1182石3斗4合を鹿角郡大湯村、風張村等12カ村に替地として当てがわれている。北氏は南部氏の一族で八戸氏、中野氏とともに「御三家」の一つとして文政元年（1818）以降南部氏を称した藩の重鎮である。大湯館は南側台上に造営され、同じく台上に家中屋敷町として上ワ町（現・和町）がつくられた。その館裾を弓形に通る街道に沿って、馬継所や尾去沢銅の銅宿が置かれていた上町、下町（現・中町）、大湯南部家にお預けの大湯同心15人の同心丁（現・丁内）の家並が続いた。

九兵衛は同じ給地である稗貫関口村に寛文8年七日市を立てることを願い出て許されている。大湯村一日市のおこりは明らかではないが、飢饉などで困窮し途絶えたのを天和2年（1682）藩に願い出て再開の許可を得ている。元禄9年2月20日没。享年76歳。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』。

きた のぶかげ
北 信景（十左衛門）1575（天正3年）～1615（元和元年）

白根金山発見時の金山奉行

北信愛の養子十左衛門信景は、慶長期に白根・西道などの初代鹿角金山奉行であった。盛岡藩士伊藤祐清（寛延2年（1749）没・67歳）の筆録『祐清私記』の中で、「奥州鹿角白根・西道等の金山をば、北十左衛門不思議の縁にて見立てられ、慶長7年（1602）

の春の頃より掘られければ、土百目に金四五拾目より七八拾目を限り出る。其金色厚く清し。困りて不来方の不知を以て領内の山子共を集め、日々夜々に掘りければ、此の事諸国へ風聞し近国は申すに及ばず、上は、京・大坂・堺を商売しければ」とあり、当山日を追っての隆盛ぶりが記されている。また、藩の組同心20人が警備に詰めたこと、同9年秋駿府の徳川家に運上として黄金千枚・砂金50斤を献上。北十左衛門が大津・堺・伏見・大坂所々に問屋を定め、米代川を秋田領能代湊へ下げ、能代にも問屋を置き、上方へ登せて金銀を引替えたとも記されている。槇山金山は、白根発見の翌年慶長4年に見立てられ、やがて白根・西道、槇山三金山を十左衛門が支配したと言われる。

十左衛門は頗る豪勇の士で、同5年の和賀兵乱に際し一隊を率いて軍功があり、藩主利直より一字を賜わり名を直吉に改めた程である。白根・西道ともに秋田側との藩境が定まらず争論が絶えなかったが、打物取っての実力行使の事態となった。十左衛門は名だたる武道練磨の強将で、彼が帯刀屋敷に居るため、秋田金堀は手を出しかねた。ここに奉行所を建てて両金山を管理するなど争論においても果たした役割は大きかった。同19年奔して大坂城へ入城し夏の陣に「南部光り武者」と謳われながら悲劇的な最期を遂げている。元和元年没、享年40歳。

<参考>『鹿角市史第一巻・第二巻上・第四巻』。

きた のぶちか

北 信愛 1523（大永3年）？～1613（慶長18年）

田子信直を盛岡藩主に擁立した功労者

北氏は南部氏21代信義の子致愛むねちかより出て、初め三戸郡剣吉村を領有して剣吉氏を称したが、子信愛の代に三戸城の城北に屋敷を有したことから北殿と呼ばれ、よって北氏と称した南部氏一門である。北信愛はまた南部家中興の祖と仰がれる26代信直の股肱の臣で、一時期比内大館城主のち花巻城主となった北尾張守、北松斎その人である。なお、孫の北久兵衛宣継が大湯館主となっている。

戦乱期の天正10年（1582）正月、南部晴政・晴継の相次ぐ死去により、田子城主信直が信愛等に推されて宗家を継いだ。この襲封に反対する九戸政実を中心とした党派は、その後も三戸城の信直に対抗する動きをみせ、南部氏の政情は安定を欠くものであった。同15年信直は関白秀吉へのとりなしを頼むため、重臣の信愛を名代として前田利家のもとへ遣わした。信愛は進物の鷹31居もと（鷹を入れた箱の単位）を携え、2月10日三戸を出発し、50余日を要し4月2日ようやく金澤へ到着した。同17年南部勢の比内・大館城攻略や豊臣政権の北奥羽の接収の動き、小田原の役に参陣するに際しても信直を補佐している。

<参考>『鹿角市史第一巻・第二巻上』。

きたばたけ まさのり

北 畠 昌教 生没年不詳、安土桃山時代の人

伊勢国司北畠氏の末裔にして鹿角折戸氏の祖

津軽の浪岡北畠氏は、南朝の柱石北畠親房の第二子顕信から出たといわれ、一方第三子顕能の系統は代々多気御所・伊勢国司として勢威を振るったが、具教に至り天正4年(1576)織田信長により滅ぼされた。具教の遺児昌教は厳しい追求の手に、宇治、瀬戸を転々とした後、本願寺に匿われるに至った。北畠氏家臣井上丹後守専忠の嫡男専正の庇護のもと、主君昌教は大湯村折戸(昌齋館)に隠住したが、北畠氏の直系を名乗ることができず、折戸氏を称した。ともに逃れて本願寺11世顕如上人に入門した専正は、同17年花輪に下り浄土真宗専正寺を建立した。折戸氏は、のち花輪に移り検断役をつとめている。

折戸には、伊勢北畠氏縁の史跡として、北畠昌教卿の墓所、蔦江姫桜、殿様の井戸、昌齋館跡等が残っている。

<参考>『鹿角市史第一巻』。

きむら だいさく

木村 大作 1928(昭和3年)～2018(平成30年)

毛馬内諸家の系譜研究に尽力

昭和3年11月14日、平作とトメの次男として鹿角郡毛馬内に生まれる。三本木農学校を卒業後、33年太田と結婚し、36年に一家3人で岩手県花巻市へ転居。48年、当地のマルカンデパートを退職して帰郷、(有)木村平作商店を引き継ぎ家業に専念する。

昭和61年頃から先祖の出自に関心を持ち、系譜研究に着手。初めは、自家や親族・姻族などを調査して系図を作成していたが、次第にその範囲は毛馬内の諸家から郡市・県外にまで及び、ついに寝食も忘れて各地の寺院・墓地・図書館などに足繁く通うという没頭ぶりであった。特に、鹿角市先人顕彰館で毎年展示されている先人の系譜に長年協力し、近世以来の多くの諸家の系図を残した。平成30年11月12日没、享年90歳。

きむら ひろし

木村 博 1928(昭和3年)～2014(平成26年)

毛馬内出身の医学博士で郷土に貢献

昭和3年10月18日、榮蔵とタキの三男として、毛馬内に生まれる。毛馬内小・早稲田中学・海軍幼年士官学校で終戦を迎えた後、昭和22年大館中学校卒業、秋田高校を経て札幌医科大学へ進み、昭和31年博士課程卒業。医科大学勤務の後、昭和38年から北海道今金病院、次いで東京高輪病院を経て昭和46年、埼玉県蕨市で木村医院開業(～平成24年)。その後山形県真室川町立病院に移る。

故郷毛馬内を愛してやまない木村は、「浜辺の歌」碑(平成17年)、彫刻家福本春男に依頼して作らせた「盆踊り」(平成19年)、「内藤湖南先生像」(平成21年)、「道元禅師御像」(仁叟寺へ平成25年)を毛馬内に寄贈した。私財を投げうってのこれらの事業により、毛馬内は貴重な財産を持つこととなったのである。平成26年8月19日没、享年85歳。

<参考>『湖南三十号』。

きむら へいさく

木村 平作 1891（明治24年）～1979（昭和54年）

大正・昭和期に商工業と地方自治の発展に尽力

二代目木村平作（実名は正路）は、初代平作とキヨの長男として明治24年4月18日毛馬内に生まれた。木村家の祖は白根金山で財をなし、青山家と同時期に尾去沢銅山^{たこおり}山田郡に移り鉱山開発に従事した。のち明治中ごろ毛馬内に移って小間物雑貨全般を商いし、大商家に数えられるに至った。

大正12年（1923）正路改め平作を襲名、昭和に入り毛馬内町商工会会長、十和田商工会会長に選任され、十和田地区の商工業の振興に寄与した。また毛馬内町議会議員を4期つとめ、副議長1期町会議長1期を歴任し地方自治の発展にも貢献した。昭和54年3月13日87歳の長寿をもって没。

<参考>『鹿角市史第三巻上』。

きむら ゆうたろう

木村 祐太郎 1901（明治34年）～1986（昭和61年）

昭和時代の毛馬内の俳人

明治34年1月8日、徳之助とシケの長男として生まれる。俳号は湖山、楼簫あるいは森しげる、森湖十。小学生から文芸に興味をもち、青年期に「さきがけ俳壇」に投句して安藤和風に師事、また齊藤路葉の『玫瑰^{はまなす}』で活躍した。戦後、鎌田露山・渡辺冬園をたすけ、毛馬内俳人会の中心的存在となった。41年毛馬内俳句会が刊行の『十句集』に「花の散る如く終りぬ盆踊」とある。

湖山は短歌、川柳と作域が広く『改新乃鹿角』が募集した「毛馬内小唄」に入選、新聞の俳壇をおもな活躍の場にもとめた。その入選句をまとめた『木村湖山作品集』全5集（十和田図書館蔵）を作った。昭和61年没、享年85歳。

<参考>『芸文とわだ2号』、『鹿角市史第三巻下』。

くどう いすけ げんりょう

工藤 伊助（玄良） 1791（寛政3年）～1864（元治元年）

江戸後期の盛岡藩の侍医

寛政3年、尾去沢銅山山内支配人をつとめた内田家3代九兵衛^{とみなみ}富涛の4男として尾去沢に生まれる。大館の叔父川瀬玄昭に従って医術を学び、のち江戸に遊学して数年間研鑽を積む。帰郷して開業、山内だけでなく近隣にも好評を博した。

やがて盛岡の役医工藤玄良の養子となり、名を玄秀と改める。養父没後玄良を襲名し、藩主利済^{としただ}の侍医となる。数十年つとめるも、名医のほまれ高く、加増150石を合わせて270石を賜わる。隠居後は藩主より^{きじちゆう}匙翁の名を与えられる。毛馬内の医師滝圭純の嫡子玄績は盛岡の玄良門で医学を学び、また俳人としても名を成した。元治元年没、享年73歳。

<参考>『鹿角志』、『鹿角市史第二巻下』、『内田家系譜録』。

くどう えいこ すずらんじょ
工藤 栄子（鈴蘭女）1911（明治44年）～1976（昭和51年）

鹿角女流俳人の一人、『十和田』の同人

明治44年11月3日、写真館を営む小田島源太郎とミヨの長女として花輪に生まれる。少女時代から短歌を始め、やがて親類筋の阿部胡六に俳句を教わる。俳号は鈴蘭女。

20歳前に工藤時計店に嫁いだが、家事の合間を見ては俳句作りに熱中する日々であった。昭和7年（1932）小田島艸子や阿部胡六らが中心となって「花輪俳談会」が誕生したが、20余名中に20歳そこそこの鈴蘭女も入っている。青森県大鰐の医師増田手古奈が主宰する俳誌『十和田』の発行開始は昭和6年1月からで、鹿角の俳人たちが名を連ねた。鈴蘭女もその一人で、昭和の年代を通じて鹿角の俳人にとって最もつながりの深い『十和田』で手古奈の選を受けて活躍することになる。

一家の主婦として、句友、歌友に恵まれ飾らない人柄で親しまれて、PTAや婦人会などの役員も積極的に引き受ける人であった。いつもポケットに手帳とエンピツを入れて歩き、俳句が生きがいであったと言えよう。『十和田』に投句した一句「しっかりと鍋ぶた押さえどじょう煮る」。昭和51年8月7日死去。享年64歳。

<参考>『芸文かづの35号』、『鹿角市史第三卷下』。

くどう じろく
工藤 治六 生年没年不詳、明治・大正期の人

大正時代に柳行李を特産化

花輪谷地田町で和洋小間物雑貨を営む商家に生まれる。明治末期、鉾山の煙害対策として鹿角郡長河野隆性が関西地方の煙害地帯を視察し、杞柳栽培が盛んに行われている状況を見て栽培を奨励した。治六は岐阜県本巣郡に赴き、柳行李の原料である杞柳の栽培技術と行李製造法を習得、大正時代に約二町歩の杞柳園を開墾して栽培を行うとともに自宅に工場を設け製造した。柳行李の生産は東北地方では珍しく、花輪の特産品として県内は勿論盛岡、八戸方面に盛んに移出されたが、技能者が育たないこともあり昭和10年頃に生産は終わっている。

工藤家に伝わる「治六文書」は、享保7年（1722）から明治40年（1907）までの手形等からなり、当時の商家や町家の名前などが記載されていて、特に江戸期の史料は鹿角市史編さんに当たって花輪での商家の経済状況を知ることができる貴重な資料である。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角市史第二卷上下・第三卷下』。

くどう としえい
工藤 利栄 1941（昭和16年）～2018（平成30年）

『狼が遺したもの』を著した郷土史家

昭和16年11月27日、卯太郎とヨコの三男として七滝村山根（現鹿角市十和田山根）に生まれる。十和田高校卒業後集団就職で上京するが、職場に幻滅し程なく帰郷。38年十

和田町役場に採用され、合併後鹿角市役所に移って平成14年3月定年退職まで勤め上げる。この間、45年から鹿角郡広域行政調査事務所へ十和田町代表職員として派遣され、鹿角市誕生の経緯に深く関わって詳細な記録を保存し、市制40周年を機に「鹿角市誕生のドラマ」を『上津野』に発表した。これは鹿角市の貴重な歴史記録となった。また平成7年には、5年に1回開かれる世界地熱会議が12年ホテル鹿角を会場に予定されていたことから、イタリアに視察に出かけたりして会議の準備に奔走した。11年4月から1年余、先人顕彰館長時代には、全展示の総点検を行うなどより良い展示を目指した。

退職後は文化財保護協会、内藤湖南先生顕彰会、古文書を読む会などの熱心な会員となり、持ち前の探求心と卓越した調査力、行動力で、次々と新しい課題に挑戦した。18年に刊行した『狼が遺したもの』で、狼にとりつかれた男と言われたが、その後も長崎御用銅、葦名神社の伝説、鹿角の歌謡と、郷土の身近な歴史をひもとくことに心血を注いだ後半生であった。平成30年1月11日没、享年76歳。

<参考>『上津野No.36・37・38・40・41』。

くどう ひさお

工藤 寿夫 1908（明治41年）～1982（昭和57年）

俳句・絵など文化活動に励んだ教育者

明治41年3月18日、和蔵とミサの長男として花輪に生まれる。工藤家は花輪南部中野家の家臣で、代々用人や家老職を務めてきた。盛岡中学卒業後、花輪尋常高等小学校の代用教員になるが、1年後岩手師範学校に入学、昭和4年同専攻科を卒業。岩手県内の小学校で勤務中に、俳句や油絵の手ほどきを受けた。10年故郷花輪に戻り、花輪高等小学校、花輪青年学校などを歴任、戦後は錦木中、柴平中、花輪小、八幡平中と各校長を歴任した。柴平中学校長時代に作詞作曲した校歌は、花輪第二中学校に引き継がれ、今また令和3年（2021）4月から平元小学校と花輪北小学校が統合して発足する柴平小学校の校歌として採用されるという。根っからの文化人で葦井子の号で花輪俳談会で活躍するかたわら、暇さえあれば絵筆を持ち、バイオリンやチェロを弾く。同僚たちと生理学者アレクシス・カレルに因む「カレル会」を発足させ、花輪で絵の展覧会（カレル会展）をひらいた。カレル会展は11回続いている。

一方、長年寺の檀家総代として墓地公園化事業を推進したり、神明社の改築を行うなど、土木工事にも手腕を発揮した。著作に句集『葦のつぶやき』がある。昭和57年1月24日死去、享年73歳。

<参考>『芸文かづの第8号・24号』、『鹿角市史第三巻下』。

くどう まさし

工藤 政志 1942（昭和17年）～2014（平成26年）

日本建築の技を撮り続けたカメラマン

昭和17年1月1日、源次郎とサキの子として大湯一本木に生まれる。29年大湯中学校

入学。修学旅行中に出会ったカメラマンが故障したカメラをあっという間に直してくれたことに感銘を受けカメラマンに憧れる。32年大湯中学校卒業後、カメラマンを目指して上京し川上勝彦氏に師事。38年銀座キャラバン商会入社。42年建築写真カメラマンとして独立し、50年株式会社クドウフォトを設立。

60年サンフランシスコ市で「日本建築の技」写真展、平成元年には岩手県毛越寺にて「毛越寺」写真展開催。平成20年東京スカイツリー工事を専属で撮影開始し、3年余に渡って撮影する。この間、22年7月NHK放送「ワンダーワンダースペシャル／ほぼ完全公開！東京スカイツリー」にて紹介される。また、NHK放送「あさイチ」に出演。スカイツリーをテーマとした写真集『UNDER CONSTRUCTION（建設中）』を出版。日本建築写真家協会会員。平成26年9月26日死去。享年72歳。

くまがい すけうえもん げつきょう

熊谷 助右衛門（月郷） 1828（文政11年）～1868（慶応4年）

南部一の勤王論者と称えられる

丹治専弥の長男として生まれ、諱（いみな）は直興、月郷と号した。母は熊谷氏の出であるが早く亡くなり、二度も義母が変わったので、母恋しさから熊谷姓を名乗ったといわれている。少年時代盛岡に出て、沢出椿庵（尾去沢出身）の塾に入門、更に長沼流の兵法、宝蔵院流の槍、新当流の剣、大坪流の馬術を学び、江幡梧楼に漢詩、毛馬内の滝麟趾（玄積）に俳句を習う教養人でもあった。正直な反面、勇気に富み、幕末の世論紛々の時に勤王主義を主張した。慶応4年6月「時勢論」を桜庭裕橘家来熊谷助右エ門直興と署名し盛岡藩主に奉ったのち、戊辰戦争にて戦死。その際、懐にあった「時勢論」を見た敵方の隊長小野寺主水より、南部一の勤王論者と称えられた。慶応4年9月2日没、享年40歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『十和田町の先輩』、『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

くまがい ちゅうざぶろう

熊谷 忠三郎 1904（明治37年）～没年不詳

国内外の諸鉱山を調査・開発した技術者

明治37年毛馬内に生まれる。昭和4年東京帝国大学採鉱冶金科を卒業、日本鉱業に勤務した。16年太平洋戦争から終戦まで技術院戦時研究院、軍需省嘱託をつとめる。戦後、日東金属技術部長、25年相内鉱山再開にともない相内鉱山長となり、ここで末広、大黒、弁天などに黒鉱床を発見した。33年南米ボリビアにある南米鉱山を調査買収し、現地に1万トン処理選鉱場を建設した。日東金属専務取締役をへて退職後、44年から伊藤忠商事金属資源開発室に勤務し、海外鉱山の調査に従事した。剣道錬士、ゴルフも楽しむスポーツマンでもあった。

<参考>『毛馬内小学校創立百周年記念誌（昭和49年出版）』。

くまがい ちよ

熊谷 チヨ 1916 (大正5年)～2013 (平成25年)

小学校特殊学級教育の先駆者

大正5年8月25日、下村平七とシナの四女として、毛馬内に生まれる。毛馬内小学校、大館高等女学校を経て、盛岡市女子師範学校を昭和13年(1938)卒業。岩手県内の小学校から東京の早稲田国民学校に転勤し、戦後花輪に帰郷して花輪一中に勤務すること10年、32年に花輪小学校に転勤する。33年2月、特殊教育の振興のため県が研究指定校とした花輪小学校に知的障害を持つ子どもたちの「さくら学級」ができると、自ら進んで担任を受け持ち指導に当たった。

その教育法は、子どもたちの無限の可能性を信じ愛情を持ってその能力を引き出すという教育原理に基づいたやり方で、字を読めない子供たちのために「し」は犬のしっぽのしに似ている。「へ」はへのへのもへじのへ」というように、子供たちに問いかけて返ってきた答をもとに五十文字の特殊辞典をつくった。時計の見かたのわからない子供には、床の上に白ぼくで大きな時計を書いて石けりやジャンケン遊びをして覚えさせた。特殊教育のさきがけといえるその指導法は、34年11月の公開授業でも全国的な高い評価を受けた。この教育体験は全国より注目、評価されその都度論文として発表され、36年には第19回全日本教員発明展に入選。また43年にはNHK厚生文化事業団精神薄弱福祉論文に入選し全国に紹介された。45年「ちえ遅れの子の学習指導」という論文を出版した。退職後は趣味を生かして手芸同好会を主宰し、老若男女を集めて様々な手芸工作を教えた。平成25年12月16日死去、享年97歳。

<参考>『県広報あきた(通巻104号)1971年(昭和46年)1月1日発行』、『鹿角市史第三巻下』。

くみかわ たかかげ

汲川 隆景 1914 (大正3年)～2004 (平成16年)

郷土の史跡保存に尽力した教育者

大正3年3月11日、徳之助とレツの四男として大湯和町に生まれる。昭和7年鷹巣農林学校卒業。11年秋田師範学校卒業後、小坂尋常小学校高等小学校訓導となる。26年病氣休職したが3年後復職し、6校統合した八幡平小学校初代校長を最後に48年退職するまで、鹿角郡市内の小中学校で勤務した。退職後は、鹿角市立幼稚園長、鹿角市老人クラブ連合会幹事・副会長、十和田・大湯地区の各老壮クラブの会長、大湯地区振興対策協議会(幹事6年～会長6年)、大湯囲碁同好会長、大湯かくら会(独居)会長を歴任するなど、組織作りや指導育成に尽力した。また、大湯郷土研究会会長として、平成4年大湯鹿倉城四百年記念鎮魂の碑建立、記念祭、記念誌発行に携わり、『大湯ふるさと探訪』、『不老倉鉦山誌』の発行などにも力を注いだ。

汲川家の祖は、岩手県紫波の高水寺城主であった奥州管領斯波氏である。敷地内にある祭神の稲荷神社は志波町の志和稲荷神社から分社。燈明石の石塔には16弁の菊花模様が刻

まれ、足利氏の後裔であることを示すとされている等もあり、県外の人達との交流も深めながらその職にあたった。平成2年老人福祉功労者秋田県知事表彰、4年鹿角市一般表彰、14年勲五等瑞宝章受章。平成16年10月19日没。享年90歳。

<参考>『鹿角市史第四巻』、『汲川家文書』。

くりやま しんべえ

栗山 新兵衛 1824（文政7年）～1900（明治33年）

十和田湖開拓の先覚者

文政7年3月18日、盛岡藩士栗山九八とナツの長男として花輪大町に生まれる。幼名は松次郎、新兵衛改め再助を名乗る。山口流剣術を関右平太、砲術を桜井忠太夫に学ぶ。さらに泉沢修斎に入門し長沼流兵法の免許皆伝を受けている。戊辰の役では、花輪隊（御給人隊）の御旗総締役として大館城攻略の先頭に立ったが、鍋島藩の援軍を得た官軍に国境まで押し返され敗戦を迎える。敗戦後旧藩士は帰農することとなり、かねてから藩境に位置する十和田湖畔に着目し、明治2年休屋の神田川沿いに入植し開墾と養殖にあたった。しばらく休山していた十和田銀山が明治8年に再開されると、帆掛舟を建造して鉾山に野菜、物資の供給や乗客を運んだりして十和田湖開発の先駆者となった。明治33年没、享年76歳。

<参考>『十和田湖開発碑誌（栗山小八郎編）』、『鹿角市史第二巻下』。

くりやま ぶんいちろう

栗山 文一郎 1920（大正9年）～1991（平成3年）

文次郎の跡を継いで古代紫根染・茜染を発展

大正9年4月14日、文次郎とマサの長男として花輪に生まれる。「生計を維持できる技術を身につけてから染めに精を出せ」という父の教えに従い、大館中学を卒業すると獣医の資格を取得するため日本高等獣医専門学校（東京）に入学。昭和40年（1965）、獣医のかたわら父文次郎の意思を継いで古代紫根染・茜染の技法を受け継ぎ、技術保持者として53年秋田県無形文化財に指定され、手間のかかる染色技法を最後まで貫いた。文次郎、文一郎父子による染物作品と使用された用具類は、平成6年市有形民俗文化財に指定された。そして、これらの作品および用具類は29年に栗山家『古代かづの紫根染・茜染資料』として市に寄贈された。

文一郎は、郷土の歴史・地理に造詣が深く、『花輪町誌編纂資料』の編集や「田中北嶺画『戊辰戦争絵日記』（解説文）」を刊行している。花輪史談会では活動の中心となって、「古文書を読む会」や「史跡めぐり」の講師を長年つとめた。また市文化財保護協会会長および市文化財審議会会長として文化財保護活動にも熱心に取り組んだ。平成3年6月15日没、享年71歳。

<参考>『古代かづの紫根染・茜染資料（鹿角市教育委員会）』、『鹿角市史第三巻下・第四巻』。

くりやま ぶんじろう

栗山 文次郎 1887（明治20年）～1965（昭和40年）

鹿角の古代紫根染・茜染技術で人間国宝となった染色家

明治20年、文二郎の長男として花輪坂ノ上に生まれる。叔父の佐藤嘉一郎に茜染・紫根染の伝統技法を学ぶ。呉服店を営みながら古代鹿角紫根染・茜染の復活に努め、大正3年（1914）に紫根染・茜染が東京三越百貨店に出荷された。6年に鹿角紫根染製造所を新設し生産量の増大を図り、同年大正天皇の即位大礼に天皇の御刀緒を染める鹿角産の紫根を納める。13年に大正の不況により倒産するが、古代技法の保存のために住民の後押しもあり、再興に力を注ぎ、15年東京三越百貨店での「東北名産品陳列会」に出展し名声を高める。昭和2年伊勢神宮に上納、皇室へもたびたび献上された。これらの功績により、19年に商工大臣より技術保存資格者の指定、28年には貴重な古代技法継承者として国の重要無形文化財（人間国宝）の指定を受けた。39年黄綬褒章、同40年勲六等瑞宝章を受章した。昭和40年6月27日没、享年78歳。

<参考>『花輪町史（宮城一杉著）』、『鹿角市史第三巻下・第四巻』。

くろさわ かくべい

黒沢 覚平 生没年不詳、江戸期の人

代々幕府巡見使を錦木塚に案内した錦木古人

幕府巡見使は、徳川将軍の代が替わるたびに旗本3人1組となって各藩政や民政の視察を行うため諸国へ派遣されるを例とした。鹿角通行は前後9回、三戸から田子・関・来満山を越え大湯泊、翌日錦木塚休息、松山お昼、花輪泊、次の日は田山お昼の旅程であった。その行列は、巡見使直属の人数123人、盛岡藩から付添の役人や同心等300人を超える物々しさであった。この巡見使一行を錦木塚で案内したのが黒沢家であった。

錦木塚に初めて幕府巡見使が立ち寄ったのは寛永10年（1633）8月18日のことで、錦木古人の黒沢覚平は献上の細布に添え、狭布の里「錦木塚の伝記」をお聞かせ申した。巡見使はお茶屋で休息ののち、出立の際に大儀大儀といたわりの言葉をかけ、また細布料として一巻ひとまきに付金百疋びきを下げ渡したという。この黒沢家による案内が、これ以後の巡見使接待の前例となって引き継がれていった。

<参考>『ふるさと鹿角（安村二郎著）』、『鹿角市史第三巻上』。

くろさわ きせき

黒澤 其石 生没年不詳、江戸後期の人

錦木塚別当で『錦木塚歌句帳』を編んだ俳人

『錦木山観音寺縁起』に併せ綴じられた無表題の『錦木塚歌句帳』は、寛政8年（1796）古川村の錦木塚別当の黒沢其石が編纂、江戸の旅人の楊柳庵ようりゅうあんが次のような序「けふの錦木尋来て詩歌連俳をうたふ人々あまたならむに、其草々埋れむ事を哀むものは細布おりヲ織なる宿しのあるしにして是をくまなく冊子に拾ひ千束の数積むとす」を寄せている。盛岡の長

谷川龍嵩の漢詩、毛馬内通代官の長嶺九兵衛の和歌、伊藤為憲の漢詩と和歌、泉沢貞直、馬淵等高、黒沢秀俣の漢詩をおさめ、俳句は54句にのぼる。中には文化10年(1813)、天保14年(1843)、安政4年(1857)の歌句があることから、順次書き継がれたことがわかる。

文化文政年間の鹿角では、松林亭・馬淵里夕と黒沢其石が引続き俳壇の輪を広げていた。文化3年(1806)黒沢其石が錦木塚の祭礼に詩歌連俳を集めて手向けようとして近隣の俳人に回した『勸進帳』に「萩すすき野にも千束の手向哉 其石」とある。

錦木は歌枕の地として知られ、中央や各地文人の訪れがあり、その影響により詩歌連俳のさかんな風土が育まれた。

<参考>『鹿角市史第二巻下』。

くろさわ こじろう

黒澤 小二郎 1885(明治18年)～1934(昭和9年)

毛馬内小学校の校歌の作詩、小蓉と号した俳人

明治18年8月25日、医家の元齋とリキの次男として毛馬内に生まれる。44年8月創刊の毛馬内小学校『同窓会誌』は、年1回の発表ながら評論から紀行詩歌にいたる地域文芸の総合誌で、小二郎は第2号から昭和初期頃まで編集者として従事した。文章にすぐれた小二郎は小蓉と号し、大正元年(1912)9月20日制定の毛馬内小学校の校歌を作詩した。「雪 銀雪高き狭布の富士 動かぬ山を鏡にて 心を磨き身を鍛え 学の道にいそしまん」。当時の学級名の雪組、月組、花組はコミュニケーションの校歌にちなむ。また『同窓会誌』第3号掲載の小蓉作歌による「鹿角郡歌」は文学博士幸田露伴と巖谷小波両先生の校閲になる。15年11月鹿角国華会の発足式に参加、昭和2年月山社の国華会奉納の篇額は小蓉の揮毫による。昭和9年2月4日没、享年48歳。

<参考>『毛馬内小学校「同窓会誌」(昭和3年)』、『鹿角市史第三巻下』。

くろさわ しゅうさい

黒澤 秀齋 1916(大正5年)?～1997(平成9年)

歯科医、子どもの口腔衛生に取り組んだ学校医

医師の祐齋とヤへの次男として生まれる。昭和23年(1948)から40年にわたり市内の学校等の校医として、児童・生徒の歯科衛生の啓蒙普及に協力し、虫歯予防と歯の大切さの指導に努めた。さらに鹿角市郡歯科医師会会長、鹿角市健康づくり推進協議会委員、鹿角市保健センター運営委員なども務め、市民の健康の保持と増進に貢献した。平成9年5月没、享年81歳。

<参考>『広報かづの(昭和62年)』。

くろさわ せいこう

黒沢 晟幸 1917(大正6年)～1997(平成9年)

十和田短歌会を育んだ教育者

大正6年10月13日、市十郎とイツの長男として草木村に生まれる。鷹巣農林学校林科を卒業後、青森営林局に採用され、二年間、青森・遠野・奥入瀬等々牧野測量に携わっていたが、体を害ねて帰郷した。

誘いを受け草木小学校の教員となり、その後鹿角の小学校で勤務し校長も歴任。初任地で国語の短歌教材に触れ、正岡子規の歌に惹かれて以来、国語教材そのものに深く入り込み、朗読・作文・書道の指導にも熱心だった。同職したアララギ歌人佐藤正二から、校内短歌会で作品を賞賛され作歌意欲は旺盛になった。職を退いた昭和50年代後半から本格的に作歌に集中し、北海道アララギ、秋田魁歌壇、花輪・十和田の短歌会に所属し、晩年まで作品を発表し続けた。この間、59年6月、12月、平成3年にさきがけ歌壇推薦作家となった。平成6年鹿角市芸術文化功労章受章。十和田短歌会の会長として死去するまで、会の運営や会員の指導にあたった。平成9年6月18日没、享年79歳。

<参考>『平成9年度年間歌集「葛」第13集』、『鹿角市史第三巻下』。

くろさわ たかとも

黒沢 隆朝 1895（明治28年）～1987（昭和62年）

音楽教育と音楽起源の研究者

明治28年4月9日、神明社神官幸太郎とソメの長男として花輪に生まれる。大正5年（1916）秋田師範卒業後、同7年東京音楽学校師範科入学、同10年卒業。バイオリンを学び、山田耕筰、田辺尚雄に師事した。在学中から先輩成田為三の音楽講義録を手伝い、早くから執筆家として知られた。大正の末頃から童謡作曲をさかんに手がけ、昭和2年自作集『可愛い童謡』全十集を完成させた。同4年には『童謡唱歌名曲全集』も編集している。

また、教壇で音楽を教えるうちに新しい教科書の必要を感じ、各種の音楽教科書及び教授資料を作った。それは、情操教育を重視した総合的なもので、現在の音楽教育の原点となっている。また文部省の教科用図書検定調査審議会委員を務めて、音楽教育の発展に貢献した。さらに、東南アジアや台湾の民族音楽を研究して、音階発生論（黒沢学説）を唱え、国際的にも大きな反響を呼んだ。著書に、『楽器大図鑑』『楽典』『音楽起源論』等、訳詞に「山の音楽家」「狩人の合唱」等がある。昭和62年5月20日没、享年92歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『芸文かづの第2号』。

くろさわ てるお

黒沢 輝夫 1928（昭和3年）～2014（平成26年）

石井漠門下の舞踏家

昭和3年1月30日、花輪川原町に生まれる。小さいころから家業の農業を手伝いながら、祭りや演芸会で踊っていた。

16歳の時に石井漠（三種町出身）の秋田公演の際、創作舞踊を見て感激し、18歳の時に上京、石井漠の弟子となる。昭和31年パートナーとなる下田栄子（八戸出身）と共に神奈川県立音楽堂で『蛇性譜』などを発表して独自の道を歩み始め、平成21年『山を登る』を娘の黒沢美香を相手に踊り、日本の現代舞踊の成果を次世代へと引き継いだ。横浜にスタ

ジオを開いて多くの後進育成に努めた。平成26年4月11日没、享年86歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角市史第三巻下』。

けまない おさつぐ

毛馬内 長次 1601（慶長6年）～1673（延宝元年）

藩政全般の発展に貢献した花輪城主

毛馬内（九左衛門）長次は、初代毛馬内城主秀範の三男直次を父とする毛馬内氏の支族である。正保2年（1645）家督を相続し、次いで承応元年（1652）家老職となり、明暦3年（1657）8月柏崎館から花輪へ知行替となった。

長次の花輪入りは、秋田藩との藩境警備を重視した藩主重直の判断による。毛馬内氏の花輪在城期間は長次の明暦3年8月から子の定次の延宝3年3月まで18年に及んだ。寛文4年（1664）12月藩主重信の襲封に際し、家督御礼の家老として将軍家綱に拝謁した。鹿角での事績は、寛文年間に盛岡藩より新田開発の奨励が出され、三ヶ田の田地を潤している三ヶ田堰は毛馬内長次の水利事業と伝えられている。また鹿角の諸金山は直山法^{じきやまほう}が適用され、藩老長次の指揮のもとに金山の管理運営にあたり、藩政全般の発展に貢献した。延宝元年7月22日没、享年72歳。

<参考>『鹿角市史第二巻上下』、『鹿角志（内藤十湾著）』。

けまない なおつぐ

毛馬内 直次 1568（永禄11年）～1652（承応元年）

江戸創生期、要衝の地鹿角を治めた盛岡藩の重鎮

初代毛馬内城主の秀範の四男である毛馬内（三左衛門）直次は、天正14年（1586）藩より新規に200石に取立てられ、同年遠野城代に抜擢された。天正19年九戸の陣に参戦、文禄元年（1592）肥前名護屋に従軍、慶長6年（1601）岩崎の陣に軍功をあげ、翌7年家老職につらなり藩政の中樞をにない、19年大阪の陣に騎将を務めた。

大湯は鹿角・津軽経営の要衝の地であるため、南部信直・利直に仕えていた大湯昌光の女婿の毛馬内直次が入部したが、寛永20年（1643）毛馬内則氏が幼少のため大湯へ知行替となり、領境警備のため直次が毛馬内へ移り、正保2年（1645）家督を嫡子九左衛門長次に譲り隠居した。三ヶ田の雲龍山宝珠寺は天正18年（1590）の創立。毛馬内直次の開基と伝えられる。承応元年10月27日没、享年84歳。

<参考>『鹿角市史第一巻・第二巻上下』、『鹿角志（内藤十湾著）』。

けまない のぶつぐ

毛馬内 信次（秀範） 1521（大永元年）～1585（天正13年）

初代毛馬内城主、安東愛季に内通した智略家

22代南部政康の五男。天文5年（1536）三戸から毛馬内へ移封され、2,000石を領して毛馬内（鞆負佐^{ゆげいのすけ}）信次と称した。南部氏一門の毛馬内氏の始まりであり、また三戸南部氏が鹿角に所領をもった始まりである。

永禄期、松山城主の安藤愛季^{ちかすま}は鹿角を窺っていたが、秀範は志をあかさず、永禄8年（1565）藩主晴政に従うと見せて、ひそかに反南部派の在地侍を秋田側に出奔させ郡中おおいに乱れたので、晴政は田子信直に鎮圧させたという（『九戸地方史』）。秀範の智略家としての顔を垣間見る事件であった。天正13年11月10日没、享年64歳。

<参考>『鹿角市史第一巻、第二巻上下』、『鹿角志（内藤十湾著）』。

けまない まさつぐ
毛馬内 政次 生年不詳～1615（慶長20年）？

利直の命により柏崎館に築城した2代毛馬内城主

初代毛馬内城主信次（秀範）の長男として生まれ、父の死にともない天正14年（1586）家督を相続した。通称名は権之助。19年九戸の乱に際し、南部信直^{のぶなお}方に付いて、政実方の大湯四郎左衛門の鹿倉城を攻略した。豊臣軍の支援により政実方の敗北に終わった後は、秋田側の十二所方面への国境警備と鉱山開発による鹿角の地域的重要性が高まった。二代藩主となった南部利直が慶長12年（1607）に毛馬内を巡見した際、当麻館に居城していた政次に柏崎館に居館を移すことを命じた。政次はその命により柏崎館に居館を移し、新たな町造りを行った。神仏に信仰の厚かった権之助は、鹿角総鎮守で南部藩主が代々再興した月山神社に社領13石を寄進、また別当寺の広増寺にも社領12石を寄進し領国の安泰と幸福を祈願した。慶長20年？没。

<参考>『鹿角市史第一巻・第二巻上』、『鹿角志（内藤十湾著）』。

こいずみ りゅうじ
小泉 隆二 1907（明治40年）～1984（昭和59年）

小坂の版画家で鹿角の文化芸術振興に尽力

明治40年小坂町に生まれる。幼いころ、東京美術学校で日本画を学んだ叔父、小泉蘆舟に絵画の手ほどきをうけた。画家を志すも家庭の事情と父親の強い反対で夢をあきらめ、青山学院大学を卒業後、昭和8年（1933）父親の後を継いで小坂町郵便局に勤め局長になる。26年年賀状版画コンクールで郵政大臣賞の受賞をきっかけに、版画家として道を歩みはじめ、日本版画協会展、日本版画院展で次々と入選を果たす。45年郵便局長を退職、48年の第23回版画院展では「奥入瀬夏」が菊華賞を受賞し、郷土の創作版画家として一時代を築いた。自然を簡明に写しだし詩情をいざなう作品は、多くの人々を魅了した。24年、阿部六郎（花輪）、大里健治（毛馬内）両氏と3人で鹿角合唱連盟を組織するなど、音楽や演劇など鹿角との幅広い芸術活動の振興と教育に情熱をそそいだ。55年秋田県芸術文化章を受章。昭和59年没、享年77歳。

<参考>『小坂町第4回郷土館所蔵美術展パンフレット』、『鹿角市史第三巻下』。

こえさし またぎえもん
小枝指 又左衛門 生没年不詳、江戸前期の人

隆昌寺を白根から小枝指村に移転した地侍

小枝指氏は中世鹿角4氏のうち安保氏に出る。『南部藩・参考諸家系図』に、小枝指左馬助から系を起し、又左衛門を数代の通称名とする系図が見える。

天和元年（1681）11月まで花輪通代官、元禄4年（1691）まで毛馬内通代官、のち鹿角郡代を勤め、宝永6年（1709）3月に宗閑と号したのは、清兵衛とも称した小枝指氏7代又左衛門能宗である。宝永7年6月、川守田弥五兵衛とともに土深井境柱を藩庁へ申し出た御境奉行として見える又左衛門も能宗のことと思われる。

また、青山庄左衛門昌良が父昌隆の菩提を弔って白根に創建し、父の名をひっくり返して号した隆昌寺を、延宝3年（1675）8月金山から小枝指村に移転した人物は、この又左衛門能宗のことか。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』、『尾去沢・白根鉦山史』、『参考諸家系図・第三巻』。

こだま こうけい

児玉 高慶 1888（明治21年）～1929（昭和4年）

日本一の武道家、武道を奨励して青少年を指導

明治21年9月9日、豪農猪太郎の長男として小枝指に生まれる。児玉家は享保の時代から続く旧家で毛馬内通りの御給人となっていた。幼少時代は健康にすぐれず、父は息子の健康を心配し、心身の鍛練をすることを薦め、さらに邸内に武道場を建てている。高慶は体力錬磨の結果、体も学業も学校一となった。13歳で父が急死したことにより、当主となり、学校を退学して家庭教師により学業を続けた。旧盛岡藩指南役の桂菅七などを招聘して剣道を学んだ。さらに上京して19歳の時、柔道は講道館嘉納門下に入って五段の免許を得、22歳の時には剣道は、当時日本一といわれた有信館の中山博道に学んだ。道場は、はじめ興武館と称し、済美館とし、さらに児玉道場とした。武道奨励の恩人として且つ人格者として、郷土の敬慕を一身に集めた高慶の下には近隣の子弟のみならず、県内外より入門するもの1200名あまり、「日本一の武道村」といわれるまでになった。

大正14年（1925）5月、摂政宮であった昭和天皇の御前試合（剣道）には、達人として知られた西久保弘道と渡り合ひ、陛下の警咳に接する光栄を担う。体重34貫（128kg）、身長五尺六寸の偉丈夫であった。武道の傍ら、柴平村の自治振興に尽くし、農民の指導に専心努力し、また郷土の青年の指導者として郷人の崇敬を受ける。昭和4年急逝、享年41歳。小枝指の隆昌寺に児玉高慶先生顕彰碑と墓がある。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角市史第三卷下』、『鹿友会誌』。

こだま さくざえもん

児玉 作左衛門 1895（明治28年）～1970（昭和45年）

アイヌ民族研究者

明治28年12月3日花輪柴平村に生まれる。大正9年（1920）、東北帝国大学医学部卒業、同大学医学部解剖学助教授を経て、昭和4年から34年まで北海道帝国大学医学部解剖学教授。日本人頭骨とアイヌ頭骨との比較研究からアイヌの民族学研究に興味を持ち、アイヌ文化の起源を探るため、北海道の考古学へと研究対象を広げていった。その間研究者

の育成指導にもあたり、日本解剖学会、日本人類学会の重鎮として評議員を務めた。それらの功績により40年に北海道文化賞、41年には勲二等旭日重光章を受章。昭和45年12月26日没、享年75歳。

現在、調査・収集した資料は児玉コレクションとして「函館市北方民族資料館」に展示されている。

<参考>『日本考古学辞典』。

こだま まさきち

児玉 政吉 1910（明治43年）～1987（昭和62年）

地方行政の確立と地域の発展に貢献、鹿角市誕生に尽力

明治43年4月10日、末吉とシクの子として柴平村平元に生まれる。昭和22年（1947）、尾去沢町議会議員に当選して以来、3期12年、30年からは議会議長を務める。34年に尾去沢町長に就任し4期13年を務める。尾去沢鉱山縮小などによる深刻な過疎化の進行に対応し、観光資源の開発、水晶山国定スキー場へのリフトなど諸施設の完備、縫製工場誘致などを行った。また東北自動車道の開通をにらんで、広域行政の気運が高まり、42年に設立された「鹿角郡の振興を図るため、広域行政に関する調査並びに研究を行う」鹿角郡広域行政調査会が発足、政吉が会長に就任して鹿角市誕生を推進した。そして誕生から市長選挙までの間、鹿角市長職務執行者として合併実務を執行した。また51年から鹿角市長を一期4年務めているが、市長在任中の尾去沢鉱山の閉山に当たっては、旧坑道利用のメインランド尾去沢のオープンを促進した。53年には閉山による過疎化の激化に対し各種事業の振興を図り、特に農林業の振興のため県種苗交換会の開催に尽力している。地方行政の確立と地域の発展に貢献したことにより45年に全国町村会より表彰を受ける。57年鹿角市功労者表彰、58年勲四等瑞宝章受章。昭和62年10月27日死去、享年77歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『広報かづの』。

こばやし くにろう

小林 久仁郎 1951（昭和26年）～2017（平成29年）

花輪高校吹奏楽部を全国一に導いた指導者

昭和26年6月13日、三郎と美佐保の長男として能代に生まれる。能代高等学校卒業後、51年、桐朋学園大学音楽科演奏学部卒業。2年間新日本フィルハーモニーでオーボエ奏者を務める。53年花輪高等学校に赴任し、15年間吹奏楽部を指導する。その間、11回全国大会出場を果たし、金賞を4回受賞。61年には第1回環太平洋音楽祭（ハワイ）でグランプリを受賞する。平成5年から9年まで秋田南高等学校勤務。2校通算15回の全国大会出場で、全日本吹奏楽連盟より「永年出場表彰」を受け、また「日本吹奏楽指導者協会賞」「木内音楽賞」を受賞。

平成15年小坂高等学校を最後に退職し、自身の編曲による吹奏楽用レンタル楽譜出版社「ムジカ・フローラ」を17年設立する。編曲作品は、英仏露の近現代の管弦楽作品40数曲に及ぶ。19年、警視庁音楽隊第7代隊長に就任。22年のニューヨーク・カーネギー

ホールでのそのすばらしい演奏により、音楽隊は「警視総監賞」を受賞する。平成29年4月10日没、享年65歳。

<参考>『秋田県立花輪高等学校創立90周年記念特別演奏会パンフレット』。

こまがみね ひょううえもん
駒ヶ嶺 兵右衛門 生没年不詳、江戸中期の人

松山・土深井境目番所の番人

鹿角はその西側と南側を佐竹領に接し、北側は津軽領に接している。他領との関門には境目番所が設置され、その役目は無手形の人や馬の出入、禁制物資の流出入を監視することであった。以前からあった松山番所に加えて貞享元年(1684)の頃、土深井番所を設置、三戸給人・与力合わせて20人が交替で、松山・土深井両番所へ勤めることになった。このうち、福岡与力(浄法寺与力)駒ヶ嶺兵右衛門について『系胤譜考』は知行57石3斗余(内45石9斗余は鹿角郡^{とぎとむら}鴫村)を継いだ後「福岡通諸御用並鹿角郡松山、土深井御番所等仰せつけられ、毎年二ヶ月宛之を勤む」と伝えている。その後は両御境目番所の番人は交替から徐々にその地に住まいし定勤となった。

江戸の紀行家、菅江真澄が文化4年(1807)鹿角を訪ねた紀行文「^{とわだのうみ}十曲湖」のなかで、鴫村の駒ヶ嶺政福宅に投宿した記述は、兵右衛門の同族が知行地鴫村にある鴫鉦山の管理を受け継いできたことを示すものである。なお鹿角における駒ヶ嶺家は兵右衛門正家を初代とする。

<参考>『鹿角市史第二巻下』、『十曲湖(菅江真澄)』。

こまがみね まさかつ
駒ヶ嶺 政功 1924(大正13年)～1990(平成2年)

十和田高等学校の興隆に尽力

大正13年3月5日、政純とチヨの長男として松山村に生まれる。秋田鉦山専門学校採鉦科(現・秋田大学鉦山学部)卒業。復員後、昭和23年(1948)4月、県立鹿角工業学校から校名を変更した県立鹿角工業高等学校に着任した。その後、学校教育法による教育形態の変化や統廃合、また学制改革により最終的に十和田高校に統合されるまで、4回の校名の変更を経験した。在任30年近くを戦後の教育行政の混乱による動揺期に、愛校心に燃えて学区内の中学校を積極的に廻って生徒勧誘に努めるなど、地域に根を下ろした高校像を追求した。厳しくも人間味溢れる熱血教師で、生徒や教職員の人望を集め、学校興隆にリーダーシップを発揮した。のち同校教頭から大館鳳鳴高校教頭、平鹿高校・大館桂高校校長として一貫して高校教育に尽力した。退職後は秋田県特定地域相談員、鹿角市社会教育委員に任命されている。従五位勲四等瑞宝章受章。平成2年12月11日死去、享年66歳。

<参考>『創立五十周年 純・剛・忍 秋田県立十和田高等学校』。

こまがみね まさとも

駒ヶ嶺 政相 1895（明治28年）～1975（昭和50年）

錦木史跡保存会を創立した教育者

明治28年2月8日、政泰とナミの長男として松山に生まれる。駒ヶ嶺家は代々松山に住し、松山番所番人を勤めていた。

政相は大正3年（1914）大館中学を卒業して郷里で教職についていたが、昭和19年末広小学校長の時、応召してフィリピンへ従軍、戦後、レッドパージに会い、錦木村農協事務、錦木公民館長等歴任した。その間、錦木史跡保存会を戦後間もなく創立して、錦木塚の復旧・管理に尽力した。30年には、錦木小学校に1部のみ保存されていた曲田慶吉の遺稿（昭和5年度版）『錦木村郷土史』を出版、また、小学校教師らを中心に、部落からの金銭的支援を得て39年、『陸中国鹿角郡 松山村郷土誌』を発行したが、この編集はほとんど政相が一人で行ったものである。なおこの時、松山郷土研究会が松山と土深井の番所跡を特定した。昭和50年没、享年80歳。

<参考> 『錦木村郷土史』、『松山村郷土誌』、『鹿角のあゆみ』、『鹿角市史第三巻下』。

こまがみね まさのり

駒ヶ嶺 政則（八兵衛） 1850（嘉永3年）～1911（明治44年）

松山街道を整備した錦木村村長

嘉永3年12月、政富とユキの長男として松山村に生まれる。明治11年（1878）郡区町村編成法が公布されたが、政則は錦木村発足まで末広村・瀬田石村の町村組合の戸長であった。この頃、松山街道は南部領より秋田領に通ずる唯一の重要な道路で、北の毛馬内通りへは女神より渡し舟で石野へ通じていたが、16年女神の崖を掘り崩して神田～松山間に女神新道を開削して馬車の往来を可能にした。また花輪通りへは紀ノ国坂の山越えで神田に向かい、渡し舟で松ノ木に至ったが、21年10月、県予算による米代川に木製の神田橋の架橋工事（川幅72間）に協力、渡船場は廃止となった。町村制施行後、錦木村初代村長として、22年～43年まで21年間にわたり錦木村の村政を担った。また26年には第10回秋田県県会議員に擁立された。明治44年1月19日没、享年60歳。

<参考> 『鹿角市史第三巻上』、『鹿角のあゆみ』、『松山村郷土誌（駒ヶ嶺政相）』。

こまつ ごへい

小松 五平 1891（明治24年）～1972（昭和47年）

鳴子旧系こけしを継承した名工

明治24年1月14日、上埜平治・さ登の六男として宮城県鳴子町山平に生まれる。明治40年、17歳で鳴子の高橋万五郎に師事。鈴木庸吉に教わり生地修行。除隊後、兄弟子とこけし作りをして花巻、盛岡、仙台で出稼ぎ生地引きの労を重ねた。大正3年（1914）、山形上ノ山の小松留三郎の工場で働き妹アサと結婚。

10年、31歳の時に観光物産開発に力を入れていた大湯ホテルの諏訪富多に招かれて大湯温泉に来住。以後50年間、鳴子の旧系こけしの伝統を守った「五平こけし」を作り続

けた。胴のくびれと模様は年代を追って微妙に変化するが、目と目の間が広がった特徴のある表情は多くの愛好者を引き付けてやまなかった。昭和35年、鳴子町より鳴子旧系こけしの伝統を継ぐ工人として表彰。38年、第5回全国こけしコンクールで名人位を獲得するなど、その評価は高く今に名を残す名工である。昭和47年11月死去。享年81歳。

大湯の奈良吉弥が43年に五平に弟子入りしたが、3年後不慮の事故により亡くなっている。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』。

こもりや とめたろう

籠屋 留太郎 1911（明治44年）～1983（昭和58年）

両生類などの生物学者、高校の生物教育に貢献

明治44年6月、国太郎の長男として宮川村湯瀬に生まれる。秋田師範学校を卒業後、満州国の学校教師となるが、戦後引き揚げ、昭和20年（1945）10月、県立花輪高等女学校（現・花輪高等学校）に勤務し、理科教育を担当した。昭和45年7月、刈和野高校の校長となる。熱情ある生物学者で知られ、花輪高校での送別会で「退職まで花輪高校の生物教師として勤めるのが、夢であったが、はからずも校長になる。残念だ。」と挨拶して参加者をおどろかせた。

花輪高校では生物クラブの創設にかかわり、同生物クラブは「サンショウウオの発育に関する研究」で、昭和43年、第12回「日本学生生物学賞」（読売新聞社主催）を受賞した。また、八幡平におけるクマガラの発見、サンショウウオやモリアオガエルなどの両生類の研究、ニホンザリガニ、トゲウオ科トミヨ、ハッショウトンボなどの研究を行った。「尾去沢産ザリガニの保護について」は、北海道より尾去沢に持ち込まれた、現在では絶滅危惧種のニホンザリガニの研究で、生息地以外に持ち込まれた生物がどのような条件下で生息しているかを明らかにした。この論文は平成21年（2009）の「日光市で発見された日本ザリガニ個体群の研究」で引用され、また花輪高等学校旧校門に栽培されている「シダレカツラ」の調査研究も注目されている。昭和58年2月14日没、享年71歳。

<参考>『鹿角市史第一巻』、『上津野第1号・第4号』。

さいとう ちょうはち

斎藤 長八 1930（昭和5年）～2019（令和元年）

鹿角の歴史・民俗の調査研究に尽力した郷土史家

昭和5年5月1日、多一郎とヨシの三男として柴平村級ノ木に生まれる。平元小学校から開校したばかりの鹿角工業学校に入学、24年鹿角工業高等学校（現・十和田高等学校）を卒業して教職につく。その間、34年には玉川大学教育学部で小学校と中学校国語・社会の免許を取得、鹿角郡市内の小学校・中学校教員を歴任し、大湯小学校校長を最後に40年に及ぶ教員生活を終える。退職後も鹿角市先人顕彰館長や出土文化財管理センター館長、市史編纂委員などを務めた。

在職中より鹿角の歴史・民俗の調査研究を精力的に続け、『市史第四巻民俗篇』をはじめ、

『上津野』、『芸文かづの』等に多くの論文を発表している。特に女性民俗学者瀬川清子の資料保存と、不老倉鋤山についてまとめた『不老倉鋤山誌』は市の貴重な財産である。また大湯郷土研究会長として大湯の歴史や先人の発掘に率先して当たり、自ら創立した十和田短歌会を主宰して会員を指導した。秋田県文化財保護協会功労者表彰、平成19年(2007)鹿角市文化功労者表彰。令和元年7月10日没、享年89歳。

<参考>『鹿角市史第一巻・第三巻下・第四巻』。

さいとう まつごろう

齋藤 松五郎 1905(明治38年)～1998(平成10年)

社会福祉の向上に尽力

明治38年5月25日、栄之助とアキの五男として夏井村小割沢に生まれる。曙村議会議員を経て、昭和31年(1956)合併により八幡平村議会議員を44年まで務める。のち、推されて八幡平村教育委員長となり、学校統合の実現をはかるなど教育の充実に貢献した。また43年には八幡平村身体障害者協会長に就任。47年の合併後は鹿角市身体障害者協会理事、59年からは同協会会長、ほかにも鹿角市社会福祉協議会理事を務めるなど、社会福祉の向上のために活躍した。61年鹿角市文化功労者表彰、平成2年厚生大臣章受章。平成10年1月13日死去、享年92歳。

<参考>『鹿角市広報(昭和61年)』。

さいとう りんどう

齋藤 麟道 1852(嘉永5年)～1924(大正13年)

花輪学校の設立、鹿角の教育文化の振興に貢献

明治6年(1873)22歳の時、伝習学校の授業生公募に川村左学、折戸亀太郎と共に応募し、3カ月の修業期間を経て教員資格を得た。伝習学校を卒業後、3人は直ちに花輪学校設立の準備に取りかかり、7年4月には開設届を出している。4月25日付けで認可された郡内の学校は、花輪学校・又新学校(尾去沢)・毛馬内学校・久保田学校の4校で麟道は久保田学校の初代教員をつとめた。同校が花輪学校に統合された後は尾去沢の元山学校に移り、14年依願退職するまで勤め上げた。

17年、本山からの命で浄土宗円徳寺23世住職となり、寺務に励むかたわら、短歌・俳句・書に親しむ。古愚や園翁の号で精力的に短歌・作句を発表する一方、「鹿角の三筆」と言われた能書家でもあった。大正13年4月26日死去、享年72歳。

<参考>『鹿角市史第三巻上』、『鹿角のあゆみ』。

さかうし しんござえもん

坂牛 新五左衛門 生没年不詳、江戸中期の人

尾去沢銅山の藩直営時の役人

坂牛氏は陸奥国三戸郡坂牛村より起こる姓で、戦国期の坂牛蔵人に始まる。新五左衛門はその五代孫で治左衛門ともいい、また大向伊織とも称した。尾去沢銅山が御手山すなわち藩

直営山となったのは明和2年(1765)のことで、名実とともに盛岡藩の直接経営となるに及んで従来の銅山奉行は廃止されるに至った。そして勘定頭の内から「御銅山御用懸」が任命されることになり、抜擢されたのが坂牛新五左衛門であった。

新五左衛門は明和2年11月3日銅山に登山し、翌4日山内一同へ御手山となった趣旨や心得べき条々を18項目にわたって厳しく申し渡したという。やがて御側御用人御勝手御用人兼帯へと進んだ新五左衛門は、「銅山用筋」とともに「公辺用向」「勝手向」に敏腕を振るった。しかし、明和6年12月に至り、平生我意をつのらせた甚だ無調法な勤方として「家名身帯家屋敷家財とも返上」の処分を受けている。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『尾去沢・白根鉱山史』。

さかた たすく

坂田 祐 1878(明治11年)～1969(昭和44年)

関東学院創立に尽力した教育者

明治11年2月12日、会津藩士中村富蔵の二男として大湯に生まれる。大湯尋常小学校卒。毛馬内小学校高等科二年に進んだが、貧窮のため中退。29年勉学の念抑え難く上京し、横浜・横須賀・足尾で労働の後陸軍教導団に入団。首席で卒業後選抜されて騎兵学校に進み、恩賜の銀時計で卒業した。陸軍士官学校馬術教官となり、日露戦争では数々の武功により金鷄勲章を賜った。39年かつて不老倉鉱山で働いた時の恩人坂田桃吉の長女チエと結婚し坂田姓となった。学校教育の宿志捨てがたく、東京学院中学部四年に編入、一高を経て東京帝大に進み宗教哲学を専攻した。卒業後は関東学院創設・大学開学に参画し、院長・学長・理事長としてキリスト教に基づいた学園の経営と教育に心血を注いだ。50年余にわたる青少年教育への功勞により藍綬褒章その他多くの榮譽に輝き、勲三等旭日中綬章を受章した。著書に『恩寵の生涯』。昭和44年12月16日没、享年91歳。

<参考>『鹿角人物誌』、『鹿角市先人顕彰集成』、『大湯ふるさと探訪(大湯郷土研究会)』。

さかもと よしゆき

坂本 昌行 1904(明治37年)～1932(昭和7年)

『赤い鳥』で活躍した童謡詩人

明治37年2月10日、千代治とクニの長男として花輪に生まれる。筆名^{まさゆき}昌行、別号^{みやふもと}まさる。准教員検定花輪準備場卒、程なく小学校本科検定合格して地元の平元、柴内、^{みやふもと}宮麓小を経て大正11年、秋田市築山小へ勤務。その後奈良県生駒小から昭和2年、東京王子第二小へ赴任する。亡くなるまで6年間の東京時代、鈴木三重吉の童話・童謡創作運動に共鳴して、築山小での同僚長谷山^{たかひこ}峻彦(作曲)とコンビを組み、詩作に励んだ。三重吉主宰の『赤い鳥』に載る「ぼたん雪」は長谷山の作曲により、レコードにもなった。他にも、「緑のゆりかご」「おどり靴」「人魚の歌」など多くの童謡詩を作っている。

昌行は昭和7年10月21日、病魔に侵されて独身のまま弟^{よしまさ}昌正にみとられて死去、享年28歳。

<参考>『秋田人名大事典』、『秋田のうたと音楽家』。

さがわ しんぞう そうけん

佐川 新蔵（宗研） 1894（明治27年）～1977（昭和52年）

裏千家秀麗会創始者

明治27年11月20日、稲垣久治四男として花輪に生まれる。花輪小学校卒業後、大工棟梁の父をしばらく手伝ってから、知人の紹介で大阪のブラシ工場に勤務した。この工場の向いに華道「旧嵯峨未生御流」の師範がおり、弟子入りした。華道を習得するうち、すすめられて昭和5年（1930）、茶道「裏千家今日庵」に入門。17年の歳月を積み、22年最高位の許状と佐川宗研の榮譽を受けた。華道も最高資格「権法権」の許状と佐川新甫の榮譽を与えられている。24年帰郷、「秀麗会」を創始して茶華道を広く町民に教授し、常に20～30人の弟子の情操教育につとめた。42年11月3日、花輪町から文化功労賞受賞。44年6月8日、秀麗会二十周年記念茶会が百助旅館で盛大に行われた。

昭和52年3月25日死去、享年82歳。秀麗会の活動はその後にも続いたが、平成20年をもって解散、孫弟子たちの新しい歩みが始まっている。

<参考>『芸文かづの23号』。

さくらだ ういちろう

櫻田 宇一郎 1908（明治41年）～1991（平成3年）

農業基盤整備、鹿角木炭生産・改良に貢献

明治41年11月20日、辰之助とナカの長男として宮川村熊沢に生まれる。昭和22年（1947）から宮川村議会議員に2期6年、八幡平村議会議員3期12年併せて18年間地方自治の振興に尽力した。この間、八幡平村議会副議長として村政推進を担うとともに、農業振興を目的として設立された鹿角地域農業構造改善事業事務組合の議員として、農地改善後の農業基盤の整備に貢献した。また、32年以来、鹿角木炭生産組合長として、熊沢地域の組合員と共に、八幡平切留平地区に約100町歩の木炭生産基地を設営し国有林の払い下げを受けて木炭生産を開始し、木炭の高品質化（強火で長持ちする）に取り組んだ。41年鹿角木炭生産組合長に、木炭生産により地場産業の進展に尽くしたとして感謝状が授与された。なお、地方自治推進の功績により、42年全国町村議会議長会長から表彰。55年鹿角市功労者表彰。平成3年11月6日死去、享年82歳。

<参考>『鹿角市広報（昭和55年）』。

さくらば つなひろ

桜庭 兵庫（綱寛） 生年不詳～1851（嘉永4年）

桜庭家支配から代官制へ

毛馬内は明暦3年（1657）桜庭光英の入部以来、預り町として統治するところであった。寛政年間（1789～1797）盛岡藩は連年の不作不況で藩財政は窮迫し、御用金や寸志金、分限金の名目で徴収して百姓や町人負担は限界に達していた。そのため9年3月毛

馬内町人らは、桜庭兵庫による過酷な御用金に耐えかね藩庁へ愁訴するなどの協議を重ねた。8月町人代表17人が兵庫への不満について藩に愁訴。藩の詰問に桜庭側は、毛馬内は先祖拝領の知行所に相違ないと答えたため、12月藩は兵庫に対し、「明暦替地以来御町を預け置いた処、知行所同様に心得しかも取扱い宜しからず。仍て御町取上げ代官支配とする」旨を達した。10年2月代官への引渡しを桜庭家は承知しなかったが、再度の藩目付達しによりようやく引渡し完了。毛馬内代官が改めて宿老・検断へ秩序維持などのことを申し渡した。この提訴事件は、裕福な町人たちが所給人の地位をえて、桜庭家支配から代官制へ移行する藩制改革の一環として生じた軋轢であった。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第四巻』。

さくらば みつひで

桜庭 光英（重綱） 1598（慶長3年）？～1682（天和2年）

毛馬内に入部した桜庭氏の初代

寛永6年（1629）10月家督、徳川家綱の諱字を避けて光英と改める。承応元年（1652）家老職となり盛岡藩の重鎮となる。2年藩主重直が江戸屋敷普請総奉行にあって4ヶ年詰越した。明暦3年（1657）8月5日鹿角郡数村の知行換地を賜わり毛馬内に入部、秋田藩との藩境警備の事務折衝の任にあたった。寛文4年（1664）9月に重直が後継を定めぬまま亡くなったので、藩内に混乱が生じた。光英は江戸に出て、密かに江戸家老毛馬内九左衛門と謀り、重信を後継者とする旨幕府に願い出て許された。

寛文9年夏蝦夷に乱がおこると、光英は御加勢の総大将となって野辺地に出張するも、渡海を待つ間に乱は静まった。この時松前の命によって家臣を遺し鉄砲五十挺を贈った。この年盛岡藩では新田開発が奨励され、鹿角でも藩営の御蔵新田と代官見立新田が定められ、12年藩老の桜庭光英は犯罪者触法者を問わず開拓農民を募集して田畑の開拓に尽力した。また白根金山などの鹿角の諸金山は直山法が適用され、藩老の光英も管理・経営にたずさわった。天和2年2月4日没、享年84歳。

<参考>『桜庭氏家系譜』、『鹿角市史第二巻上下』。

さくらば ゆうきつ

桜庭 祐橘（綱忠） 江戸後期～1901（明治34年）

最後の毛馬内館主

慶応4年（1868）8月戊辰戦争に際して、総参謀向井蔵人のもとで本番組四番隊の組頭をつとめた。盛岡城の高知二・三男および百石以上の嫡子を以て編成の上士部隊を指揮し、また自らの家中百余人を手勢として参戦した。しかし、南部方の大館占領後は、秋田方の新鋭兵器洋式鉄砲を携えた鍋島勢の前に形勢がにわか逆転、智謀勇猛をもって鳴る総大将榎山佐渡も如何ともしがたく、今泉・前山・坊沢・綴子を放棄せざるをえなかった。しかも9月2日板沢で炊飯中の桜庭本陣は不意の急襲を蒙り、一瞬のうちに大敗してクモの子を散らす如く逃げ去った。この戦で桜庭部隊は損害莫大、討死する者十余名、その中に組頭

の中村忠陸、物見武者の桂源吾の高名の士がいた。また郷士の沢出可祿、熊谷助右衛門、玉井文佐久、立山熊太郎らも名誉の死を遂げた。大館城放棄後は、9月6日桜庭隊は帰陣した。翌明治2年（1869）6月2日、祐橘は自筆の書付をもって家士たちに暇を申し渡した。

<参考>『戊辰戦役絵日記（田中北嶺画 解説栗山文一郎）』、『鹿角市史資料編第1集』、『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

さごべえ

左五兵衛 生没年不詳、江戸前期の人

白根金山の山師・検断役

左五兵衛の名は、『雑書』などに白根金山山師左五兵衛、検断左五兵衛と見えるのみで、出身地も名字も記されていない。白根金山の山先青山庄左衛門とともに金山沢中の代表として、秩序の維持や取締りに当たった江戸前期の山師・検断という。その名は、慶安元年（1648）5月の根田影平5枚9両山の堀分けでは、津軽孫助とともに検断としてあらわれている。検断の職は、山先と力を合せ金山奉行の補佐役、相談役的な役割をもちながら、沢中の事務をたばねる町役人に相当するものであった。

左五兵衛が病死したあと、沢中の者どもに誰を検断にしたいと望んでいるか、金山奉行に吟味させてみたけれども望みの者がいなかったという。それほど、検断の役が重視されていたとともに、左五兵衛に対する山内の人々の信望が厚かったということであろう。結局、二人の奉行の意見によって、左五兵衛の子の左内が検断役となった。

<参考>『南部藩・雑書』、『尾去沢・白根鉦山史』、『鹿角市史第二巻上』。

ささき こうすけ

佐々木 幸助 1870（明治3年）～1951（昭和26年）

日本棋院囲碁6段

明治3年2月15日、六弥とナミの三男として花輪横丁に生まれる。小さいころからソロバン、暗算にすぐれていたが、囲碁は父が好み碁客が絶えなかったことから自然に覚え、子供のころから大人を負かし舌を巻かせた。

明治19年、ソロバンの才を買われ花輪税務署に勤めたが、周囲の勧めもあり21年上京、方円社を訪ねて本格的な囲碁の勉強に入った。23歳のとき初段となるが、35年花輪町収入役に転じる。大正12年（1923）秋田市西根小屋町に移り住み、昭和25年、日本棋院地方棋士に推される。鹿角の門下には関威（花輪）、豊口鋭太郎（毛馬内）らがいる。昭和26年1月17日死去。囲碁6段に追贈される。享年80歳。

<参考>『秋田人名大事典』、『囲碁一筋の佐々木幸助伝』。

ささき たつたろう

佐々木 辰太郎 1880（明治13年）～1959（昭和34年）

馬産改良に尽力した陸軍獣医

明治13年11月13日、直太郎とキヨの長男として八幡平長井田村長牛に生まれる。尋

常高等小学校から、唯一獣医科のあった岩手農学校を卒業。35年、騎兵第一連隊に入隊、現役を志願して三等獣医（のちの獣医少佐）に任官、37年には野砲第一連隊に属し日露戦役に出征、38年帰還し一等獣医となり各師団獣医部、軍馬補充部、獣医学校教官などを歴任した。昭和4年大佐で予備役編入。12年帰郷、鹿角畜産組合顧問として郷土産馬の衛生、生産育成など後進の指導にあたった。15年鹿角郡は陸軍獣医学校から軍用馬衛生指導試験地の指定を受け、両3年にわたり同校幹事宮本三七郎大佐以下教官、学生が大挙来郡し鹿角4000頭の詳細な調査を実施した。かつて宮本大佐の直属先輩であった辰太郎の尽力によるものであった。昭和34年9月15日死去、享年78歳。

<参考>『秋田県人名大事典』、『鹿角市史第三卷下』。

ささき ひこいちろう
佐々木 彦一郎 1901（明治34年）～1936（昭和11年）

人文地理学・民俗学者

明治34年4月13日留次郎の子として、花輪六日町に生まれる。幼くして父母と別れ祖父母に育てられた。花輪小学校を卒業後、広島県呉市の叔父に引きとられ呉中学校、仙台第二高等学校を経て11年東京帝国大学地理学地理学科に進学、15年卒業後、同大学助手、講師として教壇に立った。一方では柳田国男に師事して民俗学を学び、地理学と民俗学を結びつけた人文地理学の分野を開拓した。昭和6年に鹿角の地域性を専門的にまとめた『山島社会誌―鹿角民俗誌』を著した。その中で、鹿角の南部・秋田・津軽に対する関係はドイツ・フランスには含まれたアルザス地方の如き関係にあり、どちらも鉱物資源に恵まれていたことから紛争の原因となり、帰属の変遷など似たような地理的・歴史的環境に置かれてきたことを指摘している。また「マタギとヤマゴ（柚子）」の章では、今日の味噌つけタンポのルーツと思われるヤマゴタンポの記述もある。他に『地理学評論』『民俗学』『民俗』などに鹿角をとりあげた文章を発表している。将来を嘱望されながら、昭和11年4月10日35歳の若さで死去。

<参考>『鹿角市史第二卷上・第三卷下・第四巻』、『花輪小学校百周年記念誌』。

さたろく
左多六 生没年不詳

伝説のマタギ

鹿角マタギの元祖的存在とされる定六（左多六）伝説では、下草木の定六屋敷に住んでいたという定六というマタギが、猟犬シロを連れてカモシカを追い、三戸領まで行き、天下御免の免状を忘れたため捕らえられた。主人の苦境を救おうとシロは急いで下草木まで戻り、巻物を持って三戸へ帰ったが、間に合わず定六は処刑されていた。妻は罪人の妻として所払いされ、十二所の葛原に移り住み、老犬シロは老犬神社に祀られた。老犬神社の建立は元和元年（1620）と推定され、葛原の氏神として厚い信仰を集めている。

下草木の定六屋敷の隣接地に住む柳館吉弥家（現当主功吉）は、江戸末期酒造業を営み遠く八戸方面にまで出荷した地主である。当家には一子相伝の秘伝書、いわゆる又鬼免状が保

存されている。「免許証文之事」と「山立最系」の2種類で、免許証文は、源頼朝の富士の巻き狩りに依藤太（藤原秀郷）の末孫定六が又鬼としてよく働いた功により、頼朝から子孫永久に全国狩猟通行御免の免状を授けられたのを、南部信直より草木村左太六に交付するというもの。柳館家の先祖が代々定六（左多六）を名のるマタギだったことになる。

<参考>『上津野No.2』、『左多六とシロの物語』、『鹿角市史第二巻下・第四巻』。

さとう さぶろう

佐藤 三郎 1929（昭和4年）～2009（平成21年）

教育家で郷土史家

昭和4年12月18日、孫四郎とユミの二男として、柴平地区寺坂に生まれる。父は4歳の時に戦病死。旧制大館中学校へ入学し、在学中に花巻の学徒動員を体験して昭和22年卒業。開学間もない秋田大学の小学校教員臨時養成課へ進む。

大学卒業後は鹿角郡市内の小学校教師として、地域の保護者たちと提携して子ども達の健全な成長を導き、大川岱小中、次いで草木小校長として教員生活を終えた。

在職中から鹿角中及び周辺のあらゆる山をバイクや徒歩で踏査し、戦跡なども調査して、退職後花輪史談会々長や文化財保護協会々長を歴任する中、県境の道標などの設置に尽力した。また、花輪図書館長や文化財保護審議委員（最後の数年間は会長）を務め、古文書・古記録の調査・解説・保存などに取り組んだ。平成21年10月20日死去。享年79歳。

<参考>『創立100年史（秋田大学教育学部創立百年記念会編）』。

さとう しゅういち

佐藤 修一 1942（昭和17年）～1995（平成7年）

花輪高校吹奏学部を全国一に導いた指導者

昭和17年5月13日、栄二と寿美子の長男として平鹿郡醍醐村（現・横手市）に生まれる。横手高等学校から秋田大学に進み、40年学芸学部中・高課程音楽科を卒業した。中仙町立豊成中学校に1年勤めた後、41年花輪高等学校に赴任、52年3月まで11年間、吹奏楽部を指導する。赴任して4年目の44年吹奏楽コンクール全国大会初出場を果たして以後連続8回の全国出場で、金賞4回という好成績を記録した。特に48年のコンクールで演奏したリムスキー・コルサコフの「シェエラザード」は「プロをしのぐ演奏と審査員を驚嘆させた」（朝日新聞昭和48年11月8日付）のであった。52年4月に県南の中学校教師として去った後も、花輪高校は広田俊介（1年間）、小林久仁郎（15年間）と名指導者に恵まれ、全県のみならず全国に名を馳せ続けた。その裏には、鹿角郡市内の中・高の指導者たちの結束と切磋琢磨があった。62年木内音楽賞受賞。平成7年3月31日、享年52歳。

<参考>「花輪高校吹奏楽部定期演奏会パンフレット」ほか。

さとう しょうじ

佐藤 祥二 1938（昭和13年）～2014（平成26年）

「かづの商工会」の振興に尽力

昭和13年1月5日、一夫と節の二男として北秋田郡扇田町（現・大館市比内町扇田）に生まれる。先代が扇田に創業して、14年鹿角郡花輪町に移転した「丸佐運送合資会社」を日本大学卒業後引き継いだ。昭和61年「花輪商工会」理事に就任。地域経済の変化やニーズに対応すべく平成6年（1994）に花輪・尾去沢・八幡平の3商工会が合併して「鹿角市商工会」が設立された。15年には鹿角市・十和田町・小坂町の各商工会が広域的合併をして、行政の枠組みを超えた経済団体「かづの商工会」が誕生した。以来、初代かづの商工会会長として、創業人材育成事業、地域活性化企画提案型事業、商工業振興ビジョン実現化事業などに指導力を発揮した。また「肉の里かづの」などの特産品の開発や、市内循環バス試験運行、鹿角市プレミアム商品券発売、チャレンジショップ事業、経営革新推進事業に尽力したほか、秋田県商工会連合会連絡協議会副会長をつとめるなど、鹿角地域のみならず秋田県の商工業の発展にも貢献した。平成24年鹿角市功労者表彰、同年秋の叙勲で旭日双光章受章。平成26年9月23日死去、享年76歳。

<参考>『かづの商工会10年の歩み』、『鹿角市広報（平成24年）』。

さとう しょうじ

佐藤 正二 1913（大正2年）～1981（昭和56年）

昭和期の鹿角を代表する歌人、百人一首の振興に尽力

大正2年1月2日、勇とヒサの二男として生まれる。昭和11年（1936）秋田師範学校専攻科卒業。小学校教師を経て花輪高校、小坂高校教諭を勤める。昭和25年から花輪短歌会代表として同会を指導、また花輪公民館・図書館主催の短歌講座の講師として短歌の普及、向上に努める。また「源氏物語を読む会」「野の花をたずねる会」「百人一首」等の指導にあたる。特に百人一首は、今日の鹿角における隆盛の礎となった。昭和51年、鹿角市芸術文化功労章受章。昭和56年10月31日死去。享年68歳。没後関係者により歌集『花の高野』を刊行、専正寺境内に短歌二首を刻んだ歌碑が建立されている。また花輪図書館に「佐藤正二先生歌碑建立記念文庫」を設置、源氏物語資料を中心とした資料が納められている。

<参考>『花輪読書会誌かえで第六号』、『芸文かづの第四三号』。

さとう しんのすけ

佐藤 新之助 生年不詳～1897（明治30年）

寸陰館に屋敷を提供した御給人

盛岡藩給人佐藤家の6代、のち重之助と改める。戊辰戦争前夜には土深井詰を命じられているが、開戦時は花輪御給人隊三番手総締役をつとめた。中小路の2000坪の広大な屋敷は佐新屋敷と呼ばれていた。

維新後江刺県に編入された鹿角に、江刺県学校寸陰館出張所（花輪寸陰館）が明治3年3

月に開校され、校舎は本丸の南部屋敷があてられた。その後南部屋敷が新任の小山少参事の役宅となったので、寸陰館は5月から佐新屋敷に移され、10月の閉鎖まで250余名の学生で溢れる盛況振りであった。明治4年の秋田県編入後に開校した花輪郷学校（閉校は5年7月）も、2か月後に川村左学宅に移るまで、佐新屋敷を使っていた。明治30年10月10日没。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』、『思ひ出つるまゝ（佐藤静子著）』。

さとう ちゅうや
佐藤 忠 弥 1898（明治31年）～1966（昭和41年）

鉄工業界で活躍した実業家

明治31年尾去沢に生まれる。7歳で父を亡くし辛苦をなめた。高等小学校2年で中途退学し尾去沢鉦山に入る。その後北海道に渡り小樽で鍛冶職を修業、夕張で製缶工になった。徴兵検査で東京入営した際に都内の工場を見て回り、大正11年、23歳の若さで都内京橋月島に鉄工所を開いた。実弟らの協力により業績を伸ばし、昭和14年に群馬県館林にも工場を設立した。太平洋戦争では軍需工場として資材を供給した。晩年は深川枝川町に幼稚園を開くなど社会事業に尽くした。昭和41年没、享年68歳。

<参考>『秋田人名大事典』。

さとう ひでお
佐藤 秀雄 1907（明治40年）～2001（平成13年）

昭和期の鹿角の歌人

明治40年10月8日、寅吉とヤスの三男として花輪沢口に生まれる。昭和3年頃に中島耕一から手ほどきを受け花輪短歌会を起こした。26年鹿角服装学院を創設。創作活動の一方で、音楽同好会をつくり中央から山田耕筰、石井漠など一流の音楽、舞踏家を招聘したり、声良鶏の文化財指定運動や花輪駅前の「声良鶏像」の建立に係った。橄欖^{かんらん}同人。昭和62年刊行の第3歌集『だんぶりこ』は「北国の風土と歴史と生活をうたった民俗詩であり、日々の哀歎を詩情豊かに表現している」として、63年秋田県芸術選奨受賞。44年花輪町文化功労賞受賞、56年鹿角市文化功労者表彰。平成13年6月22日没、享年93歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

さとう ふくえ
佐藤 福得 1916（大正5年）～2007（平成19年）

京都の手描染・織物業界で活躍

大正5年4月25日、重治^{しげはる}の二男として毛馬内に生まれる。昭和6年毛馬内小学校を卒業すると、京都市の染物の老舗升屋源助（広瀬）店に奉公に出る。東北人の粘りと根性でがんばり、同僚の嫌がる仕事を進んで引き受け、18歳のとき主人名義で出品した京染自作品が文部大臣表彰となり、主人に見込まれ手描染の研鑽を積んだ。京都府認可の京都手描染センターの理事長をはじめ、染工会社を経営し、宮内庁納京染の仕事の他、正倉院御物の研究、

京都草木染の基礎づくりに尽力した。また、沖縄県伝統の染色法の再興指導にあたり、新潟県十日町の織物および染色指導も行う。もっぱら職人、技術者としての研究に励み、また京都市政協力員や京都保健協議会役員など社会的活動にも取り組んだ。平成19年11月12日没、享年91歳。

<参考>『毛馬内小学校創立百周年記念誌』。

さとう まさじ
佐藤 政治 1914（大正3年）～2005（平成17年）

教育者、花輪の町の歴史を掘り起こす

大正3年、久助の次男として花輪に生まれる。秋田師範卒業後、昭和28年から教職に携わり、尾去沢小・中、花輪小・一中などの各校長を歴任。その間、郡内の社会科教師たちを鼓舞して、郷土学習資料としての『鹿角のあゆみ』を編纂した。退職後は、長らく花輪史談会長として、郷土の歴史や文化伝承の掘り起しに努め、花輪地区に「史蹟の解説標柱」の設置をすすめた。また、地域住民に郷土をより深く知ってもらうことを願って、地区の古老たちの聞き取り調査を進め、昭和63年『花輪の昔を語る』を編んで花輪の昔を知り確かめる手がかりとした。平成17年6月16日没、享年91歳。

<参考>佐藤政治『花輪の昔を語る』、『米代川堤で憶う』。

さとう よいち
佐藤 与一 1907（明治40年）～1972（昭和47年）

教育者、柴平村誌を著す

明治40年、太郎吉とナツの長男として花輪西町に生まれる。秋田師範を卒業後、鹿角の小中学校教師、八幡平中学校長、柴平村教育長などを務めた。教職のかたわら、郷土教育が重視された時代の傾向を察知して、鹿角の自然・風土・信仰などや郷土の古文書解読、菅江真澄研究に打ち込む。『山の国・鹿角の里』『柴平村史』など郷土研究に関する著書を著している。昭和47年12月4日死去、享年65歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下・第四巻』。

さとう ようすけ
佐藤 洋輔 1943（昭和18年）～2005（平成17年）

鹿角市の自治行政に貢献

昭和18年7月28日、昇とレイの長男として曙村松館に生まれる。花輪高等学校卒業。47年株式会社新東組を設立。56年鹿角市議会議員に当選、平成5年（1993）からは二期7年間議長を務めた。17年、市長に当選後は二期5年にわたり山積する課題解決に積極的に取り組み、末広小学校、さくら保育園、福祉プラザなどの教育施設や福祉施設の改築整備等の環境整備に努めた。一方、市財政の基盤強化のため鹿角経済戦略会議を立上げて、「共動」のスタイルを確立したほか、国の特区構想を活用し、幼保連携型認定こども園、「八幡平なかよしセンター」を建設するなど、大胆かつ柔軟な施策を展開し

市財政の健全化に貢献した。功績は高く評価され東北市議会議長会、全国市議会議長会表彰及び感謝状授与、また正五位旭日小綬章受章。17年鹿角市功労者表彰。平成17年7月16日死去、享年62歳。

<参考>『鹿角市広報（平成17年）』。

さとう ようのすけ
佐藤 要之助 1859（安政6年）～1892（明治25年）

鹿角りんごの礎を築いた功労者

安政6年1月9日、新之助とセツの長男として花輪に生まれる。父が自宅を開放した花輪寸陰館で学び、明治17年（1884）25歳の時、りんご苗木400本を盛岡から購入し、^{おなごもり}女森の原野を開拓して本格的な栽培を始めた。危ぶむ周囲をよそに精進を重ねて見事成功し、23年岩手県一関まで鉄道が開通したのを機に、東京市場へ出荷を果たす。この時の品種は赤龍。1箱12、3円とも20円とも言い伝えられ、相当高値であったらしい。因みに23年の米1俵の価格は2円である。秋田県としては最初の中央出荷で、これを契機にりんご園を開く者が続出した。

この間、20年には県議会議員に選出され、第6回・第7回県議会議員として、23年まで2期務めた。明治25年10月25日死去。享年33歳。昭和16年、鹿角郡果樹協会が桜山神社境内に、「鹿角りんごの始祖 佐藤要之助大人之碑」を建立して、その功績を称えた。

<参考>『鹿角市史第三卷上・第四卷』、『鹿角市先人顕彰集成』、『上津野33号』。

さとう よしお
佐藤 良雄 1906（明治39年）～1977（昭和52年）

カザルスの芸術を日本に広めたチェリスト

明治39年6月27日、良太郎と静子の長男として花輪に生まれる。花輪小学校に入学するが、1か月後、父の一周忌を終えて一家で東京に転居する。

小野アンナ女史に音楽の手ほどきを受ける。中学生の時、カザルスのチェロをレコードで聴いて衝撃を受け、カザルスへの一途な思いでチェロの道へ進む。ウエルクマイスターや柳信二に師事、一時渡満して新京オーケストラで活躍する。昭和26年（1951）、45歳で念願かなって渡仏、東洋人として初めてパブロ・カザルスに弟子入りし、2年半指導を受ける。帰国後、東京芸術大学などの要請を断って、カザルスの芸術を日本人に伝えるため「カザルス会」を創設し、また、才能教育研究会を興したバイオリニスト鈴木鎮一^{しんいち}の「スズキメソード」にチェロ科を開設して幼少期からの音楽教育に専念する。今や日本のみならず世界で40万近い子供達が「スズキメソード」から巣立っている。パリ管弦楽団チェロ奏者として活躍している三男光^{ひかる}を含めて。昭和52年12月17日死去。享年71歳。著書『カザルスとの対話』。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』、『鹿角市史第三卷下』。

さとう りょうたろう

佐藤 良太郎 1878（明治11年）～1912（明治45年）

温床栽培など農法の革新者

明治11年7月5日、要之助・やすの長男として花輪に生まれる。18年花輪小学校へ入学するが、その後上京して、本郷小、錦城学校尋常中学を経て東京専門学校（後の早稲田大学）英語政治科卒、同研究科で社会学を専攻する。

38年帰郷、2年後、鹿角物産株式会社社長となり、町会議員に当選、また在郷軍人団々長を務める。やがて女森^{おなごもり}に居を移し、父要之助が手がけたりんご栽培や万年青^{おもと}を引き継いだ他、ぶどうや桜桃^{おうとう}も試みた。さらに、西洋農具を納入し、温床栽培など革新的農法を取り入れて、理想農場をめざした。しかし良太郎もまた志半ばで慢性腹膜炎にかかり、帰らぬ人となった。明治45年4月22日没、享年33歳。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』、『鹿友会誌15冊』、『鹿角市史第三卷下』。

さとう ろくたろう

佐藤 録太郎 1856（安政3年）～1943（昭和18年）

鹿角の馬産改良に尽力

安政3年10月10日、勘蔵とマツの長男として八幡平の長内村に生まれる。

秋田県は畜産会と共に畜力の強化と堆肥生産必要性、また時の軍用馬匹の需要から、明治11年（1878）馬産家に外国種牡・牝馬を輸入して賃下げを行い馬産改良の促進を図った。馬好きで良馬改良に研究熱心な録太郎は、13年頃より長く畜産協議会委員をしていたが、自らも牛馬品評会に出陳して、牛馬とも二歳「一等賞・鹿毛牝馬 曙村 佐藤録太郎」の好成績を得た。また、大湯の諏訪音治の岩沢号が県産馬共進会で一等賞となるなど、馬産家の良馬改良の取り組みは曙・大湯地区で盛んにすすめられた。大正3年（1914）曙村村長に就任、産業組合を長内地区に統一し、曙信用販売組合を創立して曙農業協同組合の基礎を築いた。昭和18年1月11日死去、享年86歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』、『鹿角のあゆみ』

さわいで げんさく ちんあん

沢出 源佐久（椿庵）1803（享和3年）～1850（嘉永3年）

内藤天爵門の折衷学者

尾去沢鉦山検断役の沢出善右衛門と同山内支配人内田九兵衛富涛の二女マツとの間に生まれる。後年「椿庵」と号した。年少の頃内藤天爵^{けいし}に経史を学び、26歳の時江戸へ登り北山門の東条一堂に師事する。按摩や辻講釈で学資を得るなど刻苦勉励10年ののち帰郷し、桜庭氏の家臣となって毛馬内に住む。やがて盛岡に出て家塾を開くや名声たちまち上がり、常に満堂の盛況を呈したという。

江戸後期、鹿角の学問は折衷学派が隆盛であった。伊藤為憲を始め、泉沢履斎一門や内藤十湾、天爵から沢出椿庵らが名を得たといわれ、後年高橋克三がこれを「鹿角学統」と呼んで賛美した。近年、中央の史家はその一連の系譜を郷土派と江戸遊学派の二派に分けたが、

椿庵はむろん江戸遊学派であった。嘉永3年没、享年47歳。

<参考>『鹿角市史第二巻下』、『近世鹿角郡学統考』、『鹿角志』。

さわいで ぜんうえもん

沢出 善右衛門 生没年不詳、江戸前期の人

尾去沢西道金山の山先

善右衛門の父は渡辺善太夫といい、慶長の末年(1614年頃)真田幸村の密命を受け尾去沢金山奉行北(南部)十左衛門の大坂入城を促すべく、従者の石井善松、小松亦十郎、田中万蔵、岩城清吉とともに尾去沢西道へ下り、そのまま十左衛門の留守を預かったという。一方、善太夫の一子渡辺半蔵は大坂夏の陣に参加し、落城後尾去沢西道の親元へ落ち、善右衛門と改め沢出氏を称した。

善右衛門の名は沢出氏が数代にわたって称した通称名で、沢出家は尾去沢銅山の山先五家の一つに数えられる。初代善右衛門は金山奉行北十左衛門の下で検断役を勤めていたとされ、金山奉行の役宅帯頭屋敷に愛妾お松の方とともに住んでいた十左衛門の死後、屋敷とお松の方を預かって保護したのち、三ツ矢沢の下新田入り口へ移り住んだと伝えられる。なお、尾去沢^{たごおり}田郡の長坂金山は、元禄8年(1695)善右衛門の発見とされるが、年代から推しておそらく二代目善右衛門のことと思われる。

<参考>『鹿角市史第二巻上・第三巻上』、『尾去沢・白根鉦山史』、『南部藩・雑書』。

さわいで はやみ

沢出 速水 1851(嘉永4年)～ 没年不詳

明治期のハリストス正教の伝教者

鹿角郡荒川村の人。明治期のキリスト教において、鹿角に初めて伝道されたのはハリストス正教(ギリシア正教)といわれるが、その最初の福音をもたらしたのは、三戸郡相内村の副伝教者ステファン江刺家其太であった。明治10年(1877)1月、毛馬内村高田の湯瀬哲太郎家の二階を借りて伝道に従事していた江刺家其太によって、初めての啓蒙を受けたのが沢出速水らであった。速水は受洗名をイヤコフといい、やがて副伝教者として信仰者の道を歩んだ。沢出が荒川村の士族目時藤次郎の家の井戸の傍らに小屋を建てて住んでいたことから、目時も正教に傾倒していった。大湯村においても、12年から受洗者が相次ぎ、13年5月千葉佐惣治が沢出速水を代父(保証人)として洗礼を受けたという。また同年同月、尾去沢銅山の4名も速水の伝道によって銅山最初の受洗者となっている。当時多くの受洗者を出した荒川村の荒川福音教会が、郡内ハリストス正教の初期の拠点的作用を果たしたと伝えられ、曲田村(現大館市十二所)の聖堂創立者畠山市之助も荒川村目時家にて洗礼を受けたという。

<参考>『浅井小魚ノート』、『千葉先生伝資料』、『鹿角市史第三巻上』。

さわぐち だいきょう

澤口 大教 1898（明治31年）～1977（昭和52年）

社会福祉に貢献した仁叟寺の住職

明治31年4月19日、大巖^{だいげん}・さたの子として生まれる。仁叟寺中興の祖とされる第23世住職にありながら、昭和4年（1929）に保護委員に任ぜられ、以来方面委員、民生委員として39年間にわたり要保護者の厚生援護に尽力した。鹿角工業学校に入学した遠方の男子生徒たちを、寺に下宿させて支援したのもその例である。さらに、郡青少年問題協議会副会長、県社会福祉協会理事、郡民生委員連絡協議会会長などを歴任し、社会福祉の増進に寄与した。また、12年毛馬内町議会議員に当選以来、通算32年にわたり議会活動を通して地域の発展に尽くすなど、地方自治の振興と、社会福祉の向上に貢献した。51年鹿角市功労者表彰。昭和52年1月5日没、享年78歳。

<参考>『広報かづの（昭和51年11月号）』、『鹿角市史第三卷下』。

さわだ まさじ

沢田 政治 1922（大正11年）～1985（昭和60年）

日本社会党代議士、鹿角郡初の国会議員

大正11年6月18日、鹿角郡錦木村に生まれる。昭和15年、三菱金属尾去沢鉱業所入社。全日本金属鉱山労働組合副委員長、同事務局長、総評幹事等を歴任する。38年第30回衆議院議員総選挙で秋田1区から日本社会党公認で立候補し当選。42年の31回総選挙では落選したが、同年の参議院議員補欠選挙で秋田地方区から立候補して当選。参議院議員を2期務めた。この間、参議院建設委員長や参議院国会対策副委員長などを歴任した。昭和60年10月15日没、享年63歳。

しちゅうあんしえん

市中庵芝菌 生没年不詳、江戸後期の人

鹿角の俳諧を指導した行脚俳人

石鳥谷の渡部家所蔵の安永6年（1777）の「句帳」は、市中庵芝菌の記録したものである。その後記によれば、各地を漂泊してきた行脚俳人で、一時花輪の御城の下に一庵を結んで住みつき、支考の「俳諧十論」などを使って蕉風を指導した。支考系（美濃派）の人と考えられる。歌仙も巻いており、「南部花輪連中」としてかなりの人が参加している。

<参考>『鹿角の俳人（鹿角市みづうみ俳句会編）』、『鹿角市史第二卷下・第三卷上』。

しばた しゅんこう

柴田 春光 1901（明治34年）～1935（昭和10年）

才能をうたわれた日本画家

明治34年12月11日、毛馬内の製菓業柴田伊惣太とロクの長男として毛馬内に生まれる。幼い頃から絵の天分に恵まれ、初め佐藤紫雲に師事した後、川崎小虎の門下生となり、春光と号した。大正12年（1923）に中央美術展で入選。毛馬内の実家の向かいの家並

を描いた「東北の或る町」をはじめ、郷里毛馬内の生活風俗を好んで描き、郷土の生活を限りない愛情を持って詩情豊かに表現した作品を次々と中央の美術展に発表した。昭和2年秋田市での頒布会で平福百穂より推賞の辞を寄せられ、若き才能を認められた。8年の第14回帝国美術院美術展覧会(帝展)に入選した「十和田路」は、川合玉堂から「三本木あたりか夫れとも毛馬内か。東北の街道筋を偲ぶ地方色のよく表れた作品である。人物も自然に配合されて居てよい」との賞賛を受けた。生前最後の大作である。

昭和10年4月18日没、享年33歳。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』、『鹿角市史第三巻下』、『芸文かづの第38号』。

しばない さくうえもん
柴内 作右衛門 (久武) 1673 (延宝元年) ~ 1723 (享保8年)

松山村の松寿庵の創建者

柴内氏は中世鹿角四氏の安保氏に出る。作右衛門と称したのは南部重直の代に松山村に知行新田67石余を賜わった久充ひきみつ、久充二男の久治ひきはる、久治嫡男の久武ひきたけ、久武嫡男の久蔵ひきくらの四代にわたるが、このうち久充と久治は六右衛門とも称した。寛文10年(1670)に毛馬内御蔵奉行あるいは毛馬内代官の任にあった作右衛門は、松山村御番を務め元禄16年(1703)に没した久治と考えられる。また、鹿角郡柴内村万松寺の末庵として知られる松山村の松寿庵は、享保3年(1718)2月の建立で、開基が柴内作右衛門と伝えられる。こちらの作右衛門は、生没年代から推して、久治嫡男の久武のことであろうと思われる。久武は久正または久勝とも名乗ったらしく、40代半ばに松寿庵を創建したものであろう。享保8年12月18日没、享年50歳。

<参考>『柴平村誌』、『柴内家系図』、『参考諸家系図』、『鹿角市史・第二巻上下』。

しばない よごうえもん
柴内 与五右衛門 (久政) 1541 (天文10年) ~ 1639 (寛永16年)

柴内村の万松寺の開基に尽力

柴内氏は本来中世鹿角四氏の安保氏に出るが、一時期本姓成田氏と称した。『鹿角志』等によれば、柴内村の万松寺は、南部利直のとき柴内村に若干の知行を得た柴内与五右衛門の開基と伝えられる。与五右衛門は実名を久政、あるいは直久といい、その子に成田才次郎あるいは左次郎と称した久忠と柴内作右衛門あるいは六右衛門と称した久充ひきみつがある。

柴内西町の万松寺は、長福寺・恩徳寺・宝殊寺・鏡得寺・長泉寺・大徳寺など多くの末寺を持ち、郡内曹洞宗では唯一藩主に謁を賜わることができる御目見可能な寺院であった。しかし、万松寺が南部利直の命により三戸から移ったとされているものの、その開山時期については天文3年(1534)とも天正元年(1573)とも伝えられ、資料によって異同が見られる。いずれにしても、万松寺は与五右衛門の尽力によって開基されたことは間違いなく、のち与五右衛門は百石に加増され柴内村で天寿を全うしたが、家督を継いだ子の久充は願いによって松山村に転居している。寛永16年4月22日没、享年98歳。

<参考>『柴平村誌』、『柴内家系図(柴内興一著)』、『南部藩・参考諸家系図』、『鹿角市史第一巻・第二巻上下・第四巻』。

しぶや とよじろう

渋谷 豊次郎 1924 (大正13年) ~ 2007 (平成19年)

「日本短角種」の育成に尽力

大正13年5月25日、松太郎とマサの長男として宮川村谷内に生まれる。

昭和39年(1964)谷内産牛組合長、41年鹿角畜産農業協同組合理事、63年組合長理事また日本短角種登録協会理事などを歴任した。「日本短角種」は「南部牛」と外来種「ショートホーン」の交配により、自然放牧で粗飼料主体、自然交配で生まれ育つ増体能力に優れた特性があり、低コスト肉用牛生産等の推進につとめた。自らも全県共進会に出陳し、8回も農林大臣賞を受賞し、また全日本第二回日本短角種総合共進会で優等賞を得るなど、長年にわたり畜産振興の発展に貢献した。日本短角種のうち鹿角地域で生産される牛だけが「かづの牛」と称し、秋田畜連が誇るブランド牛として登録、普及販売されている。昭和42年、秋田県畜産功労者表彰。平成19年12月18日没、享年83歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『第100回鹿角畜産共進会記念誌』。

じへえ

治兵衛 生没年不詳、江戸前期の人

尾去沢三沢の山師・金主

銅山師の治兵衛と清兵衛の二人は、陸奥国岩井郡山目村の豪商で白根金山・銅山山師の阿部小平治の手代ともいわれる。天和3年(1683)5月25日、白根の銅山師清兵衛と治兵衛の両名が、川舟を作って秋田領沢尻まで銅を積み出すことを藩に願い出て許されている。また、尾去沢銅山の他領出銅の通し証文に、「貞享元年(1684)10月27日、5159貫200目、350個、留兵衛・治兵衛、とふかい改所」と記され、この年初めて「とふかい改所」より他領出銅され、尾去沢銅を改める必要から土深井番所の設けられたことがわかる。貞享4年1月23日、治兵衛は、河内屋留兵衛が山を返したので、単独で尾去沢・田郡・鹿沢^{ししざわ}・赤沢の4カ所の稼行を許可されている。後年、熊谷治兵衛と称した。おそらく、銅山師としての長年の功によって、苗字を賜わったものであろう。

<参考>『南部藩・雑書』、『尾去沢・白根鉦山史』、『鹿角市史第二巻上下』。

しもだ はつお

下田 初雄 1912 (明治45年) ~ 2011 (平成23年)

老人クラブの育成に尽力

明治45年1月11日、長八とキヌの長男として松館村に生まれる。昭和9年(1934)から35年間にわたり鹿角地方事務所吏員として、48年から8年間鹿角市議会議員として、合併直後の新市が抱える課題に積極的に取り組み、地方事務の振興に貢献した。また、昭和63年から8年間鹿角市老人クラブ連合会会長、秋田県老人クラブ連合会理事を務め

た。その後も社団法人鹿角地域シルバー人材センター理事長、鹿角市社会福祉協議会理事、秋田県老人クラブ連合会副会長、同監事を務めるなど社会福祉の進展に貢献した。平成2年（鹿角市文化功労者）・10年（同功労者）表彰。7年全国老人クラブ連合会育成功労表彰。14年厚生労働大臣表彰。平成23年10月4日没、享年99歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『鹿角市広報（平成2年・10年）』。

しゅんたきぼう

春 滝 坊 1853（嘉永6年）～1917（大正6年）

盲目の花輪ばやし芸人

本名木村春滝、出身は七滝村の高清水（現・鹿角市）。花輪ばやしの曲名「^{うげんきょう}宇現響」は、従来の「うげんきょう」に手を加えて、毛馬内、大湯方面に教えたという。明治32年（1899）頃に描かれた絵に二人の芸人が描かれており、三味線を弾いているのが春滝坊で、小太鼓を叩いているのが春珍坊といわれる。大正6年没、享年64歳。谷地田町の専属芸人をしていたことから、谷地田町の人々により長年寺の墓地に埋葬された。

<参考>『鹿角市史第四巻』、『花輪祭り』。

しゅんちんぼう

春 珍 坊 生没年不詳、明治大正期の人

盲目の大湯ばやし芸人

柴内村の^{うわだい}上台に生まれる。若い時に山に柴刈りに行き、眼に柴を刺し失明し座頭になったと言われる。優れた音感を生かし多くの作曲や編曲をしてその普及につとめた。ご祝儀の唄（^{けんぎょう}検校節）を得意とし、大湯下の湯に居を構えていたと伝えられており、大湯ばやしは春珍坊が大成したといわれる。

<参考>『鹿角市史第四巻』。

すがえ ますみ

菅 江 眞 澄 1754（宝暦4年）～1829（文政12年）

鹿角に足跡を残した江戸後期の紀行家

本名白井英二。宝暦4年三河国（豊橋又は岡崎）生まれと推定されている。天明元年（1781）以降漂泊の旅を送り、秋田を中心に北東北の風物・文化・民俗を記録した。鹿角には天明5年、文化4年（1807）、文政4年（1821）と3回にわたって来訪し、『けふのせばのの』『錦木』『十曲湖』『上津野の花』などの旅日記やスケッチを残した。その中で、鹿角の三大伝説である錦木塚・だんぶり長者・十和田湖と八郎太郎については多くのスペースをさき、特別の扱いをしている。晩年、秋田郡の地誌のほか例外として鹿角郡の地誌を編むため、『陸奥国毛布郡一事』として七丁の冊子の原稿を残した。文政12年7月19日角館で死去、秋田市寺内に葬られた。享年75歳。

<参考>『鹿角市史第四巻』、『菅江眞澄と鹿角（菅江眞澄研究会）』。

すぎえ むねゆう

杉江 宗祐 1939（昭和14年）～2019（令和元年）

文化・スポーツの振興と国際交流の推進

昭和14年10月28日、清助とサワの三男として花輪町六日町に生まれる。秋田県立花輪高等学校を卒業後、35年旧花輪町役場に入る。鹿角市では財政課長などを務め、63年鹿角市長選に当選し、連続3期12年間市長を務める。この間、①下水道事業の実施など都市整備を進めた。②花輪スキー場のアルペン、ノルディックコースを国体実施可能なコースに改良し、総合運動公園を創設した。③東京事務所をつくり、首都圏と鹿角との文化、物流の拠点とし、葛飾区などとの交流をすすめ、ハンガリー共和国のショプロン市との友好協定の締結を行った。④ストーンサークル出土文化財センターの建設、錦木塚伝説公園の整備などを進めた。⑤農業構造改革計画に着手するなど農業の振興や商工業振興センターの建設など商工業の振興に取り組んだ。平成15年（2003）秋田県会議員を1期務め秋田県勢の発展と福祉の向上に寄与した。23年地方自治功労により旭日小綬章を受章、同年鹿角市功労者表彰。著書に鹿角への思いを語った『黎明』（2001年刊）、『ふるさと再見 お茶の間談義の読むおやつ』（2002年刊）がある。令和元年11月29日死去。享年80歳。

<参考>『広報かづの』。

すぎやま しんきち

杉山 新吉 1924（大正13年）～2011（平成23年）

小・中学校長、鹿角市教育長を歴任した教育者

大正13年10月8日、坂本新藏とトミノの次男として仙北郡内小友村（現・大仙市内小友）に生まれる。秋田師範学校を卒業後、仙北郡で小学校の教師となる。昭和23年（1948）8月13日尾去沢田郡出身の杉山恵子と結婚、杉山姓となる。新吉は昭和20年（1945）から59年まで教職に専念し、後年鹿角市の教育委員会指導主事や市内の小・中学校長などを歴任した。59年からは市教育委員を2期8年間、63年から4年間は教育長を務めるなど、学校教育の向上や教育行政の振興に尽力した。また子供たちに鉱山の生活を紹介した『鉱山町のくらし』、晩年には『子育て歳時記』を著した。平成7年（1995）秋に鹿角市文化功労者表彰。平成9年11月教育功労者として勲5等双光旭日章を授章。平成23年7月30日没、享年86歳。

<参考>『鹿角市広報』。

すぎやま まきぞう

杉山 万喜蔵 1907（明治40年）～1957（昭和32年）

地域医療に貢献

明治40年、万次郎とステの次男として尾去沢田郡に生まれる。尾去沢小学校を卒業後、叔父を頼って青森中学から北海道帝国大学医科に学ぶ。昭和15年（1940）青森県立病院に勤務、19年青森医専の医大昇格（現・弘前大学医学部）に尽力し、23年から弘前大学医学部皮膚・泌尿器科主任教授となり、28年腎臓の立体レントゲン撮影法を完成した。

31年から同付属病院長となる。この間、個人で行った貸費生による無医村解消運動は全国的テストケースとして注目を集めた。当時弘前大医学部には秋田県出身医が11名おり、この育ての親であった。全国的に有数の無医村をかかえた秋田のため、優れた医者の育成と配置に尽力した。勲四等瑞宝章受章。昭和32年1月27日没、享年50歳。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』。

すわ おとし
諏訪 音治 1864（元治元年）～1907（明治40年）

県議・郡議などを歴任した大湯の大地主

諒平とトラの二男として大湯に生まれる。16歳で千葉佐惣治を代父としてハリストス正教の啓蒙を受ける。明治23年から28年まで県会議員に選出され自由改革派の政治家として、29年から31年まで大湯村長として尽力した。23年中央において立憲自由党の結党が実現したが、鹿角郡内では音治らが発起人となって会合を催したり、24年自由党総裁板垣退助伯爵が遊説のため鹿角に入った時は、中心となってその歓迎にあたりたりした。当時、時価金一万円以上の鹿角郡大地主5名の中の一人でもあった。

また、20年5月、県は陸軍省からフランス軍隊用アルゼリー産牡馬八頭の払下げを受け、鹿角馬産家にも貸下げした。その生産駒の軍馬として買上げられるものが年々続出したが、25年県産馬共進会では諏訪音治の岩沢号（アルゼリー種の血をひく駿馬）が1等賞牌を受けている。明治40年病没、享年43歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上』、『鹿角のあゆみ』。

すわ こまじろう
諏訪 駒次郎 1858（安政5年）？～1928（昭和3年）

大湯村長として耕地整理などに尽力

明治23年から28年、31年から39年、大正7年から15年、大湯村長を務める。鹿角郡における政友本党の有力者としても尽力。

県は明治44年勸業是を制定し、農事の奨励事項に「耕地整理」を掲げた。大正期の耕地整理状況は昭和に入って多くの紆余曲折をみた。大正12年大湯村役場に設立総会を開き、14万円の起債決議をあげ認可申請を行った。その計画は大湯村中通りより錦木村猿賀野を挟んで柴平村寺坂に至る一帯の畑と原野200余町歩の地に、大湯阿久谷川から山伝いに用水路を取り付け、開田するものであった。組合長には諏訪富多、副組合長に大湯村長諏訪駒次郎が就任し尽力した。水路トンネルを開削して30町歩の田に灌水、田植えも行ったが灌漑水漏水、崩落陥没、その後も灌漑水が地下に浸透して溢れたり、豪雨で漏水が起り田地を埋没、集宮発電所の水路が破壊されるなどしたため、せつかくの田地在次第に畑地へ転換されることが多くなり、幾多の困難との戦いであった。昭和3年9月27日没、享年70歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『鹿角のあゆみ』。

すわ つなたけ

諏訪 綱毅 1915（大正4年）～1996（平成8年）

市議会議長を長年務めた地方自治功労者

大正4年10月12日、ミホと久喜（旧姓・武田）の長男として大湯下の湯に生まれる。大湯尋常小学校の頃は、きかん坊で成績は抜群、先生を困らせていたという。その頃秋田から川口弥之助先生が赴任し、心酔して勉強に対する態度も一変。先生の勧めで旧制秋田中学校に進学する。旧制第二高等学校（仙台）での吉田賢抗の影響力が大きく、東京帝国大学支那哲学科へ進み塩谷温教授に師事する。第二高等学校時の受講ノートは整然とした細やかな文字で何冊にもまとめられており、几帳面な人柄が伺える。帝大卒業後は大学に残って学者の道を志したが、両親の強い希望で帰郷となった。

昭和22年4月大湯町議会議員に初当選。26年4月から31年9月まで大湯町長。十和田町議会議員、鹿角市議会議員など、平成3年3月まで通算31年余にわたって、地方自治の進展に尽力した。特に合併当初の昭和48年から52年まで市議会副議長を務め、新市議会が抱える山積した課題に積極的に取り組むとともに、引き続き平成元年3月まで11年余、名市議会議長として市の充実発展に貢献した。昭和60年全国市議会議長会と秋田県知事表彰。平成元年鹿角市功労者表彰。3年勲四等瑞寶章受章。平成8年2月2日没。享年80歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角市広報』。

すわ つなとし

諏訪 綱俊 1885（明治18年）～1968（昭和43年）

馬産及び中等学校設立に尽力した大湯町長

昭和18年1月10日、音治と奈美の二男、富多の弟として大湯に生まれる。東京の郁文館中学校、さらに早稲田実業に進学し、野球部のキャプテンとして活躍。綱俊はスポーツマンで、大湯黒森山にスキー場を、また千葉旅館脇にテニスコートを作ったり、得意な野球では大湯チームの結成と指導をするなど、次々と新しいスポーツを導入し、大湯の人たちを驚かせていた。

環状列石発見の前後、昭和5年調査を断行すべく、郷土史研究家浅井末吉氏が綱俊と協議して諸般の準備を整えていったが、これが後の環状列石発見につながった。10年5月から19年10月までの3期大湯町長を務めた。16年鹿角では、にわかには中等学校設立の声が高まり、毛馬内町の提案、鹿角郡長村長の立案、花輪町有志も自町にと、三者争奪の形で動き出した。これに対し、小坂町長・大湯町長綱俊は三者の大同団結による設立をめざし、建設地は県当局の裁定に一任を主張し、鹿角中学校の誘致を申合せた。しかし創設問題にはいくつも暗礁が横たわっており、難儀の上18年4月に鹿角工業学校（現・十和田高等学校）として鹿角郡初めて男子中学校が誕生し、終戦後20年2月ようやく新築校舎本館が完成した。大正から昭和にかけて大湯は馬産地としても知られ、郡産牛馬共進会では常に上位入賞を占めていた。綱俊は秋田県畜産組合会議員鹿角代表の一人でもあった。昭和43年1月

19日没。享年83歳。

<参考>『鹿角市史第一巻・第三巻下』。

すわ とみた

諏訪 富多 1883（明治16年）～1981（昭和56年）

地域産業、観光振興に貢献した東北有数の文化人

明治16年1月1日、音治と奈美の長男として大湯に生まれる。13歳の時に負傷して左眼失明。明治39年東京帝国大学で西洋哲学を修め、学究を志したが父の死によって帰郷。推されて大湯農村会会長となり農林業の振興に尽力。鉱山煙害で苦しむ七滝村の農家51戸の救済のため、私財を投じて人跡未踏の大清水を開墾し、武者小路実篤の「新しき村」構想の実現を目ざして指導に当たった。また、北奥羽開発協議会設立を首唱し、その交流幹線として大湯三戸道路の改修、国道昇格、バス運行の実現など、雄大な構想のもと地域発展に献身的に努力した。

昭和7年大湯環状列石が発見されると大湯郷土研究会を組織し、会長としてその顕彰に力を注いで特別史跡指定への道を開き、哲学的思索に基づいた青森・秋田・岩手3県を結ぶ十和田高原神都説及び大学学園都市構想などを発表。地元産業の育成のため自ら「大湯ホテル」を建設し十和田湖への要路を宣伝する他、多方面にわたる土産品の開発も手がけた。特に、小松五平を鳴子から招いてこけし制作を推奨した。さらに、霊泉と号し、書画のほか短歌、俳句、漢詩などをよくした稀有の文化人でもあった。昭和44年勲六等旭日単光章を受章。同49年秋田県文化功労者表彰。昭和56年4月29日没、享年98歳。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿）』、『鹿角市先人顕彰集成』、『鹿角市史第一巻・第三巻上下・第四巻』。

すわ みよじ

諏訪 巳代治 1856（安政3年）～1923（大正12年）

明治初期の大湯村戸長

安政3年7月7日、諒平とトラの長男として大湯下の湯に生まれる。明治初期大湯戸長として、22年から23年初代大湯村長となり、その後も39年11月から大正7年10月まで村長として尽力した。

明治に入って不老倉鉱山は、10年地元民の借区に始まったが、17年頃は借区権、譲渡等々の問題が山積。高瀬喜代治を総代理人として処理させていたところ、高瀬が専断でこれを菊池幸七に売却し、さらに菊池は古河市兵衛に売渡した。その後も紛争が絶えず戸長巳代治は県令宛に「民行鉱山志料取調」を提出したり、20年1月借区券書替に係わる事で県に対し「坑区券書替奥印附与ノ義ニ付伺」を提出したりした。鉱山が古河市兵衛の所有に帰した20年代、22年阿久谷川荒蕪地の払い下げを受け鉱山の共有墓地を新設、24年以前から開かれていた大湯小学校不老倉分教室を25年不老倉尋常小学校として県知事からの許可を得る等尽力した。大正12年2月9日没、享年66歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上』。

すわ よしつな
諏訪 善綱 1915（大正4年）～2002（平成14年）

秋田県スキー界発展の功労者

大正4年1月21日、富多と廣^{ひろ}の長男として大湯川原の湯に生まれる。東京上野中学校、北海道大学鉱山学部を卒業後、樺太の三菱金属鉱業に勤務し、そこから出征している。大学の時に山岳部に所属し、その頃より山スキーをするようになった。

秋田県スキー連盟役員として組織充実と競技スキー、基礎スキーの普及・推進及び大会運営、鹿角のスキー場開発・整備に大きく貢献。スキー国体選手・監督としても活躍。公認スキー学校（大湯スキー学校）の設立などを通して多くの指導者養成にも尽力した。基礎スキー技術に関しては力学を利用した体の使い方を研究、スキー情報誌に発表するなど諏訪理論として関係者の間では脚光を浴びた。昭和28年2月第8回国体スキーアルペン競技大会（大湯諸助山）において、高松宮殿下の案内・説明役を担った。57年に鹿角市一般表彰（スポーツの振興）、59年文部科学大臣スポーツ功労賞、平成3年に鹿角市スポーツ功労賞を受賞している。平成14年5月21日没、享年87歳。

<参考>『鹿角市広報』。

すわ りょうへい
諏訪 諒平 1826（文政9年）～1883（明治16年）

北氏の開拓奉行にして大湯村の基礎作りに貢献

文政9年5月15日、五代源吾エ門政直の三男として大湯村下ノ湯に生まれる。幼少の頃から豪気俊敏にして思慮深く、有為の人材として将来を嘱望されていた。17歳にして大湯館主北氏に仕え、内右衛門綱紀^{つなつり}と称した。財政難の主家のため開拓奉行、御城使を歴任し、縦横に敏腕を奮った。開拓奉行として藩内各地から測量技術者を集め、大湯地内だけでも9カ所の堤を築き開田した。また、慶応4年の戊辰戦争では大湯隊隊長として濁川口に出陣し、津軽兵大挙侵攻に備えた。明治2年諒平と改名。3年には捕亡（警察官）に任用され治安の確立に尽くし、西南戦争では大湯隊を主軸とする鹿角隊75名の小隊長兼給与掛りとして活躍した。その後戸長として大湯村の基礎を築いた。明治16年8月6日没、享年57歳。

<参考>『鹿角人物誌』、『鹿角市史第三卷上』。

せいべえ
清兵衛 生没年不詳、江戸前期の人

白根や尾去沢の銅山師

清兵衛は治兵衛とともに白根金山・銅山山師山ノ目小平治の手代で、盛岡十三日町の小平治の資金運用の一部を任せられていた。延宝3年（1675）10月、白根金山師青山庄左衛門が亡くなった跡を受けて、子の忠兵衛が根田影平中山両平の大水抜普請を願い出た際、藩は銅仕清兵衛・左平次・久左衛門の3名に協力方を命じたとされる。現存する証文などが

ら、この時期における白根銅山の代表的な銅山師は、山先久左衛門、清兵衛、左平治らであった。清兵衛が白根の銅山師として活躍していた時期は、少なくとも延宝年間から天和・貞享（1673頃—1684頃）にかけてと推測されるが、この間、槇山銅山や尾去沢銅山などの山師としても稼行していたことがわかる。

<参考>『南部藩・雑書』、『尾去沢・白根鉦山史』、『鹿角市史第二卷上下』。

せがわ きよこ

瀬川 清子 1895（明治28年）～1984（昭和59年）

女性民俗学の先駆者で第一人者

明治28年10月3日、岩船源太郎とスケの長女として毛馬内に生まれる。本名キヨ。明治42年毛馬内小学校を卒業。43年9月から15歳で母校の准訓導として教壇に立ち、大正4年（1915）秋田師範学校を卒業し正訓導となって鹿角郡内に勤めた。同6年22歳で大湯出身の瀬川三郎と結婚。女性でも大学に入れるとの新聞をみて、夫と姑のタツと一緒に上京し、東洋大学東洋文学科に入学。卒業後、東京市立第一中学校教師を経て大妻女子大学の教授となる。昭和8年、舩倉島の海女と生活を共にした見聞記を発表。柳田国男に認められ師事して民俗学研究に打ち込んでいく。日本各地150以上の漁村・山村などの民俗調査に当たり、記録された民俗調査ノート24冊は貴重である。女性民俗学会の代表を務め、日本民俗学会の名誉会員などを歴任し、多くの民俗学者を育てた。著書多数。55年エイボン女性教育賞、56年柳田国男賞を受賞。昭和59年2月20日没、享年88歳。

<参考>『鹿角人物誌』、『ふるさとの先人たち』、『鹿角市史第四巻』。

せがわ さぶろう

瀬川 三郎 1896（明治29年）～1969（昭和44年）

瀬川文庫の寄贈者で、ギリシャ哲学研究者

明治29年、瀬川重範（鷲峰、明治中期の歌人）とカツ子の三男として大湯に生まれる。秋田師範学校を卒業後、小坂、毛馬内小学校に勤務。大正6年同職していた岩船キヨ（瀬川清子）と結婚。母カツを伴い上京して夫婦で東洋大学に入学し哲学を専攻する。昭和8年1月ギリシャに遊学。古代ギリシャ哲学の研究を深め著書に『ギリシャの風土と文化』がある。

東京市豊島師範（現東京学芸大学）の教授となり、学校の先生を育てることに生涯を捧げた。温厚篤実な人柄で、妻瀬川清子の良き理解者でもあり、その民俗学の研究活動を大いにささえた。また、大湯小学校の子供の勉強のためにと瀬川文庫を、体位向上のためにと校庭に遊具を寄贈している。昭和44年3月10日没、享年73歳。

<参考>『鹿角市史第四巻』。

せき うへいた

関 右平太（小田島改め） 初代 生年不詳～1827（文政10年）

2代 生年不詳～1867（慶応3年）

山口流剣術指南の花輪御給人

小田島家は代々「大和屋」と称した酒造家であるが、子供がなかったので、浄法寺の関家から養子を迎えた。これが花輪御給人の初代右平太（関右平太）で、相馬大作事件で刑死した良輔（良助）の父である。一子良輔なき後、文政9年（1826）良輔の末妹に毛馬内の勝又家から久米之助（善左衛門を襲名した安人の弟）を婿養子に迎える。養父死後、右平太（2代）を襲名、実兄の勝又善左衛門から山口流剣術10代目の印可を受けて花輪に道場を開いた。これが花輪における本格的剣道教授の始まりである。関右平太の道場には、花輪通に居住する諸士や二、三男に至るまで、日夜数百人の弟子がひしめき合っていたという。

右平太は慶応3年（1867）74歳で亡くなるが、その直前嫡孫隆次郎が祖父老衰につき山口流師範を小田嶋次郎兵衛へ譲る旨を御城下へ届けている。明治年間花輪で盛況をみた小田島治右衛門道場も、山口流剣術が主流であった。また毛馬内の勝又周治も右平太の山口流を受けついで道場を開き、多くの門人を育てた。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』、『鹿角のあゆみ』。

せき きゅうべえ

関 久兵衛（三代） 1826（文政9年）～1907（明治40年）

鹿角郡初代の県会議員、産業の振興と文化の発展に寄与

文政9年3月17日、二代目久兵衛とキクの長男として鹿角郡花輪村に生まれる。明治10年（1877）宮麓村戸長、12年鹿角郡初代の県議会議員（一期）を務める。鹿角郡でのマルメロの栽培について、四代目久兵衛とともに最初に始めた人。缶詰製造については25年、伊藤吉助を招いて始めたもので好評を得た。大正時代の種苗交換会時の花輪町の鳥瞰図に自宅裏がまるめろ園であったことが描かれている。

文化の振興にも努め、一閑と号し俳句の普及に尽力し、明治25年の歌集『面影集』の発行に尽力した。また宝生流を鹿角郡に初めて伝えたひとりで、その時の門弟に関善次郎がいる。大正15年9月、関善次郎により長年寺玄関前に句碑（書は川村竹治）が建立された。

三代目久兵衛は、なにごとについても相手の言うことを否定せず、「いかにも、いかにも」と言ったことから、いかさんと呼ばれ、以後、舟場関家の屋号に準ずるものとなった。明治40年9月15日没、享年81歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』、『鹿角のあゆみ』、『長年寺資料』。

せき きょうしろう

関 享士郎 1937（昭和12年）～2018（平成30年）

磁気応用分野学における第一人者

昭和12年2月5日、桜田勇太郎とタツの二男として松館に生まれ、金三郎と昌子の養子となる。30年、秋田県立花輪高等学校卒業後、岩手大学工学部電気工学科へ入学し、同大学院電気工学科を終了。39年、同大学工学部電気工学科助手、講師や助教授を務め、57年同大学電気工学科教授となる。平成14年（2002）、退官し同大学名誉教授となる。学内では平成9年から2年間、岩手大学工学部工作センター長を務め、センターの運営組織の整備及び、同工学部の管理運営に尽力した。

専門は磁気応用学であるが、それまで主に磁性材料として評価されてきた感温磁性体の電気的特性が半導体特性やスイッチング機能を有することに着目し、その工業的有用性を検証した。温・湿度同時計測システムや超音波計測装置などを開発し、関連の特許を取得している。特に薄膜を用いた酵素センサシステムは、その独創性が高く評価され、平成12年、日本応用磁気学会より論文賞が授与されている。なお磁性体を温度センサとして使用する場合の熱応答特性に関して、熱入力、熱容量、熱伝導率など多くの相互関係を解明した成果に対して、昭和62年東北大学より工学博士号が授与されている。平成30年9月20日没、享年81歳。

<参考>『フェリ磁性膜を用いた熱型酵素センサの基礎特性（関享士郎ほか）』。

せき きんべえ

関 金兵衛 1795（寛政7年）～1834（天保5年）

義民、幕末の百姓一揆の首謀者

祖先は尾張国から鹿角に移り住み「尾張屋」を称した。白根鉾山の開発に功績のあった家柄で、白根衰退の後は花輪に移り住んだ。金兵衛は尾張屋五郎七の子で寛政7年に生まれる。幼名は清八といった。長じて関村六十郎家の養子となり、関金兵衛と称し、盛岡藩御境古人を務めた。天保4年（1833）12月、凶作により年貢米の減免と年延べを大里（治右衛門）、小豆沢（清助）、三ヶ田（佐内）、夏井（甚右衛門）の肝入と村人たちが花輪代官所に願い出たが回答が得られず、暴走した百姓達は肝入の制止を聞かず代官所に投石、さらに町に繰り出し、大商人佐藤屋庄六の米倉を打ち破り米が運び出される事件が発生した。4ヶ村の肝入などから相談を受けていた御境古人の金兵衛は暴動の首謀者と見なされ、市中引き回しの上、打首獄門となった。その死を悼み、遺骸は百姓町民に葬列が組まれ、恩徳寺に葬られた。墓石には、お上をはばかって水難死したことによる「清安良水信士」の法号が刻まれている。天保5年9月25日没、享年39歳。

<参考>『鹿角市史第二巻下』、『花輪町誌編纂資料第一号』、『歴史の中の鹿角・上（奈良寿著）』。

せき こうぞう

関 孝三 1920（大正9年）～1979（昭和54年）

鹿角市誕生と産業振興に貢献

大正9年、大塚家の三男として北海道に生まれる。海軍経理学校卒業後、海軍に入隊。戦後、湯瀬ホテル経営を継ぐ。昭和39年（1964）推されて八幡平村長に就任以来、広域行政体制の必要性を説き、「鹿角が力強く生きていくためには、鹿角五ヶ町村の合併以外にない」と、合併協議会の会長として47年4月の新生鹿角市誕生に大いに貢献した。また、教育の近代化に配慮し中学校は二校統合、小学校は六校統合をしたほか、幼稚園についても県内にさきがけて三園の建設を実現した。一方社会教育にも意を注ぎ、各集落に公民館分館を建設するなどコミュニテイ確立に尽力した。初代ロータリークラブ会長、国際ロータリークラブ第254地区ガバナー、34年秋田県温泉審議会委員、48年鹿角森林組合長、秋田

県総合開発審議会委員、52年同会長代理として活躍した。53年鹿角市功労者表彰。昭和54年11月20日死去、享年59歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『鹿角市広報（昭和53年12月号）』。

せき たけし

関 威 1892（明治25年）～1974（昭和49年）

産業振興と囲碁の普及に務めた地方政治家

明治25年11月9日、峰太郎とトヨの二男として花輪舟場に生まれる。花輪小学校卒業後、東京園芸学校に進学も病のため中退。帰郷して、まるめろ栽培や養蚕などに取り組む。その後、花輪町町議会議員を経て、山本修太郎県議会議員の下で秋田県議会書記長を務め、昭和4年（1929）秋田県議会議員となり、14年から20年まで県議会副議長を務める。この間、花輪高等女学校の創設及び県立学校化、花輪・尾去沢・十二所線の整備などに尽力。また、昭和2年の鹿角郡養蚕同業組合が結成され、県連合会代表に選出された。7年に秋田県蚕種業組合が設立により、初代組合長として養蚕業の発展に尽くした功により、翌年宮中の紅葉山御蚕所拝観の栄に浴した。

8年、指定地域拡張のため県知事と鹿角・仙北両郡の関係町村長などをメンバーとする和田湖国立公園協会が設立されると、評議員として関直右衛門、関善次郎とともに、奥羽アルプス八幡平一帯の編入、八幡平温泉郷の振興、玉川線の県道昇格などに奔走した。また、鹿角囲碁会の会長や秋田県囲碁会の副会長を長年務めるなど囲碁の普及にも貢献した。死後、その功績を記念して「関威杯争奪戦」が設けられ、現在も続いている。昭和49年12月26日没、享年82歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『秋田県議会百年のあゆみ』、『花輪の昔を語る』。

せき たつぞう

関 達三 1885（明治18年）～1925（大正14年）

後藤新平市長のもとで東京市政刷新に尽力

明治18年2月5日、「天王さん」と呼ばれていた関家の^{ひろし}広路の長男として花輪に生まれる。小学校時代より理科・数学を得意とし、32年上京して郁文館中学校入学、36年4月同校卒業。この年の夏、東京から当時では珍しい自転車で帰郷して皆を驚かせた。37年仙台第二高等学校へ進むが、病を得て1年で退学し花輪へ帰る。

花輪では養鶏を始め、白色レグホンの研究に取り組んで実績を上げ、また、町助役、郡書記などを務めた。大正6年要請されて県庁の庶務課に入り、県財政の不振立直しに敏腕を發揮した。その努力が買われて、2年後内務省監察官に抜擢され、東京市の監察を担当した。疑獄事件などで乱れていた東京市政の一大革新をめざしていた市長後藤新平に懇望されて、東京市役所に入ったのは10年2月。新設の監察課の主査となり、冷徹適正なメスを揮い、市政刷新を成し遂げて各方面より高く評価された。大正14年2月25日没、享年40歳。

<参考>『花輪町史（宮城一杉著）』、『鹿角市史第三卷上』。

せき つねしげ

関 常重 1825（文政8年）～1896（明治29年）

幕末～明治の算数家

文政8年12月16日、常宥の長男として花輪に生まれる。通称純蔵、号眺翠。江戸後期、祖常興が関流算法を研究して『算数理解鈔』を著して以来、代々算道を伝授する「数学の家」となった。常重はこの家学を受けつぎ算法の師となって懇々と教授した。謹厳実直な人柄で人々の尊敬を集め、郡内外から数十人の門弟が集まったという。数学の外、発句、謡曲、礼法、茶儀にも通じた文化人でもあった。明治29年8月9日没、享年70歳。

<参考>『鹿角市史第二卷下』、『秋田人名大事典』、『鹿角志』。

せき なおうえもん

関 直右衛門 1873（明治6年）～1943（昭和18年）

鹿角の観光に新時代を築いた実業家

明治6年9月5日、宮川村宮麓字湯端に勝蔵とトラの二男として生まれる。幼名は鶴蔵。34年、29歳の時大志を抱いて仲間と北海道に渡る。山子^{やまご}を郷土から募集して造材事業に従事させた。王子製紙会社、三井物産との造材請負で毎年20万石から50万石を出材して「関木材部」の地位を築き、日本一の山林王と称された。事業はその後、樺太や満州にまで及んだ。鷓川地域の造材流送事業対策として広大な土地を入手、関農場として1400町歩余の土地を得たが、その後自作農創設により小作者135人に土地を解放し、「五代 関直右衛門」の記念碑が建立され感謝された。

昭和6年花輪線全線開通を機に関直旅館を大改造して近代的な湯瀬ホテルを開業した。また玉川温泉の権利を得て、県道の開発に寄付金をして工事を促進、この功勞で紺綬褒章を受章。ホテルに投宿していた朝日新聞記者杉村楚人冠が八幡平観光中に落馬した際、直右衛門が「落馬記念碑」を建立した縁で、八幡平や湯瀬温泉が全国的に紹介報道された。昭和18年9月27日、宮川村々長現職のまま死去、享年70歳。

<参考>『関直右衛門伝（川村薫著）』、『鹿角市史第三卷下・第四卷』。

せき ひさし

関 久 1925（大正14年）～1995（平成7年）

郷土史家、郷土芸能の振興、かるたの普及等に尽力

大正14年4月1日、威^{たけし}とキヨの三男として花輪町船場に生まれる。昭和19年（1944）秋田師範学校を卒業後出征し、神風特攻隊員となるも終戦を迎え帰郷。その後、花輪小学校花軒田分校の教員を皮切りに、製材業の（有）鹿角農村工業や鹿角時報社に勤務。さらに、花輪町町会議員を経て、花輪町図書館長、花輪公民館長、鹿角市商工観光課長、鹿角市議会事務局長などを歴任する。

一方、『菅江真澄遊覧記』、「昔語り」などの民俗、『鹿角方言考』などの文献を渉獵して「きりたんぼ」の発祥地が鹿角であることを解明。また、「花輪かるた会」を設立し、子供たちにかかるたを通じて古典に親しんでもらおうと、佐藤正二らと共に子供会対抗による「小倉百

人一首かるた大会」を発足させ、その普及に全力を傾けた。さらに、郷土学習教材編集委員会の委員長として、鹿角の昔話の発掘・採録に取り組み、平成3年(1991)『陸中の国鹿角のむかしっこ』、同4年『陸中の国鹿角の伝説』を出版。また、花輪の町踊り、^{したかわはら}下川原の駒踊りの復活にも取り組む。なお、鹿角市と東京葛飾区との交流は、葛飾四ツ木小学校校長が久と秋田師範学校の同級生であったことから始まり、現在も続いている。平成元年(1989)鹿角市議会議員に当選し、副議長も務める。平成7年11月15日没、享年70歳。

<参考>『上津野第16号』、『花輪の昔を語る(佐藤政治編著)』、『私の東山(関久著)』。

せき ひろし

関 浩 1895(明治28年)～1946(昭和21年)

果樹園芸の技術者、全国の果樹産地で技術指導

明治28年2月26日、峰太郎とトヨの三男として花輪町舟場に生まれる。花輪小学校卒業後、祖父久兵衛の始めた「まるめろ」栽培の影響から神奈川県庁の果樹技術者となり、大正7年(1918)には農商務省興津園芸部に転じ、果樹栽培の研究に従事。この間、全国の果樹栽培産地を調査して、それらの技術指導を行う。その成果をまとめた11年発行の『実地踏査果樹栽培法』は、当時の果樹技術者たちの必携の書となった。関が行った果樹栽培の具体的な指導例として熊本県球磨^{くまもと}地方の梨栽培がある。ここは寒暖の差が大きく、霜による果樹への被害が発生していたが、これに対する関の晩霜対策が産地の安定的発展に寄与したとして評価された。また、鹿角地方の「まるめろ」栽培や鹿角りんごの技術的な研究の成果も、これらの発展に貢献している。その後、第二次世界大戦の空襲で、川崎市の自宅などが延焼したことから鹿角に帰郷。翌昭和21年11月10日死去、享年51歳。

<参考>『鹿友会誌』、『明治前期りんご栽培技術史(青森県経済部りんご課編著)』。

せき まさこ

関 昌子 1916(大正5年)～1995(平成7年)

鹿角の歌人

大正5年4月1日、威とキヨの長女として花輪町舟場に生まれる。昭和8年(1933)、秋田県立花輪女学校を卒業。祖父峯太郎の影響で花輪の俳談会に参加し、多くの俳句・短歌・詩を詠んだ。号は瀬木昌子。9年、発行された句誌『俳味』第一号で高得点を得、同年の花輪小学校の『母校創立60周年記念誌』に詩文が掲載された。結婚後、樺太で生活。終戦後帰国し、秋田県庁職員の傍ら、花輪俳談会で活躍。25年戦後復活した花輪短歌会でも多くの作品を発表、31年に創刊された『文芸はなわ』にも詩が収録されている。また戦死した弟仁の遺稿歌集『桑の実』をまとめ出版した。50年開催の俳人の忌を修する『万華忌』でも秀作が掲載されている。平成7年12月19日没、享年79歳

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『母校創立60周年記念誌』、『文芸はなわ』。

せき みねたろう

関 峰太郎 1868（慶応4年）～1896（明治29年）

鹿角の音楽教育の嚆矢となり、歌人としても活躍

慶応4年8月12日、久兵衛とスワの子として花輪町に生まれる。三代目関久兵衛が戊辰戦争に出陣して、尾去沢の峰を超えるとき孫出生の知らせを受けたことから、峯太郎と命名された。明治22年（1889）、秋田師範学校を卒業し、花輪小学校の訓導となる。24年、小山善五郎と一緒に作詞・作曲した「花輪小学校運動会の歌」は、運動会の行進で歌ったもので、大正時代まで歌われたと記録されている。花輪新田町の馬検場をスタートして、「ラッパの合図ともろともに 勇んで進む四百人 運動会の旗立てて 六日町より谷地田町」を通り、東山の久保平まで行進した。鹿角郡でオルガンを演奏した最初の人とも言われている。

峰太郎は歌人でもあり、万葉集研究で著名な国学者で歌人の佐佐木信綱が主宰する明治27年発行の『明治歌集』に三首が入選し収録されている。なお、この歌については平成元年（1989）2月発行の『文学的出発期における啄木の周辺（上田哲著）』は、石川啄木に先行する岩手歌壇の秀歌としている。明治29年5月30日、病のため早世。享年27歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『花輪の昔を語る（佐藤政治著）』、『花輪小学校沿革誌創立90周年記念会』。

せき りゅうたつ

関 隆達 生没年不詳、幕末期から明治期の人

尾去沢の御銅山医師

御銅山医師で、山先青山家10代青山金右衛門羊我（庄蔵）の娘婿となる。嘉永2年（1849）、蝦夷の探検家で北海道の命名者でもあった松浦武四郎が尾去沢鉾山を来訪した際、義父とともに松浦を案内している。戊辰戦争では、義兄の11代青山庄蔵^{ながしげ}とともに花輪隊の役医として参戦している。明治6年（1873）12月、前年の学制発布によって寺子屋等の廃止が予見されるに至り、その存続をはかる「家塾願」が提出されたが、その花輪通の提出者の中に関隆達を含めた6名の医師の履歴書が付されている。当時、これらの医師も寺子屋教育に関わっていたものらしい。

<参考>『鹿角市史第二巻下』、『鹿角のあゆみ』、『花輪小学校60周年記念誌』、『鹿角日誌（松浦武四郎紀行集）』、『青山家談叢（青山隆一編著）』。

せきりょうすけ

関 良助（良輔） 1800（寛政12年）～1822（文政5年）

相馬大作に共鳴して津軽藩主を襲撃

花輪御給人関右平太（小田島改め）とトヨの長男として花輪に生まれる。骨格すぐれて武を好み、17歳で乞われて浄法寺の関与茂七の養子となり、福岡人下斗米秀之進（のちの相馬大作）の門に入って文武に励む。北方防備のための人材育成をめざした秀之進の道場では、学科の他に武技・実戦を教え、多くの門人を集めていた。

文政3年(1820)津軽藩主第9代寧親襲撃を決意した秀之進の本当のねらいは暗殺ではなく、隠居させることだったとされる。背景には、寧親のワイロ手段により、10万石津軽藩が20万石の盛岡藩より席次・官位が上であることへの義憤があった。秀之進は従弟の惣蔵、門人の良助・一条小太郎、他2名の計6人で文政4年4月23日、津軽藩主一行を橋桁山(大館市白沢付近)で待ち伏せたが、計画が事前に洩れて一行は日程を変更し、襲撃は未遂に終わった。事件後江戸へ出奔した秀之進は相馬大作と名乗り、妻子や良助と共に潜伏するが、10月に逮捕され、大作と良助は翌文政5年8月29日、断首の刑に処せられた。大作33歳、良助22歳であった。2人の墓は岩手県二戸市の龍岩寺にある。

<参考>『上津野No.36』、『鹿角志』、『鹿角のあゆみ』、『鹿角市史第二巻下』。

せたいし きよじ
瀬田石 喜代治 1874(明治7年)～1946(昭和21年)

鹿角におけるりんご袋掛け栽培を始めた一人

明治7年5月5日、茂とイツの次男として花輪村に生まれる。花輪小学校卒業後、盛岡国民農場で農業を学ぶ。37年花輪で瀬田石喜代治、村山栄司らがりんごの虫食い被害を防ぐため、りんご袋掛け栽培を始めた。昭和3年(1928)秋の大嘗祭儀式用のりんご栽培の御下命を受け献納、同年御大典記念の京都大博覧会には紅玉を出品した。18年頃は大戦による人手不足などからりんごは無袋栽培に切り替わっている。昭和21年8月31日没、享年72歳。

<参考>『鹿角市史第三巻上下』。

せんじろう はまだむら
千次郎(浜田村) 生没年不詳、幕末期の人

大湯南部家に召し抱えられた刀鍛冶

大湯南部家『御次留帳』1865年(慶応元年)6月頃の記録では、千次郎に対し「その方儀、刀鍛え出し献上仕り度き旨願ひ出差し上げ御取納め成られ候。深切之心得神妙ニ思召候。これに依り御賞の為只今御米壹駄下し置かれ御用鍛冶仰せ付候間、猶家職出精御用滞無相勤候様心懸申す可き旨仰出さる」とある。この頃は世情騒然の時期であるので、大湯南部家においても刀鍛冶を命じたものであろう。千次郎については、領内の「浜田村鍛冶吉右衛門子」とあり、神刀一腰を献上したとある。なおこの打刀物の技術は、のちの日清戦争時に古川村に設置されたと言われる鍛刀所につながるものと思われる。

<参考>『鹿角市史第二巻上』。

そうま だいさく
相馬 大作 1789(寛政元年)～1822(文政5年)

津軽藩主暗殺未遂事件の首謀者

盛岡藩の二戸郡福岡村に生まれる。本名を下斗米秀之進しもとまいひでのしんという。18歳で江戸に出た秀之進は、名剣士として知られていた紀州藩士平山行蔵の門下となり武道に精進、四傑の一人と

呼ばれるほどに腕を挙げて帰郷し、郷里福岡で講武場兵聖閣を設けて武術の教授となった。時に文政3年（1820）、盛岡藩主の利敬が39歳の若さで世を去り、遺領をまだ14歳の利用が継いだ。利敬の早すぎる死は、津軽藩に対する積年の鬱憤が原因といわれる。当時利用は14歳で無位無官、それに対して盛岡藩に反旗を翻して独立した津軽藩の寧親は従四位下侍従に叙任されていた。このことに不満を抱いた秀之進は、寧親に果たし状を送って辞官隠居を勧め、聞き入れられない時には「侮辱の怨を報じ申すべく候」と暗殺をほのめかした。

秀之進は江戸から帰国途中の寧親を秋田藩橋桁山（大館市白沢付近）で狙撃しようと計画、文政3年（1820）10月7日、小豆沢の大日堂に寄り、一行が火急に津軽に向け通る旨を壁に墨書（後に火災で焼失）し、大湯下の湯平塚吉左衛門方に湯治と称して逗留、濁川街道の实地踏査や情報収集に努めた。翌年4月23日計画を実行しようとしたが仲間の密告によって失敗した。この前後小坂の小笠原半左衛門家、毛馬内の泉澤修齋家などに潜伏したとされる。事件後、秀之進は藩を出奔して江戸に逃れ、「相馬大作」と名を変えたが、同年幕吏に捕縛され、翌年斬首の刑に処せられた。この時、秀之進と行動を共にし処刑された鹿角の士に、花輪御給人で山口流剣術関右平太の子の関良助がいた。この事件によって津軽寧親は隠居に追い込まれており、結果的には秀之進の目的は達せられたことになる。当時の江戸市民は秀之進の行動に大いに感動し、この事件は「相馬大作事件」として講談や小説の題材としてもはやされた。また、水戸藩の尊王攘夷論者の藤田東湖や長州藩の吉田松陰などに強い影響を与えたといわれる。文政5年8月29日没、享年33歳。

<参考> 『鹿角市史第二巻下』、『南部藩・参考諸家系図』。

だいこうじ まさちか
大光寺 正親 生年不詳～1616年（元和2年）

花輪の初代館主

大光寺弾正政景の子。左衛門佐光親のち正親を名乗る（『参考諸家系図』）。家名は津軽大光寺の在名による。天正18年（1590）頃に南部氏の命により城代として花輪館に入城したと推定され、花輪・尾去・石鳥谷・三ヶ田・夏井5ヶ村3千8百石を賜わる。花輪の町づくりは大光寺氏により行われたと考えられている。九戸争乱では信直方についた。菩提寺長福寺は花輪館南館南麓（現・長年寺）に創建されたが、延宝2年（1674）中野氏菩提寺長年寺と替わって現在地の花輪下堰向に移された。没年は元和2年とみられる。

<参考> 『鹿角市史第一巻・第二巻上下』。

たかぎ しんすけ
高木 新助 1872（明治5年）～1948（昭和23年）

文化・教育・産業振興に尽力したクリスチャン

明治5年2月14日、千代とトシの長男として青森県三戸町に生まれる。高木家は斗南（現・青森県三戸郡・北郡）に移住した会津藩士で、祖父助三郎は戊辰戦争に従軍、一家か

ら2人の戦死者と子女4人の自刃者を出している。

新助ははじめ三戸小学校に奉職していたが、明治23年、先に大湯に来て呉服を商いしていた母のもとに来住、商業や鉱山業などを転々とする中で、ハリストス正教の洗礼を受けて生涯信仰に生きた。浅井小魚や諏訪富多らと親睦を深め、短歌や俳句（俳号「六山」）に親しむ一方、十和田湖の「日本八景当選記念碑」の紫明亭への建立や、大湯町の都市計画案の作成、十和田湖を中心とした大湯町の発展につとめた。昭和8年の大湯郷土研究会の発足に際してはこの企画・運営にあたり、また、大湯環状列石の発掘記録を担当し、出土品の保存・管理につとめた。「高木新助日記」は諏訪富多著の『大湯環状列石発掘史 全編』の基礎資料となっている。昭和23年6月21日死去。享年76歳。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角市史第一巻・第三巻下』。

たかすぎ じゅうえもん

高杉 重右衛門 1889（明治22年）～1964（昭和39年）

地方行政農事に尽力・歌人

明治22年、高杉由太郎とヒテの長男として尾去沢西道口に生まれる。39年県立秋田農業学校本科を卒業し、鹿角郡役所に勤務する。41年鹿角郡農会幹事技師となり、農業技術の改善に尽力した。「高杉^{かんせい}汨西農園」を創設し、率先して園芸作物の普及を図ったという。大正5年（1916）花輪町書記、9年鹿角郡農会評議員となる。その後、数々の役職を経て、昭和12年（1937）尾去沢町会議員となり、のち同町長、秋田県議会議員などを歴任した。

重右衛門は、大館市十二所と花輪を結ぶ路線の必要性を早くから強調し、県道としての実現に尽くしたが、その努力は34年に開通を見ている。また、露星と号して若年より歌に通じ、『明星』『文庫』等の中央文芸誌に投稿、地元鹿角時報社には「花輪小唄」をはじめ、郷土色豊かな詩歌を多く寄稿した。39年、長年にわたる地方行政と地域振興に多大な貢献をした功により勲六等瑞宝章を授与。昭和39年1月20日死去。享年75歳。

<参考>『鹿角市史第三巻上下』、『鹿角市先人顕彰集成』。

たかすぎ しんいちろう

高杉 新一郎 生没年不詳、明治から昭和期の人

秋田県樹苗同業組合の設立総会発起人の一人

尾去沢の人。大正11年（1922）、秋田県樹苗同業組合の設立総会の発起人として、大湯の瀬川寅吉とともに出席したのが尾去沢の高杉新一郎であった。13年7月、花輪町で開催された秋田山林会第17回総会のあと、郡内林業状況についての視察が行われた。その日程は、花輪町農会の^{まりゅう}杞柳による^{やなぎごうり}柳行李苗圃の観察のあと、尾去沢大屋布の高杉新一郎苗圃二町歩を訪れ、杉・落葉松を主とする一、二年苗の成育ぶりを見学したという。同氏経営の苗圃は数ヶ所を合して約14町歩、販売は杉その他で100万本に達したという。昭和10年（1935）、新一郎は秋田県山林樹苗同業組合の苗圃2等賞に選ばれている。

<参考>『鹿角郡産業調査書』、『鹿角市史第三卷下』。

たかすぎ ぜんまつ

高杉 善松 1915（大正4年）～1986（昭和61年）

花輪ばやしなどの三味線の盲目の達人

大正4年3月20日、尾去沢西道口に生まれる。盲目の三味線の名手柴平の高杉春庭に師事。花輪ばやしや町踊り、鹿角民謡など鹿角に伝わる民俗芸能の唄と三味線の天才的な達人であった。多くの弟子に技芸を伝え育成すると共に町民に楽しみや感動を与えた。特に現在、花輪ばやしの三味線を演奏する芸人たちは、すべて彼の弟子であった。昭和53年、秋田県文化功労芸芸表彰者。昭和61年7月21日没、享年71歳。

<参考>『高杉善松の軌跡』、『花輪まつり』。

たかすぎ ようすけ

高杉 洋介 1913（大正2年）～2008（平成20年）

孤高のアイヌ画家

大正2年2月10日、尾去沢の西道口出身の末吉とヨシの長男として日立市に生まれる。5歳の年北海道に渡り17歳まで樺戸郡浦白町に住む。18歳で上京、肖像画学校を経て、昭和10年（1935）太平洋美術学校（校長は中村不折）に入学、卒業後尾去沢中学校の助教諭として図工科を担当していた。25年12月アイヌ民族絶滅寸前を新聞で知るや、山深い浦白町でアイヌの子弟と勉学をともにしたことから衝撃を受け、翌年北海道へ渡る。有名なアイヌ酋長の貝沢松太郎翁から紹介状をもらい各コタンを28年間も巡り歩き、長老から伝承されてきた生活習慣、伝承文化、伝説および生活環境などを忠実に写生し表現描写した。さらにアイヌ民族のもつ自然に対する愛情は、自然の一切を「神」として崇め、祖先からの神謡—ユーカラの精神こそ後世に残すべき「心の遺産」であると悟り、超現実派の内面表現の画道をきわめた。洋介は、アイヌ思想には自然を愛せる叫びと自然に感謝する自然観があり、人々が見習うべきアイヌ文化があると訴えている。

美術団体の三軌会に創立以来49年間所属、昭和54年2月アトリエで倒れ18年間休会したが復帰、評議員などを歴任。鹿角市内では個展を多数開催し、平成5年6月鹿角市特別文化功労章を受章。平成20年5月23日没、享年95歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『ユーカラの世界（画集・自分史）』。

たかせ きちごろう

高瀬 吉五郎 1904（明治37年）～1979（昭和54年）

教育者・郷土の歴史解明に尽力

明治37年、八幡平夏井村の海沼家に生まれ、花輪の高瀬家の養子となる。ペンネーム吉一郎。鹿角地区の小、中学校教員や校長を務め、そのかたわら錦木古川の黒澤家に残る細布に関する文書目録の作成や地元紙に歴史・民俗研究・古文書解説・聞き書きを発表するなど、郷土史や民俗資料の掘り起こしにあたった。晩年は花輪史談会の古文書解説の講師や『花輪

町誌編纂資料』の解説、執筆を担当した。昭和54年没、享年75歳。

<参考>『鹿角市史第四巻』。

たかせ ひろし

高瀬 博 1921（大正10年）～2004（平成16年）

鹿角の歴史や伝説を書き続けた郷土史愛好家

大正10年3月31日、慶造とトミの長男として七滝（現・小坂町）に生まれる。昭和10年七滝小学校高等科卒業、秋田師範学校入学。師範学校卒業後仙台予備士官学校に入隊して、満州さらに南方へ派遣された。終戦で復員した後、鹿角郡市内の小学校教師として、元山小・毛馬内小・花輪小・大湯小、最後は十和田湖大川岱小中に勤務した。

はじめは、教育現場で観る子ども達の姿を、『子どもの生活秘話』全五集にまとめた。次いで、鹿角の歴史や文化、伝説などに関心を広げ、『十和田湖への招待』や『十和田湖の伝説』を経て、『秘録 和井内貞行』を出版するに至った。その後も、特に教職を退いてからは、一日中部屋にこもって執筆を続け、小冊子にして出版して行った。その数ざっと50余冊。鹿角の伝説や歴史遺産、歴史上の人物など多彩である。平成16年5月17日没。享年83歳。著書『秘録 和井内貞行』他多数。

たかはし うへい

高橋 右平 生没年不詳、明治期の人

小真木を初めて試掘した稼行人

幕末の頃ほとんど廃山の状態におかれていたと伝えられる白根銅山に、明治10年（1877）、初めて鉱区を設定し試掘願を申請したのが、毛馬内村の高橋熊太郎と高橋右平であった。高橋両人は、同12年に開業を決意し金銀銅鉱場の開坑に着手した。ところが、まもなく小真木で発見した土鉱が小坂鉱山と同種で古来の精錬方法ではどうにもならないことが判明、結局同17年12月その鉱区を辻金五郎へ譲渡している。このことは、両高橋の操業が伝統的技術によっていたことをよく示しているという。

<参考>『鹿角市史第三巻上』、『尾去沢・白根鉱山史』。

たかはし えいじ

高橋 栄治 1864（元治元年）～1927（昭和2年）

村長30年、十和田湖の境界を画定

元治元年12月26日毛馬内の高橋新之助の長男として生まれる。明治5年（1872）泉沢塾に学び、13年毛馬内小学校上等科卒業後、小山善五郎について漢学及び数学を学んだ。24年1月から30年2ヶ月にわたって七滝村長を務め、村民の協力を得て、小坂鉱山の煙害により窮乏した七滝村の復興にあたった。

栄治は偉丈夫で胆力がありかつ識見に富み、幾多の行政上の難問題を解決した。特に十和田湖の境界について、青森県が全湖の所有を主張するのに対し「神田川から御鼻部山を見通した線」に決めたのは、高橋の政治力によるもので「行政の高橋」といわしめた。また和井

内貞行を助けて養魚事業を支援した。十和田町町長を務めた高橋忠は孫にあたり、初代毛馬内消防組合長の若松徳治は実弟である。昭和2年7月11日没。享年62歳。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角市史第三卷上』。

たかはし かつぞう

高橋 克三 1888（明治21年）～1984（昭和59年）

内藤湖南研究と地域先人の顕彰に尽力

明治21年10月11日七郎とトミの長男として毛馬内古下に生まれる。42年秋田師範学校卒業後、毛馬内尋常高等小学校の教師となり、昭和21年教職を退くまで鹿角郡内各地の小学校校長として奉職した。明治44年勝又吉平の長女ヒサと結婚、吉平は田口多作の二男で妹の郁子は湖南夫人である。

大正4年秋田師範創立40周年に招かれた湖南と帰りの車中の6時間にわたる講義は、克三の一生を決定づけた。昭和5年鹿角の学問的系譜と人材の輩出を明らかにした『近世鹿角学統考』（昭和50年再版）は、湖南の校閲を経て刊行された。また13年青年学校や小学校高等科のための『毛馬内郷土読本』を編集した。40年、郷土の二先人の百年祭を催し『湖南先生と伍一大人』を刊行、地域社会の先覚の顕彰と史蹟の保存、石碑の建立に寄与した。55年5月「内藤湖南先生顕彰会」を設立し、初代会長に就任、『湖南』誌が毎年発行される。これらの活動が基盤となり、63年10月鹿角市先人顕彰館が開設された。

昭和45年に県文化功労章、47年に学制百年記念文部大臣章、59年に秋田魁新報創刊110年文化賞を受賞。室号は老松庵、碧雲荘。59年12月21日長寿をもって没、享年96歳。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『鹿角市史第三卷下』。

たかはし かるく

高橋 嘉六 1853（嘉永6年）～1917（大正6年）

馬耕法の普及と鹿角りんご確立に貢献した勸農指導者

嘉永6年、文吾とフヂの間に生まれ、山本喜七の三女ヨネを妻とする。幕末から、明治初期にかけ水田の代掻きに馬を使う慣行はなく、14年（1881）第4回種苗交換会で「田は三本鍬で打ち、さらに馬で掻くか、あるいは踏ませれば碎土にも保水にもよい」と馬耕法の効果を報告した。18年鹿角郡役所用係の高橋は、虫害状況の視察を命ぜられ、郡内の害虫駆除の指導に当たった。30年第6回鹿角勸業会が長年寺で開かれた際、郡農事奨励として農事試験場から馬耕器材が寄贈され、翌31年鹿角の馬耕法伝習が毛馬内で初めて実施された。また鹿角で栽培されたりんごは、明治9年吉田清兵衛、村山義和、高橋嘉六が苗木を植付けたのに始まる。29年毛馬内の嘉六らが結成した鹿角産業会は、花輪の果樹協会とともに、りんごの栽培技術の研究、病虫害の予防駆除などに精力的に取り組んだ。その他、養蚕と織物、農家の副業としての馬車ひきの指導にもあたり、特にりんごは石川理紀之助と津軽へ視察に出張した。大正6年11月18日没、享年64歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上・第四巻』。

たかはし くまたろう

高橋 熊太郎 生没年不詳、明治期の人

小真木を初めて試掘した稼行人

近世中期、尾去沢銅山とともに南部領内の主要銅山として栄えた白根銅山は、幕末の頃ほとんど廃山の状態におかれていたらしい。しかし、明治10年(1877)、ここに初めて鉱区を設定し試掘願を申請したのは、毛馬内村の高橋熊太郎と高橋右平であった。高橋両人は、同12年に開業を決意し金銀銅鉱場の開坑に着手したが、小真木で発見した土鉱が小坂鉱山と同種で古来の精錬方法ではどうにもならないことが判明、結局同17年12月その鉱区を辻金五郎へ譲渡している。このことは、高橋の操業が伝統的技術によっていたことが明らかであるという。

<参考>『鹿角市史第三巻上』、『尾去沢・白根鉱山史』。

たかはし しちろうべえ

高橋 七郎兵衛 1875(明治8年)?~1932(昭和7年)

毛馬内カトリック教会設立と毛馬内焼の創業に尽力

明治8年頃、天山堂若松屋の子孫として毛馬内の大店に生まれる。家業である雑貨商のかたわら、金融・保険業などの代理店も務めた。大正11年(1922)毛馬内商工会5回総会にて、米代川水電会社の電燈料値下問題が協議され、役員改選で会長に選任。また、屋敷内に窯を作り、名古屋から陶工の雲山を招いて毛馬内焼を創業し、主に食器類を製造した。

11年9月上町の高橋宅に小坂町カトリック教会のローゼン神父が寄宿、二階に祭壇を作って仮の教会とし、翌12年五軒町に教会を開いて鹿角初の幼稚園であるマリア園を併設した。それは神父の人柄に傾倒した高橋七郎兵衛の敷地提供による献身的協力によるものであった。昭和7年3月24日没、享年57歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

たかはし しほ

高橋 シホ 1868(明治元年)~1953(昭和28年)

郡内第一号の女子師範卒の教育者

明治元年12月8日、定志の次女として毛馬内に生まれる。幼少より勉強家で、21年秋田師範学校入学、24年卒業。十二所の成章小学校を皮切りに、小坂、山本郡森岳、大湯、毛馬内の各小学校を歴任するが、向学の念やみがたく、36年上京して国語伝習所に入学した。翌年文部省の中等教員検定試験に、合格者82名中女子2名の中の一人として合格。さらに本試験も合格して、41年5月から青森県弘前高等女学校教諭になり、昭和2年3月まで20年間、女子教育に専念した。その間、のちに参議院議員になる神近市子と同職し、教え子にはのちの石坂洋次郎夫人がいた。一生独身を通したが、校庭の早咲きの桜を愛でて、愛する毛馬内の生家の老松庵に移植した。現在も鹿角で一番早く咲く桜として、古町通りを

飾っている。昭和28年4月28日死去、享年84歳。

<参考>『十和田の先輩』、『秋田人名大事典』。

たかはし せつお

高橋 節夫 1932（昭和7年）～2010（平成22年）

鹿角の民話、昔話の研究者、語り部

昭和7年3月28日、保三とジュンを両親として毛馬内町に生まれる。鹿角工業高等学校を経て教員となり、玉川大学通信教育部を卒業。毛馬内、尾去沢、末広、花輪、小坂の各小学校に勤務し、小坂小学校教頭で退職する。

民話の宝庫鹿角において社会情勢の変化や後継者の不在などから、民話の語り伝えが厳しい状況に陥っていることに危機感を覚え、教職の傍ら鹿角のむがしっこ（民話）の採録、調査、研究を行う。48年『鹿角のむがしっこ』を、50年に『鹿角のむがしっこ（2）』を、55年に『鹿角のむがしっこ（3）』を自費出版する。鹿角市が郷土学習教材として平成3年（1991）、『陸中の国 鹿角のむがしっこ』を、翌4年には『陸中の国鹿角の伝説』を出版したが、その編集委員として活躍。5年、人間の人格形成と昔話の関わりを研究したいとの思いから、鹿角民話・伝説の会「どっとはらえ」を創立し、鹿角市内在住の古老のむがしっこのビデオ収録活動開始するとともに、6年から「鹿角のむがしっこのつどい」において語りを始めた。平成22年7月17日死去、享年78歳。

<参考>『鹿角のむがしっこを語ることについて（高橋節夫著）』。

たかはし ただし

高橋 忠 1910（明治43年）～1993（平成5年）

十和田町長・鹿角市議員として地方自治に尽力

明治43年6月24日、周治とサメの長男として毛馬内に生まれる。大館中学校卒業後、曙小学校教師となる。昭和13年（1938）満鉄入社。その後奉天の昭和ゴムに転じた所で終戦を迎え、2年間シベリアへ抑留される。

帰国後の23年、錦木村役場に勤務。32年より十和田町収入役に、次いで助役、38年より町長に就任して3期8年間町政にあたる。この間42年2月、鹿角郡広域行政調査会設立に理事として参画、鹿角市誕生の基礎に携わる。その後48年より鹿角市議会議員を2期務め、合併間もない市行政の確立、地域振興の推進、住民福祉の増進など地方自治の進展に尽力した。42年全国町村会、54年に東北市議会議長会から表彰、57年には鹿角市功労者に選ばれる。62年勲五等双光旭日章受章。平成5年5月4日死去、享年82歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『広報かづの（昭和57年11/16発行）』。

たかはし みちと

高橋 道人 1931（昭和6年）～2006（平成18年）

「みづうみ俳句会」を指導した俳人の一人

昭和6年10月13日、俊助とヒロの二男として毛馬内に生まれる。昭和25年県立鹿角

工業高等学校卒。翌夏に町職員となり、庶務、行政企画、交通対策、広報と総務部門で長く活躍、温厚で、まじめ人間として広く親しまれ、仕事に対する情熱にも定評があった。

一方、趣味の俳句は『べんがら』に入会、以後『馬酔木』を経て『野火』に入会した。この間句集『羚羊（かもしか）の眼』『虫時雨』を刊行、昭和52年野火賞を受賞した。また「みづうみ俳句会」の指導者としても後進に大きな影響を与えた。

平成14年芸術文化の向上で鹿角市文化功労者。平成18年7月28日没、享年74歳。

<参考>『木原の風（遺句集）』、『県広報あきた（昭和47年2月1日発行）』、『鹿角市史第三巻下』。

たかや あいじろう

高谷 愛二郎 1909（明治42年）～1993（平成5年）

勤労青年に対し情熱を燃やした教育者、歌人

明治42年6月24日、勝三郎（花輪出身で大館尋常高等小校長等を務める）とツヤの二男として大館町で生まれる。大館中学校、弘前高等学校を経て、昭和7年京都帝国大学経済学部を卒業後、中国大陸の国策会社に勤務し、この頃から短歌に親しむ。20年、終戦により会社は解散。中国で捕虜となるも21年帰国。しばらく行商に従事したのち、23年大湯に定時制高校発足と同時に教師となり、「勤労青年に対してアガペーの愛を以て接する」を信条として教育に情熱を燃やす。44年定年退職。以来「十和田短歌会」会員となり、40年代から60年代まで20年にわたり、秋田魁歌壇の常連として投稿し幾度も推薦歌人となった。晩年は千葉県柏市に移住、望郷歌人と呼ばれながら投稿を続け広く県内の短歌会に著名であった。この間に詠んだ短詩入選作品1万余点。著書に『十和田路：高谷愛二郎作品抄』がある。平成5年5月10日没、享年84歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『十和田路（高谷愛二郎著）』。

たき ぎたろう

滝 儀太郎 明治期～1969（昭和44年）

大正・昭和前期の郷土教育の先覚者

誠次郎とナカの長男として明治期に毛馬内に生まれる。

秋田県の郷土教育は第1次世界大戦が終わった大正7年（1918）ごろから始まり、深刻な不況におそわれた農村社会の救済のための自力更生の運動の一環としておこり、昭和初期の一大教育運動となった。それには多くの指導者が参加、実践しているが、滝もその一人で、県内各地で郷土教育を進めた先覚者であった。教え子には、秋田の版画家の勝平得之、北秋の書家の赤城藍城がおり、終生彼らの尊敬を受けたという。

長谷川小学校校長のとき『八幡平に親しむ』（昭和11年6月）を刊行、八幡平登山者のガイドブックとして、また宮川村の紹介と地域社会の発展とを目的に著述された。戦後、地域ごとにさまざまな文化団体が生まれたが、毛馬内では伊藤良三、滝儀太郎を中心に十和田郷土文化振興会がつくられた。昭和44年1月25日没。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

たき げんせき

瀧 玄積 1816（文化13年）～1880（明治13年）

三代にわたる医家で、毛馬内俳壇の指導者

安永2年（1773）八戸軽米の瀧尻善松の子玄維は故あって姉に家督を譲り、毛馬内で瀧の姓を名乗り医業を始めた。その子の医師圭純の長男純右衛門は、桜庭家家士21石6斗。次男玄積は藩主利済の侍医工藤玄良のもとで医業を研鑽して、帰郷し家業を継ぎ、瀧家は三代にわたり医道に励んだ。嘉永7年（1854）父圭純が病没し、翌年39歳のとき御役医を継いだ。明治6年（1873）家塾願をだし、地域の子弟のため、塾を開き「下町のお師匠さん」と慕われた。

また玄積は盛岡で於曾此一に俳諧を学び幕末の地方俳壇で活躍した。幕末の句集『狭布集』には兄純右衛門（俳号三巴）、実弟傳（俳号楚水）と共に玄積（俳号麟趾）の句が、祖父玄維（北川、一陽舎）の句も文化年間成立の馬淵里夕編の『錦木集』にその名が掲載されている。俳諧に親しんだ一族である。代表作に「夕榮や只落水の音ばかり」。

また大凶作であった明治3年、後に足尾鉍毒事件で活躍する田中正造が、花輪分局に着任し、救済窮民取調を命じられ、毛馬内通り貧窮者に対して無報酬の医療を施す医師として瀧玄積と勝又文友を本庁に報告している。幕末明治期に庶民に頼られた良医であった。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』、『瀧家の伝承』、『上津野No.31』。

たぐち しゅういち

田口 修 一 1919（大正8年）～2000（平成12年）

地方自治とスポーツ振興に尽力

大正8年5月9日、与次郎とヒサの長男として柴平村に生まれる。柴平村青年学校卒業後、三菱金属鉍業(株)尾去沢鉍業所に勤務。昭和25年柴平村役場に奉職。花輪町合併、鹿角市に合併の混乱期総務課長としてまとめ役に大きな力を発揮。教育次長を最後に27年間の公務員生活を終えた。退職後52年、地域住民の信望を集め鹿角市議会議員に初当選し、60年から4年間は副議長歴任など4期16年間にわたり地方自治の進展に寄与した。

特にスポーツ振興の足跡は大きく、陸上競技においては十和田八幡平駅伝全国競走大会の開催・運営に主体的に関わり今日の基盤を造りあげた。秋田陸上競技協会の重鎮として長年にわたり青森・東京間都道府県対抗駅伝の監督・総監督として手腕を発揮し、選手の育成・競技力向上に尽力。鹿角市体育協会の設立に中心的に参画し、2代目会長として10年間協会発展に寄与した。平成元年秋田県教育功労章、平成2年秋田県スポーツ功労章。平成8年勲五等瑞宝章受章。平成12年1月21日没。享年80歳。

たぐち でんしちろう

田口 伝七郎 1874（明治7年）～1944（昭和19年）

根市戸の急坂を整備・改良した浜田の篤志家

明治7年6月1日錦木浜田に生まれる。早くに盛岡に出て勉強し、若年にして市役所に勤

め、ついで岩手県庁に移り土木課長を務めた。昭和16年郷里に帰るや、推されて錦木産業組合長や農業会長となる。当時根市戸の台地には浜田の農家の畑があり、その台地に登る道は馬道といって空の荷車を引くにも容易ではなかったので、伝七郎はその不便さを痛感し急坂の改良に立ち向かった。自分の土地を無償提供、他人の土地を買求めて寄付したり、土地の交換をして、一人で測量して整備を完成させ、その苦労は想像に余りある。実直誠実な人柄で、仕事には厳格であった。酒を愛し談論を好んで人の頼みをよく聞き、村の相談役として多くの人に慕われた。昭和19年12月4日70歳で没。浜田の人たちは昭和21年4月8日急坂の中腹の広場に高さ3mほどの「田口伝七郎翁之碑」を建立し、その遺徳を顕彰した。

<参考>『十和田町の先輩（昭和47年）』。

たぐち ひろじ

田口 廣治 1896（明治29年）～1970（昭和45年）

農林行政に尽くした十和田高校PTA20年会長

明治29年9月21日慶之助とツイの二男として毛馬内中町に生まれる。毛馬内小学校卒業後、大館中学に入学したが病気のため三年で中退。健康回復して大正15年（1926）毛馬内町会議員を振りだしに毛馬内収入役につき、昭和26年（1951）8月毛馬内町振興農協組合長となり、42年には鹿角郡森林組合副会長となり林政の振興と国土緑化事業の推進に尽力した。昭和24年4月県立鹿角工業高等学校（現・十和田高校）PTA会長に当選以来20年務め上げ、校庭の拡張には率先して私有地を無償提供、校舎の増築では自ら有志の寄付金を募り、創業の困難を克服して「20年会長」として尊敬された。38年9月愛妻キミが交通事故のため急死、その鬱を晴らすため『きささぎ』や『十和田』に投句、キミの三回忌に子供らと企画し『句集花野』を刊行した。廣治の一句に「涼風にのりて踊の大太鼓」がある。昭和45年2月3日没、享年73歳。

<参考>『十和田町の先輩』。

たぐち まこと

田口 誠 1926（大正15年）～1988（昭和63年）

鹿角市政と県政の発展に尽力

大正15年6月22日、廣治とキミの二男として毛馬内に生まれる。昭和18年（1943）能代工業学校卒業後、19年鹿角工業学校（現十和田高校）の教員として奉職、兵役につき終戦。26年旧七滝村、小坂町に勤め、31年4月十和田町発足と同時に職員となり、47年4月鹿角市誕生とともに建設課長、十和田支所長などを歴任した。50年4月県議選に初当選して以来連続四期にわたり県政の発展に努め、農業経営の規模の拡大と生産性の高い複合経営の確立を提唱、国・県道の交通体系の整備促進に尽力した。また、鹿角職業訓練協会長、鹿角工業団地及び毛馬内住宅団地の造成、十和田高校の改築などにも務めた。さらに、県立大野台営農大学の中国人留学生7、8人を自宅に受入れ、農業畜産農家や農業設備を自ら案内して実地研修させ、日中友好の架け橋となって中国研修生との交流をはか

った。

「焦るな、怒るな、威張るな、腐るな、怠るな」という言葉を愛し、皆に「誠さん」と慕われた。県議会中、病魔におそわれ惜しまれて昭和63年11月30日没、享年62歳。剣道・居合道五段。鹿角市功労章受章。

<参考>『上津野No.15』。

たけいし そうび
武石 壮美 生没年不詳

明治～大正期の画家・彫刻家

生没年不詳。本名は壮。壮美は雅号である。大湯で洋服仕立業を営んでいた武石家の長男として、大湯に生まれる。鹿角市芸術文化協会の元会長武石佳久氏の伯父にあたる。若くして上京し、鹿友会の育英資金をもらって美術修業に励む。大正元年(1912)の春、小山正太郎の画塾で修業中、太平洋画会の展覧会に「元荒川」「つくし」の油絵2点を出品して好評を博した。日本画や彫刻にも精を出し、彫刻では文展入選を果たした。一方、朝鮮や満州(現・中国東北地方)を遊歴して見聞を広め、一時中国の安東女学校に勤務した。東郷神社付属美術館に文展入選の油絵がある。

<参考>『鹿角市史第三卷上』、『鹿友会誌15・21・26冊』。

たけざわ えいじ
竹澤 英次 1902(明治35年)～1990(平成2年)

学校教育及び社会教育の振興に尽力

明治35年12月31日、忠治とヒテの子として生まれる。大正13年(1924)11月教職につき、昭和47年(1972)に公職を退くまで校長、公民館長兼教育長を歴任する教育者であった。昭和2年受持ち児童と十和田湖にキャンプに行き、米・味噌だけで1週間野外生活を送ったことが、毛馬内小学校の林間学校の始まりと言われる。毛馬内小学校高等科の工業科を担当した際、スキーを子供達にやらせたい思いで、1人80銭の材料でスキーの製作を教えた。そして十和田山産の白樺材で作ったスキーは、3年県の展覧会に出品し1等賞となる。その美事さに驚いた師範学校工作主任は、その製作法を師範学校に導入し、やがて師範学校製作のスキーが天皇へ献上された。この事が、全県小学校におけるスキー製作の草分けになったという。

昭和45年十和田町芸文協の設立に協力、47年同協会会長に推挙され、49年鹿角市芸文協の発足にあたり副会長に就任した。52年春勲五等双光旭日章、同年秋に鹿角市文化功労者表彰、56年鹿角市芸術文化功労者。平成2年11月27日没、享年87歳。

<参考>『芸文かづの第7号』、『鹿角市史第三卷下』。

たけむら りゅうげん
武村 立元 1789(寛政元年)～1856(安政3年)

天保の飢饉のとき医療奉仕した仁医

武村家先祖は、武田信玄の子勝頼の弟であり、永禄7年（1564）上杉謙信との川中島の戦い第5戦が終わったころ奥州へ下向したという。江戸期には、操庵・伯順・立元・元通^{げんてき}・文中と5代続く医家であった。

立元は伯順の嫡子として寛政元年に生まれ、文化8年（1811）江戸にて3年間の医学修業を願い出て許された。天保4年（1833）10月、三年続きの大凶作のとき私財を投じて村民を救済し、無料で病人を診療するなど、神仏と崇められた。天保8年8月、大平の御山の杉1万150本を五分御取分にて献上（御取分山^{おとりわけやま}）、植立（御忠信植立山）の賞として3石および永代御役医を仰せ付けられた。仁徳高い花輪御役医として称えられ、安政3年9月1日没。享年67歳。

<参考> 『武村家覚』、『鹿角市史第二巻下』。

たてやま ていしろう

立山 弟四郎 1867（慶応3年）～1937（昭和12年）

郷土の産業・教育文化に尽力し、立山文庫を創設

内藤周蔵とミツの次男として生まれ、のち叔父の立山周助の養嗣子となる。明治41年（1908）、弟四郎は立山、内藤家の県内初となる小作人組合を作り、地主と小作人との親善を図った。43年には、瀬田石・森崎・西町・七滝地区において、県内最初の暗渠排水や耕地整理等の農地改良を実施し、耕地改善の指導によって「篤農家弟四郎」として高く評価され、種苗交換会の花形となった。また、同志とともに十和田観光開発や鹿角電灯会社を設立した。44年に、気象観測、農事奨励などの功により、緑白紫有功章を贈られている。

弟四郎の功績で最も周知されているのは、大正2年（1913）銀婚式の記念事業として、巨額の私費を投じて創設した「立山文庫」の存在である。年々県立図書館に次ぐ巨額の私財で書籍を購入し、文庫の経営・維持に努めた。文庫も経営と今に続く巡回文庫の回覧は、郷土の青少年に計り知れない恩恵を与えた。さらに、9年には勝又清毅氏とともに自動車会社を設立し、初めて鹿角に自動車を走らせている。昭和3年宮中より観桜会に召され、11年には農事功労者として観菊御会に召される光栄に浴したが、翌12年7月病を得て死去。享年70歳。

<参考> 『鹿角市史第三巻上・下』、『鹿角市先人顕彰集成』。

たてやま へいきち こうほう

立山 平吉（香峰） 生没年不詳、明治期の人

鹿角を代表する俳人・歌人の一人

花輪の人。香峰、吐月庵とも号した。明治24年（1891）4月、秋田市において月刊の詩文誌『秋田風雅集』第一号が発刊されたが、これには立山香峰、鎌田落谷ら4人が鹿角からを投句している。香峰の句に「梅か香や夜は一木とも思はれず」がある。

第二号から第七号までは、香峰ら四人のほか多くの鹿角の俳人が出詠した。また同じくこの頃発行された詩文誌として『江湖詩華』、句集に『ひとしづく』があり、鹿角から香峰ら

10人以上が出句している。また香峰は和歌にもすぐれ、明治中期の作風を示す例として、24、5年に秋田市から相次いで発刊された『秋田風雅集』・『江湖詩華』のうち、先の詩文誌に次の歌「月さゆる夜になく虫の声きけば 早や山里も秋は来にけり（立山香峰）」が収められている。

<参考>『鹿角市史第三卷上・下』、『秋田風雅集』、『鹿友会誌』。

たてやま りんぺい

立山 林平 1888（明治21年）～1918（大正7年）

将来を嘱望された天才数学者

毛馬内の素封家の立山周助とリヨの長男として下小路に生まれる。林平は毛馬内小学校から県立大館中学校、第二高等学校（仙台）、東京帝国大学数学科と進み、すべて首席で通したというほどの神童であった。中学校の時に東京数理学会に入会して高等数学を学び、4年生の時すでにスミスの代数学を独学で習得していたといわれる。

明治45年（1912）、東大2年在学中に世界的に権威のある「ダビットモルレー博士記念数学賞」を授与され、新進数学者として学会の注目をあつめた。大正3年（1914）の第八高等学校（名古屋）講師を経て翌年第五高等学校（熊本）教授となり、この年正七位を叙勲された。ますます将来を嘱望されていた矢先、その才を惜しまれつつ、30歳の若さで病没した。

<参考>『鹿角市先人顕彰集成』、『鹿角人物誌（奈良寿著）』。

たてやま れんきち

立山 廉吉 1898（明治31年）～1975（昭和50年）

立山文庫を継承した十和田図書館の初代館長

明治31年4月、第四郎とキサの長男として毛馬内に生まれる。大正8年（1919）7月北海道帝国大学農学部卒業後、昭和3年（1928）7月牧野富太郎の主筆になる『植物研究雑誌』に「秋田県鹿角郡地方に於ける植物方言等の事」を投稿、掲載される。昭和4年2月から12年3月まで毛馬内農業会副会長、14年2月から19年5月まで毛馬内産業組合組合長、7年から19年までプール神父の慈栄私塾の講師を務めた。先代第四郎が設立した私設立山文庫の蔵書約1万冊を昭和21年5月毛馬内町に寄贈、町はこれを基にして町立毛馬内図書館を創立し24年11月まで名誉館長となる。24年12月から42年3月まで約20年近く十和田図書館初代館長として奉職、図書館の充実、読書の普及に尽力した。特に「むかしを語る会（現・郷土を語る会）」を主宰し、郷土史資料編纂にも寄与した。45年11月勲6等瑞宝章を受け、49年11月第1回鹿角市文化功労章を受ける。昭和50年4月8日没、享年77歳。

<参考>『郷土植物方言考（立山廉吉遺稿集）』、『広報（昭和49年）』。

たなか けんぞう

田中 賢造 1931（昭和6年）～2019（平成31年）

鹿角果樹産業の牽引役として活躍、「北限の桃」の栽培にも貢献

昭和6年2月18日、佐吉とツヨの長男として花輪町久保田に生まれる。戦後、りんご栽培を引き継ぎ経営を行う。その後、鹿角果樹協会副会長や秋田県指導農業士となり鹿角地区のりんご栽培を指導するとともに担い手育成にも取り組み、鹿角の果樹産業の黄金期を支える。果樹農家として、りんごの単作に頼らず長女の就農に際しては温暖差のある鹿角の気候風土を生かした桃を昭和50年代初期から導入し、「北限の桃」のネーミングで全国に発信するとともに「由右衛門果樹園」として観光果樹園にも取り組む。これらは果樹栽培農家の安定経営のモデルとしても評価され、平成9年（1997）に農事改良の奨励または実行上功績顕著な者として、大日本農会の農事功績者表彰「緑白綬有功賞」を受賞している。さらに「農業技術研究グループ全国エンドー会」に加入して、全国の農業技術者との技術交流、栽培技術の研究、後進の指導に尽力している。なお朝鮮戦争直前の昭和24年3月18日花輪西山高瀬館跡地（田中家園地）にアメリカ空軍機が墜落してパイロット John C. Brown（ジョン C ブラウン）が亡くなった。20代の少年のような姿で殉職したパイロットについて、田中は慰霊碑を建て、はじめは母ツヨとともに、母死後は長女とともに70年にわたって慰霊を続けて来ている。平成31年2月8日死去。享年87歳。

<参考>『鹿角市史第3巻下』【災害史】。

たなか しょうぞう

田中 正造 1841（天保12年）～1913（大正2年）

江刺県役人として鹿角で農民救済、足尾鉍毒事件運動の指導者

天保12年、旗本六角家の名主である富蔵とサキの長男として下野国（栃木県）安蘇郡小中村に生まれる。幼名は兼三郎。明治3年（1870）3月、江刺県官吏に採用され花輪支局に着任。着任翌日から村々の窮民調査にあたり、1,800人に救援米を手当てする。勤務のかたわら江刺県学校の花輪寸陰館で内藤十湾に学ぶ。4年2月3日深夜、上司殺害事件が発生、正造が殺害の嫌疑により逮捕され、盛岡の牢獄に入る。明治7年4月5日、嫌疑が晴れ釈放となる。（獄中生活：2年10か月）獄中で書籍を読み漁り、その間に培った不撓不屈の意思と官憲に対する批判力が、その後自由民権運動に身を投じ、足尾銅山鉍毒問題に身を挺する原動力となった。大正2年9月4日没、享年72歳。

<参考>『鹿角市史第三巻上』。

たなか でんきち

田中 伝吉 1880（明治13年）～1943年（昭和18年）

花輪駅の場所選定を現在地に決定

明治13年2月15日、先代伝吉の長男として花輪六日町に生まれる。妻ヨシは阿部百助の長女。大正12年（1923）に開設した花輪駅の位置決定にあたり、町民を二分する大論争が起った。この時、助役であった伝吉は、町長石木田新太郎とともに、尾去沢鉍山と町

民の利便性を考慮して、花輪駅を現在地に決定したといわれる。この後13年11月、伝吉は石木田新太郎の跡を受けて、15代花輪町々長に就任した。昭和18年7月23日没、享年63歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角市史第三巻下・第四巻』、『鹿友会誌第45冊』。

たなか まさかつ

田中 正勝 1959（昭和34年）～2016（平成28年）

秋田の自然や歴史などにこだわった作曲家

昭和34年9月26日、逸郎とリヨの子として花輪町に生まれる。53年花輪高校を卒業後、尚美学園に勤めながら、独学で音楽を学ぶ。吉祥姫の名前で鹿角市花輪を活動の拠点に、秋田の自然、風土や風俗、歴史などにこだわった作曲家、そしてシンセサイザー奏者である。ユニークな曲風とダイナミックなサウンドは幅の広い年齢層の人たちの心をとらえて離さない。その後、千葉県船橋市に移住して活躍。

平成5年（1993）、代表作の組曲「美の国・秋田」の「水の情景」は秋田県内の水の情景、小坂町の七滝や六郷の湧水群など七カ所の風景をシンセサイザーの音楽で表現している。「炎の情景」は九戸政実の乱における鹿角市大湯の鹿倉城落城の悲劇をテーマにした「鎮魂の詩」で、前者より早く平成4年の「大湯鹿倉城落城四百年記念祭」で発表された。伝統的なリズムの大湯大太鼓とシンセサイザーがバランス良く音を織りなしている。「地域の壮絶な歴史と先人を学ぶ一助に」と鹿角市と小坂町の中・高校にこのCDを寄贈した。「シリーズ」の完結編として「後三年の合戦」をテーマにした「風の情景」を手がけている。

UFOやピラミッドにも関心があり、平成6年の「前奏曲 時空の川を越えて」は、尾去沢マイナランドで開催された「音と光とUFO」のイベントで演奏されたもので、音楽でUFOと交信することを目的としたが、実際にUFOが現れたという証言が残っている。田中の音楽は鹿角人の琴線に触れるものが多く、地元ラジオ局では、現在もリクエストがあり、放送されている。平成28年9月24日没、享年56歳。

たねいち れいざん

種市 霊山 1882（明治15年）～1945（昭和20年）

スケールの大きい気骨の書家

明治15年、三平とミキの長男として鹿角郡毛馬内に生まれる。本名は直三、号は霊山。幼時、同郷の豊口辨司に書を教わる。町の書家辨司は明治の書家長三洲に心酔、よって顔真卿の書風を取り入れた三洲の筆意が霊山の書の基本となった。33年東京の日比谷中学校を卒業後、大湯小学校、毛馬内小学校に奉職。大正7年（1918）和歌山県立日高女学校に出向し11年まで勤務。同年帰郷し旧制大館中学校で漢文と書の教師を務める。やがて吉田晩稼の書風にひかれ、晩年は内藤湖南に傾倒した。六朝の筆意を骨子としたスケールの大きさは定評のある所で、酒杯に親しみ「酒量群を抜く」と評された。^{あいあいざんじん} 靄々山人、^{りんせんろうじん} 林泉老人の別号がある。花輪幸稲荷神社前の巨大な石碑は霊山の書。昭和20年没、享年63歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』、『鹿角市先人顕彰集成』、『鹿友会誌』、『秋田書画人伝』。

たはら とうた

田原 東太 1916（大正5年）～1996（平成8年）

「みずうみ俳句会」会長として後進の指導に尽力

大正5年5月11日、惣太郎の長男として毛馬内甚兵衛川原に生まれる。毛馬内高等小学校を優秀な成績で卒業したが、家が貧しく上級学校進学をあきらめ、立山文庫の本を借りて勉強したという。2回の兵役の間に結婚、陸軍伍長で終戦を迎える。終戦後多田組勤務を経て昭和26年（1951）から自宅で農業に従事。この間、弟昭二が結核で公立大館病院に入院、自分も29年結核で同病院に入院し、これを機に俳句を始める。退院後は十和田毛馬内農業共済組合に51年の退職まで勤務。31年俳句で先輩格の昭二の死を契機に、昭二の後を追って『野火』に入会、43年同人となる。この間39年に「みずうみ俳句会」会長に就任、盟友高橋道人と共に鹿角市を代表する俳句作家として、句友や後進の指導にあたる。54年鹿角市芸文協より芸術文化功労者、平成4年（1992）鹿角市文化功労者、8年野火功労賞受賞。平成2年から4年度まで鹿角市芸術文化協会会長。『野火』最後の投句の一つに、「妻留守の厨の窓に移る秋」がある。平成8年10月死去、享年80歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『芸文かづの第23号』、『木原の風（遺句集）』。

たへえ よそべえ

太兵衛と与惣兵衛 生年不詳～1702（元禄15年）

元禄の大飢饉のとき地頭愁訴した鶴田村肝入

盛岡藩は、三年に一度は不凶不作に見舞われ、貞享4年（1687）から寛政5年（1793）までの106年間に、元禄、宝暦、天明の大飢饉をふくめ、46回の凶作があった。

鹿角では『雑書』元禄14年（1701）10月2日の条によると、鶴田村の肝入太兵衛と与惣兵衛が村人15人とともに盛岡へ上り、鶴田村に知行所をもつ与力大森助十郎の年貢の取立てがきびしく、日頃の手当も行き届かないとして、藩家老北九兵衛栄継の登城を待ちかまえ、訴状を差出した。助十郎は不行届の^{かど}簾をもって給地76石を召上げられ、およそ半地の現米15駄片馬の扶持方に格下げされて、鶴田村は給所地から御蔵入地となった。一方、太兵衛と与惣兵衛は無調法のゆえをもって鶴田村で断罪獄門に処せられた。その後鹿角では百姓の集団的な抗議騒動の記録は残されていない。

<参考>『鹿角市史第二卷下』。

たむら ただし

田村 唯志 1911（明治44年）～2002（平成14年）

教育者、内藤湖南先生顕彰会幹事長

明治44年12月12日、善之助とカツの長男として毛馬内に生まれる。代用教員をへて小学校の教師となり平元、錦木、川上小学校の各校長を務め学校教育の向上と充実に寄与した。退職後小坂町社会教育委員となり、小坂町教育委員会教育長は5年半にわたり務めた。

その後は温厚篤実な人柄で行政協力員、老人クラブ役員となる。昭和55年(1980)高橋克三が提唱した内藤湖南先生顕彰会の設立総会で幹事に推薦され、名幹事として組織の充実強化に尽力、資料の収集などに奔走した。さらに、内藤湖南・和井内貞行翁の記念館建設推進のために献身的に努力した。62年「鹿角市先人顕彰館」が完成、翌年開館にあたり奈良寿とともに連日連夜、展示構想から解説の実務にあたる。その間、59年の関西大学調査団の来訪、60年弘前大学と顕彰会とが連携して、第34回東北中国学会を実現させた。長きにわたる教育実践や社会教育・生涯教育に寄与、また内藤湖南先生の顕彰に貢献して、昭和63年鹿角市文化功労章、平成12年勲5等双光旭日章を受章。平成14年6月3日没、享年90歳。

<参考>『湖南第23号』、『鹿角市史第三卷上』。

たむら とくじ

田村 徳治 1886(明治19年)～1958(昭和33年)

日本の行政学の創始者

明治19年、根市富之助の四男として花輪六日町に生まれる。高等小学校卒業後教員準備場に入り、優秀な成績で教師となったが、準教員という資格にあきたらず、苦しい家計ながら、秋田師範学校に入学し勉学に励んだ。明治40年秋田師範を卒業し明德小学校訓導となり、翌年、秋田市三吉神社家分家の田村精一の養子となり、田村キンと結婚した。しかし、向学の心はやまず、上京して東京高等師範学校英語科次いで京都帝国大学法学部政治科に入学した。卒業後は、同大学院特別研究生、同助手を経て、大正9年(1920)には同助教教授に就任。さらに在外研究員を命じられ、11年から13年にかけてドイツ、フランス、アメリカに留学した。帰国後直ちに教授に任命され、昭和3年(1928)には、「法律学の価値に関する懐疑」という論文で法学博士号を授与された。

8年勃発した滝川事件により、通い慣れた京都大学と訣別した。退官組と残留組に分裂しかけた教授会にあって、徳治は強く慰留されながらも学問の自由と大学自治の立場を貫き辞職したのである。その後、立命館大学や関西学院大学、同志社大学、関西大学などにおいて教壇に立った。昭和33年11月25日没、享年72歳。主な著書に、『行政学と法律学』、『日本の興隆』など。花輪の長福寺に、大里武八郎の揮毫による「田村徳治翁碑」(昭和35年11月25日建立)がある。

<参考>『鹿角市史第三卷上・下』、『鹿角人物誌』、『秋田県人物大事典』、『鹿角市先人顕彰集成』。

たむら まさしろう

田村 政四郎 1891年(明治24年)～没年不詳

花輪ばやしの由来を解説

明治24年花輪谷地田町に生まれる。花輪ばやしの笛、太鼓の名手として知られ、東京富山房編集部勤務していた昭和35年(1960)に花輪ばやしの由来、起源を追及した『花輪囃子考』を発表した。笛の曲調を詳しく調べ、京都の祇園ばやしとの比較を行うなど、実

証的な論を展開した。未完原稿に『冷訓談第二話花輪囃子考』『花輪囃子用志の笛乃知識』『篠笛乃知識 追補結論編』がある。

<参考>『鹿角市史第三卷上・第四巻』。

たやま しんえつ

田山 真悦 1936（昭和11年）～2005（平成17年）

縄文焼から世界へ飛翔した「二層透かし陶芸」作家

昭和11年3月21日、津嶋直治とミエの三男として大館市岩瀬田ノ沢に生まれ、長じて大館の田山家を継ぐ節と結婚する。

新聞のチラシをよって精巧な花瓶を作るほど手先が器用であったことから、平成2年の第8回古代焼大会で大賞、特別賞を受賞したのをきっかけに、4年56歳のとき独学で「二層透かし陶芸」を発明した。9年に毛馬内の中村石油を定年退職して、本格的に陶芸の道に入った。主な作陶歴は、12年ハンガリー千年王国芸術祭典にて聖初代国王芸術大賞、13年海外芸術文化協会ローマ本部より「最良の芸術遺産」ナグラータ（伝承者）に認定、15年ルーブル美術館「美の革命展」にて壺「舞」によってグランプリ等、国内外の受賞多数。真悦は「陶芸が好き」が口ぐせで、一日中作陶に没頭し全身全霊をかたむけた。世界へ発信した真悦の陶芸は、現代日本の陶芸作家を代表する一人として国際的に高く認められるも、病気のため平成17年3月18日、68歳をもって没した。

<参考>『読売新聞（平成16年3月28日）「二層透かし」で世界を魅了する陶芸家』、『芸文かづの第37号』。

ちかない かずと

近内 一人 1835（天保6年）？～1868（慶応4年）

俳人で勤皇家

内藤泰蔵（湖南の祖母辰子の弟）の二男として毛馬内に生まれる。号王民。近内泰助の養子となり、15歳の時盛岡へ出て、澤出椿庵の塾に入り文武の研鑽を積む。山口流剣術を菊池鎌之助に、荻野流砲術を桜井忠太夫に学び、他に並ぶ者なしといわれる。また、於曾此一の門に入り俳諧をたしなむ。

慶応3年（1867）の大政奉還、王政復古と風雲急を告げる中、盛岡藩では勤皇（新政府派）か佐幕（奥羽越列藩同盟派）かで藩論を統一できないままに、4年（9月から明治改元）5月、奥羽鎮撫使九条総督を迎えることになった。警衛を命じられた近内は、6月1日一人抜け出し、盛岡の桜庭邸で割腹自殺した。享年34歳。勤皇家近内の自害は、同盟派に対する死の抗議であったといわれる。俳諧の師於曾此一は、病没と思って書いた一文と、後で割腹と知っての2篇の吊文^{ちようぶん}を贈っている。

<参考>『鹿角志（内藤十湾著）』、『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

ちば さそうじ

千葉 佐惣治 1858（安政5年）～1930（昭和5年）

大湯のハリストス正教会の草分け

安政5年9月17日、北家の家臣千葉与一郎の長男として、大湯に生まれる。祖父は戸田一刀流の達人で北家の剣術指南役を務めるなど、代々剣術の優れた家であった。幼少の頃は名代のキカン坊で、数々の武勇伝を残しているが、悪童変じて学問に熱中するや、血のにじむ苦心と努力で、漢学や新しい思想を身につけていった。最年少の19歳で西南の役に応募し、帰郷後小学校の教師になるが、3日間風邪で休んだという理由で、10年間勤めた教師を辞職する。その後商業を営みながら、村会・郡会議員として政治活動に身を投じ、小坂鉦山煙害問題、十和田湖観光宣伝、県道不老倉線開通などに情熱を傾けた。

この精力的活動の精神的支えがハリストス正教であった。幕末に来日したニコライの伝えたハリストス正教（キリストのギリシャ語読み）の洗礼を受けたのが、明治13年（1980）5月、大湯では2番目の受洗者であった。そして彼の感化を受けた青年たちが続々と入信し、明治末に県内で最も多い信者数を誇るまでになった。晩年は温郷の俳号で俳句、さらに短歌を詠み、昭和5年3月23日、自ら予言した時刻に死去した。享年71歳。

<参考>『温郷先生遺稿集（大湯郷土研究会）』、『ふるさとの先人たち（同前）』、『上津野No.1』、『鹿角市史第三卷上』。

ちば じゅうろう

千葉 重郎 生没年不詳、江戸後期の人

大湯の剣術・砲術師範

大湯においても天保期から家中諸士の稽古のため師範を置いていたこと、稽古場を建てていたこと、砲術稽古についてはなかなか趣旨徹底が難しかったことなどが知られる。天保8年（1837）12月、大湯南部家より家中諸士一統に対して、剣術は千葉重郎の取り立てにより武芸の稽古を行い、15年には「諸士一統剣鎗柔術共立仰付けられ候」、武芸取立中一カ年米一駄宛下し置かれる旨を達せられている。弘化2年（1845）戸田一心流長嶺七之丞より免許を伝授され、万延2年（1861）汲川仁兵衛に同流所伝を授与している。

<参考>『鹿角市史第二卷下』。

ちば ゆううえもん

千葉 祐右衛門 生没年不詳

幕末盛岡藩のエトロフ警備隊長

大湯を知行した北氏の家臣。18世紀後半からのロシア船やイギリス船の蝦夷地（北海道）来航を受け、幕府は東北諸藩に蝦夷地警備を命ずる。盛岡藩の松前出兵は寛政5年（1793）からであるが、その後箱館、東蝦夷地と続く。文化元年（1804）から盛岡・津軽両藩によるエトロフ警備が始まった。

文化3年5月26日、エトロフ島シャナに到着した警備隊隊長が千葉祐右衛門である。火業師として藩の砲術師範大村治五平56歳がいた。1年後の5月1日、ロシア人らがシャナ

へ上陸、大村治五平が捕虜となる。1か月ロシア船で過ごした後、リシリ沖で釈放されるが、「異国人に捕らえられ候無調法」として江戸の南部上屋敷へお預けとなり、その後盛岡へ移され、北監物へお預けということで4年6月から5年5月まで1年間、大湯の大円寺に牢居することになった。治五平はその顛末を『私残記』に書き遺している。指揮官格の千葉祐右衛門は種市茂七郎と共に、「家禄家屋敷没収」の刑を受けた。

<参考>『私残記』、『上津野No.11』。

ちょうざえもん

長左衛門 生年不詳～1658（明暦4年）

江戸初期の白根金山のきりしたん

仙台に生まれる。白根金山における五人組の結成は、きりしたん取締りによって促進されたという。慶安3年（1650）2月21日、金山山仕（師）の鍛治久七のもとにいた長左衛門がきりしたんであることを、毛馬内の角右衛門（または角左衛門）、白根の七蔵、久兵衛の三人が訴え出た。鍛治久七は山仕であるから、その宿には他国から集まってきた鍛冶や大工たちが常に同居していたであろうといわれる。直後、当の長左衛門は逃亡するが、探索の末秋田十二所で逮捕され、久七親子、五人組とともに盛岡に送られ、取調べを受けることとなった。その後、きりしたん長左衛門は江戸へ召喚されるが、慶安5年6月21日赦免の身となって盛岡に帰った。おそらく、改宗した結果であろうという。白根に戻った長左衛門は、二人扶持を与えられたが、明暦4年白根において病死している。

<参考>『尾去沢・白根鉾山史』、『鹿角市史第二卷上下』。

ちょうべえ

長兵衛 生没年不詳、江戸中期の人

新鍋座を興した毛馬内の鋳物師

享和3年（1803）2月、毛馬内の鋳物師長兵衛は新鍋座（鍋釜の鋳造販売を手掛ける組合）を立て商売したいと願い出て許された。毛馬内村の東西20間南北30間ほどの空地に鍋座を立て、秋田領に向けて販売を開始、同年7月には冶工として谷内延命寺の釣鐘を鋳造した。文化7年（1810）2月、長兵衛は秋田向けは4年前から他領入差留となつてから吹方を休んだが、再開したいので両鹿角永久吹方1ヶ年御礼錢20貫文を上納することを願い出て許された。また文政2年（1819）、閉伊郡野田通萩牛村の割石鉄山から鉬鉄^{こおり}124箇1,984貫、延鉄4箇60貫もの多量の鉄を買い入れている。このことは鹿角で鉄需要が高まり、長兵衛が鉄問屋的機能をもった鋳物師であったと認められる。

<参考>『鹿角市史第二卷上』。

つきもと こうはちろう

槻本 幸八郎 生没年不詳、明治期の人

尾去沢鉾山の基礎を作った目代

明治5年（1872）4月20日、尾去沢銅山の稼行は村井茂兵衛から政商の岡田平蔵に

引き継がれた。この時期井上馨は尾去沢の経営に深く関わっていて、6年目代として槻本を派遣した。目代とは、山主の代理人として現地経営の統轄に当たる者で、槻本はその後長く目代として職制の改革や洋式器械の導入に努め、鉾山隆盛の基礎をつくった。その後尾去沢鉾山は紆余曲折を経て、24年ついに三菱会社岩崎弥之助が一手に掌握することとなった。

<参考>『尾去沢・白根鉾山史』、『鹿角市史第三巻上』。

つじ きんごろう

辻 金五郎 生没年不詳

明治前期の小真木鉾山の経営者

東京市神田居住の人。幕末の頃ほとんど廃山の状態に置かれていた白根銅山の鉾区に、明治に入り、初めて館石・小真木にかかわる試掘願を出願したのは毛馬内村の高橋熊太郎・高橋右平であった。その後、明治17年(1884)12月、この兩人から借区の譲渡を受け、小真木鉾山の稼行人となったのが辻金五郎であった。

辻による小真木鉾山は、全国的に出色といわれる洋式技術への転換を図ったとされる。当時洋式機械をもって装備するに至ったのは、ドイツのフライブルク鉾山大学校を卒業して帰国し、小真木鉾山に招かれた大島道太郎の指導によるところが大きい。その後20年秋、辻らは新たに小真木鉾山会社を設立したが、小真木買収当初からその経営にかかわってきたとされる代理人の一人杉本正徳と三菱社々長岩崎弥之助との間で、21年6月譲渡契約が結ばれるに至った。この急転直下の譲渡により、小真木鉾山も三菱社の経営に移行することとなったのである。よって、辻金五郎が小真木鉾山を稼行したのは、わずか数年であったに過ぎない。

<参考>『尾去沢・白根鉾山史』、『鹿角市史第三巻上』。

つちだて いさ

土館 イサ 1928(昭和3年)～2007(平成19年)

俳人で、町踊りの復興や幼児教育に尽力

昭和3年9月28日、中村吉太郎とキヨノの次女として由利本荘市大町に生まれる。戦時中食糧統制の下、生魚の地区代表者として、花輪から義父市蔵、由利本荘から父吉太郎が秋田市に居住していた時、お互い年頃の子を持つ親同士により土館一郎と23年、結婚。以来、夫の家業を手伝う傍ら、花輪魚市場女子社員と茶道・華道を学び、花輪俳談会においては幹事として会長の阿部胡六を助け、俳人として活躍する。花輪俳談会発行の句集には「寿を祝う冬一番の寒き日に」などの句が載る。自らの句集『楓の花』を発行している。また一時期、衰頹していた花輪町踊りの復興に尽力し、町踊り保存会の副会長を務めた。さらに42年に、花輪で初めてのゼロ歳児から預かる保育施設「ひばり保育園」の園長を2年務めるなど幼児教育に貢献するとともに、花輪商工会婦人部長も10年務めるなど、地域の女性リーダーとして活躍した。また46年から33年間の長きにわたり、民生委員・児童委員として地域の民生の安定に貢献した。これらの活動が評価され、平成3年(1992)秋田県知事表彰、9年厚生大臣特別賞を受賞。平成19年11月27日逝去。享年79歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

つちだて いちろう

土 舘 一 郎 1923（大正12年）～1997（平成9年）

花輪魚市場の創設者

大正12年10月2日、市蔵とタミの長男として花輪町坂ノ上に生まれる。秋田商業学校を卒業後、出征。花輪に帰還後、父市蔵が創業した花輪地区公認魚配給所の業務を引き継ぐ。終戦後、いち早くトラックを配送に活用し、製氷施設の整備など進取果敢な取り組みを行う。昭和29（1954）年8月、花輪地区に鮮魚店を扱う株式会社に改編。さらに会社の成長に伴い、地方卸売市場となり、鹿角市のみならず大館市など秋田県北部、岩手県北部一帯へと商圈を広げ、地域への安定した食品供給の維持に努めた。東北の中心部である奥羽山脈のふもとに位置する鹿角は、古来鹿角街道、来満街道など流通網が発達していたため、各地から冬場の保存食糧として冷凍・塩蔵魚を取引する交流が続けられていた。このように魚に親しんできた土地柄を受け、いち早く大型冷凍庫を活用して鹿角・北秋地域の物流の拠点となる役割を担った。その業績により鹿角の食品衛生協会の副会長を務め厚生大臣賞を授与された。文化の面では、(株)花輪魚市場の女子社員の情操教育の一環として、茶道、華道を佐川宗研先生に出稽古をお願いし、各社屋に茶室を建て、自らも稽古に励んだ。茶道裏千家淡交会岩手支部「秀麗会」に所属し、2代目会長として茶道の普及に尽力。平成9年11月22日死去。享年74歳。

<参考>『株式会社花輪魚市場 HP』、『上津野 No23』。

つちだて いちぞう

土 舘 市 蔵 1902（明治35年）～1988（昭和63年）

鹿角の生鮮食品業界を刷新

明治35年、子之七ねのしちとスエの子として花輪町坂ノ上に生まれる。若き日、日本一の剣道場として著名な京都武徳殿で剣道の修行をし、明治神宮で行われた天覧試合に秋田県代表として出場するなど剣道に打ち込んでいたが、持病の悪化で剣道の道を断念する。代わりに京都で鮮魚店が繁盛しているのを見て家業を豆腐屋より鮮魚店に変更し、隆盛となる。その後、花輪実業会の役員として昭和7年（1932）、正札の価格表示がなされない商取引の解消に取り組む。14年消防業務や警察業務、軍の防衛業務に従う花輪警防團第二分團副分團長となる。15年戦時経済統制により、関係者の協力を得て株式会社花輪魚市場の前身となる花輪地区公認魚配給所を創業する。長男の戦地よりの復員に際して、家業を長男に引き継ぎ、34年頃まで秋田県水産卸の役員として秋田県の水産物の流通の拡大に貢献した。

事業に取り組む傍ら、第一回鹿角市芸術文化功労者で花輪の書聖と謳われた高瀬香汀の弟子となり、「一峯」の雅号で活躍する。35年には花輪ロータリークラブの立ち上げに参加する。昭和63年9月14日死去。享年86歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『株式会社花輪魚市場 HP』、『上津野 No23』。

てらさき こうぎょう

寺崎 広業 1866（慶応2年）～1919（大正8年）

鹿角郡役所に勤務、のち東京美術学校再建に貢献

慶応2年2月25日、秋田藩家老の家に生まれる。幼名は忠太郎、字は徳郷。秀齋、宗山などと号し、中年以降は広業を用いた。幼児から絵にすぐれ、16歳で秋田藩御用絵師の狩野派の小室秀俊に入門、19歳で阿仁鉦山に遊歴の画家第一歩を印したが、鹿角に至った時、親戚の鹿角郡長・戸村義得の配慮で郡役所の登記所雇書記になった。花輪坂上に居住し画業にも勤しみ、鹿角でも「達磨図」など後年明治画壇に雄飛した片鱗をうかがわせる作品を残している。生活は安定したが青雲の志は少しも弱まらず、明治21年（1888）、上京した。この時、一緒に上京したのが後に毛馬内町長になった田中虎二郎であるが、父に連れ戻されたという逸話がある。寺崎は挿絵を描きながら苦学を重ね明治期の南画の開拓に尽くした。31年、東京美術学校助教授に迎えられたが、翌年、岡倉天心校長排斥運動がおこり、天心派の広業は美校を去った。天心と橋本雅邦の日本美術院に横山大観、下村観山とともに広業も参加した。しかし34年、広業は美術学校教授に復し、野田九浦ら300人ほどの門下を育成している。文展審査員、皇室技芸員にも任じられて東都画壇で重きをなした。東京美術学校再建の功績を讃えて東京芸術大学美術学部の正門前に寺崎の胸像が建立されている。主要作品として『悉達多語天使』（1896、東京芸術大学）、『溪四題』（1909、東京国立近代美術館）がある。大正8年2月21日死去。享年52歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』。

てらだ たかのぶ

寺田 隆信 1931（昭和6年）～2014（平成26年）

先人顕彰館名誉館長を20年務めた東北大学名誉教授

昭和6年5月23日、歓二郎・みすの次男として兵庫県姫路市に生まれる。京都大学文学部史学科を卒業し、大学院に進学。37年から41年まで京都大学東洋史研究室で助手を務め、41年に東北大学文学部助教授として着任し、50年教授となる。以後平成7年定年退官するまで30年にわたり、東洋史講座における研究指導・教育に専念して多くの人材を社会に送り出した。また文学部長も務め、東北大学と文学部の管理運営にも尽力した。さらに、東北中国学会、東北史学会の会長として中国学・歴史学界全般にわたり指導的役割を果たした。東北大学退官後、名誉教授に推され、いわき明星大学の教授・学長を務めた。

鹿角市先人顕彰館の名誉館長に就任したのは、東北大学退官の平成7年から。当時の鹿角市長の要請を受けたもので、以来20年間仙台と鹿角を往復しながら、名誉館長として先人顕彰館の運営、内藤湖南先生顕彰会への助言・指導、機関誌『湖南』毎号への論文寄稿、さらに月1回の名誉館長講座の市民への開放、5千点余の書籍寄贈による「寺田文庫」等、鹿角のために大きな功績を残した。平成14年、鹿角市特別表彰。主な著書に『山西商人の研究—明代における商人および商業資本』『明代郷紳の研究』『紫禁城秘話』『中国の大航海者鄭和』『物語中国の歴史』などがある。平成26年8月11日死去。享年84歳。

<参考>『湖南第三十五号』。

とがし しょういち

富樫 正一 1923（大正12年）～2016（平成28年）

昭和後期から平成期の鹿角を記録した写真家

大正12年7月22日、母親の実家のある大館市馬喰町で生まれる。父親は扇田出身で、昭和5年（1930）一家で樺太へ移住、父は水産会社、母は小間物屋で生計を立てた。正一は早くから写真に興味を持ち、カメラを組み立てたりしたという。現地で兵役につき、終戦後シベリアへ抑留。24年頃帰国するが、健康を害してしばらく秋田市で療養生活を送った。28年尾去沢に転入し、職を転々とした後、精米所を営む。

30年代に入ると、自転車に乗って各地を訪れ、興味の赴くままに撮影して歩いた。その範囲は尾去沢のみならず、八幡平、花輪、錦木、毛馬内、大湯、小坂、十和田湖などの各集落に及んだが、93歳で亡くなる寸前まで、風景や人々の生活の様子、風俗、祭りなどを撮り続け、膨大なフィルムを遺した。ほとんど独学で、アマチュアに徹し、発表することを目的としなかったその写真に対する姿勢は、期せずして鹿角の歴史の貴重な記録を後世に伝えるものとなったのである。平成28年6月1日死去。享年92歳。

とぎわ ちよじ

兎沢 千代治 1894（明治27年）～1975（昭和50年）

錦果園で鹿角りんごを栽培し、りんご業界の発展に寄与

明治27年、市太郎とヒサの長男として花輪寺坂で生まれる。りんご栽培の兎沢徳蔵より苗木を分けてもらい、りんご栽培を始めたもので、昭和3年、御大典記念の京都大博覧会には、兎沢栽培の紅玉が出品された。昭和11年、兄枝と弟枝を判然として区分し、その個性を尊重することによって樹勢の均衡を確保するという独特の剪定法を考案したことから、他郡よりも弟子入りし教えを乞うものが多かった。

昭和24年に高松宮殿下および鷹司和子夫妻、35年には常陸宮殿下が、視察のため錦果園を訪れるという栄に浴した。錦果園に高松宮殿下夫妻の来訪を記念した石碑が建立されている。26年には秋田県果樹協会理事、鹿角郡果樹協会会長を務め、鹿角郡のみならず、秋田県全体のりんご業界の発展に寄与。また秋田県庁の果樹指導地が兎沢経営の錦果園に設置されことにより、りんご栽培技術の普及指導に協力した。35年に大日本農会有功賞、38年に農業で秋田県文化功労賞を受賞、49年には鹿角市文化功労者となっている。昭和50年花輪寺坂で没、享年81歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『鹿角のあゆみ』。

とぎわ とくぞう

兎沢 徳蔵 1870（明治3年）～1937（昭和12年）

明治・大正・昭和前半に鹿角りんごの栽培に尽力した篤農家

明治3年喜蔵とサンの長男として花輪寺坂に生まれる。明治27～28年（1894～95）頃、りんご栽培に取組み、40年代の柴平地区のりんご栽培急増を指導している。28年誕生の秋田県農会（石川理紀之助会長）が進めていた適産調（村々の実態調査によ

り町村是を定め経済を回復しようとする農業の経営診断)を石川門下の兎沢は明治31年から32年にかけて柴内村で実践している。明治32年頃からモニリア病、シンクイムシ被害、明治35年前後から小坂鉦山の煙害により収穫量が激減し廃園か他種転換かの状況に追い込まれた。ポルドー液の散布、シンクイムシ防除の袋かけなどが兎沢らにより取組まれている。大正7～8年(1918～19)もモニリア病、線虫被害が多発し、荒廃・廃園が相次いだが鹿角果樹協会長の兎沢は北海道帝国大学星野勇三博士を招聘するなど病虫害防除の技術指導、普及に奔走し復興に取り組んだ。昭和3年(1928)、御大典記念の京都大博覧会には兎沢栽培の紅玉を出品した。8年、花腐病や実腐病が発生し収穫量が激減したが、果樹協会は秋田県庁技師を招聘し防除方法の研修会を開催して困難を乗り越えた。10年、大日本農会功労者表彰。昭和12年10月急逝。享年67歳。その業績を讃えて寺坂稻荷神社に「兎沢徳蔵翁乃碑」が建立されている。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』、『鹿角のあゆみ』、『実地踏査果樹栽培法』。

とだて やすたろう

戸館 安太郎 1908(明治41年)～1992(平成4年)

八幡平地区の基盤整備・土地改良に尽力

明治41年12月26日、仁太郎とキヨの二男として松館村に生まれる。昭和25年(1950)曙村消防団長、31年八幡平村議会議員、33年曙村農業共済組合長を歴任、35年から助役に就任し、戦後24年制定の土地改良法は、土地所有者中心の法であり、根本的な制度改革が必要であるとして、農業構造改造事業を積極的に推進した。退任後は土地改良区理事長として農業経営の合理化と農業生産力を高めるために、これまでの耕地整理組合や水利組合を廃止して、農地の改良整備・開発・集団化を耕作農民自ら行う、土地改良区という組織の一本化を図った。44年に再び八幡平村議会議員から副議長、さらに鹿角市議会議員として地方自治と産業の振興に貢献した。昭和54年鹿角市功労者表彰。平成4年9月17日死去、享年84歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『鹿角市広報(昭和54年)』。

とよぐち えいたろう

豊口 鋭太郎 1873(明治6年)～1952(昭和27年)

秋田県特殊教育の先駆者

明治6年11月4日、木曾弥の長男として毛馬内に生まれる。秋田師範学校卒業後、東京英語学校で英語を学ぶ。27歳の若さで大湯小学校長、ついで毛馬内小学校長となり、間もなく師範学校附属明德小学校の首席訓導に招かれ、近代教育確立期の指導者として活躍した。その後、県内小学校長・視学等を歴任して優れた教育実践と特色ある学校経営を展開し、初等教育研究の中心に立ってこれを推進した。後に秋田県教育会長に選任され、会の改革、教育会館建設、ヘレン・ケラー来秋の実現等教育行政面でも敏腕を振るい、教育振興に多大の貢献をした。更に帝国教育会理事として昭和12年東京で開催の世界教育会議を運営し成功に導いた功績は大きい。同年6月、盲聾啞三重苦の聖者ヘレン・ケラーを秋田に招くこ

とに尽力した。県立の聾唖学校の基礎を確立した伊藤良三とともに、秋田県特殊教育の先駆者であった。

明治30年8月毛馬内小学校同窓会第1回の席上、鋭太郎は同窓会文庫の設立を提唱、32年8月に毛馬内文庫として創設。現在県立図書館や弥高神社に保管されている平田篤胤の資料は鋭太郎と諏訪富多の尽力によって保存されたものである。昭和27年9月6日死去、享年78歳。

<参考>『顕彰館パンフ』、『鹿角市史第三卷上・下』、『鹿角人物誌』。

とよぐち かっぺい

豊口 克平 1905（明治38年）～1991（平成3年）

世界を駆けた工業デザイナー

明治38年11月16日、亀五郎とヤシの二男として毛馬内に生まれる。大正14年（1925）東京高等工芸大学（現・千葉大学）工芸図案科に入学したのは、工業デザイナーへの第一歩であった。昭和3年（1928）振興産業工芸研究団体の「型而工房」を同人7名と設立、8年から34年まで通産省産業工業試験所に26年間勤め、その間、日本インダストリアルデザイナー協会（JIDA）の理事長となる。35年豊口デザイン研究所を設立、さらに武蔵野美術大学の教授に迎えらる。その後、JETROより「モスクワ日本産業見本市」の会場設計、「シアトル21世紀博」の日本館ディスプレイ、さらに40年第4回国際工業デザイン団体協議会国際会議（ウィーン）日本代表として出席、モントリオール万博の日本館ディスプレイを委嘱される。44年日本万博ディスプレイ顧問、45年通産省の委嘱により東南アジア意匠、商標登録デザイン調査会使節団長として台湾、シンガポール、タイ、香港を巡回、会議に出席するなど、国際的な工業デザイナーとして日本工業会に大きな影響を与えた。

作品を残すことよりも日本の今日のデザインを準備する役割に徹した人であった。昭和46年貿易振興総理大臣功労賞、51年勲三等瑞宝章、平成2年通産大臣より第1回デザイン功労者賞などがある。著書に『型而工房から』（1987年発行）ほか多数、雑誌・新聞に発表した著述多数。スケッチや彩色画を趣味とし、平成3年7月18日没、享年85歳。

<参考>『芸文かづの第30号』。

とよぐち きよし

豊口 清志 1885（明治18年）～1952（昭和27年）

「どじょっこふなっこ」の採録者

明治18年2月6日、勇蔵とハマの次男として毛馬内中町に生まれる。明治32年毛馬内小学校卒業、翌年10月花輪準教員検定準備場を経て教員となるが、兵役除隊後は家業（米屋）に就く。「どじょっこふなっこ」は北東北地方に流布する民謡・わらべ歌のようなものを明治34年頃、豊口清志が会合の席で即興に歌詞を作り詩吟の節でうたい上げたものだとされている。その後教師仲間にも流行し、現在の歌は玉川学園の岡本敏明が金足小学校で男鹿市の中道松之助の歌うのを採譜したものである。なお、清志は大正の初め花輪町に分

家し、郡内の鉾山へ米を納めたり、東京市場に出荷するなど、政府米買い入れ米穀商となり、のち荒物屋を営んだ。また、浅井小魚を師として句会を開いており、俳号を村子、のちに静蓮と称した。毛馬内仁叟寺境内に「どじょっこふなっこ」の石碑がある。大正2年11月、花輪町において鹿角俳句大会が開かれた際、村子として佐々木北涯（久太郎・山本郡）の選を受けている。昭和27年没、享年67歳。

<参考>『鹿角市広報 平成3年1月1日号 (No.426)』、『鹿角市史第三卷下』。

とよぐち じんべい

豊口 甚平 1913（大正2年）～1997（平成9年）

酒造業、地方自治・中小企業の振興に尽力

大正2年4月19日、柳太郎とリヨの長男として毛馬内に生まれる。幼名茂太郎。江戸期より豊口屋甚平を称し甚平酒屋の名称で親しまれた。昭和9年（1934）全国清酒品評会において「豊丘」が受賞。19年北鹿酒類製造株式会社へと統合され会長を務める。26年～30年毛馬内町、31年～32年十和田町議会議員、38年鹿角郡農業協同組合発足時の理事、49年～56年には十和田商工会会長など務める。地方自治の振興並びに地域中小企業の育成と産業の振興に寄与した。藍綬褒章受章。平成9年9月17日死去、享年84歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

とよぐち たけごろう

豊口 竹五郎 1870（明治3年）～1932（昭和7年）

県行政及び来満街道・花輪線開通に尽力

明治3年2月2日、勇次郎とエツの長男として毛馬内に生まれる。若くして政治に志し、32年から大正4年（1915）まで16年間、秋田県会議員として県政に尽くした。その間、中野から大湯までの新道（大湯街道の前身来満街道）建設を実現（開通は大正元年）し、花輪線の前身である秋田鉄道の大館からの延長を期して、尾去沢の内田平三郎と共に奔走した。大正2年1月、東京において開かれた東北人憲政擁護大会に、竹五郎は秋田県政友会を代表して、県国民党代表安藤和風とともに、決意表明の演説を行なった。昭和2年（1927）から7年まで二期にわたって毛馬内町長に推され、行政的手腕を発揮したことはよく知られている。昭和7年6月27日、病のため死去。享年62歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』、『十和田町の先輩』。

とよぐち ただし

豊口 唯志 生没年不詳、明治期の人

真田太古に共鳴した毛馬内人

俊司と浪の長男として毛馬内に生まれる。幼名は熊五郎。明治10年（1877）、西郷隆盛が中心となって鹿児島の上族が西南戦争を起こしたが、これに呼応して三戸郡関村の修験真田太古を主謀者とする旧士族層の反政府運動が計画された。青森県三戸郡、岩手県二戸郡、鹿角郡毛馬内の約300名が決起して青森・岩手県庁を襲い、尾去沢銅山を掠奪し、

東京まで進もうとするもので、毛馬内からは唯志を中心とする30余名が参加する手筈となっていた。事件は未遂に終り、多くの逮捕者が出たが、毛馬内では13名が検挙され、有罪2人、他は無罪となった。唯志の甥の仲之助が懲役1年、大森與平が懲役100日となった外は、唯志などは無罪であった。なお主謀者の真田太古は懲役5年になった。毛馬内では、唯志らを中心とする血気の青年達による「トヤ事件」として語り伝えられた。

<参考>『鹿角市史第三卷上』。

とよぐち べんじ

豊口 辨司 1861（文久元年）～1926（大正15年）

明治の鹿角の代表的書家で俳人

明治の代表的書家の祖父・文平、父・順蔵の子として毛馬内に生まれる。書号を碌々居士と号した。長三洲に心酔し書風も近く、自家の墓石をすべて自らの手で書き替えている。明治24年、県会議員となる。明治41年、小坂鉦山の煙害対策のため毛馬内町長田中虎二郎の求めに応じ、他7名の地主代表とともに拠出金を負担した。大正15年没、享年65歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上』。

とよた かずお

豊田 一雄 1917（大正6年）～2005（平成17年）

数多くの歌謡曲を作詞・作曲

大正6年1月16日、卯之助とカネの長男として湯瀬に生まれる。本名は^{かずお}貞雄。父は小坂鉦山で働いていたが、同10年、高収入を求めて歌志内炭鉦に転職のため一家あげて北海道へ移住する。豊田は昭和12年（1937）頃釧路管弦楽団に入り、東海林太郎の北海道公演が機となり、音楽の道に進むため上京して東邦音楽学校（現・東邦音楽大学）に入学。24年歌手柳田一夫としてテイチクからデビュー。作詞・作曲では29年の「初めて来た港町」（唄）藤島恒夫が124万枚売る大ヒットとなり、以後ヒット曲を連発する。31年、八幡平が十和田国立公園に編入されたのを記念して、八幡平村観光協会が豊田に「八幡平音頭」と「八幡平小唄」の制作を依頼している。20年代は東海林太郎・松山恵子・西田佐知子・藤島恒夫などの歌手の作詞・作曲を手がけていたが、30年代には作曲を主体とし、フランク永井や三浦洸一などのヒット曲を出し、歌謡界に大きな足跡を遺した。平成17年没、享年88歳。

<参考>『上津野第40号』、『昭和の思い出（阿部菊美）』、『鹿角市史第三卷下』。

ないとう いちろうた

内藤 市郎太 江戸後期～1873（明治6年）

盛岡に習字塾を開いた書道家、帰郷して寺子屋師匠

書道家の内藤市郎太は、末広松山の人。幼くして読書を好み、毛馬内の内藤委仲（医者）に寄寓し、十湾の父天爵の教えを受けた。代々安保姓であったが、これより内藤の姓をもって村に帰り内藤家を本家とする。また以前に書道を好み、玉置流（玉置半助を祖とする書道

の一派)に私淑し、日夜勉強して遂に玉置流と市郎太の両家の筆跡を並べ較べると、その判別ができないほど書の奥義に達した。盛岡に出て習字塾を開き盛況を呈した。毎朝肌が紅色になるまで全身摩擦をし、老年に至るまで壮年のようであったという。頭角を露わす門人多く、盛岡に十有余年住んだ後、帰郷して松山村で寺子屋を開く。その評判を聞きつけて、訪れる門人は鹿角郡一円に及んだ。明治6年5月15日没。

<参考>『鹿角志』、『陸中国鹿角郡 松山村郷土誌』、『鹿角市史第二巻下』。

ないとう せんぞう てんしゃく
内藤 仙蔵 (天爵) 1794 (寛政6年) ~ 1849 (嘉永2年)

多くの人材を育てた鹿角を代表する儒学者

寛政6年5月29日、湯瀬安棟を父として毛馬内に生まれる。通称仙蔵、天爵は泉沢履齋から授けられた^{あぎな}字である。享和2年(1802)内藤官蔵の養子となり娘の辰子と結婚する。幼時から頭脳明敏、長じて経史・詩法・医学を学ぶ。中年に尾去沢銅山に招かれ経営に携わるかたわら子弟を教授。当時の鉾山は隆盛期にあり、四方から一芸一能に秀でた人達が集まって来た。天爵は彼らと交わり、周易や長沼流兵法、武衛流砲術を身につけて行く。その後、主君の毛馬内館主桜庭氏に従って前後2回江戸に登り、朝川善庵に儒学を、清水俊蔵に兵術を学び、帰郷して郷塾を開く。門下の傑出した人材に奈良養齋、沢出椿庵、沢出善平、勝又定八、川口範多らがいる。間もなく桜庭氏の家宰となり世子の侍講を兼職、主家の財政の建て直しをはかった。藩主利濟には弘化年間に数回謁見を賜っている。

嘉永2年8月20日盛岡の屋敷にて病死、享年55歳。

<参考>『鹿角志 (内藤十湾)』、『鹿角市史第二巻下』。

ないとう ちやういち じゅうわん
内藤 調一 (十湾) 1832 (天保3年) ~ 1908 (明治41年)

『鹿角志』の著者で頼山陽を信奉した儒学者

天保3年3月、天爵と辰子の長男として尾去沢^{たごおり}田郡に生まれる。十湾は号。父天爵から儒学を学び、その後泉沢修齋の塾で研鑽を積み、修齋の長女容子と結婚。一時江戸で医学を学び、盛岡で川上東巖から詩文、江幡梧楼に儒学を学ぶが、この梧楼の影響で吉田松陰、頼山陽に傾倒する。戊辰の役では従軍して『出陣日記』二巻を著述。

明治3年江刺県花輪寸陰館に奉職、入学した田中正造に教授している。その後尾去沢鉾山に招かれて、破格の待遇で鉾山事務を担い、間もなく開校した又新^{ゆうしん}学校に湖南を入れる。尾去沢時代の最後は元山学校、さらに十和田鉾山の十湾学校の教壇に立つ。その間に湖南を師範学校に入れ、柏崎(館)に家を新築、頼山陽の山紫水明処に因んで「蒼龍窟」の額を門に掲げた。十湾は政治にも並々ならぬ関心を持ち、第一回総選挙に際して結成された泔水倶楽部の会長を務めたりして、湖南に影響を与えている。晩年は読書のかたわら塾生(育焉亭)の教育と郷土資料の蒐集に当たり、70歳から数年かけて『鹿角志』を編集、40年75歳にして刊行にこぎつけた。明治41年3月22日鎌倉病院で死去、享年76歳。

<参考>『鹿角市史第一巻・第二巻上下・第三巻上・第四巻』、『十和田町の先輩』。

ないとう とらじろう こなん

内藤 虎次郎（湖南） 1866（慶応2年）～1934（昭和9年）

東洋学の世界的権威

慶応2年7月18日、調一と容子の次男として毛馬内に生まれる。号湖南。幼時から母と儒学者の父の薫陶を受け、秋田師範学校を出て綴子小学校（現北秋田市）訓導として奉職したが、青雲の志やみがたく明治20年（1887）上京。大内青巒主宰の『明教新誌』を皮切りに仏教的ナショナリストの手引きによってジャーナリズムの世界に入り、政府の欧化政策に反対する三宅雪嶺らの政教社に入社、『日本人』の記者となる。やがてその文名が広く知られるようになり、大阪朝日新聞の高橋健三に招かれて論説記者として健筆をふるう。29年には松隈内閣書記官長高橋健三の秘書として内閣政綱を起草した。『万朝報』を経て大阪朝日新聞に再入社した湖南は、数次の中国への学術調査により、中国朝鮮の専門家として重用される。

40年京都大学文科大学長狩野亨吉に招かれ、東洋史講座を担当し、文化中心移動説、中国時代区分論と唐宋時代観など独創的な学説をうちたて、甲骨文字や敦煌古書の紹介につとめる一方、邪馬台国近畿説、応仁の乱の歴史的な位置づけなど、東洋学の権威として中国、日本をはじめ東洋各地の文化史研究に不朽の業績を残した。また、幼時から父十湾に鍛えられた漢詩文は、明治を代表する漢詩人の一人とされ、書も端正温雅な独特の書風が高く評価されている。書画に対する優れた鑑識眼は当代随一で、混乱する清朝末期の中国の美術品の多くが、中華文明の至宝を守ろうとする湖南の仲介で関西の財界人を中心とするコレクションとなって今日も保存されている。43年文学博士、大正15年帝国学士院会員に推挙。退官後は5万巻の蔵書を持って恭仁山荘に隠棲した。主な著書に『近世文学史論』、『支那論』、『東洋文化史研究』、『日本文化史研究』など。昭和9年6月26日死去、享年67歳。

<参考>『内藤湖南全集』、『十和田町の先輩』、『鹿角人物誌』、『鹿角市史第一巻・第二巻下・第三巻上下・第四巻』、『内藤湖南とその時代（千葉三郎）』、『日本の思想家「内藤湖南」（貝塚茂樹）』、『竜の星座（青江舜二郎）』。

ないとう れんぱちろう

内藤 練八郎 1866（慶応2年）～1945（昭和20年）

小坂鉦山鉦毒問題に取り組んだ社会派運動家・教育者

慶応2年2月10日、金七とミヨの間生まれる。内藤虎次郎と同学年で竹馬の友でもあった。秋田師範学校卒業後、鶴川小学校を皮切りに小学校教師になる。

小坂鉦山の煙害問題が社会騒動化する明治38年（1905）、毛馬内町会にて内藤練八郎を建議者とする「鉦毒煙に関する建議案」が可決されたが、政府は鉦山側に有利な判断を示した。41年煙害対処の「小坂鉦山煙毒除害期成同盟会」が結成され、練八郎らを発起人として町会議事堂で開催された。この動きは毛馬内の地主達によって大正3年（1914）「小坂鉦山鉦毒除害期成同盟会」となって再出発し、会長に内藤練八郎、幹事に山本修太郎、

勝又次郎、豊口一蔵、石川正治、高橋七郎兵衛、浅利成一ら会員数2千名にのぼり、稲の開花期間の製錬中止等の要求を掲げ鉾山側と交渉したが埒が明かなかった。翌4年山本、勝又、豊口、石川の幹部4人は各省の大臣に惨状を陳情、さらに大阪の藤田組本店に解決交渉などにあたった。このとき藤田組から同盟会に贈られた5千円と幹旋にあたった内藤湖南への粗品料2千円とを合わせ育英事業の^{もくたくかい}木柝会が開設され、会長・基金管理者に練八郎が就いた。昭和20年10月2日没、享年79歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上・下』、『湖南第35号』。

な か えばた ごろう
那珂（江幡） 梧楼 1827（文政10年）～1879（明治12年）

藩校作人館教授として鹿角人らを育成

本名は通高。毛馬内田口家出身の盛岡藩医師童春の二男として、文政10年11月24日生まれる。18歳のとき藩主利済の近習に挙げられるが青雲の志を抱いて脱藩、江戸・京都・安芸などに遊学、吉田松陰、桂小五郎ら多くの士と友誼を結んだ。嘉永2年（1849）藩医の兄春庵が利済の側近田鎖左膳に捕らえられて獄死。梧楼は仇討を画策したが、利済派が失脚するに終る。安政6年（1859）盛岡藩は江戸で暮らす梧楼を藩校明義堂教授に迎えた。慶応元年（1865）藩校を作人館と改称、梧楼は「和漢一致」の学風を唱え、そこには内藤十湾、田口多作、川村左学の鹿角人が学び、泉沢恭助は交友を結んだ。また那珂通世（梧楼の養子、東洋史学の先駆者）原敬（政友会総裁、首相）田中館愛橘（物理学者）ら、多くの逸材が作人館から輩出された。

明治元年（1868）戊辰戦争にて梧楼は盛岡藩内を駆け巡り和平工作に尽力したが、楢山佐渡、佐々木直作とともに捕らえられ、4年赦免。その後は大蔵省、文部省に務めるも明治12年5月1日没、享年51歳。著書に『梧楼日記』『梧楼存稿』（『南部叢書』）など多数。

<参考>『評伝那珂梧楼（高野豊四郎）』、『鹿角市史第二卷下・第三卷上』。

な か どうしゅん
那珂 童春 1788（天明8年）？～1844（天保15年）

毛馬内田口家出身の盛岡藩奥医師

御境古人の田口和多衛門の四男として毛馬内に生まれる。本名は瀧治。秋田藩大館の江幡道明（快庵）の婿養子となる。和多衛門の妻は産科医の娘で、瀧治は母の実家大館で産療を学び、長じて水戸で一子相伝の産療の家で学んだ。その後、水戸侯に聞こえて150石の禄を給わり、弟子取りして他人に伝法することを命ぜられるほど産療の名人となる。

文化年中（1818～29）二人の子供を連れて盛岡城下に出て産科医を開き、藩より広く医療活動に従事する許しを得た。そこで盛岡藩に仕えんがため田口童春と姓を復し、天保7年（1836）2月御目見医となり、さらに12月に2人扶持永代、奥御医師に任ぜられる。8年7月田口童春から本姓の江幡に改姓が許され（さらに維新後に那珂姓に改め）た。しかし、13年藩主利済の二男錦之助（謹諧）の病死の責任を問われ、家屋敷を召しあげら

れ蟄居を命じられる。15年2月、幽閉中に死去、享年56歳。

<参考>『評伝 那珂梧楼(高野豊四郎 平成20年刊)』、『湖南第4号』、『内史略4(岩手史叢第4巻)』。

なかじま こういち

中島 耕一 1903(明治36年)～1949(昭和24年)

花輪短歌会の発端を作った県歌壇の指導者

明治36年1月20日、庄太郎とミヨの長男として花輪に生まれる。花輪小学校高等科卒業後の大正7年(1918)2月上京し、東京工手学校本科冶金科に入学。10年7月同校を卒業して、尾去沢鉦山精煉課に勤務するも、病気のため1か月で退職、療養につとめながら文芸、特に短歌をたしなむ。前田夕暮の『詩歌』、窪田空穂の『国民文学』を経て『沃野』の同人。自らも『暁星』『草の実』といった同人誌を発行する。12年に発行された『草の実』は、一時休刊したが昭和3年頃復活する。これが花輪短歌会の始まりである。20代の若者を中心とした活発な活動は、3年9月の合同歌集『落葉松』に結実した。

4年4月、秋田市へ移り新聞社に入る。この年の12月には関節炎の悪化から右足を切断。9年草園社創立、翌年暮、秋田魁新報社に入社。「さきがけ歌壇」の選者をつとめる。23年勝平得之と共著で歌集『雪橇』を出版。昭和24年2月28日没。享年46歳。

<参考>『草園(中島耕一―追悼号)4月号』、『鹿角市史第三巻下』、『秋田人名大事典』。

なかつやま のぶさと

中津山 延賢(冨右衛門) 生年不詳～1894(明治27年)

鹿角りんご栽培の勸農指導者、県議

中津山家は代々毛馬内館主桜庭氏の重臣で、戊辰戦争の際は、南部吉兵衛のもとで従軍している。県の勸農政策のもと、鹿角で自由試験場や私設勸業場を設けて西洋農法の移植をはかったのは、旧士分層の人たちであった。明治11年(1878)中津山は勸業係に任ぜられ、さらに種苗交換会談話会員に選ばれた。24年乾田法による米質改良試験の委託が行なわれ、中津山と安倍嘉津馬が農業委託試験委員に選ばれた。また25年から果樹品評会が開催され、募集委員として鹿角から中津山が任命され、仙台で開催されたりんごの名称統一会には、県代表として出席した。県はりんご栽培の基礎を作った功労者として、鹿角では佐藤要之助、中津山延賢、瀬田石喜代治をあげている。29年鹿角産業会を結成し、りんご栽培の研究、病虫害の予防駆除・出荷の共同をめざした。このように明治期の鹿角りんご栽培は、旧士族や篤農家、地主にささえられ発展した。彼は、変革の時代を先導したりんご農家、勸業指導者であった。

また、国会開設運動が高まるなか、15年6月から22年3月まで連続4期県会議員に選出されている。その間16年5月改進黨党大会に県議として湯瀬哲太郎らと出席、民権運動の一翼を担った。明治27年6月25日没。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

なかの きちべえ

中野 吉兵衛 1638（寛永15年）～1691年（元禄4年）

大光寺氏の跡を受けた花輪館主

中野伊織改め吉兵衛^{やすたか}康敬を通り名とした。中野氏の祖は中野修理康実で、九戸政実の末弟である。康実は初め斯波家の女婿となったが、のち南部家に帰参して中野村に2千石を与えられ中野氏を称した。吉兵衛は延宝3年（1675）花輪に知行替となり、花輪城代並びに秋田境目を預かる。花輪町預かりについては、明和2年（1765）尾去沢銅山が藩直営になった際に代官支配に移管されていたため、中野家の手にはなかった。中野氏は代々吉兵衛を襲名したが、文政元年（1818）南部姓を名乗ることを許された。吉兵衛は元禄2年（1689）隠居し^{どくえん}独円と号し、4年11月24日死去。享年53歳。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』。

なかむら しちのじょう

中村 七之丞 生年不詳～1795（寛政7年）

不老倉銅山奉行を務め大徳寺^{がらん}伽藍建立

生年不詳。中村家は江戸後期、知行所大里村に居住し、大徳寺の有力な檀家であった。萬松寺7世良室吞久が慶安3年（1650）創立したとされる大徳寺は、はじめ^{しつべいの}尻平野にあったが、火災に遭い現在地に移ったという。その伽藍を再建したのが中村七之丞である。七之丞の石造座像が六地藏堂の中に安置されており、石像の裏に、「不老倉御銅山」「于時安永^{つちのとい}己亥歳」という墨書が読みとられる。安永8年（1779）の建立ということになる。

『雑書』によると、安永4年3月15日、花輪住居御銅山附御山奉行中村七之丞を、御銅山御取次御物書兼帯に任命するとともに不老倉兼務としている。そして同5年には、格別心を用いたとして切米三駄の加増を受けた。また安永9年（1780）10月には、老年になってもよく出精して勤めたと「御紋巻御上一具」が下賜されている。延宝5年（1677）から廃山になる昭和45年（1970）まで300年近い間、幾度も盛衰をくり返した不老倉銅山が、この頃は比較的好況であったことが伺われる。大徳寺過去帳によると、寛政7年7月29日永眠。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』、『不老倉鉦山誌（斎藤長八著）』。

なまこや いたう ちょうじ

生子屋（伊藤） 長治 生没年不詳、江戸中期の人

尾去沢銅山を稼行した盛岡の商人

享保11年（1726）から尾去沢銅山を請け負った盛岡四ツ家町の商人で、なまこや長治と称した。長治が銅山師に任ぜられたのは何月からであったか判然としないが、相当の経済力を持っていたらしく、同年中に「銅山御役金ノ内御側御用金」として800両、南部屋八十治を通して藩主の母堂「真寿院様へ御仕切金壹ヶ年650両宛月割ヲ以て」差出すことを約し印判手形を提出している。長治はその後もしばしば多額の献金を行って土籍に列せ

られ、同14年4月盛岡大火後勘定所に召され加増100石を賜わったという。

このように、長治は尾去沢銅山の稼行によって大利を博したとされ、のち藩の勘定頭まで昇進した。しかし、「御勝手御用仰付け置かれ候処、・・・段々致し方至極不届」だとして、享保18年(1733)6月家禄没収、翌19年5月身代蔵所を命ぜられた。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『尾去沢・白根鉦山史』、『南部藩・雑書』。

なら いちのじょう
奈良 市之丞 生没年不詳

大正期にバスケット合資会社を設立した蔓細工師

大正11年(1922)、花輪町奈良市之丞、山口栄助出資によるバスケット合資会社が設立され、蔓細工及び原料品の販売に力を注いだ。13、15年の東北銘産品陳列会出品に秋田県特産品に鹿角あけび蔓細工が選定され、14年の東京上野で開催された全国副業展覧会において、奈良市之丞の「三本畝尺一寸平蓋^{ひらびた}バスケット」が二等賞を受賞している。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

なら えんぞう じょうざん
奈良 円蔵(讓山) 1780(安永9年)～1843(天保14年)

山本北山に学び、銅山の吟味役にもなった盛岡藩儒

奈良重右エ門の第三子として安永9年花輪に生まれる。幼名文助、通り名を幸蔵のち円蔵と改めた。号は讓山。享和3年(1803)大志をたて、江戸に赴き儒学者山本北山に学ぶ。文政3年(1820)南部利用^{としもち}に召抱えられ盛岡藩の儒臣となり、同12年藩財政に貢献したとして禄200石を与えられ、天保に入って目付役兼銅山吟味役となり禄20石を加増された。天保14年5月29日没、享年63歳。

<参考>『花輪町史』、『鹿角市史第二卷下』。

なら しょうぞう ゆうこう
奈良 省三(裕功) 1894(明治27年)～1983(昭和58年)

大正・昭和期に活躍した日本画家、俳人

明治27年、謙一の三男として花輪町に生まれる。父が林野局に勤めた関係から、御料林のあった山梨の甲府中学校に学ぶ。43年上京して寺崎広業の画塾に入門。のち平福百穂、川崎小虎に師事する。昭和2年(1927)、「十和田の秋」が帝展に入選したのを始め、独立絵画展、日本美術協会展、院展などに入選を重ねた。8年、雅号を麓僊^{ろくせん}から裕功に改める。裕功は丸山応挙の流れを汲む四條派に属し、その画風は自然をとらえ、その心を表現することに専念したという。また、兄野人とともに俳句もたしなみ、37年から10年間、在京秋田美術会の幹事を務める。昭和58年5月没、享年89歳。平成21年(2009)から翌年にかけて、秋田県立近代美術館において、「時^{とき}有幽花 日本画家・奈良裕功の素描展」が開催された。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『秋田県立近代美術館年報』。

なら しょうべえ
奈良 庄兵衛 生没年不詳、明治・大正期の人

りんご農家で憲政会の地元幹部

庄兵衛は佐庄の一族と思われ、明治22年(1889)農務局西ヶ原養蚕業試験場の養蚕生徒として習得証を授与される。佐藤要之助のりんご東京移出の成功をみて、28、29年には吉田五郎、奈良庄兵衛、村山元司らのりんご園を開く者が続出した。36年大坂での第5回内国勲業博覧会において、庄兵衛がりんご出品で二等賞となり、また鹿角りんごは過半数の上位入賞を占め名声を博した。39年には農会令の改正にともない、鹿角郡農会の評議員となり代表者にもなった。

政治活動では、32年憲政本党の河野廣中らの演説が花輪町長年寺で開かれ、懇親会では地元から庄兵衛ら百余名が参加。大正8年(1919)県会議員定期改選では、政友会と憲政会の二大政党の激しい選挙戦となった。憲政会鹿角郡支部の主なメンバーは、支部評議員に選出されていた奈良庄兵衛、諏訪富多らで構成され、地域での有力者として知られた。

<参考>『鹿角市史第二卷下・第三卷上下』。

なら しんし
奈良 真志 1846(弘化3年)～1911(明治44年)

秋田県人最初の渡米留学者、明治時代の海軍軍人

弘化3年、盛岡藩士奈良(青山)宮司と菊子の三男として尾去沢に生まれる。幼名駒之助。幼時から聡明であり、藩主の江戸出府に同行する。江戸で勝海舟に学び、勝の推薦により明治3年(1870)、華頂宮博経親王がアメリカ留学の時、南部英麿らとともに随行した。盛岡藩の政治家であった父宮司と同じく理財に長じており、アメリカで海軍会計事務を学ぶ。海軍省に入り海軍主計学舎の教頭などを経て、19年初代の主計学校校長となる。26年主計総監。日清、日露戦争を軍の経理面より支える。27年には父の伝記である『奈良養斎傳 附 奈良孝斎傳』を著している。海軍主計少将として退官。32年勝海舟の葬儀の際に勝の棺を担いだ門人の一人であった。海軍に在籍した多くの鹿角人の面倒を見たことでも知られる。明治44年11月7日死去。享年65歳。

<参考>『日本人名大辞典』、『青山家談叢(青山隆一著)』、『秋田人名大事典』。

なら しんれい
奈良 真令 1827(文政10年)～1878(明治11年)

漢詩の詩人として活躍

文政10年、盛岡藩士奈良(青山)宮司と菊子の長男として尾去沢に生まれる。通称猪太郎。号は孝斎、春吟。内藤調一は奈良宮司の追悼文で、真令について「読書あり、医術に巧みに、又鎗術に名あり、書は顔公を慕ひ、墨蹟飛動して、世の伝称する所なり」と評した。盛岡市史では、奈良真令が開いた「信成塾」で多くの偉人が学んだことが記されている。漢

詩の詩人として活躍し、書をよくし「幽居帖」を上木した。次弟の常方は熙斉と号し、菊池氏を嗣ぎ、末弟の真志は真斉と号し後に海軍主計少将となるが、ともに漢詩をよくした。奈良一家の漢詩をおさめた『趨庭吟集』がある。明治11年10月3日没。享年51歳。

<参考>『青山家談叢（青山隆一著）』、『鹿友会誌第3冊』、『盛岡市史外』。

なら せいしろう
奈良 清四郎 1910（明治43年）～1991（平成3年）

尾去沢出身の反骨・情念の洋画家

明治43年11月18日、尾去沢に生まれる。昭和2年（1927）、17歳のとき上京、神田中央学校土木科夜間部に入ったが、翌年中退して日本美術学校西洋画科に入学した。翌4年、同校を退学。この年、光風会展および中央美術展に入選する。芥川賞作家の寒川光太郎との交際は、この頃始まったという。5年、片多徳郎、堀田清治に師事。この年の秋頃、旧制大館中学を卒業後体調を崩して静養中だった同じ尾去沢で二歳下の内田慎蔵とともに、彼の伯父の持ち家で作画に専念する。翌年独立美術協会第一回展に出品するも落選、その後は看板描き・旋盤工などをしながら絵を描くが、当時の社会主義思想の洗礼を受け、警察署に検束されたこともある。

戦後、モダンアート展、自由美術展に出品、39年には主体美術協会の創立に参画した。その後は同会展を主な発表の場としている。また在京の県出身美術家が結成した秋田美術会にも参加した。54年には大館市における「三洋画家自選展」に長谷川善四郎・内田慎蔵とともに出品した。平成3年5月5日没、享年81歳。追悼文のなかで、内田慎蔵は「徹底した反骨の人だった。一貫して個性の強い強烈な自我発揮の作品で、フォーブ（野獣派）の精神で生涯それを貫き通した」と述べている。平成5年、作品62点を収載した『奈良清四郎画集』刊行、文章は寒川光太郎ほか執筆した。代表作として「断雲（ベトナムの子）」、「鹿角の山」などがある。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

なら とくたろう
奈良 徳太郎 生没年不詳、昭和期の人

駅の切符自動販売機の発明者

生没年不詳。江戸期の花輪町の豪商佐庄の流れを汲む今泉「佐幸」の別家の出で、若くして上京し、芝白金三光町で奈良工業KKを経営し、家庭電気部品などを扱っていた。昭和42年（1967）100円・50円硬貨が発行されたのを機に、100円以下の切符の自動販売機を発案して特許を取る。この自動販売機は43年国鉄の東京駅に納入されたのを皮切りに、東京・大阪の主要駅に急速に広まった。バスに付いている乗車整理券自動発行機も徳太郎の発案だとされている。

昭和30年代の高度経済成長期に盛んだった集団就職者を激励する形で、町村毎（中学校単位）に「東京〇〇会」ができた。その中で明治から戦前まで続いた「鹿友会」を懐かしむ人々により、会長川村竹治の子息秀文のもとで「鹿友会東京はなわ会」が発足したが、徳太

郎は幹事長を務めている。また、49年の花輪小学校創立百周年式典に、東京花輪会会長として参列した。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『花輪の昔を語る（佐藤政治著）』。

なら のぶや
奈良 農夫也 1888（明治21年）～没年不詳

明治後期、北海道でアイヌ教育に従事

明治21年6月1日、金太郎とカネの長男として花輪に生まれる。同41年3月、三本木（現十和田市）の青森県立畜産学校を卒業、獣医師の資格を取得する。その後北海道に渡り、44年（1911）から昭和2年（1927）までアイヌが多く住む沙流郡平取村^{おきちない}の長知内尋常小学校で教員を務める。農夫也は教員免許を取得しなかったため代用教員のままであったが、児童の指導に情熱を傾け、教え子や村人にも慕われた。読書家でもあり、短歌、童話などの創作やアイヌの地誌、伝承の記録を『平取外八箇村誌』などに書き残している。教職を退いて上京し、徳富蘆花家のもとで全集の編集、出版の手伝いや『蘆花全集』の出版を通して、岩波書店の創始者である岩波茂雄との親交を深めた。

<参考>『北荒の黒百合コタンの教員・奈良農夫也の生き方（渡辺惇著）』。

なら ひさし
奈良 寿 1911（明治44年）～1999（平成11年）

教育者、鹿角を代表する郷土史家の一人

明治44年、阿部鉄太郎とエツの二男として八幡平字長嶺和田に生まれる。昭和6年（1931）秋田県師範学校本科を卒業して教員となり、のち毛馬内の奈良家の婿養子となる。27年に平元小学校校長。その教育活動は高く評価され、36年には文部省道徳教育指導書2巻に教育事例が採用。文部省機関初等教育資料の執筆者となり、秋田県教育功労賞を受賞。47年、十和田中学校長を最後に教職を退いて鹿角市教育委員会教育長となる。56年、鹿角市史編さん事業事務局嘱託となり、安村二郎氏らとともに『鹿角市史』を執筆する。58年、鹿角市文化功労章を受章。また、平成元年から3年かけて『鹿角人物誌』を著す。主な著書に、『私の道徳教育』、『私の教育』、『歴史の中の鹿角（上・中）』などがある。

<参考>『鹿角市史第二卷上下・第三卷下』、『鹿角のあゆみ』。

なら まさじ
奈良 正路 生没年不詳、大正・昭和期の人

労農運動の指導者で、『入会権論』の著者

花輪町今泉の奈良家の出身で、花輪の準備場を出て曙小学校に勤務。その後札幌師範を大正11年（1922）に卒業、北海道の小学校教員を経て中央大学法科に入り、経済学者平野義太郎に従って法政大学専門部に移る。在学中から、花輪の自主的な独立青年団・愛友団に参加し、機関紙『愛友』に寄稿を続け、社会主義的な立場より「花輪まぐさ場問題」を取り上げるなど、新しい法律運動としても社会学を提唱した。この愛友団を背景に15年、花

輪農民組合の結成をはかり、さらに日本鉱夫組合尾去沢支部の発会と尾去沢鉱山総罷業の支援にあたった。昭和3年(1928)、全農南鹿(曙、宮川、柴平、花輪)連合会を結成し、また全農柴平村乳牛支部の指導にあたったが、翌4年頃東京に転任した。上京後は法律活動に専念し、無産階級、農民、婦人など弱者のための実践的な法律書を16冊作成した。この中の『入会権論』は、後に昭和前期農政名著全集に収録される。奈良は俳誌『主流』の同人としても活動している。長女にピアニストの奥村洋子がいる。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『秋田県社会運動の百年』、『入会権論(奈良正路著)』。

なら まさたか
奈良 正敬 生年不詳～1906(明治39年)

郡役所職員として教育会を設立した文化人、教育者

花輪今泉の奈良家の奈良又助の長男として生まれる。母は川村家の女。男爵石田(奈良)八弥は実弟。泉澤恭助の私塾に川村左学、大里寿とともに数十名が勧誘され毛馬内まで行って学んでいる。鹿角郡役所の郡書記として、明治20年(1887)全国的な教育会開設運動に対応して鹿角教育会の創設に関わり、翌々年、鹿角学事会への改組の発起人となる。30年6月教員不足を解消するため、秋田県教育会では「都市へ奨励費を給し、准教員を養成せしめる件」を提案した。鹿角学事会は同年、「尋常小学校本科准教員乙種検定準備場」の創設を議決し、31年町長となっていた奈良宅に開設している。郡書記としては、21年郡内の町村の統合の業務にも当たった。のち、病のため町長を辞し、明治39年5月死去。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

なら みやじ
奈良 宮司 1803(享和3年)～1872(明治5年)

盛岡藩の侍医、鉱山・勘定奉行を歴任した儒学者

享和3年7月12日、青山金右衛門榮承と於縁の三男に生れる。幼名は清松と称し、名は真守で尾去沢の奈良家の養子となった。内藤天爵の門に入って経史と医術を学び、鹿角学統として名を連ねる。そして江戸へ上る毎に泉沢履斎、東条一堂に就いて経説を授けられた。また銅山奉行金矢氏に従って大坂に留まること三年、その間、学を磨き見聞を広めた。帰郷するや直ちに山先役に推挙された。文政8年(1825)、銅山において従来坑夫一人につき一日八合であった扶持米を四合五勺に減じ、減額分を代金で支払うこととしたため暴発寸前となったが、坑夫の信頼が厚く、奈良の説得によって減米案が撤回され事なきを得たという。奈良は尾去沢の再盛案を作成し、明和以来の仕法を変えた結果、出鉱量が著しく増加した。壮年、士族に列し鉱山奉行となって藩内の諸山を監督した。藩中、学才比肩する者なく、三本木開拓の新渡戸伝と共に両雄として並び称された。彼の篤学を慕う塾生は常に数十人を越え、食客も絶えなかった。医術においても名医の噂が高く、藩公の侍医となった。理財にも明るく盛岡藩の藩政改革に任ぜられ、安政5年(1858)盛岡藩の勘定奉行となり、窮乏した藩財政の改革にあたるが、反対派のために失脚した。明治元年(1868)藩

の大監察、会計総裁として復帰し、盛岡藩の莫大な借財を整理し藩政の宿弊を改めた。また大坂で俳諧を学び、東岐^{とうぎ}という俳号で一家を成す観があるなど俳句でも力を発揮した。明治5年11月6日死去。享年69歳。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』、『青山家談叢』、『鹿友会誌（内藤調一著）』。

なら やすのり

奈良 靖規 1897（明治30年）～1985（昭和60年）

新教育運動の先覚者

明治30年10月25日、江戸期の豪商「佐庄」の分家の吉太郎とトキの長男として大湯上の湯に生まれる。秋田師範学校に学び学校では教育、哲学、語学、音楽に優れていた。大正6年（1917）卒業し、山本郡切石小学校に赴任。時の校長は大湯出身曲田慶吉で、ここで世界の新教育運動の思想や生命哲学を学んだ。8年十二所成章小学校に転じ、県下初の器楽合奏を授業に取り入れるなど新教育活動の実践に励んだ。得意の語学を駆使してアメリカの図工教科書八巻やジョンソン著の『児童の歌声指導法』を翻訳、研究誌に連載していても当時の教育界に大きな反響を巻き起こした。

東京市立富士小学校で教科書なしの教育を実施（生活科）。ウォッシュバーン・ラッグ博士来朝時は、公立学校を代表し授業提供、説明役をしている。昭和8年退職して三友社に入社し、編集長として『御民教育』を創刊。また参謀本部囑託を命ぜられ、『総力決戦論』を著した。19年、秋田県主事・高清水道場長となる。東北で唯一の崎門学者。戦後、大湯町公民館長、大湯町・十和田町の教育長として地域教育改革を推進。大湯温泉観光促進のため、土産品として創作こけしなどを作った。44年勲五等瑞宝章、49年市文化功労章を受ける。昭和60年4月30日没。享年87歳。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『芸文かづの第24号』。

ならやま さど

檜山 佐渡 1831（天保2年）～1869（明治2年）

盛岡藩の家老、戊辰戦争において鹿角隊を指揮

天保2年5月、代々盛岡藩家老を務めた檜山家に隆翼^{なかくよ}・きえの長男として生まれる。実名は隆至^{たかし}。佐渡は23歳にして家老職に就き、後には主席家老として藩政の改革に奔走した。疲弊した藩財政と相次ぐ一揆をおさめるために働き、藩主利剛^{としひさ}の信頼を得た。慶応4（1868）年2月、旧幕府側と薩長側に揺れる藩の行く末を決めるべく、首席家老として京都へ赴いた。京都滞在中、西郷隆盛や岩倉具視、桂小五郎ら新政府側の人々と接触するも、薩長下級武士らの傍若無人の振舞に危機感を覚える。このため新政府と対抗する意志を固め、奥羽越列藩同盟への加盟を決意したとも言われる。同年7月、檜山佐渡を総大将とする鹿角隊でもって、盛岡藩は同盟を脱退した久保田藩を鹿角口から攻めたが、新型砲を有する佐賀藩兵ら援助を得た秋田勢に二ツ井のきみまち坂で敗れ国境まで撤退、同年9月に降伏謝罪の手続をした。佐渡は主席家老としてその戦争の責任を一身に受ける形となり、明治2年

(1869)年6月23日、故郷盛岡にて切腹の形をもって処刑された。享年38歳。

辞世 花は咲く柳はもゆる春の夜に うつらぬものは武士の道

<参考>『鹿角市史第二卷上下』、『鹿角のあゆみ』。

なりた かずほ

成田 一穂 1929(昭和4年)～2002(平成14年)

スポーツの振興、教育の向上尽力

昭和4年、敏とフミの子として毛馬内中野に生まれる。昭和23年大湯中学校美術教師として奉職以来、平成元年3月まで、学校教育特に保健体育の指導に尽力した。昭和39年から43年11月まで北教育事務所鹿角出張所指導主事、同年12月からは県教育庁保健体育課指導主事として46年3月まで勤務した。その間国体事務局に携わり、46年2月の国体冬季大会スキー競技会(田沢湖国体)においては、競技係長として大会運営に奔走した。さらに八幡平中学校校長等学校教育のみならず、十和田地区体育協会会長、鹿角市体育協会会長を務め、長きに渡って鹿角市のスポーツ振興に貢献した。鹿角市スポーツ振興事業団理事、鹿角市スポーツ振興審議会会長も歴任した。また、十和田八幡平駅伝競走全国大会の企画・運営に中心的役割を担い、今日への継続の基盤を作った。平成9年2月に鹿角市で開催された第52回国体冬季大会スキー競技会では、総務企画専門委員長として、大会の成功に貢献した。平成11年11月、鹿角市文化功労者表彰。同年県スポーツ栄誉賞。平成14年7月2日没、享年73歳。

なりた しょうきち しょうじ

成田 正吉・庄司 生没年不詳、江戸後期の人

菅江真澄の宿泊先／彫刻師

文化4年(1807)、鹿角来訪2回目の菅江真澄が9月19日、毛馬内から大湯を通り箒畑に至って一泊したのが、成田正吉宅である。箒畑はサワフタギ(ニシコオリ)の灰を紫根染屋に売って生計を立て、冬には狩りをするマタギの村でもあった。成田家は箒畑を開発したとされる一家で、屋号を「庄右衛門」と言った。

正吉の子孫庄司は、現当主庄司から5代前の人で、地方では知られた彫刻師であった。彼の手になる仏像・神像の彫刻や絵馬が多数残されている。彫刻では、現在同集落の自治会館に安置している3体の御神像、関上・一本木・野口の各神社の御神体など、鹿角郡市内に20体位はあるという。絵馬では、明治5年(1872)葦名神社に奉納された1枚、箒畑山神社の8枚が確認されている。また、元治元年(1864)葦名神社に奉納された仁王像2枚も、成田庄司の作と伝えられている。

<参考>『鹿角市史第二卷上・第四卷』、『十曲湖(菅江真澄著)』、『葦名神社の絵馬(鹿角市教育委員会)』。

なりた すけつな
成田 助綱 生没年不詳

鎌倉初期の鹿角郡最初の地頭職

成田氏は武蔵国幡羅郡（のちの埼玉県大里郡）成田村から起こる武蔵武士団である。幡羅太郎道宗の子の成田大夫助高を祖とし、四郎と称した助綱はその三代目に当たる。

源頼朝の文治5年（1189）、奥州合戦に従軍した成田助綱が鹿角郡地頭職に任じられた最初の人であるという。すなわち、鎌倉初期に鹿角郡地頭職として派遣されたのは、成田・安保・奈良・秋元の関東武士で、これを国侍とか四天士と記し、また鹿角四姓、鹿角四氏あるいは鹿角党などと呼んだらしい。四氏のうち、もっとも早く鹿角郡地頭職に補任されたのが成田氏であり、以後鹿角郡一円に強力な一族支配を押し進めたとされる。ちなみに、「津軽郡中名字」に見える中世鹿角四氏の初期領地15郷村のうち、成田氏が最初に支配したのは谷内・三ヶ田・夏井・長牛・尾去の五つであったが、後世には42郷村のうち、湯瀬・長嶺・谷内・高市・神田・毛馬内・大地・荒川・高清水・関上の10郷村に交替したと伝えられる。

<参考>『鹿角市史第一巻・第二巻下』、『鹿角人のルーツ1（畠山一鷲）』、『鹿角由来記』。

なりた もときち
成田 元吉 1899（明治32年）～1964（昭和39年）

宮川村村長から八幡平村初代村長

明治32年、元助とキエの長男として湯瀬村に生まれる。志茂乃湯旅館を引き継ぐ。明治14年の市町村制により、湯瀬村を含む宮麓村は長谷川村と合併して宮川村となっていたが、後年元吉は推されて宮川村村長に就任、3期務めた。その後昭和22年（1947）、国の地方自治法の公布によって地方分権主義に移るべく県の町村合併計画案が示され、鹿角は2町8ヶ村となった。また、学校教育体系も6・3・3制に移行することになり、宮川村と曙村は八幡平地区の地理的地域特性により、新制中学校として二ヶ村組合立の鹿南中学校が創設された。両村による新制中学校の設立を機に、両村の合併を村議会が可決。昭和31年6月15日付で新制八幡平村が発足、元吉が初代八幡平村々長に就任した。この時、学童たちが八幡平村の地域内を国旗を振り行列して誕生を祝ったという。昭和39年2月3日死去、享年65歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『鹿角のあゆみ』。

なんぶ としなお
南部 利直 1576（天正4年）～1632（寛永9年）

毛馬内の町づくりを推進した南部氏27代・盛岡藩2代藩主

天正4年3月、三戸田子館に生まれる。信直の長子で、はじめ彦九郎、元服して信正、長じて晴正あるいは信濃守と称した。のち加賀前田利家の「利」の一字を得て利正そして利直と改めた。信直のあとを受けて南部氏27代を継承、盛岡藩2代藩主となる。

わが国の鉱業の歴史において、古代と近世という二度にわたる画期的な発展の時代のう

ち、鹿角における「慶長のゴールドラッシュ」と称される時期は、まさに藩主南部利直の治世と重なる。盛岡藩士の伊藤祐清と星川正甫は、それぞれの著書『祐清私記』、『食貨志』の中で、慶長3年（1598）といわれる鹿角郡石野村の白根金山見立と、引き続く17世紀初頭の尾去沢五十枚、楨山、西道金山の発見とその後の隆盛ぶりを詳細に描いている。その中の「利直（公）の世に至ってから金貨の多く出ければ、公私とも封内富饒にして富既に天下に甲たり」などの表現は、鹿角の産金がいかに創業期の盛岡藩にとって有益であったかを物語っている。特に白根金山には、諸国から商人や金堀り達が群れ集まり、たちまち都会の賑わいを見せるようになった。この白根金山の盛況とほぼ時を同じくして、毛馬内の新町建設が行なわれたという。すなわち、現在の毛馬内は、藩主利直直々の縄張りによる柏崎の築造と新しい町づくりによってできたもので、古館・西町地区から急きょ移転が行なわれ、新城とともに新たな商人町が形成されることになった。その原因は、当時の状況から推して、金山大盛と利直の英断によってもたらされたといえる。利直は武人としてだけでなく、文芸にも通じ、詩歌・茶道・能などにも優れた才があった。寛永9年8月18日、江戸桜田邸にて没。享年56歳。

<参考>『南部藩・参考諸家系図』、『鹿角市史』。

なんぶ のぶなお

南部 信直 1546（天文15年）～1599（慶長4年）

盛岡藩の基礎を作った初代藩主

南部氏2代南部政康の孫で、津軽郡石川城主石川左衛門高信の長男。五男が毛馬内氏の祖となった^{ゆげいひでのり}靱負秀範である。三戸南部氏は、安信の子晴政の代になると、近隣諸豪との抗戦のみならず、国内にも反乱がしばしば起こって、三戸城も一旦消失した。晴政の嫡子彦三郎晴継が早世すると、南部氏の家督をめぐって、当時田子城主であった信直と九戸城主九戸政実が対立。天正18年（1590）、信直は豊臣秀吉の小田原攻めにいち早くはせ参じて、領地安堵状を与えられた。翌19年、信直は秀吉の援軍を得て、逆賊となった九戸氏の九戸城を攻撃、政実方五千の兵に対し、信直方は五万とも六万とも言われる。この時、鹿角の地士たちも一族を二分して、両者に加担せざるを得なかったとされる。これが世にいう九戸戦争とも九戸争乱とも呼ばれるもので、また秀吉の「奥州再仕置き」とも称されるものである。九戸争乱に勝利した信直は、南部氏26代を家督、やがて三戸から盛岡の不来方へ城を移し、盛岡藩初代藩主となった。以後、盛岡藩は近世大名として発展していくことになる。

<参考>『南部藩・参考諸家系図』、『鹿角市史第一巻・第二巻上』。

なんぶ や やそじ

南部（屋） 八十治 生没年不詳、江戸中期の人

尾去沢銅山を経営した江戸の商人

享保19年（1734）、総称として用いられた「尾去沢銅山」のうち長坂御山を稼行したのち、同年8月尾去沢銅山の支配人となった江戸の商人。南部八十治、又の名を南部屋八

十治と称した。尾去沢銅山の稼行に乗り出した八十治は、長崎奉行より前借金一万両をうけ、廻銅定数一ヶ年100万斤を請け負ったといわれる。ところが、その頃長崎廻銅高は不振を続け、唐船の入港を制限し輸出の削減を図らなければならない状況にあったという。こうして享保から元文にかけて長崎廻銅が不振におちいり、貿易に差支えを生じたことに対する糾問が行われ、寛保2年(1742)八十治は廻銅遅滞の責任を問われ御山御免となった。以後尾去沢銅山の稼行は18人の盛岡商人組合を経て森田屋六右衛門に替わったが、商人たちの積年にわたる放漫経営と廻銅の遅滞によって、明和2年(1765)ついに南部藩は尾去沢銅山を藩直営としたのである。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『尾去沢・白根鉱山史』、『南部藩・雑書』。

にしだ てんこう

西田 天香 1872(明治5年)～1968(昭和43年)

田の沢鉱山を経営した曙一燈園の修養家

明治5年3月18日、滋賀県長浜に生まれる。本名は市太郎。青年時代に二宮尊徳の報徳思想の強い影響を受けて北海道の開拓事業に参加するが、3年で挫折。20歳代後半から懷疑と求道の放浪生活を送る。明治38年故郷での修行をもとに、後に京都に開く修養道場一燈園につながる奉仕活動を始める。一燈園は無所有無一物の懺悔奉仕の生活にもとづく「光明祈願」を主旨とし、各地を托鉢しながら修養する宗教団体であった。

37年天香の親戚の実業家・西田卯三郎は、八幡平檜内の田の沢鉱山の鉱業権を花輪の関村清之助(屋号は村六)から譲渡されたが、経営不振に陥り、39年京都の天香に泣きつき、鉱業権を天香に譲渡した。天香が経営する宣光社第1号としての田の沢鉱山の事業は、労使協調の理想的事業と社会経済改革を試みる新しい村の建設にあった。天香は、立派な洋風の鉱山事務所を建設、それは修養道場としての曙一燈園を兼ねていた。また、田の沢鉱山尋常小学校(私立)を開設し、校長以下3名の教員を雇用して従業員の子弟教育につとめ、販売所などを設立し村造りに尽力した。400人以上の従業員を雇用し、月産粗銅60屯以上もの鉱石を小坂鉱山に販売して一時の繁栄をみたが昭和17、8年頃に閉山した。曙一燈園は市内での便所掃除やすわらじ劇団の演劇公演を行なったと伝えられる。昭和43年2月29日没、享年95歳。

<参考>『西田天香(平成10年)市立長浜城歴史博物館刊』、『一燈園 西田天香の生涯(三浦隆夫)』、『西田天香 この心この身このくらし(宮田昌明)』。

にしよのせき ぐんうえもん

二所乃関 軍右衛門 1804(文化元年)～1839(天保10年)

角界の第1人者「沢風」

文化元年、肝煎阿部甚之丞の次男として鹿角郡長嶺村に生まれる。幼名は甚八、幼年時より優れた体力と力量の持ち主であった。15年、甚八14歳の時、旦那(知行主)目時隆之進の推挙により、三十八代藩主利済の御陸尺となり、「大力の甚八」と可愛がられた。その後藩の御抱え力士として江戸藩邸に伴なわれ、身分はそのまま江戸相撲に入り、しこ名を

「沢風」と名乗り、二所乃関一門に入門。文政7年（1824）20歳の時、江戸大相撲において優勝、十両筆頭に昇進する。さらに將軍上覧相撲で優勝、24歳の頃、江戸相撲の本場所で大関を破って日本一の相撲取となった。天保9年32歳の頃、その怪力無双ぶりを朋輩に妬まれ、藤裏草履に猛毒を仕込まれた。豪病を得て現役を去り、二所乃関部屋二代目親方を継いで二所乃関軍右衛門と名乗ったが、遂に病を得て郷里長嶺に帰り、天保10年9月25日、薬石効なく35歳の若さで永眠した。

東京相撲の地方巡業が花輪で開催される時は、二所乃関一門の関取衆が長嶺の二代目二所乃関軍右衛門の墓参に人力車を連ねるのが恒例であったという。

<参考>『鹿角市史第四巻』、『老人大学学習記録集「八幡平伝承ひろい其の一」』、『上津野第10号』。

にゅうい よしひろ

乳井 義博 1906（明治39年）～1975（昭和50年）

多くの日本一の剣道家を育成した剣道家

明治39年、花輪六日町に生まれ、小枝指の児玉高慶に剣道を学ぶ。大正9年（1920）に上京し、当時日本一の剣道家で「昭和の剣聖」と呼ばれた高野佐三郎の道場「修道学院」に入門して中西派一刀流を学ぶ。乳井は「修道学院」の三羽鳥の一人に数えられ「白鬼」の異名をとる。相撲取りのような大柄な体格で力が強く、通常の竹刀（約500g）より重い竹刀（800g）を使い、ときに真剣並み（1kg）の竹刀も使った。毎朝重い振り棒を300～1000回振っていた。二刀流の遣い手であり積極的に二刀を教えた。昭和4年（1929）、高野の推薦により第二高等学校剣道師範に就任するとともに育英中学校、小牛田農林、東北帝国大学などでも剣道の指導をした。その指導力は高く評価され「東北に乳井あり」と全国にその名が轟き、11年大日本武徳会から剣道教士号を授与される。第二次大戦後、仙台市立町に道場を開く。24年高野から剣道十段を授与される。指導した小牛田農林は日本一の選手を多く輩出した。特に千葉仁が全日本剣道選手権大会で3度目の優勝を果たした際、緑内障であった乳井が「千葉はまだ足を上げて進んでいる。つま先を上げず、すり足で攻めるように言っておけ」と言付けしたのは心眼あるいは音で判断したといわれている。戦後、安全なスポーツ化した剣道を批判した。「体当たり、足払いなどを禁止した剣道は竹刀の触りっこにすぎない、ラグビーは体と体がぶつかる、剣道は足をかけられても死ぬことはないのだから、禁止ではなく、審判が止めればよい」と語っていた。剣道の技を36通りに編集し学生に教えたほか、指導した「水平切り返し」は現在も小牛田農林高校、角田高校に受け継がれている。昭和50年12月30日死去。享年69歳。

<参考>『剣道日本』、『剣道時代』。

ぬかづか えいじろう

糠塚 英次郎 1903（明治36年）～1981（昭和56年）

戦後、新制毛馬内中学校の基礎を作った初代校長

明治36年4月20日、岩助とヨシの四男として毛馬内に生まれる。京都帝国大学工学部

卒業後、台湾の台北市鉄道局に勤務、工場長等を務めた。終戦で引き揚げの際、英次郎は輸送船の指揮をとり、それには同郷の大里武八郎が乗船していた。

帰郷後は鹿角工業学校の英語教師となり、昭和22年6月から32年3月まで10年間にわたり毛馬内中学校校長として奉職した。その間、23年6月校舎二教室を増築落成、24年6月東京への修学旅行、26年7月天野貞祐文相の来校、27年第1期工事新校舎落成移転、28年4月学校図書館の開館、31年白鳥省吾の作詩による校歌制定などの事業を行う。生徒中心の地域社会に根ざした学校教育全般にわたる基盤造りに専念した。昭和56年6月15日没。享年78歳。

<参考>『毛馬内中学校沿革史（昭和38年3月発行）』、『同窓会誌 第14号（昭和22年刊）』。

ねもと ごろう

根本 五郎 1846（弘化3年）～1922（大正11年）

学務委員、畜産委員、初代曙村村長

弘化3年、鹿角郡八幡平の長井田村長内「上の家」に生まれる。明治13年（1880）、五郎は長井田村戸長であったが、学区制の廃止により第一学区学務委員となる。学区設置、教員の委嘱任免、教則・教科書用書籍の選定、授業料や公費一切の収支予算を定めるなどの学制改革に参画した。また、秋田県から委託された畜産会の畜産委員を務め、自らも種馬を飼育する馬産家の一人として、郡内の馬匹改良のため種牡馬の導入及び普及と適正配置に尽力した。22年、長井田村と松谷村の合併により曙村初代村長に就任、3期にわたり村政の刷新に当たった。さらに、33年には第14回秋田県県会議員も務めた。大正11年8月13日死去、享年76歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』、『鹿角のあゆみ』。

のじり さきょう

野尻 左京 生没年不詳 江戸初期の人

「三ヶ田堰」水路開削で開田

鹿角三郷士（野尻左京、草木丹後、牛馬長根越後）の一人で、江戸初期、八幡平荒町地区に水路を開削して農業の発展に貢献した豪族。江戸初期、花輪館に転封された毛馬内九左衛門の命を受け、夏井村岩崎から大久保、杉山、三ヶ田を通り荒町から野尻にいたる4kmにおよぶ水路開削事業を難工事のすえ完成させた。その水路は「三ヶ田堰」と呼ばれて、広大な原野が開田されて稲作ができるようになり、集落が形成されて発展した。三ヶ田堰は今も当時とほぼ同じ場所にあり、毎年住民が堰上げを行うなどの管理をしている。荒町・野尻集落が今日あるのは野尻左京のおかげだとして、住民は推測される屋敷跡・墓地跡の整備を計画している。また八幡平小豆沢の吉祥院は野尻左京の菩提寺ともいわれ、その愛娘の石仏が参道脇に建てられている。

<参考>『鹿角市史第二卷下』、『歴史の中の鹿角中巻』、『野尻左京研究会（畠山博英）』、

『北鹿新聞（令和元年7月19日）』。

の と や に し む ら せいざえもん
能登屋（西村）清左衛門 生没年不詳、江戸期の人

毛馬内の味噌醸造家で、榎山金山の山師

能登屋清左衛門の先祖は、榎山鉦山の山師である。榎山鉦山は、古代から鹿角と比内を結ぶ連絡路の巻山峠の上り口にあった。榎山金山は、白根発見の翌年慶長4年（1599）に見立てられ、やがて北十左衛門によって白根、西道とともに榎山三金山が支配されたといわれる。『開立年限附』には、元禄3年（1690）より7ヶ年毛馬内町山師の能登屋清左衛門が金銅山として働き、のち銅山になったと記されている。また、能登屋は生活必需品で備荒食品でもある味噌を自家用だけでなく、販売用の味噌・銅山の御用味噌の営業用として醸造していた。酒造業は藩政が確立し民生が安定するにつれて需要が高まった。元禄4年当時の毛馬内の酒屋衆は、山本九郎兵衛、片山甚吉、西村清左衛門、若松屋利兵衛らがあり、御用金は個人に仰付けることなく、酒屋組合に一括して申して戴きたい旨、藩庁へ願出がなされた。それは、無理な御用金や割付の不公平を避けようとするものであった。

天明3年（1783）は未曾有の大凶作にみまわれ、翌年3月、勤番代官大須賀忠太より差紙があり、知行高50石の給人に召出す旨、城下より達しがあった事が告げられ、西村清左衛門らが御用金の上納を引き換えに給人取立となった。しかし、商人達を給人として所御用に縛ることは支障があるので、商売は二男を家代として相続させ従来通り商売を続けるようにとの申渡しがあった。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』。

は し も と うんきち
橋本 運吉 1929（昭和4年）～2014（平成26年）

教育文化の向上・「大日堂舞楽」の保存に尽力

昭和4年7月1日、喜一郎とリワの長男として小豆沢に生まれる。秋田師範学校を卒業後、理科教員として平成2年尾去沢中学校長を最後に職を辞するまで、一貫して学校教育に携わった。退職後もトンボなど昆虫類の分布調査を続けた。また、地元八幡平小豆沢の大日堂舞楽の諸行事に自ら出演するかたわら、保存会活動を通して、舞楽の保存・伝承活動及び後継者育成に尽力した。昭和49年からは、保存会の幹事（事務局）を務め、舞楽奉納4集落間の調整・意識高揚を図り、保存会活動の充実に当たった。昭和51年大日堂舞楽が国の重要無形民俗文化財指定を機に、大日堂舞楽記録集作成に当たっては、編集員として参画した。さらには、鹿角市出土文化財管理センター館長、鹿角市文化財保護協会監事、八幡平史談会副会長などを歴任した。平成11年秋田県民俗芸能功労者表彰。15年鹿角市文化功労者表彰。平成26年7月3日死去。享年85歳。

<参考>『大日堂舞楽』、『鹿角市広報（平成15年）』。

はせがわ りゅうきょう

長谷川 龍 嵩 生没年不詳、江戸末期の人

盛岡藩の儒学者で鹿角人に俳句、短歌、漢詩を指導した文化人

盛岡藩の儒学者で、泉澤織太に経学を内藤天爵に経史を教えた。泉澤は泉澤塾を、天爵は内藤塾を開き、それぞれ鹿角学統の双璧を成す。

長谷川は錦木にも深く傾倒しており、文化2年(1805)刊行された『錦木集』に漢詩「錦樹墳歌七言古」を、馬淵里夕の書画集『錦木集』に「文化乙丑之夏」の序文を寄せるなど、鹿角人に俳句、短歌、漢詩を指導している。なお「錦樹墳歌七言古」は菅江真澄の「錦木」(仮題)〔菅江真澄全集第四巻〕にも収められおり、菅江との交流もうかがえる。

<参考>『鹿角市史第二巻下』、『鹿角志(内藤十湾著)』、『菅江真澄全集第四巻』。

はたけやま きいち

畠山 喜一 1916(大正5年)～2002(平成14年)

地方自治に貢献、鹿角交通協会初代会長

大正5年3月3日、久造とキエの長男として湯瀬村に生まれる。尋常高等小学校卒業後、秋田土崎の軍需工場に奉仕、戦争に駆り出される。

戦後、昭和26年(1951)から60年まで通算26年にわたり、宮川村、八幡平村、鹿角市の各議会議員を務め、八幡平村議会議長、鹿角郡町村議長会会長などを歴任、鹿角市発足に尽力した。また、50年財団法人鹿角交通協会設立と同時に会長に就任、55年に退任するまで交通安全思想の普及や交通事故防止に尽力した。63年鹿角市功労者表彰。平成5年勲四等瑞宝章受章。平成14年8月28日死去、享年86歳。

<参考>『鹿角市広報(昭和63年)』。

はたけやま せいいち

畠山 誠一 1927(昭和2年)～2005(平成17年)

歴史文化の振興に寄与

昭和2年10月30日、与七とトメの長男として鹿角郡の宮川村鷺の巣に生まれる。日本大学卒業後、鹿角市職員として奉職。のち地域住民に推され鹿角市議会議員を務め、高邁な政治信念のもと、山積する課題に積極的に取り組み、地方自治の振興に尽力した。この間、総務財政常任委員会副委員長、交通網整備促進特別委員会委員長を歴任した。また郷土史に造詣が深く、八幡平史談会会長、鹿角市文化財保護協会理事を務め、「史跡大里城跡」の標示板を設置した。さらに家紋の研究者としても知られ、地域の歴史文化の振興に大きく寄与した。平成14年鹿角市文化功労者表彰。平成17年8月24日死去、享年77歳。

<参考>『鹿角市広報(平成14年)』。

はなた えいたろう

花田 栄太郎 生年不詳～1937(昭和12年)

明治期鹿角唯一の文芸誌『かづの』の編集発行者・俳人

花輪生まれ。俳号旭峰。盛岡の大森白我の門下で花輪最後の文人といわれる。俳句のほか和歌、漢詩、都都逸と、その多才ぶりは個人で明治45年(1912)7月に第一号を発行した文芸誌『かづの』で見ることができる。この『かづの』には、安藤和風ら三人の選者による俳句として、旭峰以下鹿角の十数人の作品、及び立山香峰、吉田月耕らの和歌や高杉露星、花野露村らの短歌が収められている。『かづの』は、明治期に発行された鹿角唯一の文芸誌である。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』、『鹿角の俳人(みづうみ俳句会編)』。

はなわ ほうきのかみ ちかゆき

花輪(伯耆守)親行 生没年不詳、戦国期～江戸初期の人

鹿角の有力国人で後の円子氏

花輪氏は鹿角四氏のうち安保氏を祖とする。安保氏は武蔵国安保郷(現・埼玉県神川村)を発祥地とし、鎌倉末期に鹿角郡内に地頭代として派遣された一族である。『鹿角由来集』には「安保兄弟三人、都より下り長男は大里村、次男は花輪村、三男は柴内村を領地」と伝えられている。安保三人衆は、戦国期にしばしば三戸南部氏に反抗し、永禄8年(1565)檜山安東氏の鹿角侵攻に当たり、安東氏に味方し長牛城を包圍攻撃した。同11年、南部氏の鹿角出兵により安東勢が撤退し、花輪親行らは一時郡外に退去したが、その後南部晴政と信直父子の対立が起こり、晴政に仕えた親行は、天正年間(1573～92)信直により九戸(現・軽米町)円子に所替えとなり、円子氏を称した。

<参考>『鹿角市史第一卷・第二卷下』。

はれさわ なおみ

晴澤 直見 1905(明治38年)～1995(平成7年)

教育・社会福祉の向上に寄与

明治38年12月21日、恒治とトクの長男として鹿角郡の宮川村谷内に生まれる。秋田師範学校(現・秋田大学)卒業。大正12年(1923)教職に就き一時兵役に服したが、退職するまで郡内の小・中学校の校長等を歴任、子弟教育の充実と向上に寄与した。

昭和27年(1952)からは宮川村教育委員、八幡平村教育委員・同教育長、また公民館長として青少年の健全育成や老人の生きがいと組織づくりに努力し、老人大学学習記録集『八幡平伝承ひろい』を発行するなど、鹿角市老人クラブ連合会長として活躍した。さらに鹿角市社会福祉協議会理事、八幡平体育協会会長として教育の向上と民生の安定のために貢献した。のち天照皇御祖神社(谷内)の宮司として神職に従事した。53年鹿角市文化功労者表彰、平成7年1月1日死去。享年89歳

<参考>『鹿角市史第一卷』、『鹿角市広報(昭和53年)』、『老人大学学習記録集』。

はれさわ ひさし

晴澤 久 1930(昭和5年)～2013(平成25年)

青少年保護育成教育・社会福祉の向上に寄与

昭和5年5月16日、直見とキミの長男として鹿角郡の宮川村谷内に生まれる。秋田大学卒業後、郡市内の中学校教員を長年務め、花輪第二中学校校長を最後に退職した。その後、教育現場で培った豊富な知識と経験を活かし、鹿角市青少年保護育成委員会、同青少年問題協議会、同青少年育成市民会議などに参画、青少年を見守る体制作りに尽力した。

久は父直見の跡を受けて天照皇御祖神社（谷内）の宮司職を継ぎ、大日堂舞楽谷内五大尊舞保存会会長としてその保存に努めた。そのほか鹿角市声良鶏保存会会長、また八幡平地区および鹿角市老人クラブ連合会の会長を務め、文化財の保護や老人クラブ活動の継承発展に寄与、地域のリーダーとして活躍した。これらの功績が評価され、秋田県警察本部長功労表彰、東北管区功労表彰、平成11年警察庁長官功労栄誉金賞受賞。24年鹿角市文化功労者表彰。平成25年6月28日死去。享年83歳。

<参考>『鹿角市広報（平成24年）』。

ふくだ こうざん

福田 光山 1904（明治37年）～1978（昭和53年）

戦後「鹿角焼」を指導した陶工

戦後間もない昭和22年（1947）、浅利佐助らが出資して花輪上旭町に鹿角陶器株式会社が設立され、陶工福田光山（本名：渉^{わたる}）を千葉県寒川（現・野田市）から招いた。絵付を相川善一郎、奈良裕功、高杉洋介が担当して半磁器をつくり、これが「鹿角焼」と呼ばれた。日用雑器をはじめ、美術工芸品は秋田、盛岡、東京と販路を求めたが、終戦直後のこともあり、鹿角焼は県の美術工芸展で知事賞を得るも、24年には経営不振のため解散に至った。昭和53年没、享年74歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

ふくなが みつこ

福永 光子 1914（大正3年）～2004（平成16年）

地域住民の保健医療に尽力

大正3年9月16日、黒岩鹿蔵とヤスの長女として九州の福岡に生まれる。帝国女子医専（現在の東邦医大）卒。戦時下の医師不足時代、小坂鉦山病院に乞われて夫の医師福永一夫と赴任、まもなく地域の強い要請により毛馬内に福永医院を開業した。以来60年近くの長きにわたり、強い信念と責任感のもとに地域住民の保健医療に尽力し、医療の充実と生活環境の向上に貢献した。また、予防接種事業などの市の保健行政にも積極的に協力、十和田高等学校の校医として生徒の健康管理に努めるとともに、体位向上や健康相談、保健衛生の啓蒙に尽力し青少年の健全育成に貢献した。平成7年介護老人保健施設「鹿角微笑苑^{みしやうえん}」、平成14年グループホーム「せきがみ」「こさか」などを設立。

また、官休庵鹿角会代表として武者小路千家の茶道を長年にわたり指導し、伝統文化の継承にも努めた。平成10年秋田県知事、秋田県学校保健会長より表彰、12年鹿角市文化功労者表彰。平成16年11月9日没、享年90歳。

<参考>『鹿角市広報（平成12年度）』。

ふくもと はるお

福本 晴男 1940（昭和15年）～2014（平成26年）

毛馬内のために多くの作品を造った彫刻家

昭和15年、毛馬内出身の安蔵の二男として東京都日暮里に生まれる。父のもとで木工を手伝いながら、35年都立工芸高校を卒業、鈴木慶雲に師事する。この年、第9回創型展に初出品、以後連続出品し、第16回展で「ねこ」の奨励賞受賞を皮切りに、都知事賞、創型会賞、文部大臣奨励賞など数々の賞を受ける。45年には創型会同人となり、後には審査委員、日本美術家連盟会員として活躍。また度々、東京や大阪で個展を開いてきた。

十和田市民センター前の「はばたきの像」は、福本が毛馬内のために初めて制作したもので、55年7月に設置された。その後も、毛馬内出身の木村博氏の寄贈になる「盆踊り」（平成19年8月19日除幕）、「内藤湖南先生像」（21年11月8日除幕）、仁叟寺への「道元禪師御像」（25年）を制作した。また鹿角市には、10年「鳥をもつ少女」を寄贈している。多くの作品を鹿角に残して、平成26年9月11日、突然この世を去った。享年74歳。

ふなこし げっこう

船越 月江 1830（天保元年）～1881（明治14年）

川口月嶺の高弟で、盛岡藩の画家

天保元年、尾去沢の山先青山家の九代青山金右衛門榮謙の三男として尾去沢^{たごおり}田郡に生まれる。本名は長善、通称は善治であったが、盛岡藩勘定奉行頭取と同名であったことから、善四郎と改名した。数え17歳で盛岡の船越家に養子となり、20歳から盛岡藩に仕えた。花輪出身の盛岡藩の絵師川口月嶺に師事していたことから、15代藩主南部^{としひき}利剛の弟新二郎の御画御相手となった。

月江は砲術にも励んだことが記録されており、幕末期には蝦夷地の防衛を任された盛岡藩士として蝦夷地（北海道）に渡る。この時の実績から明治5年（1872）、北海道開拓使の吏員となって測量や地図の製作に携わる。その傍ら風景を写生したことで知られ、「明治6年札幌市街之真景」、「胆振国勇払郡樽前岳噴火図」などは、開拓期の北海道を描写した絵として著名である。明治14年死去。享年51歳。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』、『青山家談叢（青山隆一著）』、『盛岡藩士船越長善（月江）の足跡（齋藤里香著）』。

ふもと さぶろう

麓 三郎 1893（明治26年）～1976（昭和51年）

尾去沢鉦山史、白根鉦山史の研究者

明治26年、岩手県に生まれる。旧東京高等商業学校を経て、同専攻部を卒業した。三菱合資会社入社、三菱鉱業株式会社海外、人事、総務の各部長を歴任した後、監査役を務める。昭和27年退社。勤務の傍ら、鉦山史の研究などを行う。31年『佐渡金銀山史話』、39

年『尾去沢・白根鉱山史』等を執筆した。

特に、『尾去沢・白根鉱山史』は鉱山王国であった鹿角の主要鉱山の歴史を諸文献を基に、豊臣時代から描いたもので、鹿角市史も本書によるところが大きい。本書は、「金山の時代」、「銅山請負稼行の時代」、「銅山藩営稼行の時代」、「藩営期における生産組織」、「大坂廻銅」、「明治初期における尾去沢鉱山」の章立てをしている。この中の「長崎御用銅供出と銅山経営」では、江戸期の尾去沢、花輪、大湯、来満峠の御銅街道と、田子（以下青森県）、三戸、野辺地とつながる鹿角街道について、さらに野辺地湊より大坂、長崎までの北前船の流通について明らかにしている。昭和30年（1955）、石川県能登沖で沈没した北前船に銅が積み込まれていたことが明らかになり、広大な銅の流通ルートの実証的な研究も進んでいる。昭和51年死去。享年83歳。

<参考> 『鹿角市史第二卷上』、『鹿角のあゆみ』、『尾去沢・白根鉱山史』。

ふるかわ こしょうけん

古河 古松軒 1726（享保11年）～1807（文化4年）

江戸後期巡見使に随行し『東遊雑記』を著す

享保11年8月、備中国（現・岡山県）下道郡新本村に生まれる。中期より日本各地を旅して『西遊雑記』、『東遊雑記』等の紀行を著し、また絵図を制作した。晩年、江戸幕府に命じられて江戸近郊の地誌『四神地名録』を編纂した。その紀行文は、『奥の細道』など古人の足跡を辿り、旅先で自ら実見、体感したままを記述、学問的に考察しようとする点に特色がある。「上方・中国筋」を基準としてその土地の不便性、後進性の程度を批評している点、時に経済、軍事学的考察を加えている点なども特徴といえる。

古松軒は天明8年（1788）幕府巡見使に随行して鹿角に入った。8月3日、三戸から来満峠を越えて大湯に入り、4日に大湯を出て錦木塚に立ち寄り、松山から尾去沢銅山へ。6日、花輪を出て大日堂に寄り、湯瀬を経て田山へ。この3日から6日までの4日間の鹿角在住の見聞を記した『東遊雑記』は、当時の鹿角の村や町、鉱山の様子のみならず、人々の暮らし振りや風俗について貴重な記録を残している。文化4年11月10日没、享年81歳。

<参考> 『鹿角市史第一卷・第二卷下・第四巻』、『鹿角のあゆみ』。

ほんだ えいのすけ

本田 鋭之助 1878（明治11年）～1945（昭和20年）

地域医療に貢献した仁医

明治11年7月18日、延司の長男として毛馬内古町に生まれる。毛馬内小学校では、陸軍中将となる石川漣平と同級生であった。26年盛岡中学入学、総理大臣となる米内光政と席を並べたという。盛岡中学卒業後仙台第二高等学校に進み、その三部（医科）を卒業し、ただちに京都帝国大学に入学して41年3月卒業。帰郷後は自宅に開業、資性温厚で良心的な医療に努めたので、患者の信頼が厚かった。また七滝小学校や毛馬内小学校の学校医を務め、児童の保健衛生の向上に努めた。現在の本田医院は3代目である。昭和20年3月28

日没。享年67歳。

<参考>『十和田町の先輩』。

ほんだ えんじ

本田 延司 1843（天保14年）～1922（大正11年）

初代毛馬内町長

天保14年8月21日毛馬内に生まれる。本田家は代々桜庭氏の家臣で、延司は清廉潔白で古武士の風格があった。明治22年（1889）町村制発布により、毛馬内村外2ヶ村戸長であった延司は、初代毛馬内町長に挙げられた。助役伊藤文七と協力して、明治中期の毛馬内の基礎を作った。隣村の山根外三ヶ村が合併して七滝村と称したのは、延司の発案で決まったという。また延司は山根地区の住人が自分たち農民を診てくれる医者をも切望していることを知り、彼らの協力も得て長男の鋭之助を医者への道へ進ませたのである。大正11年1月5日没。享年78歳。

<参考>『十和田町の先輩』。

ほんま きよまつ

本間 喜代松 1907（明治40年）～1993（平成5年）

山ごぼう栽培の基盤を築く

明治40年、直助とマミの子として比内町独鉆に生まれる。独学で教員及び普及員の資格を取得し、代用教員・青年学校の教諭として子弟の教育に尽くした。昭和26年（1951）秋田県農務課（柴平農協）時代、本間の尽力によって県果樹協会は発足した。秋田県農業協会・秋田県職員を経て、27年秋田県技術吏員となり、40年秋田県職を退くまで農業改良普及所長など歴任。多年にわたり農業技術改良普及及び指導に尽力した。

畑作振興のため山ごぼうの採種圃を指導して、鹿角の山ごぼう栽培の基盤を築くとともに「十和田人参」を創作した。また、りんごの品種更新を推進するため接ぎ木をしたその年から結実させる「大枝接ぎ」を考案し、早期栽培の一大改革を行うなど鹿角農業の振興に大きく貢献した。60年鹿角市文化功労者表彰。平成5年6月10日没、享年86歳。

<参考>『広報かづの（昭和60年11月号）』。

まいた ひろし

米田 博 1920（大正9年）～2009（平成21年）

鹿角の植物誌を著した教育者

大正9年11月20日、泰次郎とイヨの三男として大湯に生まれる。秋田師範学校に学び、昭和16年に卒業して教職につき県内小中学校に勤務。32年に秋田大学生物研究所に内地留学。44年鹿角市理科教育研究会会長。52年鹿角市立大湯小学校長を最後に退職。55年から63年まで鹿角市教育委員。

教鞭を執る傍ら自らが撮影した写真をもとに、市内の山野に自生する植物を分かり易くまとめた『かづの草木ノート』を58年から3年間にわたって「広報鹿角」に連載し、それ

を一冊の単行本にして発刊。又、『秋田県鹿角地方植物誌』を発刊。平成2年鹿角自然の会会長。3年に鹿角市文化功労章受章。郷土の先人達の残した貴重な植物標本を整理分類した『泉沢恒蔵・立山廉吉植物標本日録』を編さんし、植物標本や採集用具一式・関連資料などが「緑の文庫」として十和田図書館に保存されている。14年には『北国鹿角地方(秋田県)の滅びゆく野生植物』を発行するなど、まさに植物に生涯をかけ郷土の自然を愛した人生であった。平成21年5月5日死去。享年88歳。

<参考>『鹿角市史第一巻・第四巻』。

まがた けいきち

曲田 慶吉 1888(明治21年)～1941(昭和16年)

『鹿角郷土誌』『伝説の鹿角』などを著した教育者

明治21年9月2日、儀助の長男として大湯に生まれる。42年秋田師範学校を卒業後、花輪、小坂、錦木、郡外の切石、男鹿などの小学校教師や校長を務めた。教育学も大きく転換しつつある時期で、「教育改革は確固たる信念と理論を身に付けることが大事」と世界の新教育運動の思想や、フランスのベルグソンの生命哲学に基づく教育論を教え、後輩教育者に大きな影響を与えた。また勤務地を中心にして資料を集め、郷土教育のために各地で郷土誌を発行している。鹿角郡在職の頃『鹿角郷土誌』や『伝説の鹿角』『錦木村郷土史』を発行、新聞などにも歴史や民俗に関する文章を数多く投稿して郷土研究者として有名になり、その著書は他郡の人々の鹿角研究の資料としても活用された。『鹿角郷土誌』は内藤十湾の『鹿角志』に次ぐ郡内2番目の総合郷土史で、その真摯な研究に師範学校長和田喜八郎は「類書中の白眉である」と激賞している。昭和5年9月の東伏見宮大妃殿下の御成に際しては、錦木塚伝説をご説明申し上げる栄を担っている。昭和16年4月2日死去。享年52歳。

<参考>『鹿角人物誌』、『鹿角市史第三巻下・第四巻』。

まき だいすけ

牧 大介 1920(大正9年)～1990(平成2年)

洋画家で、『花岡ものがたり』の作者の一人

大正9年4月、毛馬内に生まれる。本名は下村信一。旧制大館中学に進み、叔父の乳井良五郎が花岡鉱山直営劇場の共楽館の館主であったことから世話になった。卒業後、日製日立工場に勤め美術部を創設、戦後の昭和25年GHQの指令によるレッドバージ(赤狩り)に見舞われ、日立争議の5,555人の首切りで職を失った。そのとき下村らは、中国美術の一分野である木刻連環画を手本に『日立物語』を制作発行した。次に、戦前の花岡鉱山で蜂起した中国捕虜労働者が共楽館の広場に駆り集められ、首謀者とみられる人たちが苛酷な拷問をうけ、多くの中国人が死んでいった悲惨な花岡事件を取材。滝平二郎・新居浩治・牧大介の三人で『花岡ものがたり』を作成、昭和26年5月に発行。この集団創作の連環画は31年に中国で『花岡惨案』として出版され、ベストセラーとなった。

その後、新しいばらきタイムス社に入社、牧大介のペンネームを使い画家の道にはいり、42年には毛馬内で「牧大介油彩展」を開き、油彩「毛馬内盆踊り」(十和田市民センター所

蔵)を寄贈した。茨城県美術家懇談会常任理事などを務め、ふるさとを愛しながらも芸術と平和運動に厳しく生き、平成2年12月29日、心不全で70歳をもって没した。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『秋田さきがけ(平成3年1月17日夕刊)「花岡」を刻んだ画家一毛馬内出身・牧大介を悼む(野添憲治)』、『花岡ものがたり(無明舎1981年)』。

ますだ てこな

増田 手古奈 1897(明治30年)～1993(平成5年)

大鰐で『十和田』を主宰し鹿角俳人を指導

明治30年10月3日、滝弥・きよの長男として青森県南津軽郡蔵館村(現大鰐町)に生まれる。本名義男。大正7年(1918)東京帝大医学部入学、大学院時代の12年、水原秋桜子に勧められて高浜虚子門に。この年千葉県真間の手児奈堂吟行の折から「手古奈」を号とし、『ホトトギス』の新人として活躍。昭和6年(1931)大鰐に帰郷して医院を開業、同年1月創刊の俳誌『十和田』を主宰して近隣の俳人たちを指導した。鹿角では小田島艸子、阿部胡六、鎌田露山をはじめとする多くの俳人が『十和田』に投句を続けた。手古奈もしばしば鹿角に足を運ぶなど、『十和田』と鹿角の俳壇は密接なつながりをもっていた。

昭和51年大鰐町名誉町民第一号となった手古奈は、60年余にわたり客観写生の俳句の道を広めて、平成5年1月10日、95歳の生涯を終えた。『十和田』はこの年5月の終刊まで、実に734号を数えている。

<参考>『戦後詩歌俳句人名事典(日外アソシエーツ)』、『東北近代文学事典(勉誠出版)』、『鹿角市史第三卷下』、『鹿角の俳人(みずうみ俳句会)』。

またしろう

又四郎 生年不詳～1839(天保10年)

幕末花輪を代表する酒屋「小浜屋(小又)」

元和元年(1615)創業と伝わる花輪の酒屋「小浜屋(小又)」10代目にあたる又四郎は、当時藩内一といわれた花輪谷地田町の豪商・佐藤屋庄之助(佐庄)の三男として生まれる。幼名は子之助。同町内の小浜屋へ婿養子となり、先代の名を継いだ。文化年間(1804～18)、小浜屋は多額の御用金を藩に納めていたが、天保5年(1834)には又四郎が200両もの大金を上納した。この功により南部盛岡藩花輪通り御給人にとりたてられ、田村又四郎義則を名乗った。創業以来酒造業及び物流卸業に励んできた小浜屋は、この後商家と士族の二つの顔と名前を持つことになった。

<参考>『鹿角市第二卷上・下』、『松風邸建築調査報告書』。

まちい かつたろう

町井 勝太郎 1850(嘉永3年)～1941(昭和16年)

鉄道省で全国の鉄道の測量設計に携わる

嘉永3年12月29日、市十郎の長男として花輪に生まれる。明治維新後盛岡の作人館で英語、化学、測量学などの新知識を学び、花輪で子弟の教育にあたった。薫陶を受けた一人

に奈良八弥(のちの石田八弥)がいる。25歳の頃、工部省鉾山寮に登用され、明治8年(1875)、科学技術員として大葛鉾山に派遣、ついで小坂鉾山に移って鉾山開発に尽くした。同18年工部省鉄道局に転じ、以来全国の鉄道測量や設計を手がけ、鉄道の基礎づくりにあたった。昭和16年没、享年90歳。長男はゲーテ訳者の町井正路である。

<参考>『秋田人名大事典』、『上津野15号』。

まちい きちのすけ

町井 吉之助(加都屋善兵衛) 生年不詳～1863(文久3年)

酒屋「鹿都屋」を創業、御給人で佐庄事件に連座

父佐助の後を継ぐ。町井家『日記書留覚』によると、天保13年(1842)には毛馬内第一の酒屋名古屋善治の酒造株50石のうち25石を譲り受け、新たに鹿都屋善兵衛名で酒屋を開業した。資金の一部は佐庄が援助した。天保3年以来、連年の飢饉のため酒の需要が減少し、休業を余儀なくされたが、当時隆盛をきわめていた八戸領大野鉄山や奥通りで、良質な鹿角の酒の需要があることを知り、佐庄の鉄・海産物移入の見返りとして、酒を移出することにした。また天保4年には農民救済のため触所内に種粃20駄を献上している。

「鹿都屋」こと町井吉之助は永年の功勞で御給人、さらに南部毛馬内代官所書役になった。嘉永5年(1852)盛岡藩へ呼び出され、毛馬内通り40ヶ村の調査を命ぜられた。これは嘉永貢租改正の土地調査で、40ヶ村を村寄せして13ヶ村分13帳、南部土佐知行所、桜庭陽之助知行所、山本九一郎知行所の3帳を加えて16帳の詳細な調査を差出した。

町井吉之助は健筆で計算に明るいことから藩の諸調査を命ぜられたが、なに故か安政2年(1855)不調法の^{かど}廉ありとして酒屋証文を召上げられ追放、同4年佐庄も^{かくしだ}隠田があるとの理由で欠所、牢舎入りを命ぜられ、藩にすべての財産を没収された(佐庄事件)。その後、町井吉之助は妻リキの実家小坂村太田家(大稲坪)で文久3年4月22日没。

<参考>『鹿角市史第二卷上・下』、『歴史の中の鹿角上巻(奈良寿著)』。

まちい さすけ

町井 佐助(加都屋善治) 生年不詳～1834(天保5年)

佐庄の手代で、毛馬内の大商人

毛馬内の町井家は、花輪御給人・御境役の町井佐平治の分家で、その弟の佐平が寛政(1789～1800)の初期に毛馬内へ分地され、その子息が町井佐助である。明和2年(1765)尾去沢銅山が藩営となり、大坂廻銅の大部分は野辺地湊から船積みされ、その返り荷として上方の商品が多量に移入され領内有数の豪商となったのが花輪の佐藤屋庄六(佐庄)である。佐庄の商売は多岐にわたり交易の範囲も広がったのは、尾去沢鉾山の大消費地があったからである。

その野辺地湊との取引は、佐庄の手代町井佐助が担った。天保年間(1830～1843)の記録によると、銅輸送の戻り荷として上方から塩のほか木綿類・古着・繰綿・鯉ぶし・薬種が牛馬を連ねて送られ、鹿角からは米のほか紫根染・茜染が上方へ送られた。佐助は毛馬

内通り御蔵750石の肝入りを務めるかたわら、当時南部第一の豪商佐庄の手代として雑貨商を営み、鹿角両通り経済活動の中核をになった。天保5年12月3日没。

<参考>『鹿角市史第二卷上下・第四卷』。

まちい ちょうくろう

町井 長九郎 生年不詳～1676（延宝4年）

南部・秋田境界争論時の鹿角山見

鹿角は、中世より陸奥・出羽両国の大境であり、その境界争論・対決は江戸前期の延宝期に入っても止むことなく続いていたという。延宝3年（1675）9月、鹿角領の毎年草刈場としている尾去沢の鍋倉で百姓3人が萱を刈っていると、秋田領の人数300人ほどが論地を通して入り込み、そのうち30人ばかりで右の3人を囲み打擲し小荷駄8疋を奪った。おりがら論所見廻りに来ていた山見共のうち長九郎なる者が遠くから見かけ、走りよって「論地を越え、当領へ入って余りの狼藉、秋田方の山見衆は居られないか」とただしたところ、大勢の中から黒羽織の者が出て理不尽にも刀を抜き長九郎に切りかかってきた。長九郎は棒で打倒したが、大勢が脇差で向かってくるので是非無く脇差で切り払ったとされる。この事件で、長九郎は秋田領の百姓源十郎を切り殺したかどにより、翌年11月22日江戸評定所の判決で処刑されている。これを境目着落の端緒と意義づけている史料もあり、長年にわたって未解決のまま放置されてきた南部・秋田境界争論に対し、延宝5年ついに幕府評定所において論地に対する墨引きが行われ、さしも長年にわたった争論に終止符が打たれたのである。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』、『南部藩・雑書』、『古今萬覚鑑』。

まちい まさみち

町井 正路 1878（明治11年）～1946（昭和21年）

ゲーテ「ファウスト」の翻訳者・肥料研究者

明治11年1月20日、勝太郎の長男として花輪谷地田町に生まれる。父に従って北海道に渡り、札幌農学校（現・北海道大学農学部）に学び、卒業後は肥料会社に勤務した。中学時代から語学が堪能で、多くの英文の文学作品の和訳を手がけており、中でもゲーテ作『ファウスト』があり、これは高橋五郎訳に次ぐ二番目の訳業であった。文豪夏目漱石に贈呈したものに漱石自身の書き込みがされたものを鹿角市先人顕彰館が所蔵している。この後、それを森鷗外がドイツ語原典から翻訳した。また、肥料会社では硫酸の製造法で新しい発見をしており、都市における汚物処理に取り組んで事業を立ち上げている。昭和21年没、享年68歳。

<参考>『上津野第15号』、『秋田人名大事典』。

まつうら たけしろう

松浦 武四郎 1818（文化15年）～1888（明治21年）

幕末鹿角を訪れた蝦夷探検家・旅行家、『鹿角日誌』の著者

文化15年2月6日、桂介・とく子の四男として伊勢国一志郡須川村に生まれる。父親は庄屋で比較的恵まれた中、武四郎は後の探検家として役に立つ文化的な素養を身に付けたとされる。弘化3年(1846)に樺太詰となった松前藩医・西川春庵の下僕として同行し、北海道だけではなく択捉島や樺太にまで探査に及んだ。嘉永2年(1849)、蝦夷より江戸への帰り鹿角を通過したが、滞在した10日の間に各地を訪ね、多彩な事項を詳しく『鹿角日誌』としてまとめた。ここでは江戸末期の鹿角が絵入りで描かれ、花輪・毛馬内の町並みや鹿角紫根染・尾去沢鉱山の様子などが詳細に記述されている。安政2年(1855)に江戸幕府から蝦夷御用御雇に抜擢され、再び蝦夷地を踏査し、『東西蝦夷山川地理取調図』を出版した。明治2年(1869)には開拓判官となり、蝦夷地に「北海道」の名を選定した。北海道へは6度赴き、150冊の調査記録書を遺した。余生を著述に過ごしたが、死の前年まで全国歴遊を行っている。明治21年3月12日没、享年70歳。

<参考>『鹿角市史第二卷上下・第四巻』、『鹿角のあゆみ』。

まつおか はちざえもん

松岡 八左衛門 生年不詳～1699(元禄12年)

土深井の米代川藩境を画定した鹿角郡御境奉行

松岡氏は畠山氏族で二戸郡の浄法寺氏に出る。初代八左衛門は、和賀兵乱の際は所領6千石の大身で譜代の旧臣も多かったらしく、寛文9年(1669)家老八戸弥六郎らの要請を受け、浄法寺郷中の与力新田の開発に着手した。慶長8年(1603)に没落していた浄法寺譜代の旧臣たちのうち、大森助十郎・太田源太郎・勝又嘉兵衛・駒嶺兵右衛門・佐藤庄八ら12人の浪人がこの新田開発に従事し、その功によって毛馬内の与力に任命された。また八左衛門は元禄5年から15年まで鹿角郡御境奉行の任にあり、延宝5年(1677)幕府の裁定によって南部・秋田の境界論争に終止符が打たれたのち、洪水による流路の変化があった土深井の米代川藩境に御境柱10本を建てることを画定している。

<参考>『浄法寺町史・資料編』、『南部藩・参考諸家系図』、『鹿角市史第二卷上下』。

まつおか りゅういち

松岡 隆一 1924(大正13年)～2016(平成28年)

看板業と画家として町づくりに貢献

大正13年8月26日、友治とスミの長男として北秋田郡合川町に生まれる。復員後、昭和25年鹿角郡花輪町で「アトリエ・マツオカ」を開業する傍ら絵画をはじめた。看板デザインでは秋田県内業界をリード、秋田県ディスプレイ協会理事長を務めた。花輪町ライオンズクラブ初代会長、花輪町商工会理事として商工業の振興にも貢献した。

絵画は三軌会の互井開一に師事、三軌会展でプルブルー賞を受賞。三軌会評議員、秋田県支部長。代表作は「古代の舞」「北の挽歌(盆)」「北夏残響」「花輪ばやし」、画号は彩雪。公民館等で積極的に展示会を開催、花輪図書館の読書感想画や絵画の審査員を長年務めた。平成10年鹿角市一般功労表彰受賞。平成28年10月15日死去、享年92歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『鹿角市広報(平成10年)』。

まぶち おとじろう

馬淵 乙次郎 1835（天保6年）～1887（明治20年）

藩主利剛に文武を上覧、月嶺門下の画家

馬淵乙次郎は南溪と号した画家で、俳人里夕の孫である。父卓助は早く死に兄賢太も夭死したので幼少にして家を継いだ。母に養育され、泉沢修斎について句読を受けた。長じて経史を学び、あるいは長沼流兵学を研究し、また桜井忠太夫に従って荻野流砲術を勉強し諸芸に通じたので一時の名望があった。

万延元年（1860）8月藩主南部利剛が鹿角郡内の巡回に際し、郷土の文武を上覧したとき、乙次郎は泉沢修斎とともに藩主の前で『兵要録』を講義し、あるいは銃砲を射的して褒賞をうけた。また絵画を修斎より学び、さらに川口月嶺に師事、慶応2年（1866）月山神社に「明智左馬之助湖水渡リノ図」を奉納した。なお、家人をびっくりさせたという幽霊の絵は、もと仁叟寺に宝蔵されていて、お盆に本堂に掲げられた地獄・極楽図の掛物の一部ではないかと言われている。明治20年病没、享年52歳。

<参考>『鹿角志』、『鹿角市史第二巻下・第三巻上』、『十和田町の先輩』。

まぶち かんうえもん

馬淵 貫右衛門 生年不詳～1817（文化14年）

寛政・文化期の毛馬内俳壇の俳匠、『錦木集』の編者

毛馬内の御給人で御境吟味役も務めた貫右衛門は、里夕と号し、俳諧を嗜み、平生客を愛した。門をたたくものあれば喜んで出迎え、相對して連句に付合い、遠客の留宿数日にわたるも厚くもてなした。また庭園を好み、多くの奇石を集め松樹を植え松林亭と名付けた。今の本田医院の地である。

寛政3年（1791）盛岡の志雪窓三白が上梓した芭蕉百回忌の『はすのくき』に「うめさきて寺に米搗くおとこかな 里夕」と見える。当時の毛馬内俳壇の中心的俳人といわれ、文人墨客あとを絶たず、文化2年（1805）それらの詩歌、書画を里夕がまとめた『錦木集』の書画帖は有名であった。有名・無名の俳人の訪れは、鹿角の俳人に大きな影響をあたえ、特に毛馬内中心に目覚しい俳壇の隆盛をみるに至った。

<参考>『鹿角志』、『鹿角市史第二巻下・第三巻上』、『十和田町の先覚』。

まぶち ちょうこ

馬淵 テフ子 1911（明治44年）～1985（昭和60年）

大空駆けた女流飛行家

明治44年6月5日、常義とナヨの長女として、父の赴任地弘前に生まれる。鹿角郡宮川村宮麓小学校に転入し、5年生まで通学した。

日本体育専門学校を出て円盤投げでオリンピック出場をめざしたが選にもれ、失意のとき長山きよ子に誘われて飛行機に同乗、大空の魅力にとりつかれ亜細亜飛行学校に入学。昭和9年（1934）に女性で13人目の二等飛行機操縦士となり、プロペラ機での飛行家への夢を実現した。同9年8月10日、祖母のいる鹿角へ郷土訪問飛行を敢行し「サルムソ

ン2A2」号機に搭乗、東京洲崎から宮城野原を経て能代東雲飛行場で暫時待機後、8月14日菩提野に無事着陸し郷土の人々の熱烈な歓迎をうけた。その後「黄蝶号」での訪満飛行にも成功している。NHK朝ドラの「雲のじゅうたん」のモデルの一人でもある。親友長山きよ子との共同生活後、昭和60年5月23日伊東市で死去。享年73歳。

<参考>『飛行家をめざした女たち』。

みっかいち あわじ
三日市 淡路 生没年不詳、江戸期の人

さきわいなり
幸稲荷神社の社家

鹿角郡花輪村東山にある花輪の総鎮守幸稲荷産土神社の社家に生まれる。淡路庄太夫ともいう。三日市家は花輪の幸稲荷神社のほか、三ツ矢沢、小深田、田沢の稲荷社、松子沢、狐平の神明社などの神職も兼務していた。幸稲荷神社に関する『寺社』貞享5年(1688)8月7日の条に「稲荷別当三日市海路(淡路)」とあるので、三日市家はこの時からでも、社家として明治まで200年近く続いていた。貞享の記録は、陸奥下閉伊郡の本山派年中行事を務める安楽院より、「花輪村稲荷別当庄太夫らは社家ではなく、山伏同然のものであるからまぎらわしい」との訴えがあったが、幕府より社家(神職)であることが認められたことによる。

<参考>『鹿角市史第二卷下』。

みっかいち いよじ
三日市 猪代治 生没年不詳、明治・大正期の人

鹿角果樹協会の初代会長

幸稲荷神社の社家(神職)の家に生まれ、明治4年(1872)から始まった神仏分離において、その調査を担当したことが記録されている。14年、教育・産業・備荒の三資積備蓄営業を行う一種の無尽会社である秋田尽忠報告会の花輪分会が置かれたが、三日市は17年に分会代理人となった。11月には花輪分会の臨時総会が開かれ、秋田尽忠報告会から独立して花輪忠国社に改められたが、三日市は司計になっている。三日市は花輪のりんご栽培において技術的な面で先駆的な活躍をし、大正4年(1915)1月花輪果樹協会が鹿角果樹協会に改組された際に会長となる。鹿角果樹協会は三日市らの指導の下、毎年の果樹園品評会、年数回の果樹研究会の開催等を行い、その後の鹿角りんごの発展に貢献した。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』。

みのむし さんじん
蓑虫 山人 1836(天保7年)～1900(明治33年)

幕末から明治期の放浪画人

天保7年1月23日、美濃国(岐阜県)安八郡結村あんぱちむすぶむらに生まれる。本名は土岐源吾。嘉永2年(1849)14歳の時に故郷を出て、長崎で鉄翁祖門に学び、諸国を放浪する。その足跡は全国に残され、画人、紀行家、民俗学、考古学など多彩な活動で知られた。扇田から

鹿角に入ったのが、明治28年（1895）10月のことで、鹿角関係の絵は錦木、大湯温泉など18図を数える。諸国歴訪を終えた後は、名古屋市長母寺に寄寓し収集した資料の展示館を構想していたが、濃尾大地震などで果たせないまま明治33年死去、享年64歳。

<参考>『鹿角市史第一巻・第三巻上』、『上津野第3号』。

みやぎ さじろう

宮城 佐次郎 1881（明治14年）～1951（昭和26年）

八幡平を世に紹介、尾去沢町長・『花輪町史』の著者

明治14年11月1日、川又善助の次男として花輪六日町に生まれる。同30年花輪の宮城家の養子となる。号は一杉^{いっさきん}。37年、秋田師範学校卒業。39年頃、ふけの湯に湯治した折、付近一帯を踏査して八幡平の絶景に感嘆し、それを文筆で紹介したことが八幡平が世に知られる端緒となった。鹿角の小学校教員・校長を勤めた後、尾去沢村長・（町制施行により）町長となる。昭和11年（1936）11月20日に発生した尾去沢鉾山ダム決壊事故では、町長として陣頭指揮にあたる。町長退任後はおかねてから郷土の歴史に関心を寄せていたことから、町史の編纂、執筆に取りかかって『鹿角時報』に連載していたが、未完のまま昭和26年6月9日没、享年69歳。その後花輪史談会の人達により『花輪町史』として同32年に発刊された。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『花輪町史』、『鹿角市史第三巻下・第四巻』。

むとう あきら

武藤 晃 1911（明治44年）～1980（昭和55年）

第七次南極観測越冬隊長として活躍

明治44年4月13日に生まれる。武藤家は尾去沢出身で、父友次郎が花岡鉾山病院長だったので、花岡（現大館市）から大館中学校へ通学して昭和4年（1929）3月卒業、慈恵医科大学へ進む。戦中は海軍軍医を務めラバウルで終戦を迎える。復員後、整形外科医として横浜市立病院を経て七沢病院初代院長。慈恵医大時代の山岳部での経験を生かして、夏の間槍ヶ岳肩ノ小屋に診療所を開設し登山事故者の診療にあたった。

南極越冬隊員には2回選ばれた。1度目は昭和34年の第3次越冬隊の医学・医療隊員として。この時、第1次越冬隊が残した15頭の樺太犬のうち奇跡的に生存していたタロ・ジロと再会し、7頭の遺体の解剖に当たっている。2度目は40年の第7次で、17人の隊員を束ねる越冬隊長として41年2月1日から375日間を氷上で過ごした。南極行の頃は京成電鉄病院長だったが、のち神奈川県障害福祉センター建設事務局長、厚木リハビリセンター所長を務めている。昭和55年6月23日死去、享年69歳。

<参考>『大館の人・事典』、『百周年記念誌（大館鳳鳴高等学校）』。

むとう じさぶろう

武藤 治三郎 1908（明治41年）～1987（昭和62年）

鹿角市社会福祉協議会初代事務局長で教育者

明治41年3月23日、徳三とテルの三男として毛馬内町に生まれる。鷹ノ巣農林高校を卒業後教職につき、七滝小学校・末広小学校・大湯中学校の各校長を歴任した。退職後、社会福祉協議会に勤め、昭和52年（1977）に四ヶ町村の社会福祉協議会が一本化され、社会福祉法人鹿角市社会福祉協議会が設立された。民間の自主的組織団体として世帯更生のための生活福祉資金、たすけあい資金の貸付、心配事相談などのほか、在宅心身障害者の福祉サービス、歳末募金、福祉ボランティアの育成などへの協力等、福祉活動の拠点となった。その初代会長・円通寺住職岩館道三を助け、治三郎は事務局長としてこれらの事業の基盤を作った。庭球が得意で、毛馬内盆踊りの名手としても知られる。昭和62年12月9日没、享年79歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』

むらき たけし
村木 武司 生没年不詳、江戸後期の人

藩校作人館の医学句読師

花輪御給人村木甚蔵の嫡子。文久元年（1861）医者を目指し、藩学明義堂・作人館の医学補助を務めた医家である坂本春汀より医術を教わった。長じて春嶺と名を改め、作人館の医学句読師に抜擢された。花輪御給人・一生役医ののち、明治以降は尾去沢の銅山御抱医も合わせて務めていた。

<参考>『鹿角市史第二巻下』。

むらや ろくすけ
村屋 六助（関村六十郎） 生没年不詳、江戸後期の人

花輪の豪商の一人

初代・関六之助改め六右エ門は豊臣秀頼の近習役を務める旗本であった。大阪冬の陣で佐竹義宣よしのぶの捕われの身となったが、厚遇を受け随臣して番頭役を務めた。二代・六十郎は更に累進して御前番頭を務めている。三代目・六右エ門は3歳の時に父金兵衛が病死して母が花輪六日町に移住し村上三之丞と再婚、両家の姓から一字ずつ取り「関村」と改姓、名は六右エ門改め六十郎を襲名した。行商などの小商いから身を起こし、尾去沢銅山が好況であった事もあり、藩の御用達を務める豪商となった。天保6年（1835）の南部藩分限番付には花輪の佐藤屋庄六、小田嶋徳兵衛（ともに谷地田町）村屋六助こと関村六十郎（六日町）が載っている。苗字帯刀を許され、御給人になった六十郎（村六）は、幼い頃受けた町内の恩義を忘れることなく、凶作時には三百駄の米粟を供出して町内の救済に当たった。子孫もその教えを守り、明治38年（1905）の「六日町の大火」の際には全戸に刳や杉材を復旧材として提供している。また万三林まんざんぼやしは村六の寄付を基に六日町町内の財産となった。

<参考>『鹿角市史第二巻下』、『花輪の昔を語る』。

むらやま きしろう

村山 喜四郎 1871（明治4年）～1940（昭和15年）

地方行政と学校教育に貢献した花輪町長

明治4年、三ヶ田忠蔵とテツの三男として鹿角郡花輪町に生まれる。堰向の二代村山兵助（幼名・庄蔵）の娘キツと結婚し村山家の贅養子となる。幼少時、花輪長福寺で漢学塾を開いていた大館人・石垣柯山に学び、門人となる。

大正から昭和にかけて、政友本党の有力者として活躍。この頃、鹿角郡内に中等学校がほしいとの声が上がリ、まず花輪町に実科高等女学校を設立すべきという世論が高まった。大正14年（1925）7月に調査臨時委員会が設置され、村山も委員となる。文部省の陳情などを経て、大正15年4月花輪町立実科高等女学校として開校し、さらに昭和3年（1928）に県立に昇格した。その年、村山は花輪町長となり、7年まで務める。在任中、花輪高女の校舎設定について議論をよび、舟場通裏に決定後も、寄付金の応募が芳しくなかったが、村山は町長として各方面を積極的に訪問して目標の達成に貢献した。また、花輪線開通に当たっても、駅の設置の決定等に尽力した。昭和15年没、享年69歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』、『県立花輪高等学校創立70周年記念誌』。

むらやま ぎわ

村山 義和 1847（弘化4年）～1927（昭和2年）

馬産やりんご栽培に尽力

弘化4年12月19日、千蔵とミヲの三男として花輪に生まれる。幼名慶七郎。先祖は小谷城主浅井家に仕え、浅井氏滅亡後山形の村山郡楯岡村に転住して村山に改姓、盛岡を経て慶長18年（1613）花輪に来住、天明3年（1783）御給人に取り立てられる。円徳寺との縁が深く、善之助代に十六羅漢像を勧請している。

義和は若い頃盛岡に出ていたが、花輪に戻ってからはりんご栽培や馬産に精力的に取り組む。明治14年（1881）の畜産協議会23名の委員に、鹿角郡から小田島治右衛門と義和の2人が選ばれている。また、りんご栽培でも、23年吉田清兵衛・南部康保やすもつと共に盛岡から数百本の苗木を仕入れて本格的な栽培を始めた。以後りんご栽培は分家の方が主流となっていく。27年戊辰戦争の戦死者27回忌に際し、盛岡の桜山神社の分社建立の主唱者5人に義和も加わるが、兄の廉治が戊辰戦争で戦死していたことが理由であったと思われる。昭和2年10月2日死去。享年79歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上』、『村山家系図』。

むらやま けんざぶろう

村山 健三郎 生年不詳～1987（昭和62年）

花輪愛友団幹事長として民主的な活動に尽力

村山喜四郎とキツの三男として鹿角郡花輪町に生まれる。花輪小学校高等科を卒業した同級生数名によって大正5年（1916）に発足した花輪愛友団のメンバーとなる。愛友団は同人誌『愛友』を発行し、尾去沢鉱山争議の支援、煙害問題批判の支援など地域で民主的

な活動を行っていた。団友には花輪の今泉奈良家出身で後の東京大学教授の石田英一郎、郷外団員には同じく奈良家の出身で、後の法政大学教授の奈良正路、東京大学助手の佐々木彦一郎などが名を連ねていた。大正14年春頃、尾去沢鉦山で多数の従業員に危険思想の印刷物を配布回覧させている者がいるとの噂がひろがり、鉦山の警邏がひそかに調査したところ、村山が不穏分子の一人とされたが、印刷物は「愛友」であった。東京の三菱本社への転勤命令が出されたが、村山は赴任せず退職して、家業の果樹園経営を継ぎ、鹿角りんごの発展に貢献した。昭和62年死去。

<参考>『鹿角市史三卷下』、『入会権論（奈良正路著）』。

むらやま さだはる

村山 貞治 1888（明治21年）？～1940（昭和15年）

鹿角医療組合設立、八幡平の国立公園編入に尽力

花輪袋丁村山家に生まれ製粉所を営む。昭和8年(1933)、産業組合法に基づく有限責任鹿角医療購買利用組合が設立され、理事長に関善次郎、専務理事は村山が務めた。鹿角医療組合は、鹿角初の総合病院の花輪病院の業務を引き継ぎ、開業は同病院跡で、病院長は前花輪病院長の村松正雄が就任した。18年に秋田県農業会の発足により、鹿角医療組合は秋田県農業会鹿角組合病院となり、その後、幾多の変遷を経て現在のかづの厚生病院となった。

国立公園候補地の十和田湖に八幡平などを包含させる運動が具体化したのは7年であり、村山は世話役となり、関直右衛門、関善次郎、浅利佐助花輪町長、阿部貞吉宮川村長、渡部繁雄曙村長、十和田会の立山弟四郎、大湯の諏訪富多、十和田の和井内貞時の鹿角関係者に仙北の田沢、桧木内、西明寺などの町村長を加えて、十和田湖国立公園地域拡張期成同盟会を発足させた。同盟会の活動は、より多くの人々の活動に結びつき、31年八幡平地域は十和田国立公園への編入が実現した。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

むらやま もりたろう

村山 守太郎 1906（明治39年）～1997（平成9年）

昭和期の鹿角りんごの代表的な栽培家

明治39年10月20日、栄司の長男として花輪町袋丁に生まれる。昭和8年(1933)は鹿角りんごにとって大正12年以来の花腐病や実腐病が発生し、収穫量が半減するなど壊滅的な被害を受けた凶運の年であった。同年8月、鹿角果樹協会は、錦木浜田の石川半助宅で被害地視察を終えた秋田県の島田技師を中心に、会長兎沢徳蔵をはじめ会員参加による防除法の会議を開催した。この会議は、その後の鹿角りんごの興亡をかけた重要な会議と位置づけられているが、村山はその一員であった。鹿角りんごは、秋田県の主産地を形成しており、その栽培技術は常に指導的な地位にあった。26年に秋田県果樹協会が発足したが、村山は理事となり活躍している。31年には花輪町の村山、柴平村の兎沢忠男を発起人として県北果樹研究青年同志会が結成された。32年には秋田県の果樹指導として秋田県果樹

試験場花輪分場（現かづの果樹センター）が、花輪小坂野に設置されているが、この設置に当たっては鹿角郡果樹協会四代会長の兎沢千代治とともに、五代会長の村山の尽力が大きかったとされる。「村山の鹿角りんご」として一世を風靡した。また、守太郎が歌人で創立メンバーでもあった花輪の「暁星」は、後の花輪短歌会に引き継がれた。平成9年8月15日死去。享年90歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

もちづき ちょうべえ

望月 長兵衛 生没年不詳、江戸期の人

切支丹改めや南部・秋田の藩境決定に関わった盛岡藩の横目

江戸期、各藩は諸役人の勤怠などをはじめとする政務全般を監察するために目付を置いたが、この配下に徒目付・歩行目付・横目などといった足軽や徒士の戦果及び勤務を監察する役職を置くことが一般的であった。望月は盛岡藩の横目で奉行であり、鹿角の切支丹改めや南部・秋田の藩境決定に関わった。幕府のキリシタン弾圧政策の強行により、多数の信徒が諸国の鉾山に潜行して役人の探索から逃れようとした。鉾山の技術者が多かったと言われる。鹿角の切支丹改めは、慶安3年（1650）に七蔵、五兵衛なる者が白根金山の山師久七の配下の長左衛門を切支丹であると訴えたことに始まる。長左衛門はそれを聞きつけ秋田領内に逃れたが、この地で捕らえられ盛岡城下の町会所で吟味を受けた。この口述書を作成したのが横目で奉行の望月長兵衛らで、幕府に届出がなされた。切支丹長左衛門は江戸に引き立てられたが、転びで慶安五年赦免となり、同年6月盛岡城下に戻ってきたと云う。慶安3年には南部と秋田の境目論地のうち花輪境の西道金山とばっかい沢が焦点となったが、長らく決着せず、承應元年（1652）及び3年の江戸召喚があった。望月はこれらに応じて江戸に登っている。

<参考>『鹿角市史第二卷上』。

もちづき まつたろう

望月 松太郎 1906（明治39年）～1985（昭和60年）

教育者で剣道練達の士

明治39年2月14日、八太郎とヨコの五男として、柴平村平元字小枝指に生まれる。昭和2年秋田師範学校本科二部卒業、教員生活を始める。22年大湯小学校長として赴任するが、2年後の24年3月31日未明の突然の火災で、新年度の準備万端を整えていた校舎が一物も残さず全焼した。当時小学校校舎には、新制大湯中学校、鹿角工業高等学校定時制大湯分校も同居していたので、事後処理や三者各々の分散授業など大変な苦労があった。2年後によく小学校が新築され、同時に26・27年度科学教育標準校の県指定を受けた。全職員・PTA一丸となつての公開発表は大好評を博したが、望月校長の指導力あつてのことである。その後、柴平中学校長、社会教育指導主事など歴任し、36年米内沢小学校長を最後に教職を退き、花輪図書館長や花輪公民館長を務めた。

短歌・俳句・謡曲と趣味も広がったが、特に剣道は、生地の小枝指において幼少の頃から

児玉高慶の道場に通って指導を受け、精進を重ねて剣道7段教士、居合道7段教士の資格を得るまでになった。42年秋田市に転居してからは、土崎中学校剣道部の指導に情熱を注いだ。昭和60年12月31日没、享年79歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『大湯小学校百周年記念誌』。

もりた さかえ

守田 栄 1917（大正6年）～1996（平成8年）

鹿角市初代収入役

大正6年2月24日、賢太・つえの長男として大湯に生まれる。昭和23年（1948）から秋田県事務官として地方行政に携わり、その卓越した手腕を乞われて26年に大湯町助役に、32年には十和田町助役となり町行政に力を注いだ。40年十和田町公民館館長となり、45年度を目標に一世帯一住宅の実現を図る国の施策に呼応し、折戸の山村から全戸大湯白山への移転に尽力。また、新生活運動で生活様式の簡素化を図り、公民館結婚式の奨励や農業集団電話の普及、女子・青年学級の開催に努めた。

47年市誕生時初代教育次長、同年12月から51年6月まで初代収入役として市行政の推進に尽力。その後52年から3期12年にわたり鹿角市議会議員として、市行財政の確立、地域産業経済振興、住民福祉の向上など、地方自治の発展に寄与した。鹿角市議会産業経済委員、同教育民生委員長、市庁舎建設特別委員会副委員長など歴任。昭和59年地方自治功労者県知事表彰、62年全国市議会議長会表彰、平成4年市功労者表彰など。平成8年8月17日没。享年79歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『ふるさと散歩（安村二郎）』、『市広報』。

もり もり たや ろくうえもん

森（盛）田屋 六右衛門 生没年不詳、江戸中期の人

尾去沢銅山を稼行した盛岡の商人・山師

盛岡藩四大飢饉の一つとされる宝暦5年（1755）の未曾有の凶作は、死者6万人を越えたと伝えられるが、このような天災によって白根鉦山の衰退にも拍車がかかり、ついに代々白根山先として続いてきた青山家も尾去沢へ引き移るに至った。

宝暦11年（1761）7月、尾去沢銅山の稼行は18人の商人組合から森田屋六右衛門に替わったが、鉦山稼業に着手した六右衛門は、翌12年大坂銅問屋23人のうち一人であった平野又兵衛から1万3500両の融資を受けている。ところが、この時期の鉦山稼行はいずれの場合も苦しく、まもなく大坂廻銅の遅滞のみならず、藩に対する月割卸礼金も滞納され、山元の創業資金も枯渇していることが判明した。その追求を恐れた六右衛門は、明和2年（1765）冬江戸を出奔し行方をくらましたという。これがいわゆる森田屋六右衛門事件と呼ばれるもので、同年11月、尾去沢銅山は白根とともにやむなく藩の直営に移ることとなった。

<参考>『鹿角市史第二巻上』、『尾去沢・白根鉦山史』、『南部藩・雑書』。

やえがし きさく

八重樫 喜作 1892（明治25年）～1970（昭和45年）

八重樫建設創始者でこけし収集家

明治25年富蔵の二男として岩手県岩崎村に生まれる。小学校を抜群の成績で卒業したが、上級学校へ進むこともならず、ある豪農の作男となる。当時作男の労働は過酷で、朝仕事から戻っても土間で立って食事をする程であった。17・8歳頃不老倉へ移り、兄半四郎や間もなくやって来た弟吉弥と三人で、道路工事など土方仕事をした。不老倉鉱山が隆盛期となり、県の道路工事などが始まると、兄弟も道路の一区間を担当。八重樫兄弟の仕事は一際立派な出来栄であったという。苦節10年、誠実な仕事ぶりが認められ、大正5年（1916）に八重樫組を創立、昭和25年（1950）八重樫建設株式会社となった。以来幾多の盛衰を重ね苦難を克服して県内外に事業所を持つようになった。こけしの収集家でもあり、現在寄贈となった約1000体のこけしが「こけし館」として大湯温泉プラザに展示公開されている。

また、39年の大湯小学校創立90周年記念事業の一つとして校旗を寄贈している。「私は若くして郷里を出、一労働者として当地に参り、地域の皆様から並々ならぬご愛顧を受け今日を築く事が出来ました。90年の式典に当たり、大湯の少年たちに立派な校旗を贈らせていただき誠に有難いことです」と校長に深々と頭を下げたとの逸話がある。昭和45年1月没、享年78歳。

<参考>『鹿角人物誌』。

やすむら きんのすけ

安村 金之助 1927（昭和2年）～2016（平成28年）

公共利益の向上に貢献した司法書士

昭和2年4月25日大湯字一本木に生まれる。旧制大館中学、神奈川大学法学部を卒業。

31年に花輪で司法書士事務所を開業し、長年にわたり地域社会の法的需要に応えるとともに、地域住民の財産の保全や権利の擁護、社会秩序の安定に努め公共事業の向上に貢献した。52年からは秋田県司法書士会副会長、さらに62年からは会長となり司法書士制度の発展に努め、その後は名誉会長として後進の指導にあたった。深い法知識と真摯な取りくみで地域社会の信頼に応えてきた功績が広く認められ、秋田県司法書士会や日本書士会連合会の表彰を受け、平成5年法務大臣表彰、7年黄綬褒章を受章。13年鹿角市文化功労者。また、「米代川源流自然の会」を立ち上げ、上沼の植樹をはじめ、クリーンナップ作業やトゲウオの生息地の整備など、鹿角の自然環境の保護活動に尽力した。平成28年8月5日没、享年89歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『広報（平成13年11月）』。

やすむら じろう

安村 二郎 1924（大正13年）～2012（平成24年）

鹿角市史編纂の続括者・鹿角を代表する昭和期の郷土史家

大正13年2月25日、富蔵とリヨの次男として大湯一本木に生まれる。昭和17年（1942）大館中学校卒業、同19年秋田青年師範学校卒業。戦後間もなく、中学校の社会科教師として新しい時代の教育方針を試み、郷土の歴史・地理をわかりやすく指導した。そのかわら、秋田魁新聞に「秋田の地名・鹿角」「秋田の町名・花輪編」を連載、市広報には各集落の歴史を紹介した「ふるさと散歩」や郷土の歴史を紐解いた「ふるさとの歴史風景」「ヒストリーふるさと鹿角」を連載している。大湯環状列石の研究・支援のための「万座の会」、「鹿角菅江真澄研究会」の結成など数々の文化財研究や文化財保護団体などの育成に尽力した。特に鹿角市史編纂事業では、委員会の統括として資料の調査執筆にあたり、昭和57年11月第一巻の発刊をみた。郷土を愛し、その歴史を掘り起こし、郷土の魅力や発展に限りない情熱を注いだ。昭和62年秋田県教育功労賞、平成4年鹿角市文化功労者表彰、9年地域文化功労者・文部大臣表彰、13年秋田県文化功労賞。平成24年7月18日没、享年88歳。

<参考>『鹿角市史全巻』、『芸文かづの第39号』。

やち まさたみ

谷地 政民 1899（明治32年）～1954（昭和29年）

大湯町の初代町長

明治32年11月6日、政^{まさのぶ}とヨネの長男として大湯に生まれる。大正15年9月大湯村長となり、大湯村は昭和3年11月1日に町制を施行し、大湯町となり初代町長となる。大正15年6月、大湯村会に於いて小坂鉱山使用の発電用水路の賃貸料値上げを決議したことから、村内に大きな紛糾の種がまかれた。村会は膨張する村費の財源を得るため鉱山との交渉に入ったが、これを拒絶した鉱山は村会有力者への工作を図り、かえって村民の誤解を招くと共に、村長派、反村長派の対立に油を注ぐことになった。この問題はしばしば村民大会の開催にまで発展し、村長への批判と弾劾に終始したが、9月に至り鉱山との話し合いで円満解決を見た。昭和2年立憲民政党秋田県支部発足時、鹿角郡党務委員となる。また同年、懸案であった郡養蚕同業組合の結成が図られ、評議員としても選出される。5年2月には鹿角郡家畜保険組合が設立。我が国家畜保険組合の最初とも二番目とも言われる早い設立だが、その理事に就任している。昭和29年1月26日没、享年54歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

やなぎさわ げんいち

柳澤 源一 1923（大正12年）～1992（平成4年）

鹿角市初期の教育長

大正12年10月22日、柳澤源太郎（二代目）の長男として花輪町坂ノ上に生まれる。県立大館中学校卒業後、関西学院大学予科に入学。在学中に学徒出陣したが、復員後、昭和25年（1950）関西学院大学経済学部を卒業した。同年、大阪市にある佐渡島金属に入社。経理及び外国為替業務に携わった。29年、同社を退職して花輪町役場に就職。総務課

長、出納室長などを歴任し、38年には教育長に任命された。47年の鹿角市発足後、49年から63年までの14年間、鹿角市教育委員会教育長を務め、次代を担う児童生徒の学力向上を育むための教育環境の充実、生涯学習活動のための環境づくり、体育・スポーツの振興と施設整備を合併後の鹿角市政の下で手腕を発揮した。平成4年8月19日死去。享年68歳。死後、鹿角市文化功労者表彰。

<参考>『広報かつの（平成4年11月号）』、『米代新報（平成4年8月21日）』。

やなぎさわ げんたろう

柳澤 源太郎（初代） 1860（万延元年）～1935（昭和10年）

名品「花輪酢」の酢醸造を業として味噌醸造に拡大

花輪町谷地田町の柳澤家に生まれた。柳澤家は江戸期から「花輪酢」を製造していたことから、屋号は酢屋と呼ばれていた。花輪酢は江戸期に創業した柳澤酢屋家の秘伝の製法でつくりあげた酢で、穀類などを原料にした醸造酢と酢酸、調味料を混ぜた合成酢で、酸っぱさの指標となる酸度が一般の醸造酢が4.2～4.5%なのに対し11.2%と約3倍あるのが特徴であった。通常の酢より濃いため寿司などには少量で済み、飯がべとつかず、漬物も早く漬かり、カビが生えにくいなど好評であった。明治33年（1900）頃、それまで取り組んできた造酢を弟の儀三郎に譲り、自らの屋号を「志屋」として味噌醸造を開始した。味噌の生産量は6、7万貫まで増え、秋田市以北では小玉商店に次いで第2位であった。昭和4年（1929）の南鹿小作争議に於いては、地主会の争議対策会長として解決に尽力した。8年花輪町坂ノ上に移転。昭和10年7月死去。享年75歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』、『浅利佐助商店 HP』。

やなぎさわ たつえ

柳沢 兌衛 1936（昭和11年）～2016（平成28年）

『鹿角市史』編纂事務を総括

昭和11年8月29日、永治とタキの三男として毛馬内城ノ下に生まれる。家の都合で中国に渡り、河北省張家口の小学校に入学。戦後の引き上げ時の混乱で通学できずに毛馬内へ戻ったため、毛馬内小学校の一学年下に編入する。毛馬内高等学校（現十和田高等学校）卒業後、毛馬内図書館、毛馬内公民館を経て鹿角市職員として勤務、先人顕彰館長を最後に退職する。この間、市史編纂室長として鹿角市史編纂事務局長を務め、第一巻から第四巻までの刊行に携わった。退職後は秋田県民俗研究会や地名研究会などで活動し、市内の板碑や石像などの調査研究に精力を注ぎ、『上津野』や『湖南』に多くの論文を発表。また、平成17年から22年まで内藤湖南先生顕彰会会長も務めた。平成28年3月7日没、享年79歳。

<参考>『鹿角市史第一巻～第四巻』。

やなぎさわ ひめ

柳沢 ヒメ 1929（昭和4年）～1978（昭和53年）

牛飼いの歌を詠み続けた歌人

昭和4年1月7日、定吉とキエの長女として大湯町宮野平に生まれる。大湯小学校卒業後、青年学校で和裁を習うかたわら、祖母を助けて農業に従事。太平洋戦争中青年女子報国隊員として、東京の兵器工場に勤労奉仕する。戦後第2人の世話をしながら、祖母と共に農業を続けるが、32年家畜商をやっていた父を送り、2年後には祖母も死去、37年からは女一人で牛の飼育に専念する。

42歳になった昭和46年3月、十和田短歌会に入会。初めての投稿歌は「日に三度牛の乳見ぬ出産の頃にはまだまだ小さき張りを」であった。肉親同様の愛情を注いで牛を育てることに執念を燃やしていたヒメは、52年病に倒れるまで、牛に語りかけた独白（ひとりごと）を歌に詠み続けた。53年4月1日、癌性腹膜炎で死去。享年49歳。1年後、十和田短歌会の手によって、遺歌集『牛を育てて』が刊行された。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『芸文かづの12号』、『遺歌集 牛を育てて』。

やなぎたて けいいち

柳 館 計一 1926（大正15年）～2012（平成24年）

「^{かなやま}からめ節金山踊り」の保存・伝承に尽力

大正15年1月15日、伝治とヌエの長男として尾去沢に生まれる。尾去沢小学校卒業後大館中学校へ進学。昭和18年（1943）3月卒業。応召して終戦後シベリアへ抑留され、帰国後の23年12月鹿角郡曙村役場に奉職。尾去沢町役場を経て鹿角市役所職員として57年まで勤務する。その間、尾去沢鉱山マインランド創設に参画して準備に没頭、57年4月の開業と同時に鉱山観光株式会社へ移り、61年定年退職までその運営に携わった。

一方、鉱山の選鉱時の作業唄に始まった「からめ節金山踊り」が鉱山の衰退で存続が危ぶまれていたため、59年有志と共に保存会を発足させ、会長としてその保存・伝承に努め、平成5年（1993）秋田県教育委員会から民俗芸能功労者に表彰された。また鉱山に関わる諸資料の調査発掘では右に出る者がなく、鉱山の生き辞引と言われた。晩年はシルバー人材センター理事長としても活躍している。14年鹿角市文化功労者表彰。平成24年1月14日没、享年86歳。

<参考>『広報かづの』。

やまぐち いすけ

山口 猪祐 1894（明治27年）～1976（昭和51年）

幼児教育の発展に尽力

明治27年6月27日、百太郎とヒサの長男として旧宮川村二ツ屋に生まれる。花輪準備場卒業と同時に准教員として教職についた。大正4年（1915）正教員の資格を得て5年1月宮麓小学校の訓導となった。しかし、この年の10月5日、猪祐が宿直の夜に宮麓小学校は業火に見舞われ、校長安部多喜恵ともども責を負うて退職した。その後、猪祐は上京し働きながら日大高等師範部を卒業し再び教職に就く。昭和3年（1928）10月には東京秀文社から『綴方教育の実際—児童の創作意欲に出立する』を発刊し、板橋第六小学校の

校歌の作詞なども行っている。19年東京石神井西国民学校の校長となり、在職11年余りにわたり名校長として知られた。

退職後は念願の幼児教育のため、練馬関町に「ちぐさ幼稚園」を創立し、以来二十年の長きにわたって園長を務める。この間、東京私立幼稚園協会理事長、日本幼稚園連合会理事長、日本教育連盟副理事長などの要職を歴任。46年勲五等双光旭日章、49年全国放送教育連盟の感謝状など、数々の表彰を受けている。昭和51年4月12日死去。享年81歳。

<参考>『鹿角人物誌（奈良寿著）』、『国立国会図書館HP』。

やまぐち えいすけ

山口 栄助 生没年不詳、明治・大正期の人

バスケット合資会社を設立したつる細工師

木通蔓細工あけびづるは明治37～38年（1904～1905）の日露戦争後、出征軍人遺家族援護会の事業として始められた。以来、先進地である青森県などから教師を招聘して、数多くの伝習会が開催され、花輪の山口栄助は木通蔓細工伝習所を開催し、技術者の養成に努めた。その結果販路も京阪神地方にまで延び、需要に応じきれない程の盛況を呈した。このため鹿角物産株式会社を設立して対応していたが、第一次世界大戦後の不況により需要が低迷し、会社は解散に追い込まれた。

その後、秋田県は、アメリカはじめ海外への輸出品として、木通蔓細工バスケット類に期待し事業助成に努める。このような流れを受けて、大正11年（1922）、山口は同じ花輪の奈良市之丞とバスケット合資会社を設立し、蔓細工及び木通蔓原材料品の売買と委託売買に力を注ぐこととなった。14年、東京・上野で開催された日本産業協会主催全国副業展覧会において、奈良市之丞の「三本畝尺一寸平蓋バスケット」が二等賞を受賞している。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

やまぐち しょうじろう

山口 庄次郎 生没年不詳、江戸期の人

入会争論いりあいの調停にあたった北家の家士

江戸前期、農業経営において山林広野は水、薪炭、まぐさ稜等の採取場として大きな役割を果たし村の生活には欠かせなかった。村々ではその村専用の預かり山を内山、他の村と共同で利用する山を入会山と称し、それぞれ相互の協定を設けて管理運営にあっていた。しかし長い年月の間には様々な事情が錯綜し、内山と入会山の境が乱れ協定が守られず、度々入会紛争が生ずるようになった。文化5年（1808）には、北領の多い蟹沢村・中野村と、桜庭領の多い芦名沢の間で入会紛争が起こり、裁定が出されるが、嘉永3年（1850）再び紛争が起こり、両家役人の苦慮にもかかわらず争論は拡大した。この時は百姓が北・桜庭家人達の調停を受け入れようやく和解している。この入会論の折衝に当たったのが北家の家士庄次郎である。入会紛争解決の頗る困難であったことを書き残している。

<参考>『鹿角市史第二卷上下』。

やまぐち まつさぶろう

山口 松三郎 1906（明治39年）～2004（平成16年）

山口電機工業(株)の創始者

明治39年4月1日、鹿角郡八幡平川部に生まれる。同地で代用教員を経て17歳で上京。苦勞しながら明治大学政経学部を卒業した。受験塾やガリ版筆耕で生計を立てながら自動車が将来普及することに目を向け自動車部品、および用品の開発・製造の会社、三栄電気製作所を創業した。昭和21年（1946）山口電機工業（株）に改組し代表取締役役に就任、59年会長となる。また、39年に東京八幡平会初代会長、44年には全国自動車用品工業会初代会長を歴任した。その後、45年に故郷鹿角に秋田工場を創設し、61年に改修で現社屋となった。平成6年には永年の夢であった中国工場を広東省東莞市に建設した。

ある雑誌のインタビューの「私の健康法」で「足と皮膚を鍛えること」と話し、それを自ら実践し、健康のため毎日7キロを歩き、風邪をひきやすい悩みを乾布摩擦で克服した。また長年高血圧で悩んでいたため毎日海苔3枚を10ヶ月食べ続けたという話もある。健康が力の源であることを実践し、亡くなるまで会社経営に携わった。平成16年9月14日没、享年98歳。

やまぐち りんじ せつそう

山口 林治（雪操） 1824（文政7年）～没年不詳

幕末・明治前期の狩野派の大湯村画人

雪操は、第二大区六小区戸長、地租改正時の大湯村伍長総代となって活躍、絵画とともに俳句にも優れた作品を残している。柴内村にある萬松寺に、南部利直の寄附した竹布の袈裟一領・利直自画一幅・水晶数珠一の宝物三品があったが、明治32年、村の大火により萬松寺が類焼。しかし同寺焼失以前に雪操が南部利直自画像一幅を模写していた。大湯神明社に奉納された絵馬が、その技倆の並々ならぬことを示したが残念ながら失われてしまった。大湯には現在その画作数点が残っているだけである。明治24年4月、秋田市において月刊の詩文誌『秋田風雅集』が発行されたが、その第一号への俳句出詠者として「元日や古式の残る山の家」を鹿角から投句している。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

やまざき いちごろう

山崎 市五郎 生没年不詳、幕末から江戸前期の人

鹿角花輪鍛冶の元締め

現在鹿角の鍛冶業の多くは、花輪日向屋敷に源をもつ山崎市五郎系か、もしくは毛馬内山崎鍛冶の系統に属した。伝承によると、花輪組町の山崎徳太郎家には、慶長年間（1596－1615）に京都山崎で鍛冶を営んでいた3兄弟が、犬をめぐる争い事から山崎を去り、碓ヶ関を経て鹿角入りし、花輪日向屋敷に住み、次いで新町に居を移し鍛冶を営んだという。3兄弟のうち長兄の末裔は現在まで22代に及び、長く市五郎を襲名していたが、現在の徳太郎氏の4代前の春松（1848年11月10日生れ）の代に火災に会い、現在の小坂町大

生手近くに移住して鍛冶を営んだとある。鹿角では、鉾山及び山林用具と火山灰地という地理的条件に対応する鹿角鎌(南部鎌とも呼ばれる根刈り可能な草刈鎌)が有名だが、「市五郎鍛冶」に代表される山崎鍛冶では代々、刀の鑿や農具のほか、注文によってはタンスの金具や荷車の車輪など様々なものを製造していたらしい。現在の組丁の山崎自転車や横丁にあった花輪自動車整備工場の山崎家などは山崎鍛冶の末裔である。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『鹿角由来集』、『上津野41号』。

やまざき じゅんじ

山崎 順二 生年不詳～1955（昭和30年）

花輪の私設託児所の創設者

順二は徳太郎とトクの子として花輪町に生まれる。妹の正子、小石川保母伝習所卒業の山崎つや子の3人で、大正13年（1924）9月、上花輪自宅（山久呉服店）の奥座敷を開放して託児所を開いた。当時この託児所は山崎幼稚園といわれており、希望者が60人以上もあり収容しきれず、午前午後の2組編成にしていたという。山崎順二の奉仕の事業として開設されたこの託児所は、父兄には経費的負担をさせなかった。花輪町では、大正14年度から私立託児所補助費を計上して援助していた。その後、昭和2年（1927）に上花輪（沢口）に移転、5年順二が離町後は小田島治右衛門が経営に当たったが、7年町に移管され町立花輪幼稚園と改称された。昭和30年8月10日死去。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

やまざき よざえもん

山崎 与左衛門 生没年不詳、江戸前期の人

槇山金山で銅を吹き出した山師

槇山金山において、延宝2年（1674）銅1,452貫余、翌3年銅3,940貫余を吹出したのが山崎与左衛門らであった。槇山は鹿角郡八幡平の夜明嶋川よあけしまの支流槇山川をかかのぼった上流の谷合を占め、金山の西側の巻山峠を越えると大葛の金山集落へ出る。この槇山金山は、白根発見の翌年慶長4年（1599）に見立てられ、やがて盛岡藩から金山奉行として派遣された北十左衛門によって、白根・西道・槇山の三金山が支配されたといわれる。槇山は隆盛期に小屋数1000軒を数えたと伝えられ、元禄期頃から銅山に移行している。槇山が金山から銅山へ移り始めたのが、山崎与左衛門が吹出した延宝2年からであったとされ、『雑書』によると、この頃山師はかなり頻繁に交替したらしいことがわかる。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『南部藩・雑書』、『尾去沢・白根鉾山史』。

やまざき ろくうえもん

山崎 六右衛門 生没年不詳、江戸後期の人

毛馬内山崎鍛冶の祖

毛馬内の鍛冶師山崎家では、代々六右衛門と六左衛門とを交互に名乗ることになっていたらしく、毛馬内下小路の路傍に数基見える石碑のうち一基は、文化元年（1804）に湯

殿山詣でをした山崎六左衛門が、文化7年には子の六右衛門と6名の毛馬内鍛冶仲間が再び参詣した記念碑とされる。山崎六左衛門の元には、別名「一文字鎌」とも呼ばれた鹿角鎌の製法を学び取るために秋田藩側から渡部斧松が弟子入りした。それは文政年中（1818－1830）鹿角から産出する南部鎌は秋田藩のそれに比して断然優秀であり、秋田藩が年に3,000両も輸入するほど、これを圧倒していたためである。鹿角鎌の製法を学び取って帰った斧松は、秋田藩自給の道を開き、南秋渡部村の創設者となった。

<参考>『鹿角市史第二卷上』、『鹿角由来集』。

やまもと きしち

山本 喜七 1832（天保3年）～1911（明治44年）

毛馬内代々の大地主で、^{うわのたい}上野平に勸業場を開く

山本家11代の喜七は、九一郎とナカの長男として天保3年に生まれ、慶応4年（1868）九一郎より家督を相続した。山本家は先祖代々開墾を計画実施し小作人を愛護した。毛馬内の中野新田、柴平では大曲、七滝では上川原と大地の田畑や山林の多くは、山本家によって開拓された。

喜七の代には、国の開墾、養蚕、製糸、紡織の殖産興業政策がおし進められ鹿角にも浸透した。毛馬内では江戸後期より縫織養蚕が盛んであったため、明治19年（1886）6月蚕糸業組合が結成され、組長の大里巳代治のもと、山本喜七らの有力地主が議員として参画。また20年頃には勝又平太郎と山本喜七が毛馬内上野平に勸業場を設け、りんご・梨を栽培したが茶は適合しなかった。25年9月西郷従道伯爵の一行が鹿角に入り、山本喜七宅でもてなされているが、毛馬内盆踊りを踊ったことは今なお語り種となっている。明治44年3月没、享年79歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上』。

やまもと きしちろう

山本 喜七郎 1907（明治40年）～1990（平成2年）

秋田県陸上競技の振興と農業技術向上に貢献

明治40年、貞次郎とジュンを両親として花輪西町に生まれる。柴内小学校卒業。早くから駿足で知られ、昭和5年（1930）の全県大会で1500m優勝を果たした。22年から19年間、秋田陸上競技協会副会長などの要職にあって、戦後まもない23年第1回十和田八幡平駅伝競走全国大会の開催をはじめ、36年には国民体育大会を秋田県に誘致した。その功績が認められ、秋田陸上競技協会から功労賞、また鹿角市スポーツ功労賞を受けた。

一方、36年から冷害に強い稲作作りの技術向上に取りくんで、41年米作り日本一技術優秀賞、同年及び47年の2回農林大臣賞を受賞した。さらに集団化稲作の推進と多収技術の普及、共同防除による鹿角りんごの品質向上に尽力、県集落農場化推進友の会会長として農業後継者の育成にあたるなどして、県農協中央会より農業功労者として表彰、大日本農会より緑白綬有功章を受章。46年に花輪町文化功労者、52年には秋田県文化功労者の表彰

を受けている。平成2年9月没、享年83歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『広報（昭和49年・57年）』。

やまもと ぎすけ

山本 儀助 1919（大正8年）～1989（平成元年）

新しい「秋田犬標準」審査基準を確立

大正8年、吉次郎とスミの四男として鹿角郡宮川村小豆沢に生まれる。昭和8年（1933）玉川温泉に入社以来24年にわたり、温泉開発と道路開設に傾注し、玉川温泉の発展に貢献した。また戦前から自宅犬舎で秋田犬を飼育し展覧会に参加していたが、展覧会の審査は昭和30年改正の古い「秋田犬標準」で行われていた。秋田犬の気質や体格ほか、頭・耳・頸・尾・握り・毛色などを観察し、秋田犬の外面的・内面的な美しさを追求して、独自の研究から「鑑賞理論」の確立に努め、品評会で大きな成果を得た。山本の「鑑賞理論」の見解は、展覧会の新しい「秋田犬標準」審査基準として活用されるに至った。その後も秋田犬保存会本部から米国秋田犬支部の展覧会審査員として派遣されるなど、秋田犬の保存・普及に貢献した。また44年から60年まで17年間にわたり、八幡平村、鹿角市の教育委員として八幡平中学校の集団宿泊訓練所および武道館の設置、体育活動振興会の設立など教育の振興に尽力した。昭和60年、秋田犬の保存・普及に尽力したとして、秋田県文化財保護協会感謝状受賞、平成元年鹿角市文化功労者表彰。平成元年6月19日死去、享年70歳。

<参考>『鹿角市広報（平成元年11月号）』、『秋田犬保存会—秋田犬標準—座談会』。

やまもと くいちろう

山本 九一郎 1690（元禄3年）～1746（延享3年）

苗字帯刀を許され、御給人となる

元禄3年、3代九郎左衛門の4男として生まれる。実名は當廣。25歳で家督を継ぎ、兄（4代九郎兵衛）の跡を受けて町宿老を務める。享保11年（1726）御金165両を上納（御貸上）。12年14石の免地を受け、山本姓の苗字帯刀を許される。13年金250両余、米二百駄余りを上納、14年御与力、18年所給人、19年百石の御給人となる。伊勢屋は鉾山に物資を供給して財を築き、元文5年（1740）の勘定目録決算総高は1万貫を越す豪商であった。その大半は新田開墾により、元文6年には持地688石余の大地主となり、この持地の米穀を中心に木材・雑貨・酒造・質屋金融の多角経営を行った。また山本家代々の譲り金の蓄財は、慶長歩判と白根をはじめ阿仁、大葛各金山の吹金であった。延享3年2月24日没、享年56歳。

やまもと くろう

山本 九郎 1904（明治37年）～1985（昭和60年）

第二代十和田町長として町政の発展に尽力

明治37年5月21日修太郎とユキの長男として毛馬内に生まれる。昭和3年（1928）から22年まで秋田県職員として農業技術の指導に当たったのち、毛馬内町振興農業協同

組合長、毛馬内地区農業改良委員などを歴任、卓越した技術指導により地域産業の振興に貢献した。さらに秋田県職員として34年まで秋田県農業行政に参画している。

34年から1期4年間十和田町町長を務め、大湯中岱に町営住宅20戸の建設、大湯中川原橋の竣工、関上・大川原2集落の県の営農改善モデル地区の指定、毛馬内北部土地改良区の設立、毛馬内焼山下に公営住宅20戸の建設、国鉄バス十和田南線が大館駅を基点に運行、秋田国体途次の昭和天皇皇后両陛下の十和田町役場でのお迎え、松の木・大湯間の全面舗装の完成、大湯黒森自然公園を自衛隊の協力をえて完成など、地域環境の整備と産業の振興に尽力した。昭和60年1月16日没、享年80歳。

<参考>『広報（昭和55年）』。

やまもと くろうざえもん

山本 九郎左衛門 生年不詳～1706（宝永3年）

町宿老で白根銅山の請負師

山本家2代久治の長男。家伝によると、伊勢屋山本家は、初代の伊勢九郎兵衛は伊勢国の浪人で、八戸を経て三戸に住み、寛永年間（1624～1643）または正保3年（1646）前後に白根金山に移住、その際三戸の菩提寺の日蓮宗妙光寺から白根へ本光院を勧請した。2代久治の時、山本家は白根から毛馬内に移り、本光院も毛馬内に移した。

3代九郎左衛門は初代からの事業を拡大し、豪商伊勢屋の名を高からしめた。取扱品目は米・粟・餅米・大豆・小豆・塩・みそ・煙草・白油・かぶ油・小麦・蠟・鉄・春木等、その他質屋を営んだ。さらに鉾山に直接投資をはじめ、元禄8年（1695）越前国新保の上野平太夫から銅山請負のための資金調達と物資供給を請負うが、完全に失敗し148両余の損失を全額引き受けた。のち毛馬内館主の桜庭兵助光英より免地5石を受け町宿老を務める。宝永3年12月20日没。

やまもと こうぞう

山本 幸蔵 1857（安政4年）～1936（昭和11年）

山本道場で多くの剣士を育てた毛馬内町町長

安政4年3月31日、喜七とナカの長男として毛馬内に生まれる。山本家12代を継ぐ。明治7年（1874）毛馬内小学校が創立された時、泉沢熊之助と黒沢准治とともに教鞭をとり、校舎が狭くなれば道場を開放して教室に充てた。また育英の志に厚く、有望な子弟のため財を惜しまず中等または高等教育を受けさせ社会有用の人材を育てた。

幸蔵は壮時より8代・九一郎が開いた東軍流剣術にはげみ、山本道場を中心として多くの剣士を輩出させた。山本家の今は無き武家門は安永9年（1780）の建設になり文化財的価値が高かった。明治37年（1904）4月町会議員に当選、その後毛馬内町町長に奉職。趣味として囲碁をよくし、謹厳で古武士の風格を備えた人格者であった。昭和11年11月8日没、享年79歳。

<参考>『十和田町の先輩』、『鹿角市史第三卷上』。

やまもと しゅうたろう

山本 修太郎 1882（明治15年）～1955（昭和30年）

県会議長として県政発展に寄与した政治家

明治15年12月20日、幸蔵とミツの長男として毛馬内に生れる。山本家13代を継ぐ。秋田師範学校卒業後、小坂や毛馬内小学校の教職にあったが、のち上京して井上円了の哲学館（今の東洋大学）に学ぶ。

小坂鉱山煙害問題に対する補償交渉は明治30年代半ばから進められてきたが、大正3年（1914）に鉱毒除害期成同盟会が結成されると、修太郎は内藤練八郎会長のもとで、中堅幹部の一人として多数の農民とともに煙害賠償運動に従事した。その補償問題を陳情するために大阪の藤田組に出張、交渉にあたった。このとき幹旋にあたった内藤湖南に粗品料として贈られた2千円と同盟会に提供された5千円の資金をもとに、就学を支援する木柁会が^{もくたぐ}大正5年に組織され、育英事業に努めた。

大正8年9月推されて県議選に出馬し、最年少にして最高点をもって当選、以降昭和22年まで連続7期県議となる。その間大正12年と昭和6年（1931）の2期にわたり県会議長をつとめた。大正から昭和にかけて全国的に労働運動が高まり、地主に対する小作人争議が多発した。昭和4年、毛馬内の地主10名のうち山本修太郎はいち早く永久1割5分の小作料減免を言明した。当時難航した湯瀬温泉駅の設置や十和田、不老倉両街道の整備にも尽力した。晩年は新潟陸運局の道路委員に任命され、本県の道路行政に貢献。囲碁をよくし、花輪の佐々木幸助六段の高弟の一人でもあった。昭和30年2月24日病没。享年72歳。

<参考>『十和田町の先覚』、『鹿角市史第三卷上下』。

やまもと とらお

山本 寅雄 1938（昭和13年）～2004（平成16年）

「あきたこまち」を開発した育成グループの一員

昭和13年5月21日、為次郎とトシ子の長男として毛馬内に生まれる。寅雄は、山本家12代幸蔵の実弟慶祐の孫にあたる。東北大学農学部卒業後、秋田県農業試験場に奉職。

「あきたこまち」は、秋田県に適する早生で良質、良食味の水稲新品種の育成を主目標に、コシヒカリを母に奥羽292号を父として昭和50年に交配を行ったものの後代で、その後9年かけて県農試で選抜、育種が続けられた。命名は、美人の誉れ高い平安朝の歌人小野小町にちなむもので、全国的に名声が得られるようにとの願いが込められている。新奨励品種「あきたこまち」は「良食味」と「早生」に優れるが、量より質が重視される産地間競争に対応する流通販売対策上、この二点の特性の意義が大きい。寅雄は栽培試験や種子生産に従事し、「種子は世代交代させながら永久に保存することができ、あきたこまちの姿・形が永遠に変わることなく存在することを願います」と述べている。「あきたこまち」育成グループは平成4年、河北文化賞を受賞。平成16年7月4日没、享年66歳。

<参考>『秋田県農業試験場研究報告第29号 平成元年』、『河北文化賞受賞記念誌「水稲良食味品種あきたこまち育成の思いで」』。

ゆぜ けんご
湯瀬 謙吾 生年不詳～1856（安政3年）

幕末の鹿角を代表する算術家

鹿角は古くから鉱山技術に必要な算術が重用される数理的風土があり、幕末に至って多くの算術家を輩出している。なかでも毛馬内の桜庭家中湯瀬謙吾と花輪の関純蔵は著名である。鹿角を代表する算術家の湯瀬謙吾は、幼名を順蔵といい、毛馬内の人である。少年のころより数学を好み、長じて盛岡の算術家阿部九兵衛の門に入って研究にはげみ、ついに演段術において、師に推奨されるまでになった。帰郷後、郡中の傑物といわれ、数理を理解できない者は教えを請い、その応答は水の流れる如きであったという。また識見に富み、一郷の偉人と称された。

<参考>『鹿角志』、『鹿角市史第二巻下』。

ゆぜ てつたろう
湯瀬 哲太郎 1846（弘化3年）～1918（大正7年）

地域社会の振興に尽力、県政で活躍した改進黨の県議

弘化3年9月19日、五兵衛とキサの長男として生まれる。明治3年（1870）花輪寸陰館の訓導師補1等となり奉職。

10年三戸郡相内村副伝教者ステファン江刺家其太が毛馬内高田の湯瀬宅の二階を借り、ハリストス正教の伝道を行った。11年毛馬内五軒町に石川儀兵衛とともに湯瀬哲太郎らが織座の女工場を設立操業。12年郵便取扱人の湯瀬哲太郎が自宅（毛馬内118番）で毛馬内郵便局を開設した。13年馬産の振興策をめざした県の畜産協議会に、鹿角から小田島治右衛門と湯瀬哲太郎が協議委員に就いた。政治家としては、13年7月平鹿郡の柴田浅五郎が設立した秋田立志会に参加、14年2月から28年5月まで県会議員を務めた。その間に15年秋田改進黨の結成に参画した大久保鉄作（号は霞城^{かじょう}。明治言論界で活躍、秋田日報主幹）と行動をともにした。湯瀬は改進黨の重鎮と目され、また国会開設を目前にした22年、秋田大同俱樂部が結成され、その常議員として県政界で活躍した。大正7年5月16日没、享年71歳。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻上』。

ゆぜ やごろう
湯瀬 弥五郎 生没年不詳、明治期の人

大湯堀内の「マタギ免状」所有者

現在確認されている市内のマタギ文書は、大湯下草木の柳館功吉家の左多六文書と、同堀内の湯瀬弥五郎家に伝承されている「マタギ免状」と呼ばれるものである。湯瀬家の文書は梵字風の記号で書かれており、日月や人間の顔、鳥の頭、山や草木なども描かれ、専門家にも解読不能である。この巻物は小正月の16日の朝、当主と長男だけが開帳して拝み、他の家族や女子どもは絶対に見てはならず、この掟を破った者は「眼つぶれる」と伝えられていたという。明治38年（1905）4月1日、これまで鹿角郡内11農協であったのを一郡

一農協の鹿角郡農協が発足した。郡単位の合併は東北地方で初、全国でも二番目、合併の結果正組合員数4,430人、資本金1億円、米の集荷量15万俵となった。弥五郎は新役員の一員として就任している。

<参考>『鹿角市史第二巻下・第三巻下・第四巻』。

ゆぜ ゆうしち
湯瀬 勇七 1898（明治31年）～1940（昭和15年）

鹿角厚生病院の前々身、私立花輪病院の設立者

明治31年、毛馬内に生まれ、花輪横町に住む。明治大正時代から花輪町には本格的な病院を創立して欲しいとの希望が強くあり公立病院の創立が計画されていたが、財政難のために断念していた。このような中、湯瀬は、院長に義弟の医学博士村松正雄を招聘し、親族や地元の資産家より資金面や人材の協力を仰ぎ、自らも私財を投げ打って昭和7年（1932）6月3日、私立花輪病院を創立した。内科・外科など7科を擁する総合病院であった。長男の正人が病気の際、満足な治療が受けられずに亡くなったことが、病院創設を決意させたと伝えられる。しかし、病院経営については創業当初からきびしい状況に陥った。このため2年後の9年に、鹿角医療組合総合病院が私立花輪病院より村松院長ほか主要職員や施設を引き継ぐ形で創立されたのである。鹿角に本格的な医療病院を創立し、その体制が鹿角医療組合総合病院に引き継がれ、鹿角地方の住民の医療に貢献してきていることなど、湯瀬は鹿角の医療史に不滅の名を刻む。昭和15年9月30日死去。享年42歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『鹿角組合総合病院五十年史』。

よこた まさゆき
横田 正行 1904（明治37年）～1993（平成5年）

範士の称号を受けた剣道家

明治37年毛馬内に生まれる。毛馬内小学校卒業後、大館中学を経て東京高等師範学校体育科卒業。大正15年（1926）明治神宮体育大会剣道大学高専の部で優勝。昭和4年（1929）台湾に渡り、台北高等学校に奉職し、また陸軍の剣術教官として指導した。7年アメリカに渡り、体育状況の視察とオリンピック大会を見学しながら、日本武道の普及を図った。戦後帰郷し、28年花輪高校の講師として一年勤めて上京、府中刑務所に矯正官として勤務するかたわら、法務事務官となり42年まで勤めた。39年60歳で剣道八段、44年65歳で剣道範士の称号を受ける。平成5年9月28日没、享年89歳。

<参考>『毛馬内小学校創立百周年記念誌（昭和49年発行）』。

よしだ いくじろう
吉田 育次郎 1921（大正10年）～2011（平成23年）

鹿角市福祉事務所初代所長

大正10年12月1日、豊治・そのの二男として花輪に生まれる。花輪高等小学校卒業後、向学心に燃えて上京、苦学しながら法政大学工業学校電気科を卒業する。文章を書くのが好

きで、小説を書いては近所に住んでいた尾崎紅葉の元へ通ったという。

昭和16年(1941)4月、満州の新京無線技術局に勤務したのを皮切りに、太平洋戦争中、通信兵としてビルマからインドネシア各地を転戦する。戦争末期の転戦に際し2000人を乗せた輸送船が爆撃を受けて沈没し、7時間漂流して一命をとりとめた体験(助かったのはわずか80人ばかり)から、亡き戦友たちへの追悼を終生忘れなかった。

22年復員し、28年花輪町教育委員会事務局書記として奉職以来、花輪町の発展に尽力した。47年鹿角市発足により、市の福祉行政実施機関として鹿角市福祉事務所が生まれ、初代所長に就任した。その後、鹿角市収入役を歴任するなど市政の発展、振興に尽力した。鹿角市職員を退職後、59年から鹿角市社会福祉協議会福祉協力員、63年からは同副会長を務め、社会福祉の向上に貢献した。さらに、平成元年から鹿角市民生委員推薦会委員長も歴任し、社会福祉行政の進展にも寄与した。10年、鹿角市文化功労者表彰。平成23年3月29日死去。享年89歳。

<参考>『鹿角市広報(平成10年)』、『鹿角市史第三卷下』。

よしだ ごろう

吉田 五郎 生没年不詳、明治期の人

花輪郵便局長、花輪「果樹協会」初代会長

明治20年(1887)4月から45年3月までの25年間にわたり花輪郵便局長を勤める(町会議員も兼ねる)。また、佐藤要之助のりんご栽培の成功を見て、同27、28年頃からりんご園を開いた。花輪や毛馬内ではりんご園を開く者が続出し、29年毛馬内には「鹿角産業会」、花輪には「果樹協会」が結成され、吉田は花輪の「果樹協会」の初代会長となった。この後、鹿角は県下第一のりんご産地としての名声を確立することになった。花輪長福寺にある愛山(大里禎次郎)追悼の献額に吉田五郎(月耕)の詠んだ和歌がある。

<参考>『鹿角市史第三卷上』。

よしだ しゅんどう

吉田 俊道 1905(明治38年)～1981(昭和56年)

民政の安定と社会福祉の向上に尽力

明治38年12月17日、継道とツルの二男として岩手県二戸市に生まれる。大正8年(1919)得度し、駒澤大学を出て10年間ほど群馬県立盲啞学校・同県立伊勢崎商業高校で教鞭をとり、昭和14年、34歳で第22世長福寺住職となる。以後56年まで、42年間に及ぶ在任であった。戦後直後、花輪町助役として町政に参画し、昭和31年からは花輪公民館長として10年間に渡り、青少年の指導と地域の生活文化の向上に尽力した。昭和36年にはその功績が認められ、秋田県教育功労賞を受賞した。また、司法保護司、民生委員、行政相談員として、長年に渡り民政の安定と社会福祉の向上に尽力した。50年鹿角市文化功労者表彰、52年大本山總持寺顧問就任、55年勲五等瑞宝章受章。昭和56年6月5日死去、享年75歳。

<参考>『鹿角市広報(昭和50年)』。

よしだ しゅんりゅう

吉田 俊龍 1936（昭和11年）～2013（平成25年）

民政の安定と社会福祉の向上に尽力

昭和11年4月13日、俊道とトモの長男として群馬県伊勢崎市に生まれる。26年得度し、34年駒澤大学卒業後、大本山永平寺で修行を重ねる。56年父俊道の跡を継いで長福寺23世住職に就任する。52年から鹿角市民生委員・児童委員として尽力。平成4年（1992）に花輪地区民生児童委員協議会会長、7年に鹿角市民生児童委員協議会会長に就任し、民生の安定に貢献した。

さらに、鹿角市社会福祉協議会会長、花輪ふくし会理事長、鹿角市地方共同募金会会長、鹿角市教育委員会委員長などの要職を歴任し、豊富な経験と見識を活かして福祉の向上と普及に寄与した。多くの功績が高く評価され、全国民生委員児童委員連合会表彰、秋田県知事表彰、厚生大臣特別表彰ほか、平成23年春の叙勲において瑞宝双光章受章。同年11月、鹿角市功労者表彰。平成25年10月19日没、享年77歳。

よしだ しんろく

吉田 新六 生没年不詳、江戸後期の人

自費で稲村橋を架橋した花輪御給人

藩政時代、花輪と尾去沢銅山への人馬の往来は舟渡しに頼っていたが、天保元年（1830）花輪御給人、吉田新六は自費で稲村橋を架け藩に献上した。藩主南部利敬はその敬神の志を褒め、新六に「上総」の名を与え幸稲荷神社の神職を申し付けた。同4年、大堰の新規掘替の際には惣掛をつとめている。また嘉永6年（1853）から安政2年（1855）正月まで用水堰御普請御用懸を仰せつけられた。万延元年（1860）藩主利剛の鹿角巡視の際、吉田邸はその本陣となり、兵学御前講釈が行われた。

<参考>『鹿角市史第二卷上下・第四卷』、『花輪の昔を語る』。

よしだ せいべえ

吉田 清兵衛 生没年不詳、江戸後期から明治期の人

明治初めの産業全般の振興に尽力した名士

明治9年（1876）花輪の吉田清兵衛が地租改正委員として上京した折、勸業所からりんごの苗を払い下げてもらい村山義和、毛馬内の高橋嘉六などが栽培を試みた。その後、佐藤要之助が盛岡から苗木を購入、植付けに成功して東京へも出荷した。これが鹿角りんごの盛んになる基となった。また清兵衛は同20年頃、東京から高価な鶉うずらを購入、明治後期には「鳴き鶉」の本場として鹿角鶉は全国的にその名が知られるようになった。

24年郡制が公布され、大地主互選により郡会議員に選出されている。27年、戊辰戦死者の法要の際に桜山神社の分社建立案が持ち上がると、清兵衛ら5名が中心となって、30年盛岡桜山神社を分社して花輪の北館に桜山神社を建立。周囲に桜を植樹して現在の桜山公園の基をつくった。

<参考>『鹿角市史第二卷上・第三卷上・第四巻』、『花輪の昔を語る』。

よねざわ いわきち

米沢 岩吉 1886（明治19年）～1953（昭和28年）

農民のために尽くした社会運動家にして農業技術者

明治19年12月、専助の二男として錦木村大欠に生まれる。同村の米沢岩太郎の養子となった。32年3月に毛馬内小学校高等科卒業後、農業に従事したが、傍ら社会運動に興味を持ち独学で勉強を続け文筆にも親しむ。

その頃、小坂鉦山は、黒鉦の精錬法を開発し本格的な生産に乗りだしていたが、煙害により田圃の収量は激減し、煙害激地の農民には北海道などに移住する者が続出した。農民の多くは、煙害の拡大に伴い団結して鉦山交渉に当たることとなり、大正13年（1924）、煙害闘争の応援に来ていた川俣清音らの指導により日本農民組合小坂支部が結成され、鉦山争議と煙害闘争は、労農提携の形となった。米沢もこの運動に参加して、昭和2年（1927）、日本農民組合錦木支部長になり、さらに尾去沢や阿仁前田の小作争議の指導に当たった。米沢は極端な暴力主義を排し常に理路整然と談笑のうちに運動を推進したので、多くの人たちに信頼され、こうした社会主義運動のなかった鹿角に新風を吹き込んだと言われている。同年秋の日本労農党北鹿支部創立大会では委員長に選出された。

米沢は農業改良にも取り組み、末広地区に無害の農業用水を引くため、女神付近で米代川を横断する大導水管や用水路の建設を推進し画期的な成果を挙げている。末広小学校の校歌の原作詞も米沢による。昭和28年没、享年67歳。

<参考>『鹿角市史第三巻下』、『鹿角人物誌』。

よねざわ まんろく

米沢 万陸 1868（明治元年）～1931（昭和6年）

黒鉦自溶製錬法の開発者、日立鉦業の基礎を築く

明治元年2月5日、錦木村大欠に生まれる。12年末広小学校を卒業後、生活のために14年、柴内小学校の教師手伝いとして働き日給七銭を得ていたが、生活が苦しく17年、小坂銀山分析所につとめた。小坂銀山は大阪の人藤田伝三郎が時の政府から払下げをうけ、17年から資本金20万円でこの事業を経営していたが、銀鉦は30年の末には掘り尽くされる事が判明した。さらに日本経済は銀本位制から金本位制に転向することとなり銀価は暴落。30年小坂銀山は60万円の損失となって銀山休山説が流れるに至った。当時の鉦山長久原房之助は、銀鉦製錬を銅鉦製錬に移行する方針を執り金銀銅亜鉛を含有する黒鉦製錬による小坂は再生を目指し、その研究陣を結成した。製錬の幹部となっていた米沢は黒鉦製錬の試験を重ね、33年画期的な黒鉦自溶精錬法を完成し、日本鉦業界に革新の時期をもたらした。41年小坂鉦山所長となり、44年日立鉦山を興した久原房之助の懇請により日立鉦山に転じた。以来、久原の部下として働き、大正7年（1918）九州佐賀関製錬所長、12年日立鉦山事務所長となり、日立の重鎮として活躍した。世人は「日立の神様」と称したという。米沢は生涯を勉学に捧げた篤学の人であるが、常に故郷の人々の恩を忘れず、報

恩のことを心がけ故郷の話題となっていた。昭和6年6月29日死去。享年63歳。

<参考>『鹿角市史第三卷上』、『鹿角人物誌（奈良寿著）』。

よねやま ひころう

米山 彦郎 生没年不詳、明治・大正期の人

鹿角郡医師会設立に尽力、「国の華会」初代会長

仙台の人。明治36年（1903）東京帝国大学医学部卒業。41年5月から小坂町鉾山病院に赴任し、昭和2年5月まで在職。39年県医師会規則が制定され、鹿角郡医師会は翌40年11月に設立されたが、その医師会の郡の組織化に努力したのが、花輪の大里文五郎と小坂の米山彦郎であった。43年6月に第3回総会が小坂鉾山事務所で開催され、鉾山病院見学の後小坂小学校で通俗衛生講演会が開かれたとの記録が残っている。大正8年（1919）、医師会令が公布され、医師の免許を得た者は郡市医師会や県医師会へ強制加入することが義務づけられた。このため、これまでの鹿角郡医師会は自然解散の運びとなり、新たな鹿角郡医師会が、9年4月に県から認可された。各郡市医師会をまとめた県医師会創立総会が同年5月秋田市で開催され、鹿角郡からは代議員として米山彦郎が出席した。彦郎は、和歌にも精通し、鹿角「国の華会」の初代会長を務めた。まもなく会長職は立山弟四郎になったが、月1回の例会を開いて活発な活動をしていた。

<参考>『鹿角市史第三卷上下』。

ろーぜんしんぷ

ローゼン神父 生没年不詳、明治から昭和期の人

毛馬内カトリック教会を創設、鹿角で最初に幼稚園を開設

小坂町カトリック教会の宣教師ローゼン神父は、大正11年（1922）9月毛馬内上町の高橋七郎兵衛宅に寄宿し、二階に祭壇を造り仮の教会を作った。毛馬内教会の設立にあたっては敷地入手に難渋したが、高橋の献身的協力により五軒町に教会を開設し、次いで12年マリア園を併設し、園児を20名ほど受け入れた。これが鹿角ではじめて創設された幼稚園である。ローゼン神父は人格者として知られたが過労のため倒れ、やむなく13年小坂町教会のウィルヘルム・プール神父と交替した。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

わいない きょうこ

和井内 恭子 1921（大正10年）～1997（平成9年）

日本を代表する創作舞踊家

大正10年1月7日、貞時とサキの三女として十和田湖畔に生まれる。本名は恭。姫鱒を養殖した和井内貞行は祖父にあたる。

東京立正高等女学校を出て、本県出身の創作舞踊家石井漠の門に入り、同門の大野弘史と結婚し独立した。昭和16年（1941）第一回創作舞踊発表会で「大和」を上演し文部大臣賞を受賞。28年インドで公演を重ねながらインド舞踊を研究し帰朝、29年9月花輪劇

場などで報告公演を行なった。43年渡欧し3ヶ月公演、47年にはアメリカでも公演した。東京で大野弘史・和井内恭子創作舞踊研究所を主宰。平成7年（1995）現代舞踊協会功労賞を受賞。平成9年1月5日没、享年75歳。

<参考>『鹿角市史第三卷下』。

わい ない さだ ゆき

和井内 貞行 1858（安政5年）～1922（大正11年）

十和田湖で養魚・観光の礎を築く

安政5年2月15日、桜庭家の家老貞明（通称・治郎右衛門）とエツの長男として毛馬内古町に生まれる。幼名は吉弥。幼い頃から和井内の吉弥さんを見習えといわれたほど、温厚篤実な中にも毅然たる意志を秘めた少年だった。慶応2年（1866）泉沢修斎の塾に学び、17歳で毛馬内小学校の教員手伝いとなって7年間郷土の人々の教育に当たった。

明治11年（1878）鎌田倉吉の長女カツと結婚。14年工部省鉾山寮に採用され、小坂鉾山の十和田支山詰めとなった。ここで魚の住まぬ十和田湖での養魚をこころざし、17年郡長小田島由義の援助により鯉の稚魚600尾を放流した。その後数多くの失敗を重ね、家財を傾けたがそのこころざしをつらぬき、辛酸をなめること22年、明治38年の秋に遂にカパチュポ（姫鱒）の養魚に成功し、これを「和井内^{ます}鱒」と命名した。この年東北地方は大凶作となり、貞行は飢饉に苦しむ湖畔の住民に全漁獲を与えて救済した。その功績が認められ、40年緑綬褒章を授与された。晩年は、十和田湖の景勝宣伝に努め交通機関の整備に尽くした。そのため、学術調査や観光開発に多くの学者や知名人を招き、また国立公園編入運動にも貢献した。大正11年5月16日、65歳をもってその生涯を閉じたが、大川岱の住民等はその恩恵を称えて和井内神社を建立し、夫婦の御霊を祀っている。また、貞行と内藤湖南を主とする鹿角市先人顕彰館が旧和井内邸跡に建設され、その功績は永く伝えられることになった。

<参考>『鹿角人物誌』、『和井内貞行の生涯（鹿角市先人顕彰館）』、『十和田町の先輩』、『鹿角市史第三卷上下』。

わかまつや たかはし いちざえもん

若松屋（高橋）市左衛門 生没年不詳、江戸期の人

「天山堂若松屋」を称した毛馬内の大商人

高橋家は会津若松から白根を経て毛馬内に移住し、大商人に成長して代々「天山堂若松屋」と称した。貞享5年（1688）年商わずか140貫で始まった若松屋は、元禄の大凶作で田畑の集積を進めながら、元禄16年（1703）には年商4千貫と大きく拡張し毛馬内の大商人となる。主に金融及び雑貨を扱い、さらに酒造業、木材業にも手をひろげ、白根その他の鉾山へ納入していた。また商品も直接^{かみかた}上方の京・大阪へ出張して仕入れ、さらに^{かわせ}為替を利用して大規模な営業を行った。

凶作時の困窮領民の救済のため藩では庄屋や富商に囲米の貯蔵やみその醸造を命じ、安

値で払出させている。宝暦12年(1762)若松屋は大凶作の教訓に鑑み、代官から御備味噌の醸造と御預けを命ぜられた。宝暦以前には井戸水による木管の地下上水道が設置されていたが、清水を多量に扱う若松屋などの酒屋筋は宝暦6年井戸の普請を行い、主に酒屋や富商が費用を負担して引水し、付近の人々も飲料水として利用し、生活用水にもなった。また防火のための明和9年(1772)箱の中に押し上げポンプの装置がある消火用具(龍吐水)を若松屋ら各家々がお金を出して設置、生活環境の整備は富商中心に共同運営がされていた。その後、若松屋は天明3年(1783)苗字帯刀の宿老となり、度々上納金を命じられて11月から同6年9月までに703両、銭500貫文を献金して給人に登用された。このため酒屋仕込資金にも事欠き酒屋の再開が不可能となり、それ以後給人・地主として生活を送ることとなった。

<参考>『鹿角市史第二巻下』、『天山堂文書』。

わせき とみじ

上関 富治 1860(万延元年)～1937(昭和12年)

徳富蘇峰と交流した文化人

万延元年、源之助とタキの長男として毛馬内古町に生まれる。母は和井内貞行の父の実妹である。少年時代から俊才の誉れ高く、隣家の浅沼郷左衛門に山口流剣術を学び、向いの泉沢修斎について漢学を学んだ。小学校卒業後、青雲の志をもって上京しようとしたが、叔父の和井内治郎右衛門に老父母に孝養を尽くすことを諭された。それ以降もっぱら独学に専心、文武の道を修業し、考証学を研鑽して一角の漢学者となる。毛馬内小学校教員として奉職していた当時、平民主義を提唱する徳富蘇峰が『国民新聞』等に論説を発表するたびに、用字の誤りや、文章の構成を詳細に指摘批判し送ったという。蘇峰はその適格な指摘に感銘を受け、それ以来論説を送り批判を仰ぐこととなり、終生富治先生と尊敬して文筆での交わりを結んだ。また、甥の貞行が諸官庁に提出する文書を代筆したり、大正15年(1912)鹿角の国の華^{はな}の発足式に参加した。明治・大正期を通じて鹿角を代表する文化人であった。昭和12年3月20日77歳で病没。蘇峰は丁寧な弔文を寄せている。

<参考>『鹿角タイムス(平成5年10月)』、『鹿角市史第三巻下』。

わたなべ いちじろう

渡辺 一治郎 生年不詳～1967(昭和42年)

鹿角の代表的俳人の一人

小坂町で育ち、のち毛馬内に住む。本名は一次郎、冬園と号する。教職(鹿角工業高等学校機械科)のかたわら、鹿角郡内の句会で活躍していた。昭和28年(1953)、会長鎌田露山(倉蔵)、副会長渡辺冬園として毛馬内俳句会が設立された。また渡辺郎は、戦前から発行されていた合同句集『句聚』の発行所ともなった。41年、露山が75歳で没した翌月発刊された『十句集』に、「ひた急ぐ 早春の道 海に沿ふ」を残す。翌42年没。

<参考>『鹿角市史第三巻下』。

わたなべ おのまつ

渡部 斧松 1793（寛政5年）～1856（安政3年）

毛馬内の山崎鍛冶に弟子入りした秋田の鍛冶師・新田開拓者

寛政5年12月4日、足軽・惣十郎の長男として能代檜山に生まれる。18歳の時に南秋田郡面瀧の鍛冶師・市郎兵衛の弟子となるが、当時南部藩の鎌が優れているとの評判から、一年後、毛馬内の鍛冶師・山崎六右衛門の弟子となり鹿角鎌の製法を学ぶ。約2年の修業後、檜山に戻り鍛冶業を営むが、志を立て江戸に出て南町奉行根岸肥前守の小姓として仕えた。27歳で故郷に戻り、文政5年（1822）30歳の時に男鹿に移り鳥居長根の開拓、同8年には渡部村の建設や秋田六郡各地の新田開発などにあたった。これらの功績により秋田藩の士分に取り立てられる。安政3年6月4日没、享年62歳。

<参考>『秋田の偉人・渡部斧松』、『秋田人名大事典』、『鹿角市史第二巻上』。

わたなべ こうさぶろう

渡部 幸三郎 1911（明治44年）～1998（平成10年）

鹿角市史編纂資料の解明にあたった花輪の郷土史家

明治44年4月21日、桶職人であった父亀吉の子として花輪新田町に生まれる。上京し慶応義塾商業学校、立正大学高等師範部国漢科卒業。星製薬に勤める。戦後の昭和21年（1946）4月、創業時の鹿角組合病院の事務長に就任。同32年12月由利組合総合病院事務長に転勤、同42年6月で定年退職となる。同53年に鹿角市史編さん協力員に委嘱され、資料の整理と目録整理、古文書の解説などにあたる。特に藩政時代の花輪商人の屋号、人名、職人名を明らかにするなど市史編さんの基礎資料作成に貢献した。平成10年7月27日没、享年87歳。

<参考>『鹿角組合総合病院50年史』。

わたなべ こよ

渡部 コヨ（こよ女） 1905（明治38年）～2002（平成14年）

花輪俳談会を代表する俳人の一人

明治38年7月20日、三ヶ田時次郎とトヨの三女として花輪六日町に生まれる。大正12年（1923）18歳で渡部安太郎に嫁ぐ。安太郎との間に六男一女を儲ける。

俳号・こよ女。昭和43年（1968）頃から俳句を始め、花輪俳談会に所属。小田島青蛾、阿部胡六、工藤華車らと親交を深め、各俳句結社に投句する。同56年には自筆による和綴の句集『桔梗の蕾』を刊行。後年は花輪老人クラブ「青垣句会」の指導にあたる。「琴弾けと言はれて心動く春（こよ女）」。平成14年2月18日没、享年96歳。

<参考>『芸文かづの第40号』、『鹿角市史第三巻下』。

わたなべ しげお

渡部 繁雄 1886（明治19年）～1976（昭和51年）

鹿角農業協同組合の基盤をつくった初代組合長

明治19年5月13日、花輪南部（中野）家から養子に入った康民とリツの長男として^{あけぼの}曙村石鳥谷に生まれる。中央大学卒業後東京の丸善に就職したが、大正初期の曙地区の農業は冷害続きで大変な状況にあり、地元からの強い要望により退社して郷里に帰った。翌年曙村助役に就任し村の刷新にあたった。大正9年（1920）曙村村長となり、村の農業振興のために、養蚕・養鶏・青果物荷受・馬匹・木炭・森林等、多くの組合を育成指導した。その結果、曙村が県内の養蚕・そ菜栽培では先進地となった。農村工場では助成金を得て醤油の醸造や山菜加工も手がけ、曙信用購買生産組合を設立し組合員の利便性をはかった。その後、同組合は曙農会と合併して曙農業会となり、昭和23年（1948）には曙農業協同組合が誕生した。38年鹿角郡内11農業協同組合の統合・大同団結を提唱し、鹿角農業協同組合を設立して初代組合長に推された。41年勲五等瑞宝章受章、秋田県文化功労章受章、49年鹿角市文化功労者表彰。昭和51年1月22日没。享年89歳。

<参考>『鹿角のあゆみ』、『鹿角人物誌』、『鹿角市広報（昭和49年）』。

わたなべ ぜんじお
渡部 全次雄 1901（明治34年）～1984（昭和59年）

^{こゑよしどり}声良鶏、秋田犬、郷土民謡の保存・普及に尽力

明治34年5月18日、康民とリツの二男として鹿角郡曙村石鳥谷^{いしどりや}に生まれる。日本大学卒業後、終戦まで青年学校長を務める。昭和23年（1948）から教育委員として多年地域の教育向上に尽力するとともに、郷土民謡の保存・伝承に情熱を注ぎ、自ら民謡コンクールを開催し、各種講習会の企画に当たった。さらに「声良鶏」の天然記念物指定のため奔走し、指定を受けるや保存・普及のため秋田県声良鶏保存会、全日本声良鶏保存会を組織し、会長となり組織の拡大・強化のため献身的な活躍をした。また秋田犬の保存に熱心に取り組み、秋田犬保存会本部から米国秋田犬支部の展覧会審査員として派遣されるなど普及に貢献した。その間、鹿角市の文化財保護審議会委員等を歴任し、文化行政の推進に尽力。56年鹿角市文化功労者表彰。昭和59年6月20日死去。享年83歳。

<参考>『鹿角市広報（昭和56年）』、『鹿角市史第三巻下』。

わたなべ とみ
渡部 トミ（森女） 1890（明治23年）～1930（昭和5年）

鹿角を代表する女流俳人

明治23年8月12日、小田島由義とハツの二女として花輪町に生まれる。東京成女高等女学院を卒業、帰郷して曙村の渡部繁雄と結婚。大正5年（1916）、実兄小田島樹人の勧めで俳句に親しんだ。高浜虚子に師事して「ホトトギス」で活躍していた渡辺水巴の俳誌『曲水』に投句して、「月見えで明るき雪や樹々の風」の作品で注目された。俳号は森女。また農村婦人の地位を高めるためとして、曙村婦人会を組織して活発に活動した。昭和5年5月6日40歳で急逝。7年『森女句集』が義弟渡部全次雄によって刊行された。花輪の恩徳寺に「秋草のみな花つけし淡さかな」の句碑がある。

<参考> 『秋田人名大事典』、『鹿角市史第三巻下』、『鹿角人物誌』。

わだ よしえ

和田 芳恵 1906（明治39年）～1977（昭和52年）

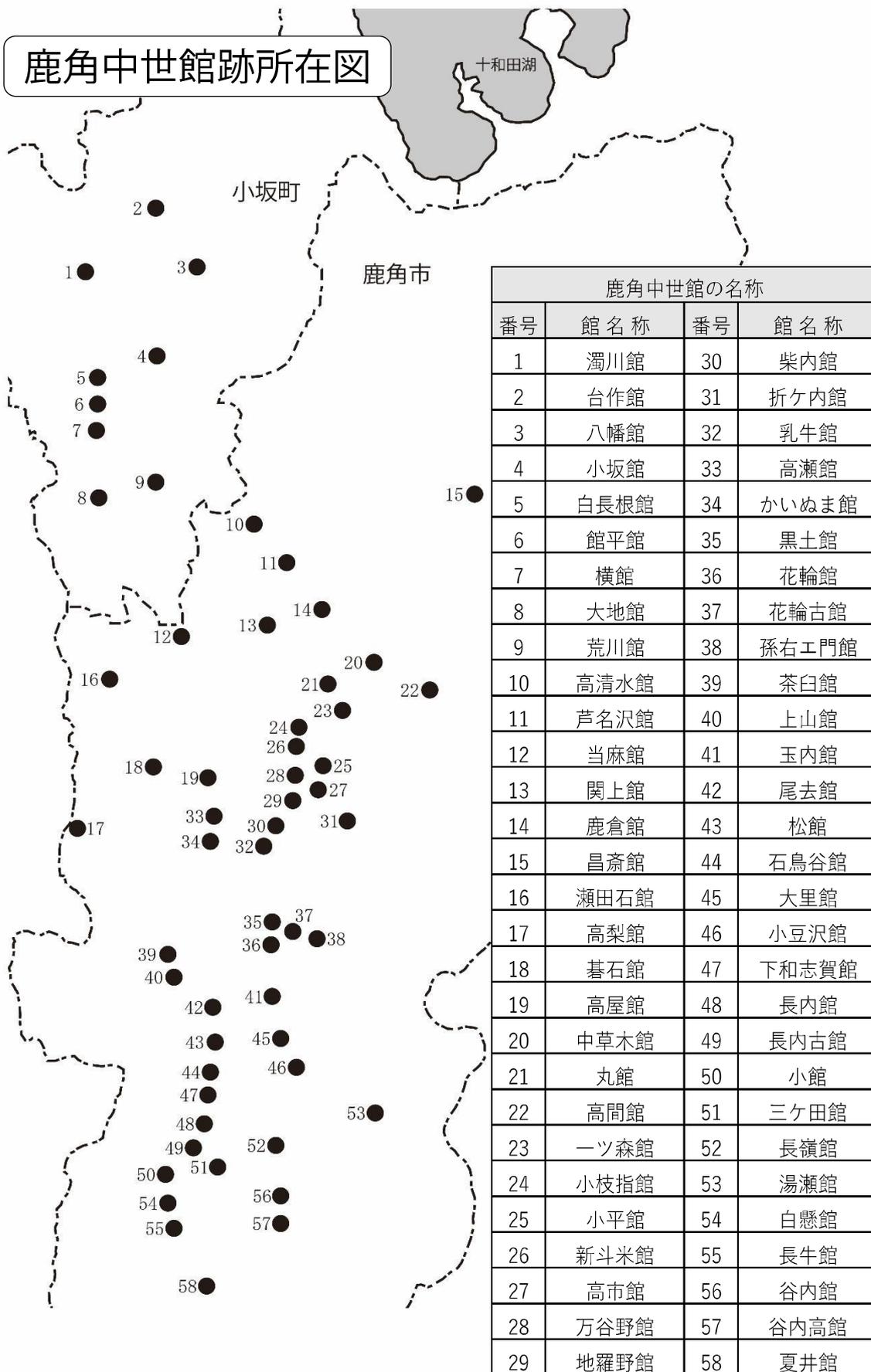
直木賞を受賞した戦後の作家

明治39年3月30日、毛馬内出身の伊太郎とリエの四男として北海道長万部に生まれる。北海中学校（現・北海高校）、中央大学独法学科卒業。新潮社勤務のかたわら同人誌に小説を執筆。昭和17年（1942）和井内貞行の伝記『十和田湖』を発刊する。取材は毛馬内に嫁いだ妹を頼ってしたが、親類の人達が貞行や十和田湖の資料を集めてくれたという。同38年『塵の中』で直木賞を受賞した。また樋口一葉研究者としても知られる。昭和52年10月5日没、享年71歳。

<参考> 『文人たちの十和田湖（成田健著）』。

資
料
編

鹿角中世館跡所在図



鹿角42郷村名 (鹿角由来記)		寛文4年(1664) 村名(寛文印知集)	享和3年(1803) 村名(郡領分中本村)	明治7年~ 村名	明治9・10年~ 村名	明治22年~ 町・村名	昭和30・31年~ 町・村名	昭和47年~ 市・町名	平成30年度自治会名				
29	毛馬内	毛馬内	毛馬内	毛馬内	毛馬内	毛馬内町	十和田町		館 瀨田石 石野 中野 蟹沢 大湯 根市 篝畑 腰廻 関上 一本木 倉沢 宮野平 風張 草木 冠田 案田 沢尻 浜田 古川 神田 松山 大久 土深井 芦名沢 高清水 長者久保 鴨 鳥越 長沢 牛馬長根 万谷 荒川 大地 小坂 赤坂 瀨川 野口	三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田
30	瀨田石	瀨田石	瀨田石	瀨田石	瀨田石	毛馬内町	(S30. 3. 31) 毛馬内町 錦木村合 併		三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
31	大湯	大湯	大湯	大湯	大湯	大湯村	(S31. 3. 20) 小坂町山 根地区編 入		三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
32	関上	関上	関上	関上	関上	大湯村	(S31. 9. 30) 十和田町 大湯町合 併		三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
33	草木	草木	草木	草木	草木	錦木村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
34	神田	古川	古川	古川	古川	錦木村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
35	高梨子館	松山	松山	松山	松山	錦木村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
36	芦名澤	大掛	大掛	大掛	大掛	錦木村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
37	高清水	高清水	高清水	高清水	高清水	錦木村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
38	荒川	荒川	荒川	荒川	荒川	七滝村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
39	大地	大地	大地	大地	大地	七滝村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
40	小坂	小坂	小坂	小坂	小坂	七滝村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
41	瀨川	瀨川	瀨川	瀨川	瀨川	小坂村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
42	八幡館	八幡館	八幡館	八幡館	八幡館	小坂村			三の丸 古町 下小路(上) 下小路(下) 城ノ下 中代 上ノ湯 中田 篝畑 腰廻 関上 大川原	南 上町 中町 下町 川原ノ袋 湯ノ内 下ノ湯 川原ノ湯 堀内	高田 横丁 菅町 陣場 五軒町 中町 四ノ袋 四ノ袋住宅 川上	土ヶ久保 豊兵衛川原 山田	
		42	33	69 (田山舎)	71	11	5	2	十和田地区71自治会				

盛岡藩における行政区（通制）

通（とおり）は、盛岡藩政初期は単に方面とか、その地方を表現した言葉であったが天和年間（1681～84）には代官所統治区域を指した。

盛岡・八戸両藩の独特の行政組織としての「通制」であり、代官所統治地区を「通（とおり）」と称している。八戸藩を分地する以前は、慶安5年（1652）は47の代官区とし、それに遠野南部氏の1区を加え48の代官区となった。

寛文5年（1665）八戸藩に分轄した際、浜通・長苗代、久慈・軽米、志和の代官区は八戸藩に属した。その他の40区前後の代官区を33に改編し、通ごとの地域区分は時代により若干の移動があった。

◇安永9年（1780）盛岡藩の行政区（10郡33通）

岩手郡：上田通 31ヶ村、厨川通 7ヶ村、雫石通 10ヶ村、向中野通 11ヶ村、沼宮内通 38ヶ村

志和郡：飯岡通 9ヶ村、長岡通 12ヶ村、日詰通 9ヶ村、見前通 9ヶ村、徳田通 9ヶ村、
伝法寺通 10ヶ村

稗貫郡：大迫通 7ヶ村、八幡通 21ヶ村、寺林通 20ヶ村、高木通 23ヶ村、万丁目通 14ヶ村

和賀郡：沢内通 7ヶ村、通通黒沢尻 12ヶ村、鬼柳通 5ヶ村、安俵通 11ヶ村、二子通 13ヶ村

閉伊郡：大槌通 23ヶ村、宮古通 58ヶ村、遠野通 41ヶ村

九戸郡：野田通 22ヶ村

二戸郡：福岡通 72ヶ村

三戸郡：三戸通 33ヶ村、五戸通 29ヶ村

北 郡：七戸通 24ヶ村、野辺地通 12ヶ村、田名部通 37ヶ村

○鹿角郡：花輪通 24ヶ村、毛馬内通 45ヶ村

○花輪通～代官所：花輪館の二ノ丸にあった。

花輪村 小豆沢村 湯瀬村 大里村 夏井村 長牛村 石鳥谷村 川部村
長嶺村 谷内村 三ヶ田村 尾去村 松館村 鏡田村 狐平村 花軒田村
高屋村 神田村 土深井村 三矢沢村 甘露村 長内村 白欠村

田山村（※田山村は現在の八幡平市の一部）

○毛馬内通～代官所：柏崎館の二ノ丸にあった。

毛馬内村 松山村 小枝指村 大欠村 柴内村 乳牛村 高市村 関上村
新斗米村 寺坂村 小平村 草木村 大湯村 高清水村 古川村 大地村
瀬田石村 鶺鴒村 小坂村 浜田村 沢尻村 長沢村 濁川村 野口村
万谷村 牛馬長根村 鳥越村 長者久保村 芦名沢村 鶴田村 室田村
冠田村 蟹沢村 中野村 赤坂村 腰廻村 根市村 一本木村 箒畑村
上台村 石野村 風張村 宮野平村 倉沢村 荒川村

鹿角に多い名字100

順位	名字	主な読み	鹿角市	小坂町	郡市戸数	順位	名字	主な読み	鹿角市	小坂町	郡市戸数
1	阿部	あべ	670	32	702	51	高瀬	たかせ	52	5	57
2	佐藤	さとう	600	85	685	52	池田	いけだ	40	17	57
3	成田	なりた	380	120	500	53	豊田	とよた	54	1	55
4	木村	きむら	340	130	470	54	米田	まいた	52	2	54
5	安保	あんぼ	290	60	350	55	小林	こばやし	26	28	54
6	中村	なかむら	175	125	300	56	渋谷	しぶや	52	1	53
7	工藤	くどう	230	67	297	57	栗山	くりやま	45	8	53
8	斎藤	さいとう	250	35	285	58	上田	うえだ	50	3	53
9	田中	たなか	270	13	283	59	小館	こだて	42	10	52
10	黒沢	くろさわ	260	12	272	60	渡部	わたなべ	41	6	47
11	高橋	たかはし	210	60	270	61	川口	かわぐち	17	29	46
12	柳沢	やなぎさわ	245	13	258	62	松岡	まつおか	44	1	45
13	奈良	なら	220	35	255	63	相馬	そうま	42	3	45
14	畠山	はたけやま	190	9	199	64	沢口	さわぐち	35	9	44
15	村木	むらき	190	5	195	65	藤原	ふじわら	34	10	44
16	児玉	こだま	180	13	193	66	本田	ほんだ	3	41	44
17	兎沢	とざわ	170	5	175	67	石木田	いしきだ	42	0	42
18	石川	いしかわ	150	7	157	68	山田	やまだ	25	17	42
19	金沢	かなざわ	140	15	155	69	倍賞	ばいしょう	40	1	41
20	関	せき	140	5	145	70	田子	たっこ	40	1	41
21	大森	おおもり	115	19	134	71	田原	たわら	37	4	41
22	沢田	さわた	82	45	127	72	吉田	よしだ	32	9	41
23	佐々木	ささき	110	15	125	73	根本	ねもと	40	0	40
24	伊藤	いとう	62	60	122	74	戸館	とだて	37	1	38
25	山本	やまもと	110	6	116	75	土館	つちだて	32	5	37
26	湯瀬	ゆぜ	105	3	108	76	浅利	あさり	35	1	36
27	山口	やまぐち	95	9	104	77	藤田	ふじた	28	8	36
28	浅石	あさいし	100	0	100	78	杉原	すぎはら	3	32	35
29	田口	たぐち	90	5	95	79	川村	かわむら	28	6	34
30	小笠原	おがさわら	33	60	93	80	桜田	さくらだ	25	9	34
31	田村	たむら	70	21	91	81	亀田	かめた	1	33	34
32	和田	わだ	36	52	88	82	鎌田	かまだ	27	6	33
33	石井	いしい	83	3	86	83	瀬川	せがわ	31	0	31
34	菅原	すがわら	70	16	86	84	西村	にしむら	31	0	31
35	小田島	おだしま	81	4	85	85	杉江	すぎえ	29	2	31
36	海沼	かいぬま	80	2	82	86	三浦	みうら	25	6	31
37	柳館	やなぎだて	75	7	82	87	渡辺	わたなべ	18	13	31
38	川又	かわまた	81	0	81	88	加藤	かとう	26	4	30
39	熊谷	くまがい	25	53	78	89	宮沢	みやざわ	29	0	29
40	大里	おおさと	70	5	75	90	戸嶋	としま	28	1	29
41	山崎	やまざき	55	19	74	91	駒ヶ嶺(峯)	こまがみね	28	1	29
42	高杉	たかすぎ	70	1	71	92	館花	たてはな	28	0	28
43	千葉	ちば	43	28	71	93	泉沢	いずみざわ	28	0	28
44	青山	あおやま	60	6	66	94	米村	よねむら	27	1	28
45	湯沢	ゆざわ	62	3	65	95	福島	ふくしま	27	1	28
46	高田	たかだ	60	2	62	96	稲垣	いながき	27	1	28
47	鈴木	すずき	38	24	62	97	浅水	あさみず	25	3	28
48	三ヶ田	みかだ	55	4	59	98	谷地	やち	26	1	27
49	目時	めとき	12	46	58	99	馬淵(淵)	まぶち	25	2	27
50	米沢	よねざわ	54	3	57	100	豊口	とよぐち	24	3	27

出典:『昭和59年版NTT電話帳』より算出

南部氏の分流名字一覧

(1)

名 字	よ み	発 祥 地 (名字地) ・ 由 来	始祖
一 戸	いちのへ	岩手県二戸郡一戸町	行朝
仙 徳	せんとか	同 宮古市千徳	行重
浅瀬石	あせいし	青森県黒石市浅瀬石	不詳
浅 石	あさいし	同 黒石市浅瀬石	長治
野 田	のだ	岩手県九戸郡野田村	行重
米 田	まいた	青森県十和田市米田	義行
荒木田	あらかだ	岩手県岩手郡西根町荒木田	光恒
寄 木	よりき	同 岩手郡松尾村寄木	義名
平 館	たいらだて	同 岩手郡西根町平館	隠岐
松 野	まつの	平館氏の一時的称号	嘉祐
長 牛	なごうし	秋田県鹿角市八幡平長牛	義正
谷 内	たにない	同 鹿角市八幡平谷内	光元
中 村	なかむら	青森県津軽郡中村	光連
江 繫	えつなぎ	岩手県下閉伊郡川井村江繫	正朝
八木沢	やぎさわ	同 宮古市八木沢	光堅
種 市	たねいち	同 九戸郡種市町	光房
蛇 口	へびぐち	同 九戸郡軽米町蛇口	吉広
堀 切	ほりきり	同 岩手郡西根町堀切	不詳
川 井	かわい	同 下閉伊郡川井村	不詳
中 市	なかいち	青森県三戸郡倉石村中市	不詳
津軽石	つがるいし	同 宮古市津軽石	勝富
根井沢	ねいざわ	同 宮古市根井沢	政重
近 内	ちかない	同 宮古市近内	不詳
堀 内	ほりない	同 宮古市堀内	不詳
破切井	はきい	山梨県巨摩郡波木井	実長
身 延	みのぶ	破切井氏の一時的称号	実長
七 戸	しちのへ	青森県上北郡七戸町	朝清
野辺地	のへじ	同 上北郡野辺地町	慶堅
新 田	にった	青森県八戸市新田	親光
藤 井	ふじい	不詳	不詳
八 戸	はちのへ	青森県八戸市	政長
矢 幅	やはば	岩手県紫波郡矢巾町	不詳
久 慈	くじ	同 久慈市	光興
撰 待	せったい	同 閉伊郡田老町撰待	治光
角 沢	かくざわ	不詳	治定
松 原	まつばら	岩手県釜石市松原か	不詳
横 浜	よこはま	青森県上北郡横浜町	慶則
藤 村	ふじむら	不詳	不詳
三 戸	さんのへ	青森県三戸郡三戸町	信居
戸 沢	とざわ	同 五所川原市戸沢か	検校
東	ひがし	糠部郡の東門の意	政行
葛 卷	くずまき	岩手県岩手郡葛巻町	不詳
五 戸	ごのへ	青森県三戸郡五戸町	不詳
福 田	ふくだ	岩手県二戸市福田	不詳

坂牛	さかうし	青森県八戸市坂牛	不詳
穴沢	あなざわ	岩手県下閉伊郡岩泉町穴沢	不詳
田所	たどころ	不詳	不詳
田頭	たがしら	青森県三戸郡福地村田頭	不詳
杉沢	すぎさわ	同 三戸郡福地村杉沢	不詳
石沢	いしざわ	同 三戸郡倉石村石沢	不詳
名久井	なくい	同 三戸郡三戸町名久井	政武
東野	とうの	東氏遠族をはばかって東野	勾當
岩泉	いわいずみ	岩手県下閉伊郡岩泉町	信時
四戸	しのへ	同 二戸郡四戸	宗朝
金田一	きんだいち	同 二戸市金田一	不詳
櫛引	くしびき	青森県八戸市櫛引	河内
中野	なかの	同 八戸市櫛引中野	康実
足沢	たるさわ	岩手県二戸市足沢	義村
山口	やまぐち	同 宮古市山口か	不詳
九戸	くのへ	同 九戸郡九戸村	行連
中野	なかの	同 盛岡市中野	直康
高田	たかだ	同 紫波郡矢巾町高田	康仲
辛	かのと	享保六辛年生れによる	金永
姉帯	あねたい	岩手県二戸郡一戸町姉帯	兼実
中里	なかざと	同 岩手郡葛巻町中里	不詳
野沢	のざわ	青森県三戸郡新郷村野沢	重義
田子	たっこ	同 三戸郡田子町	光康
大光寺	だいこうじ	青森県南津軽郡平賀町大光寺	行実
北	きた	糠部郡の北門の意	宗実
剣吉	けんよし	青森県三戸郡名川町剣吉	致愛
堤	つつみ	同 津軽郡堤ヶ浦	光康
北守	きたもり	北愛時女を妻として北守氏	愛元
梅田	うめた	岩手県二戸郡浄法寺町梅田か	愛路
種市	たねいち	北氏の別系・母方の姓	愛尋
小軽米	こかるまい	岩手県九戸郡小軽米	久俊
江刺家	えさしか	同 九戸郡九戸村江刺家	直久
南	みなみ	糠部郡の南門の意	長義
下田	しもだ	青森県上北郡下田町	直政
六戸	ろくのへ	同 上北郡六戸町	政辰
石亀	いしがめ	同 三戸郡田子町石亀	信房
檜山	ならやま	岩手県二戸郡一戸町檜山	義実
浅水	あさみず	青森県三戸郡五戸町浅水	長義
毛馬内	けまない	秋田県鹿角市毛馬内	秀範
館	たて・たち	青森県八戸市館か	賀高
山田	やまだ	母方の姓山田を称す	利長
石川	いしかわ	青森県弘前市石川	高信

注：『南部藩・参考諸家系図』『角川・地名大辞典』等により作成。

盛岡南部氏藩主表

(南部氏代数)	諱	読み	称号	父諱	生誕	家督	享年
1(26)	信直	のぶなお	大善大夫	高信長男	1546年	1591年	54歳
2(27)	利直	としなお	信濃守	信直長男	1576年	1599年	57歳
3(28)	重直	しげなお	権平	利直3男	1606年	1632年	59歳
4(29)	重信	しげのぶ	彦六郎	利直5男	1616年	1664年	87歳
5(30)	行信	ゆきのぶ	右馬之助	重信3男	1642年	1692年	61歳
6(31)	信恩	のぶおき	藤平	行信7男	1678年	1702年	30歳
7(32)	利幹	としとも	吉助	行信11男	1689年	1708年	37歳
8(33)	利視	としみ	吉助	信恩3男	1708年	1725年	45歳
9(34)	利雄	としかつ	辰之助	利幹長子	1724年	1752年	56歳
10(35)	利正	としまさ	幸吉	利視11男	1751年	1780年	34歳
11(36)	利敬	としかか	慶次郎	利正2男	1782年	1784年	39歳
12(37)	利用	としもち	駒五郎 善太郎	信丞長男 信浄3男	1803年	1820年 1821年	16歳 23歳
13(38)	利濟	としただ	源太丸	利謹	1797年	1825年	59歳
14(39)	信侯	のぶとも	達次郎	利濟長子	1823年	1848年	66歳
15(40)	利剛	としひさ	鉄五郎	利濟3男	1826年	1849年	71歳
16(41)	利恭	としゆき	彦太郎	利剛長子	1855年	1868年	49歳

<注記> 12代利用は二人あり。14代信侯はのち利義に改める。称号は複数あり。
 なお、信直は南部氏中興の祖とされるが、ここでは信直を盛岡南部氏初代とした。

盛岡藩(幕末期)

中野氏・桜庭氏・北氏 家臣一覽

中野氏

氏名	氏名
川村 左学	矢沢 新左衛門
川村 伝右衛門	阿部 源左衛門
川村 市左衛門	大里 秀助
岩館 源作	安保 卯七
川村 多毘人	大里 真右衛門
大里 儀左衛門	工藤 要右衛門
川守田 織右衛門	根市 練藏
川村 仙蔵	根市 権右衛門
根市 多之助	川村 七右衛門
関 六兵衛	根市 藤四郎
小田島 広志	大里 文右衛門
橋本 瀬左衛門	柳田 文之丞
吉田 治右衛門	奈良 辰平
関 七九郎	柳田 善四郎
奈良 織太	
山屋 善作	
佐藤 長十郎	
村山 俊助	
関 菌右衛門	
奈良 文右衛門	
佐藤 新十郎	
川又 嘉八郎	
折戸 恵太郎	
関村 六左衛門	
斉藤 周監	
小田島 権八	
菅生 富人	
工藤 賜	
工藤 恒(経)人	
佐藤 賢治	
川守田 軍藏	
工藤 源之丞	
工藤 源五郎	
岩館 毘代治	
菅生 能治	
円子 忠五郎	
根市 源右衛門	
川村 俊平	
川村 与八郎	
川村 理右衛門	
立山 専弥	
工藤 甚兵衛	
川村 佐次右衛門	

57名

桜庭氏

氏名	氏名
和井内 治郎右衛門	玉井 辰五郎
中津山 富右衛門	豊口 謙也
横田 富蔵	青山 七三郎
立山 弥一郎	高橋 七郎
熊谷 東次郎	石垣 和吉
泉沢 熊之助	福本 五郎兵衛
岩船 直弥	小泉 和毘太郎
内藤 太郎吉	川口 勝太郎
横田 忠右衛門	内藤 安太郎
上関 富治	目時 金吾
内藤 新八郎	本田 延司
内藤 助次郎	横田 直吉
刈谷 万吉	米沢 万六
横田 貞助	田中 茂八郎
内藤 調一	米沢 直之助
内藤 金七	内藤 辰太郎
浅沼 郷左衛門	杉原 銑次郎
岩船 瀬平	北方 文四郎
和田 吉蔵	青山 武八
阿部 権蔵	太田 市助
伊藤 良三	小笠原 吉之助
大志田 トウ	長谷川 廉太郎
立山 周助	長谷川 周次郎
湯瀬 虎之助	村木 伊三郎
湯瀬 哲太郎	石井 武
上関 七蔵	石川 吉六
立山 安身	熊谷 藤吉
中津山 直吉	鎌田 末吉
中津山 恒弥	立山 嘉助
中嶋 重右衛門	石田 栄次郎
泉沢 元弥	木村 庄太郎
木村 喜代志	岩舟 丹次郎
上関 村太	山崎 宇吉
高橋 新之助	糠塚 廣治
内藤 周蔵	和田 熊太郎
米沢 源五郎	鎌田 倉吉
大里 巳代治	児玉 季太郎
青山 峰之助	馬淵 音松
石館 鎮平	能勢 儀七
滝 純輔	湯瀬 富次郎
江家 小七	安保 万之
柳館 専蔵	近内 範蔵
井上 伊太郎	

85名

北氏

氏名	氏名
一方井 銀蔵	
汲川 仁兵衛	
諏訪 内右衛門	
工藤 次郎右衛門	
工藤 源右衛門	
宮野 勇次郎	
村杉 専八	
千葉 惣太郎	
汲川 淳五郎	
谷地 忠二郎	
森田 兵太郎	
中村 弥太郎	
千葉 新太郎	
中村 佐内	
上野 九助	
千葉 善七	
千葉 与七郎	
諏訪 善右衛門	
谷地 孝蔵	
千葉 礼八	
中村 傳治	
四戸 軍蔵	
瀬川 富太	
谷地 吉太郎	
諏訪 民弥	
安保 酉蔵	
森田 勇之助	
一方井 初弥	
瀬川 長作	
中村 市右衛門	
相馬 宮之助	
曲田 初五郎	
山口 族	
青山 瑾一郎	
玉井 藤太郎	
汲川 吉五郎	
黒沢 茂八	
下田 修吾	
汲川 周蔵	
黒沢 善之助	
佐藤 俊助	
谷地 類之助	
賀川 祐五郎	

43名

『中野吉兵衛家士名簿』
慶應元年9月

『毛馬内郷土史資料(二)』
旧藩時代
伊藤良三編

鹿角市史所収
『濁川出陣日記』
慶應4年

花輪・毛馬内両通以御給人表(明治2年)

(1)花輪御給人

	氏名		氏名
1	吉田 権太郎	44	川口 駒次郎
2	渡部 嘉与太	45	佐藤 新之助
3	川村 重蔵	46	田村 茂司
4	小田島 徳弥	47	奈良 裕次郎
5	町井 勝太郎	48	村山 元司
6	内田 慎吾	49	杉江 快右衛門
7	関村 六十郎	50	佐藤 甚之丞
8	奈良 七五郎	51	関 文之助
9	関 金太郎	52	森内 寅五郎
10	渡部 官七郎	53	吉田 岩治
11	佐々木和左衛門	54	村山 宇之吉
12	佐々木六郎兵衛	55	青山 文吉
13	奈良 己代治	56	奈良 庄右衛門
14	吉田 貞作	57	奈良 長兵衛
15	村山 善右衛門	58	大越 嘉兵衛
16	井上 良助	59	小田島 権助
17	川口 勇治	60	栗山 新兵衛
18	村木 春嶺	61	村山 宇太郎
19	吉田 政右衛門	62	関村 録太郎
20	吉田 壮右衛門	63	小田島 太郎
21	関 寿助	64	阿部 貞志
22	関村 貞衛	65	奈良 熊太郎
23	黒沢 藤一郎	66	阿部 忠七
24	赤坂 徳弥	67	関村 乙吉
25	乳井 良蔵	68	関村 庄之助
26	三々田藤右衛門	69	小田島治郎兵衛
27	渡部 伝右衛門	70	川口 啓蔵
28	乳井 茂八	71	小田島 又八
29	赤坂 弥之助	72	児玉 周八
30	関村 壮吉	73	松本 寿助
31	内田 平八郎	74	奈良 重助
32	井上 和喜之助	75	小田島 徳治
33	井上 儀左衛門	76	阿部 儀兵衛
34	村山 忠左衛門	77	米川 林治
35	三々田郷左衛門	78	阿部 与五郎
36	阿部 忠左衛門	79	村山 寅五郎
37	三々田定右衛門	80	花田 圓次郎
38	青山 庄蔵	81	工藤 重吉
39	岩尾 勝右衛門	82	川口 林吉
40	奈良 広見	83	吉田 和七
41	川口 理仲太	84	佐々木 友次郎
42	沢出 善右衛門	85	関 長十郎
43	高橋 重右衛門		

(2)毛馬内御給人

	氏名		氏名
1	山本 喜与志	38	平尾 吉六
2	大森 弥五郎	39	豊口 猶右衛門
3	豊口 唯志	40	駒嶺 茂右衛門
4	児玉 善蔵	41	太田 廉助
5	勝又 周治	42	大森 甚作
6	豊口 文平	43	石田 立治
7	工藤 金十郎	44	関 喜惣八
8	坂本 泰蔵	45	豊口 喜陸
9	関 正二郎	46	高橋 瀧治
10	石田 又市	47	木村 勇右衛門
11	勝又 官兵衛	48	高橋 七兵衛
12	黒沢 覚右衛門	49	田口 宇八
13	工藤 郷太郎	50	関 源之助
14	高橋 市弥	51	石田 釜蔵
15	西村 小太郎	52	関 与惣治
16	高橋 文吾	53	柳沢 作治
17	石田 文十郎	54	安保 儀八
18	高橋 勇之助	55	町井 源八
19	高橋 辰太郎	56	板橋 勘兵衛
20	馬淵 乙次郎	57	豊口 忠左衛門
21	田口 民弥	58	豊口 源二郎
22	石田 定之助	59	西村 八左衛門
23	太田 千代司	60	田口 吉弥
24	太田 半十郎	61	工藤 弥助
25	児玉 善弥	62	勝又 巳助
26	川村 新平	63	柳沢 弥助
27	豊口 小七郎	64	豊口 平治
28	関 清左衛門	65	山本文治
29	岩泉 和平	66	勝又 万作
30	木村 喜平	67	勝又 儀助
31	星川 勝志	68	岩泉 周吉
32	大森 寿助	69	豊口 謙治
33	関 万太郎	70	石川 和蔵
34	駒嶺 左平	71	奈良 吉十郎
35	大森 仁七	72	駒嶺 喜八郎
36	石川 貢	73	関 丈助
37	児玉 良平		

出典：鹿角市史第2巻上

鹿角選出県会議員一覽

年号	改選期	氏名	氏名	氏名
1879	明治12.2	関 久兵衛	勝又平太郎	
1880	明治13.10	勝又平太郎	石川儀兵衛	佐藤健助
		(補)湯瀬哲太郎	(補)川村左学	
1882	明治15.6	湯瀬哲太郎	佐藤健助	中津山延賢
		(補)小田島由義	(補)勝又平太郎	
1884	明治17.2	中津山延賢	大里 寿	勝又平太郎
		(補)湯瀬哲太郎		
1885	明治18.11	湯瀬哲太郎	勝又平太郎	中津山延賢
		(補)泉沢熊之助		
1887	明治20.11	中津山延賢	湯瀬哲太郎	佐藤要之助
1889	明治22.4	勝又平太郎	湯瀬哲太郎	佐藤要之助
		(補)渡辺小太郎	(補)佐々木文太郎	(補)諏訪音治
1891	明治24.2	豊口弁司	佐々木文太郎	湯瀬哲太郎
1891	明治24.8	湯瀬哲太郎	勝又平太郎	
1893	明治26.6	湯瀬哲太郎	勝又平太郎	
		(補)駒ヶ嶺政則	(補)本田延司	(補)諏訪音治
1895	明治28.8	駒ヶ嶺政則	諏訪音治	
		(補)豊口木曾弥	(補)佐々木文太郎	
1897	明治30.8	豊口木曾弥	奈良庄兵衛	
1899	明治32.1	豊口木曾弥	豊口竹五郎	
1899	明治32.9	豊口竹五郎	根本五郎	
1903	明治36.9	豊口竹五郎	内田平三郎	
1907	明治40.9	豊口竹五郎	内田平三郎	
1911	明治44.9	豊口竹五郎	内田平三郎	
1915	大正04.9	山本修太郎	阿部重吉	
1919	大正08.9	山本修太郎	石木田新太郎	
1923	大正12.9	山本修太郎	大里周蔵	
1927	昭和02.9	山本修太郎	関 善次郎	関 威
1931	昭和06.9	山本修太郎	関 威	
1935	昭和10.9	山本修太郎	関 威	
1939	昭和14.9	山本修太郎	関 威	
1943	昭和18.9	山本修太郎	関 威	
1947	昭和22.4	川出雄二郎	青山 倭	高杉重右衛門
1951	昭和26.4	湯瀬安人	青山 倭	高杉重右衛門
1955	昭和30.4	木村定治	青山 倭	木村米松
1959	昭和34.4	木村定治	青山 倭	木村米松
1963	昭和38.4	折戸多次郎	青山 倭	大里文祐
1967	昭和42.4	折戸多次郎	青山 倭	瀬川 浩
1971	昭和46.6	折戸多次郎	大里文祐	瀬川 浩
1975	昭和50.4	田口 誠	阿部隆之助	瀬川 浩
1979	昭和54.4	田口 誠	阿部隆之助	
1983	昭和58.4	田口 誠	阿部隆之助	
1987	昭和62.4	田口 誠	柳沢 清	
1991	平成03.4	阿部隆之助	大里祐一	
1995	平成07.4	柳沢 清	大里祐一	
1999	平成11.4	川口 一	大里祐一	
2003	平成15.4	川口 一	杉江宗祐	
2007	平成19.4	川口 一	大里祐一	
2011	平成23.4	川口 一	大里祐一	
2015	平成27.4	川口 一	石川 徹	
2019	平成31.4	川口 一	児玉政明	

<注>(補)は補欠選の議員。昭和26年の湯瀬は任期途中から木村定治へ。

『秋田県政史』により作成。

郡長・市町村長一覧

NO.1

○ 鹿角郡長

氏名	就任	前任	在任期間	転任先
山田 純	明治11. 12		2年6ヶ月	由利郡長へ
日理 宗信	明治15. 7	県属より	1年	北秋田郡長へ
泉田 政成	明治16. 6	警部より	10ヶ月	平鹿郡長へ
小田島由義	明治17. 3	御用係より	2年7ヶ月	雄勝郡長へ
戸村 義得	明治19. 9	川辺郡長より	1年10ヶ月	川辺郡長へ
小田島由義	明治21. 6	雄勝郡長より	9年	非職
城 忠貞	明治30. 5	高知県属より	2年10ヶ月	雄勝郡長へ
古澤義三郎	明治33. 2	県属より	2年6ヶ月	山口県都濃郡長へ
河野 隆性	明治35. 7	警部より	7年	由利郡長へ
戸崎 順治	明治42. 6	県属より	2年7ヶ月	依願免官
渡邊 達夫	明治44. 12	県属より	1年5ヶ月	由利郡長へ

○ 花輪町長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	大里 寿	明治22年5月	4年	館
2代	佐藤 健助	明治26年5月	4年	下花輪
3代	佐藤 健助	明治30年5月	1年4ヶ月	下花輪
4代	奈良 庄兵衛	明治31年9月	3年4ヶ月	上花輪
5代	村山 義備	明治35年3月	8ヶ月	袋町
6代	大里 寿	明治36年4月	1年	館
7代	奈良 正敬	明治37年6月	1年	下花輪
8代	奈良 庄兵衛	明治38年9月	4年	上花輪
9代	小田島治右衛門	明治42月8月	3年2ヶ月	上花輪
10代	小田島 由義	大正02年2月	2年1ヶ月	
11代	小田島 由義	大正06年2月	2年4ヶ月	
12代	関 徳太郎	大正08年5月	2ヶ月	
13代	関 善次郎	大正08年6月	2年6ヶ月	上花輪
14代	石木田新太郎	大正10年12月	1年9ヶ月	
15代	田中 伝吉	大正13年11月	3年6ヶ月	
16代	村山 喜四郎	昭和03年7月	4年	
17代	浅利 佐助	昭和07年7月	4年	下花輪
18代	浅利 佐助	昭和11年7月	4年	下花輪
19代	浅利 佐助	昭和15年7月	4年	下花輪
20代	浅利 佐助	昭和19年7月	1年4ヶ月	下花輪
21代	大里 周蔵	昭和20年10月	4年	下花輪
22代	大里 周蔵	昭和24年10月	4年	上花輪
23代	大里 周蔵	昭和28年10月	1年7ヶ月	上花輪
24代	浅利 佐助	昭和30年5月	1年6ヶ月	下花輪
25代	阿部 新	昭和31年11月	3年9ヶ月	上花輪
26代	阿部 新	昭和35年8月	4年	上花輪
27代	阿部 新	昭和39年7月	4年	上花輪
28代	阿部 新	昭和43年7月	3年9ヶ月	上花輪

郡長・市町村長一覧

NO.2

○ 柴平村長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	児玉 正次郎	明治22年5月	4年	平元
2代	児玉 正次郎	明治26年5月	4年	平元
3代	児玉 正次郎	明治30年5月	4年	平元
4代	児玉 正次郎	明治34年5月	4年	平元
5代	児玉 正次郎	明治38年5月	4年	平元
6代	児玉 正次郎	明治42年5月	4年	平元
7代	児玉 正次郎	大正02年5月	4年	平元
8代	木村 嘉助	大正06年5月	4年	
9代	木村 嘉助	大正10年5月	8ヶ月	
10代	児玉 政七	大正11年3月	4年	
11代	児玉 政七	大正15年3月	3年3ヶ月	
12代	木村 勝衛	昭和04年9月	2年4ヶ月	
13代	児玉 高則	昭和07年1月	4年8ヶ月	
14代	金沢 卯太郎	昭和11年9月	4年	
15代	児玉 高則	昭和15年12月	4年	
16代	児玉 高則	昭和19年12月	3年	
17代	金沢 憲司	昭和22年4月	4年	
18代	金沢 憲司	昭和26年4月	4年	
19代	金沢 憲司	昭和30年5月	1年5ヶ月	

(花輪町に)

○ 毛馬内町長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	本田 延司	明治22年4月	4年	毛馬内
2代	岩泉 源蔵	明治26年4月	1年1ヶ月	毛馬内
3代	勝又 平太郎	明治28年9月	5ヶ月	毛馬内
4代	田中 虎次郎	明治29年9月	4年	毛馬内
5代	田中 虎次郎	明治33年9月	4年	毛馬内
6代	田中 虎次郎	明治37年9月	4年	毛馬内
7代	田中 虎次郎	明治41年9月	4年	毛馬内
8代	田中 虎次郎	大正01年9月	4年	毛馬内
9代	豊口 重太郎	大正05年9月	4年	毛馬内
10代	豊口 重太郎	大正09年9月	10ヶ月	毛馬内
11代	山本 修太郎	大正10年7月	2年4ヶ月	毛馬内
12代	山本 修太郎	大正12年11月	4年	毛馬内
13代	豊口 竹五郎	昭和02年11月	4年	毛馬内
14代	豊口 竹五郎	昭和06年11月	4ヶ月	毛馬内
15代	奈良 正太郎	昭和08年1月	1年3ヶ月	毛馬内
16代	伊藤 良三	昭和09年4月	4年	毛馬内
17代	伊藤 良三	昭和13年3月	11ヶ月	毛馬内
18代	大里 清三	昭和14年2月	4年	毛馬内
19代	大里 清三	昭和18年2月	2年8ヶ月	毛馬内
20代	伊藤 良三	昭和20年10月	8ヶ月	毛馬内
21代	伊藤 良三	昭和21年7月	9ヶ月	毛馬内
22代	伊藤 良三	昭和22年4月	4年	毛馬内
23代	伊藤 良三	昭和26年4月	1年3ヶ月	毛馬内
24代	大里 清三	昭和27年7月	2年9ヶ月	毛馬内

(十和田町に)

郡長・市町村長一覧

NO.3

○ 錦木村長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	駒ヶ嶺 政則	明治22年4月	4年	末広
2代	駒ヶ嶺 政則	明治26年4月	4年	末広
3代	駒ヶ嶺 政則	明治30年5月	4年	末広
4代	駒ヶ嶺 政則	明治34年5月	4年	末広
5代	駒ヶ嶺 政則	明治38年5月	4年	末広
6代	駒ヶ嶺 政則	明治42年5月	1年6ヶ月	末広
7代	青山 文太郎	明治43年12月	4年	末広
8代	青山 文太郎	大正03年11月	4年	
9代	青山 文太郎	大正07年12月	4年	
10代	青山 文太郎	大正11年12月	4年	
11代	青山 文太郎	大正15年11月	4年	
12代	沢田 勇次郎	昭和03年10月	4年	
13代	柳沢 善六	昭和07年10月	4年	
14代	米沢 源一郎	昭和11年10月	4年	
15代	上田 伝吉	昭和15年10月	4年	
16代	上田 伝吉	昭和19年10月	2年6ヶ月	
17代	佐々木 鉄蔵	昭和22年4月	4年	
18代	佐々木 鉄蔵	昭和26年5月	4年	

(十和田町に)

○ 大湯村・町長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	諏訪 巳代治	明治22年5月	1年	大湯
2代	諏訪 駒次郎	明治23年5月	4年	大湯
3代	諏訪 駒次郎	明治27年5月	1年7ヶ月	大湯
4代	谷地 源太	明治29年1月	1週間	大湯
5代	諏訪 音治	明治29年2月	8ヶ月	大湯
6代	諏訪 駒次郎	明治31年10月	4年	大湯
7代	諏訪 駒次郎	明治35年10月	4年	大湯
8代	諏訪 巳代治	明治39年11月	3年	大湯
9代	諏訪 巳代治	明治43年10月	4年	大湯
10代	諏訪 巳代治	大正03年10月	4年	大湯
11代	諏訪 巳代治	大正07年11月	4年	大湯
12代	諏訪 駒次郎	大正11年11月	3年10ヶ月	大湯
初代	谷地 政民	大正15年9月	4年	大湯
2代	谷地 政民	昭和05年9月	3日	大湯
3代	上野 豊吉	昭和06年5月	4年	大湯
4代	諏訪 綱俊	昭和10年5月	4年	大湯
5代	諏訪 綱俊	昭和14年4月	3年5ヶ月	大湯
6代	諏訪 綱俊	昭和17年9月	2年2ヶ月	大湯
7代	米田 恒太郎	昭和19年11月	2年2ヶ月	大湯
8代	諏訪 富多	昭和22年1月	3ヶ月	大湯
9代	諏訪 富多	昭和22年4月	4年	大湯
10代	諏訪 綱俊	昭和26年4月	4年	大湯
11代	諏訪 綱俊	昭和30年4月	1年6ヶ月	大湯

(十和田町に)

郡長・市町村長一覧

NO.4

○ 十和田町長（合併後の）

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	伊藤 良三	昭和30年5月	4年3ヶ月	毛馬内
2代	山本 九郎	昭和34年8月	4年	毛馬内
3代	高橋 忠	昭和38年8月	4年	毛馬内
4代	高橋 忠	昭和42年8月	4年8ヶ月	毛馬内

○ 尾去沢村・町長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	三ヶ田 市助	明治22年4月	1年	蟹沢
2代	越 俊道	明治24年2月	1年3ヶ月	笹小屋
3代	高橋 山吾	明治25年8月	7ヶ月	笹小屋
4代	内田 慎吾	明治27年11月	1年5ヶ月	笹小屋
5代	三ヶ田 市助	明治29年5月	1年8ヶ月	蟹沢
6代	兔沢 正義	明治31年2月	4ヶ月	赤沢
7代	田中 忠次郎	明治31年8月	5ヶ月	笹小屋
8代	内田 平三郎	明治32年6月	4年	山方
9代	石井 清太郎	明治36年7月	3年4ヶ月	中沢
10代	高橋 山吾	明治39年12月	2年9ヶ月	笹小屋
11代	高橋 山吾	明治42年8月	4年	笹小屋
12代	高橋 山吾	大正02年8月	4年	笹小屋
13代	高橋 山吾	大正06年8月	4年	笹小屋
14代	高橋 山吾	大正10年8月	2年	笹小屋
15代	内田 清太郎	大正12年7月	5年	笹小屋
16代	内田 平三郎	昭和03年8月	4年	山方
17代	兔沢 忠次郎	昭和07年6月	1年	
18代	田村 勇太郎	昭和08年8月	9ヶ月	
初代	宮城 佐次郎	昭和09年7月	4年	(尾去沢町に)
2代	宮城 佐次郎	昭和13年7月	2年5ヶ月	
3代	小田島 徳蔵	昭和17年1月	4年10ヶ月	
4代	高杉 重右衛門	昭和22年4月	4年	
5代	木村 米松	昭和26年4月	4年	
6代	工藤 仙一	昭和30年5月	4年	
7代	児玉 政吉	昭和34年4月	4年	
8代	児玉 政吉	昭和38年4月	4年	
9代	児玉 政吉	昭和42年4月	4年	

郡長・市町村長一覧

NO.5

○ 宮川村長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	阿部 甚七	明治22年4月	2年	長谷川
2代	安倍 悦人	明治26年5月	4年	宮麓
3代	安倍 悦人	明治30年5月	4年	宮麓
4代	安倍 悦人	明治34年5月	2年2ヶ月	宮麓
5代	阿部 重助	明治36年8月	2年4ヶ月	長谷川
6代	阿部 義恵	明治38年12月	8年	宮麓
7代	阿部 藤助	大正03年2月	4年	
8代	阿部 藤助	大正07年2月	4年	
9代	阿部 藤助	大正11年2月	6年	
10代	阿部 藤助	昭和02年2年	1年3ヶ月	
11代	阿部 喜佐	昭和03年10月	4年	
12代	阿部 貞吉	昭和07年3月	4年	
13代	阿部 貞吉	昭和11年3月	4年	
14代	関 直右衛門	昭和15年3月	3年6ヶ月	
15代	阿部 嘉平	昭和18年11月	8ヶ月	
16代	阿部 喜佐	昭和19年7月	1年7ヶ月	
17代	成田 元吉	昭和21年3月	1年2ヶ月	
18代	成田 元吉	昭和22年5月	4年	
19代	阿部 吉郎	昭和26年4月	4年	
20代	成田 元吉	昭和30年4月	1年4ヶ月	

(八幡平村に)

○ 曙村長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	根本 五郎	明治22年4月	3ヶ月	長井田
2代	渡部 文蔵	明治22年7月	5ヶ月	松谷
3代	阿部 熊五郎	明治23年2月	8ヶ月	長井田
4代	毛馬内 次孝	明治23年11月	4年	長井田
5代	毛馬内 次孝	明治27年11月	4年	長井田
6代	毛馬内 次孝	明治31年11月	2年10ヶ月	長井田
7代	小田島 千代治	明治34年10月	4ヶ月	花輪
8代	渡部 文蔵	明治35年4月	4年	松谷
9代	渡部 文蔵	明治39年4月	7ヶ月	松谷
10代	根本 五郎	明治39年11月	4年	長井田
11代	根本 五郎	明治43年10月	3年7ヶ月	長井田
12代	佐藤 録太郎	大正03年5月	2年	
13代	根本 一三	大正05年6月	3年5ヶ月	
14代	渡部 繁雄	大正09年3月	4年	
15代	渡部 繁雄	大正13年4月	4年	
16代	渡部 繁雄	昭和03年4月	4年	
17代	渡部 繁雄	昭和07年4月	4年	
18代	佐藤 富治	昭和11年4月	4年	
19代	佐藤 富治	昭和15年4月	4年	
20代	佐藤 富治	昭和19年4月	7ヶ月	
21代	渡部 繁雄	昭和19年11月	1年6ヶ月	
22代	佐藤 富治	昭和21年7月	4ヶ月	
23代	斎藤 吉之助	昭和22年4月	4年	
24代	根本 一次	昭和26年6月	3年11ヶ月	
25代	佐藤 富治	昭和30年5月	1年1ヶ月	

(八幡平村に)

郡長・市町村長一覧

NO.6

○ 八幡平村長

代数	氏名	就任	在任期間	住所
初代	成田 元吉	昭和31年8月	4年	
2代	成田 元吉	昭和35年7月	3年8ヶ月	
3代	関 孝三	昭和39年3月	4年	
4代	関 孝三	昭和43年3月	4年	

○ 鹿角市長

代数	氏名	就任
市制施行時	児玉 政吉(こだままさきち)	昭和47年04月01日から
初代	阿部 新(あべあらた)	昭和47年04月28日から
2代	児玉 政吉(こだままさきち)	昭和51年04月28日から
3代	阿部 新(あべあらた)	昭和55年04月28日から
4代	阿部 新(あべあらた)	昭和59年04月28日から
5代	杉江 宗祐(すぎえむねゆう)	昭和63年04月28日から
6代	杉江 宗祐(すぎえむねゆう)	平成04年04月28日から
7代	杉江 宗祐(すぎえむねゆう)	平成08年04月28日から
8代	佐藤 洋輔(さとうようすけ)	平成12年04月28日から
9代	佐藤 洋輔(さとうようすけ)	平成16年04月28日から
10代	児玉 一(こだまひとし)	平成17年07月03日から
11代	児玉 一(こだまひとし)	平成21年07月03日から
12代	児玉 一(こだまひとし)	平成25年07月03日から
13代	児玉 一(こだまひとし)	平成29年07月03日から現在

『秋田県町村合併史』、『鹿角のあゆみ』等により作成。

鹿角市功労者・文化功労者一覧

(1)

年度	功労者・文化功労者	氏名	地域	功績
S49	功労者	諏訪 富多 渡部 繁雄	十和田大湯 八幡平石鳥谷	産業、文化、地方自治 地方自治、産業振興
	文化功労者	相川 善一郎 高橋 克三 立山 廉吉 兔沢 千代治 奈良 靖規	花輪下花輪 十和田毛馬内 十和田毛馬内 花輪下モ屋敷 十和田大湯	彫刻・陶芸 学校教育・社会教育の発展 図書館充実・読書の普及 地方自治・産業の振興 教育・観光の振興
S50	文化功労者	大里 健治 佐藤 富治 竹原 茂男 松岡 権四郎 吉田 俊道	十和田毛馬内 八幡平松館 尾去沢瓜畑 花輪曲沢 花輪下花輪	芸術文化の向上 地方自治・産業の振興 産業の振興 産業の振興 福祉・教育文化の向上
S51	功労者	沢口 大教 金沢 憲司	十和田毛馬内 花輪間瀬川	地方自治・福祉の向上 交通安全、地方自治の振興
	文化功労者	田村 好夫 渡部 幸太郎 青山 イト 鶴浦 有紀	尾去沢軽井沢 花輪新田町 十和田浜田 花輪沢小路	民生安定、地方自治の振興 産業の振興 社会福祉の向上 保健医療の向上
S52	功労者	高嶋 直吉 青山 倭 大里 文祐	十和田大湯 十和田浜田 花輪堰向	地方自治の振興 地方自治の振興 地方自治、保健医療の向上
	文化功労者	田村 正平 関 フミ 武石 チエ 竹沢 英次 津島 要蔵	八幡平玉内 尾去沢下モ平 花輪上花輪 十和田毛馬内 十和田毛馬内	民生安定、教育の向上 民生安定、福祉の向上 社会福祉の向上 教育、社会福祉の向上 産業振興、教育の向上
S53	功労者	高橋 克三 関 孝三	十和田毛馬内 八幡平湯瀬	教育、文化の向上 地方自治・産業の振興
	文化功労者	賀川 茂治 晴沢 直見	花輪下花輪 八幡平谷内	産業、地方自治の振興 教育、社会福祉の向上
S54	功労者	田村 平太郎 戸館 安太郎 関 東一	尾去沢軽井沢 八幡平松館 花輪中花輪	地方自治・産業経済の振興 地方自治・産業の振興 地方自治の振興、民生安定
	文化功労者	沢口 ミツホ 松井 太禅	十和田毛馬内 花輪上花輪	民生安定・教育の向上 教育の向上・民生安定
S55	功労者	金澤 與三治 山本 九郎 櫻田 宇一郎	花輪西町 十和田毛馬内 八幡平平	地方自治の振興 地域産業・地方自治の振興 地方自治の振興
	文化功労者	岩井 誠 似鳥 清 西村 ミヤ 高杉 善松	花輪古館 尾去沢下モ平 十和田大湯 尾去沢下モ平	学校教育の向上、地域産業の振興 地域産業の振興、地方自治の進展 婦人の地位向上に尽力 郷土芸能の振興
S56	功労者	中西 佐一	花輪下夕町	地方自治・産業の振興
	文化功労者	渡部 全次雄 杉江 イホ 佐藤 秀雄 工藤 忠	八幡平石鳥谷 十和田毛馬内 花輪中花輪 尾去沢新山	教育・文化行政の推進に尽力 社会教育の振興 私学振興、文化活動普及振興 学校教育・教育行政の向上
S57	功労者	児玉 政吉 高橋 忠	尾去沢蟹沢 十和田毛馬内	地方自治行政の確立 地方自治の進展
	文化功労者	石井 春教 山本 喜七郎 奈良 善吉 阿部 安子 小田島 由男 上野 六蔵	花輪中花輪 花輪観音平 花輪古館 八幡平中川 花輪上花輪 十和田大湯	民生安定、社会福祉の向上 スポーツ・農業の振興 学校教育・社会教育の向上 幼児教育の向上 学校教育・芸術文化の向上 民俗芸能の保存に尽力

(2)

年度	功労者・文化功労者	氏名	地域	功績
S58	功労者	松岡 権四郎	花輪曲沢	産業の振興
	文化功労者	木村 重次郎 大里 久次郎 中澤 幸太郎 奈良 壽	尾去沢下モ平 十和田毛馬内 花輪中花輪 十和田毛馬内	民俗芸能の振興発展 地域農業振興 更生保護・社会福祉の増進 学校教育の向上、郷土歴史家
S59	功労者	相川 善一郎	花輪下花輪	彫刻・陶芸
	文化功労者	山田 善吉 阿部 一郎 豊口 甚平 岩館 昇園	八幡平谷内 八幡平谷内 十和田毛馬内 花輪上花輪	観光の振興 地方自治の振興 地方自治・産業の振興 社会教育・学校教育の向上
S60	文化功労者	北郷 始 村山 守太郎 本間 喜代松	尾去沢瓜畑 花輪下花輪 花輪古館	学校教育・社会教育の向上 果樹農業の振興 農業の振興・技術改良
S61	功労者	大里 文雄	十和田毛馬内	地域防災に尽力、農業の振興
	文化功労者	斎藤 松五郎 関 金三郎 田村 ヨネ	八幡平小割沢 花輪上頭無 尾去沢軽井沢	地方自治・社会福祉の向上 社会福祉の増進 学校教育・生涯教育の向上
S62	功労者	米田 萬右衛門	花輪新斗米	地方自治、産業経済の向上
	文化功労者	佐藤 政治 大里 令三 黒澤 秀齋 高杉 正巳 橋野 市之助	花輪八正寺 花輪古館 十和田毛馬内 尾去沢西道口 十和田大湯	教育の向上 芸術文化の向上 保健衛生の向上 地方自治、産業経済の向上 地方自治、産業経済の向上
S63	功労者	畠山 喜一 田口 誠	八幡平湯瀬 十和田毛馬内	地方自治の振興、交通安全の向上 地方自治の振興
	文化功労者	田村 唯志 勝又 啓一	十和田毛馬内 十和田毛馬内	教育文化の向上 教育の振興
H 元	功労者	諏訪 綱毅	十和田大湯	地方自治の振興
	文化功労者	阿部 繁治 山本 儀助	花輪合ノ野 八幡平小豆沢	教育の振興、福祉の向上 教育文化の向上
H 2	功労者	阿部 新 阿部 廣吉	花輪上花輪 八幡平中川	地方自治の振興、社会福祉の向上 地方自治・産業経済の振興
	文化功労者	石木田 善蔵 下田 初雄 小笠原 達	花輪中花輪 八幡平松館 十和田大湯	産業経済の振興 地方自治の振興、社会福祉の向上 保健医療の向上
H 3	功労者	小田島 邦夫	花輪上花輪	教育文化の向上
	文化功労者	米田 博	十和田大湯	教育文化の向上
H 4	功労者	守田 榮	十和田大湯	地方自治の発展
	文化功労者	田原 武 石井 トシ 阿部 壽 安西 りよ 安村 二郎 山口 耕作 柳澤 源一	十和田毛馬内 花輪下中島 花輪柳田 花輪八正寺 花輪合ノ野 花輪上花輪 花輪	芸術文化の向上 学校教育・女性の地位向上に寄与 私学教育の振興 芸術文化の向上 教育文化の向上、郷土史家 保健医療の向上 地方行政の進展に尽力
H 5	功労者	阿部 仙蔵 田口 修一	八幡平沼田 花輪鶴田	地方自治・産業の振興 地方自治・スポーツの振興
	文化功労者	浅利 成和	十和田毛馬内	学校教育・武道の振興
H 6	功労者	児玉 朋司 阿部 隆之介	十和田草木 八幡平沼田	地方自治・産業の振興 地方自治・産業の振興
	文化功労者	玉井 繁樹 池田 政勝	十和田大湯 十和田錦木	教育文化の振興 地方自治・産業の振興
H 7	功労者	関 富治	花輪中花輪	地域防災・防犯活動に貢献
	文化功労者	阿部 豊吉 杉山 新吉	八幡平谷内 尾去沢蟹沢	学校教育・教育文化の向上 学校教育・教育文化の向上
H 8	文化功労者	小田嶋 信一	尾去沢軽井沢	地方自治の振興・民生の安定

(3)

年度	功労者・文化功労者	氏名	地域	功績
H 9	功労者	関 良子 石木田 芳郎 浅利 昭	八幡平湯瀬 花輪堰向 花輪八正寺	産業経済の振興・女性の地位向上 社会福祉の向上・地方自治の振興 産業経済の振興・公益
	文化功労者	石木田 禮三郎 根市 セイ	花輪上花輪 花輪下中島	産業経済の振興・民生の安定 芸術文化の向上
H10	功労者	下田 初雄 大里 俊夫	八幡平松館 十和田毛馬内	地方自治の振興・社会福祉の向上 地方自治の振興・商工業の振興
	文化功労者	柳澤 ナホ 吉田 育次郎 高橋 照	花輪案内 花輪下花輪 十和田毛馬内	芸術文化の向上 地方自治の振興・社会福祉の向上 女性の地位向上・保健衛生の向上
H11	功労者	阿部 雄治 青山 善蔵 阿部 理一	八幡平三ヶ田 十和田 花輪	地方自治の振興 地方自治の振興 地方自治の振興・産業の振興
	文化功労者	奈良 トシ子 相川 積 浅利 悦造 成田 一穂	花輪 花輪 花輪 十和田	芸術文化の向上 文化財保護・教育文化の向上 武道の振興・商工業の振興 スポーツの振興・教育文化の向上
H12	功労者	木村 末蔵 黒沢 直弥	花輪 十和田草木	産業の振興・地方自治の振興 地方自治の振興
	文化功労者	石田 大三 福永 光子	十和田 十和田	教育文化の向上 保健医療の向上
H13	功労者	高杉 英次郎 大信田 喜一	尾去沢 尾去沢	地方自治の振興 地方自治の振興
	文化功労者	安村 金之助	花輪	公共利益の向上
H14	功労者	安村 二郎 成田 吉衛 安保 富雄	花輪合ノ野 十和田 花輪	教育文化の向上・歴史文化の振興 地方自治の振興・農業の振興 産業の振興
	文化功労者	石井 茂夫 柳館 計一 畠山 誠一 奈良 東一郎 高橋 道人	花輪 尾去沢 八幡平 花輪 十和田毛馬内	教育文化の向上・社会福祉の向上 芸術文化の向上・産業の振興 地方自治の振興・歴史文化の振興 芸術文化の向上 芸術文化の向上
H15	功労者	山口 耕作 神田 庄司	花輪 八幡平	保健医療の向上 農業の振興
	文化功労者	大里 克三 橋本 運吉	十和田毛馬内 八幡平	民俗芸能の振興 教育文化の向上・民俗芸能の振興
H16	文化功労者	阿部 益栄	花輪大川添	教育文化の向上・社会福祉の向上
H17	功労者	佐藤 一 佐藤 洋輔	尾去沢 八幡平	地方自治の振興 地方自治の振興
	文化功労者	武石 佳久	花輪	芸術文化の向上
H18	功労者	奈良 喜三郎 阿部 節雄	花輪 八幡平	地方自治の振興 地方自治の振興
	文化功労者	畠山 謙次郎 木村 嘉隆	八幡平 花輪	観光・物産の振興 産業の振興
H19	功労者	岩船 正記	花輪	地方自治の振興・産業の振興
	文化功労者	斎藤 長八 関 堯	十和田大湯 尾去沢	教育・芸術文化の向上 教育文化の向上・民生安定
H20	功労者	浅利 忠	花輪	地方自治の振興・教育文化の向上
	文化功労者	長内 茂昭 柳澤 儀一郎	十和田岡田 花輪	教育・スポーツの振興 産業・民俗芸能の振興
H21	文化功労者	高木 豊平	十和田大湯	芸術文化の向上
H22	文化功労者	上野 満	十和田大湯	スポーツの振興
H23	功労者	杉江 宗祐	花輪	地方自治の振興
		吉田 俊龍	花輪	民生の安定・社会福祉の向上

(4)

年度	功労者・文化功労者	氏名	地域	功績
H24	功労者	佐藤 祥二 遠藤 嗣昕 山本 喜三	花輪 花輪 花輪	商工業の振興 地方自治の振興 農業の振興
	文化功労者	晴澤 久 畠山 定雄 澁谷 久夫 工藤 富雄 米村 修一 阿部 恭子	八幡平谷内 尾去沢 花輪下花輪 花輪 花輪 八幡平谷内	教育文化の向上・社会福祉の向上 社会福祉の向上 スポーツの振興 教育・スポーツの振興 産業の振興 観光の振興・社会福祉の向上
H25	功労者	大里 恭司 阿部 佐太郎	花輪 八幡平和田	地方自治の振興 地方自治の振興
	文化功労者	花海 道雄	十和田大湯	スポーツの振興
H26	功労者	中西 日出男 阿部 邦宏	花輪下夕町 八幡平谷内	地方自治の振興 地方自治の振興
	文化功労者	虎渡 進	十和田末広	教育文化の振興・社会福祉の向上
H27	文化功労者	高瀬 勇 小林 健夫 岩館 祖芳	花輪荒屋敷 花輪荒屋敷 花輪上花輪	教育文化の振興 社会福祉・教育の向上 民生の安定
H28	功労者	大里 祐一 岩尾 昌子	花輪 十和田	地方自治の振興・保健医療の向上 地方自治の振興・保健医療の向上
	文化功労者	沢田 欣之	花輪	教育文化の振興
H29	文化功労者	木村 鷄郎 安田 孝司	十和田 花輪	スポーツの振興 教育文化の向上
	功労者	田中 専一	花輪	農業の振興
H30	文化功労者	小笠原 武	十和田	保健医療の向上
	功労者	勝又 幹雄	十和田	地方自治の振興
R元	文化功労者	村木 悦子	花輪	保健医療の向上

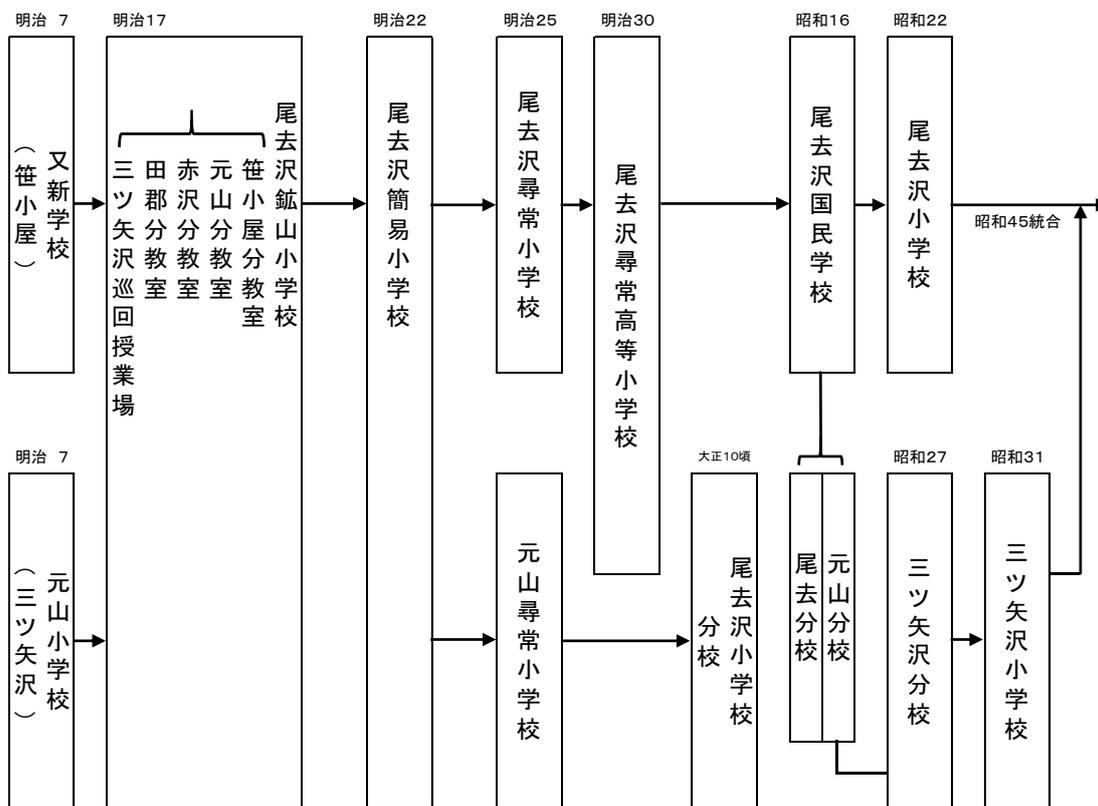
出典：広報かつのより抜粋

鹿角市芸術文化協会
芸術文化章歴代受賞者名簿

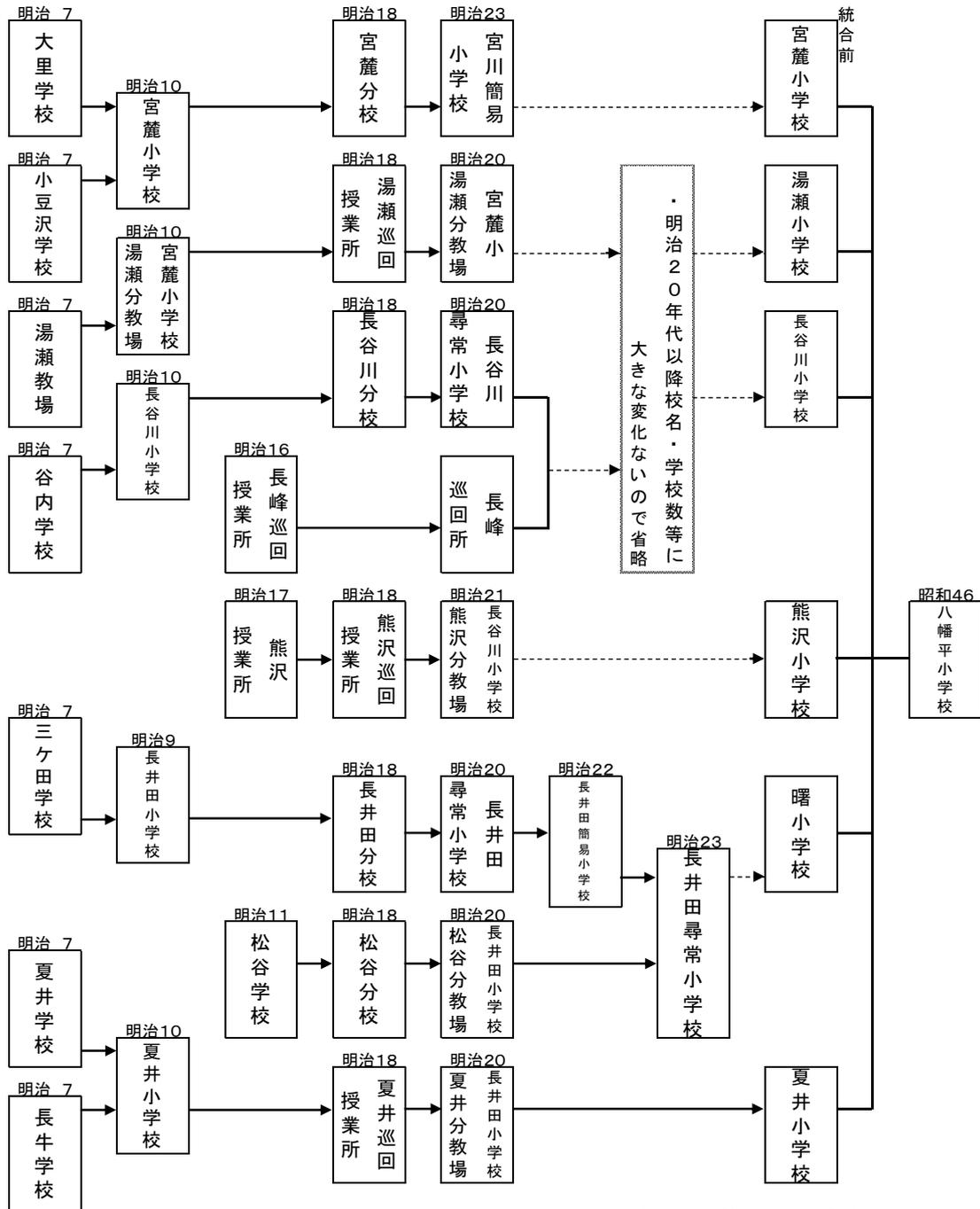
年度	氏名	分野	年度	氏名	分野
昭和	51 高瀬 儀一	書道	13	中村 サダ	民謡・郷土芸能
	51 木村重次郎	町踊り	13	山本 皎	俳句
	51 佐藤 正二	短歌・古典	13	武藤 廣子	演劇
	52 杉江 イト	華道	14	土館 イサ	俳句・茶道
	52 高瀬吉五郎	古文書	14	川村 和男	民謡・郷土芸能
	52 高杉 善松	芸能・三味線	15	津嶋 廣志	謡曲・芸文運営
	53 山崎 サエ	箏曲	15	湯澤 栄幸	民謡
	53 大里 令三	邦楽	16	畠山 玄介	鬼太鼓
	54 長崎 鍊一	書道	16	関 政雄	民謡
	54 田原 武	俳句	16	杉江 良子	茶道・華道
	55 竹沢 英次	芸文運営	17	川口 仁人	写真・芸文運営
	55 兎沢 忠雄	民謡	17	佐藤 園	茶道・芸文運営
	55 栗山文一郎	古文書	18	阿部 恭子	俳句
	56 渡辺 コヨ	俳句	18	米田 良子	民謡
	57 中村 主	民謡	感謝状 19	武石 佳久	前会長
	57 吉原 進	写真	19	千葉 ノリ	短歌・舞踊
	59 阿部甚之助	芸文運営	19	黒澤 文男	民謡
	59 安西 りよ	華道・茶道	特別章 19	若柳吉初恵	舞踊
	59 富樫 正一	写真	20	米田 優三	民謡
	59 川口 力三	町踊り	特別章 20	渡辺 智子	舞踊
	60 高橋 道人	俳句	特別章 20	鎌田 亮	俳句
	60 米田 興一	民謡	21	佐々木善蔵	町踊り
	61 奈良 竹治	謡曲	21	横尾 征子	民謡
	62 関 久	読書会・町踊り	22	阿部 和子	謡曲
	62 菅原 昭二	花輪囃子	22	佐藤 ツギ子	民謡
	63 米田 文夫	民謡	22	川又美智子	舞踊
	63 吉田 久子	茶道・華道	23	杉江 定子	かるた・町踊り
平成	1 阿部 寿	短歌・芸文運営	23	新田左津雄	写真・芸文運営
	2 土館 昭子	舞踊	23	山本 義一	民謡・芸文運営
	2 糠塚 京子	茶道・華道・書道	23	太田ななこ	民謡・小学生
	2 佐藤 四郎	俳句	特別章 23	佐々木嶺松	大正琴
感謝状	2 小田島由男	元会長	24	金澤 キヨ	民謡
	3 中西 タエ	郷土芸能	24	木次谷郁子	舞踊・芸文運営
	4 柳沢 ナホ	茶道	25	米村キヨエ	民謡
	4 安藤 和子	華道・舞踊	25	三森 吉次	俳句・芸文運営
感謝状	5 田原 武	元会長	26	関 幸一	謡曲
	5 黒沢 晟幸	短歌	26	奈良美佐子	バレエ・芸文運営
	5 村上 政身	俳句	27	石川 準一	謡曲・芸文運営
	5 奈良東一郎	短歌	27	海沼 イネ	民話
	6 福永 光子	茶道	特別章 27	水木 愛歌	舞踊
	6 佐藤 秀雄	短歌	28	黒澤 一夫	民謡・芸文運営
	7 高木 豊平	演劇	28	佐藤 初恵	華道・芸文運営
	8 兎沢 ヤエ	茶道・華道	28	加藤 栄子	大正琴
	8 黒沢 みえ	俳句・茶道	特別章 28	明扇 華穂	舞踊
	9 根市 セイ	華道・茶道	29	佐藤 武彦	かるた
	10 田中 リヨ	郷土芸能	29	古川 久男	民謡・郷土芸能
	10 佐藤 祐幸	民謡	感謝状 29	高木 豊平	前会長
	11 斎藤 長八	短歌	30	阿部 益栄	民話・芸文運営
	12 丸岡 一雄	民謡・郷土芸能	30	川又 節三	謡曲
	12 栗山 廣	郷土芸能	令和 1	又賀喜代美	民謡・芸文運営
	12 阿部 和子	コーラス	1	山口 京子	民話・芸文運営

鹿角郡市内小・中・高校変遷図

○ 小学校（尾去沢地区）

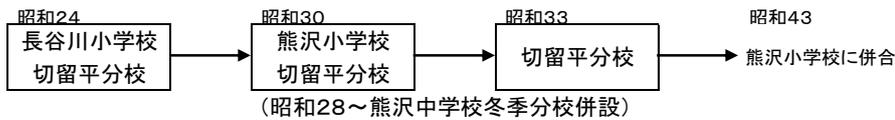


○ 小学校 (八幡平地区)

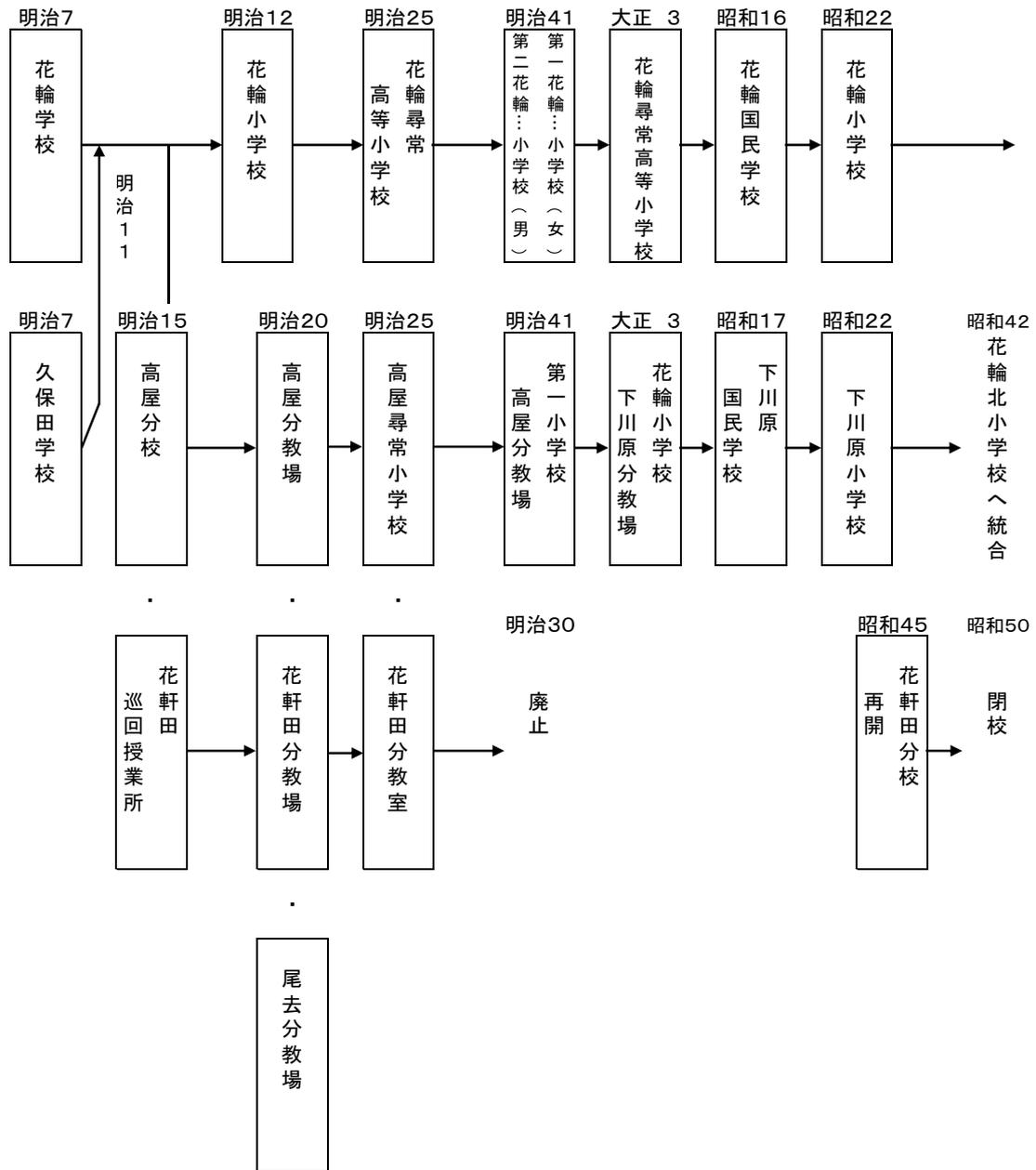


(八幡平小学校百周年記念誌より)

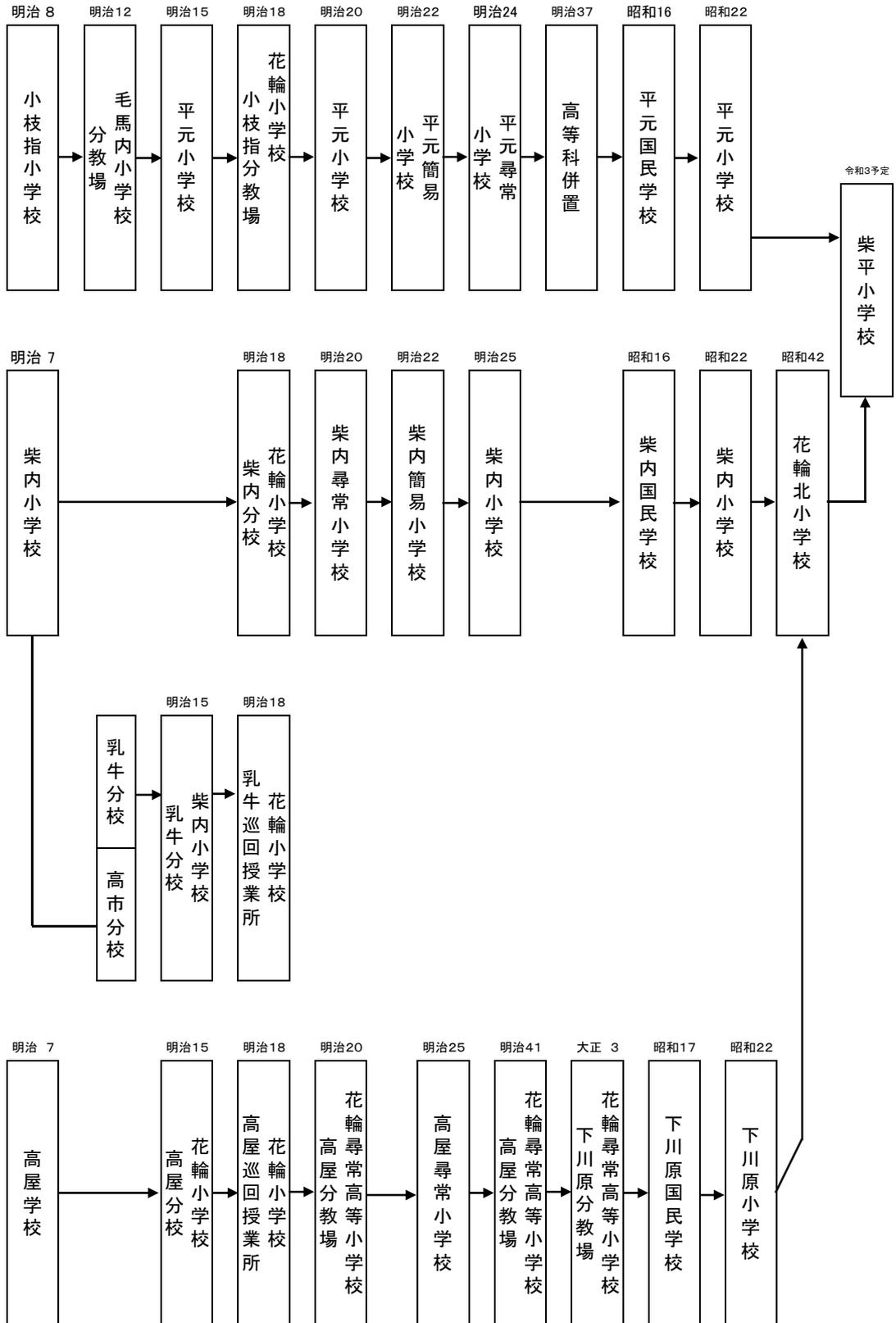
※切留平分校の推移



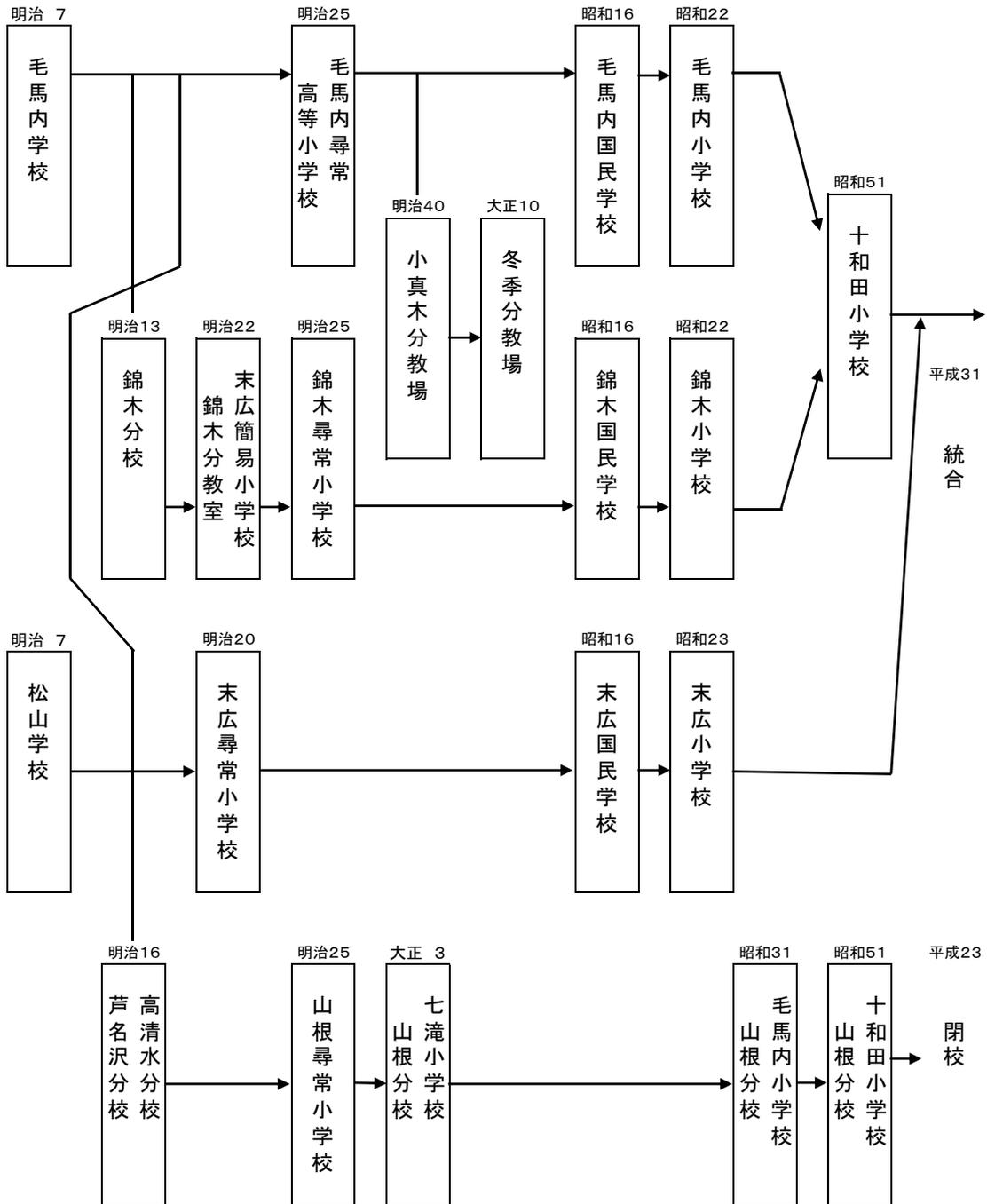
○ 小学校 (花輪地区)



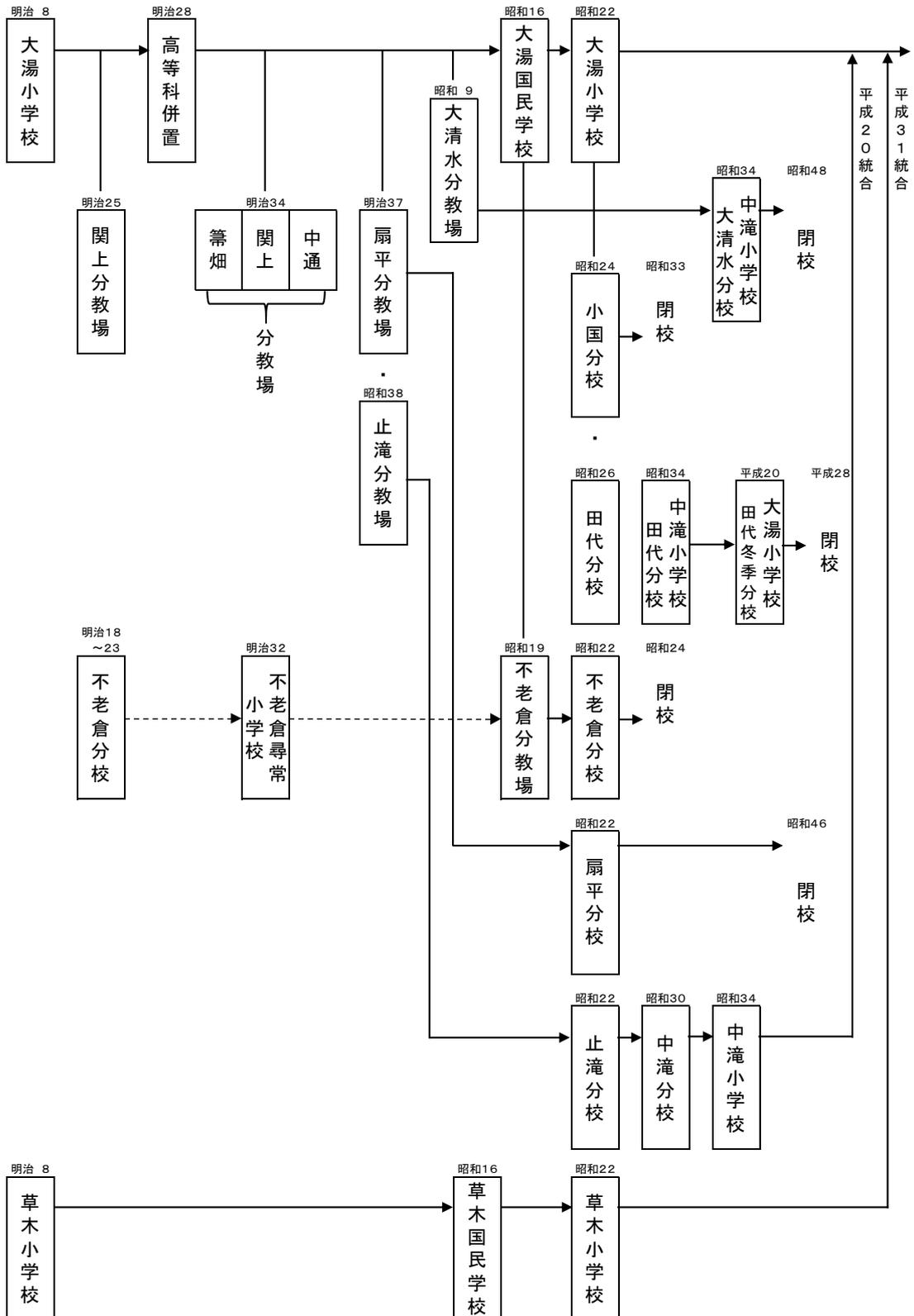
○ 小学校 (柴平地区)



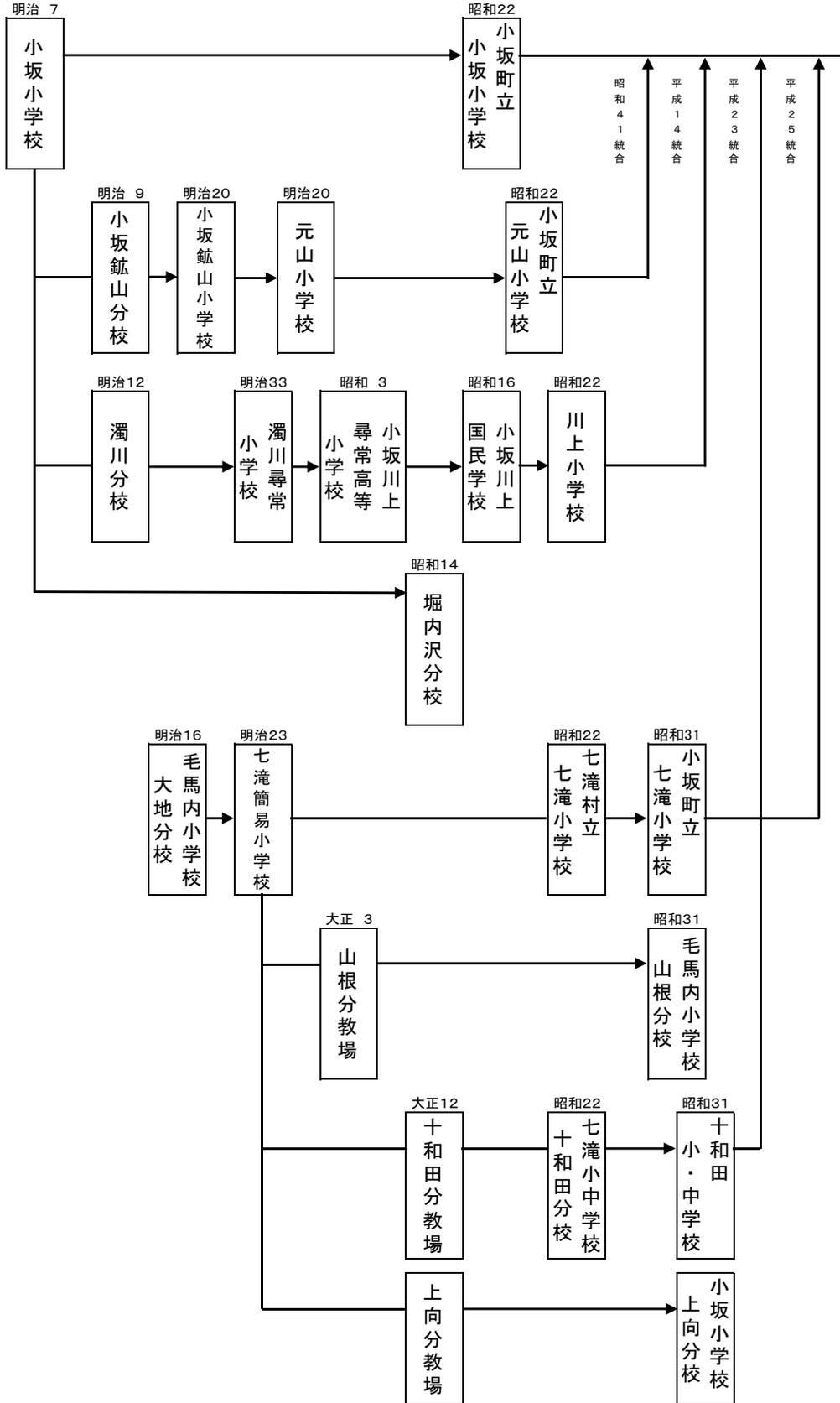
○ 小学校 (毛馬内・錦木地区)



○ 小学校 (大湯・草木地区)

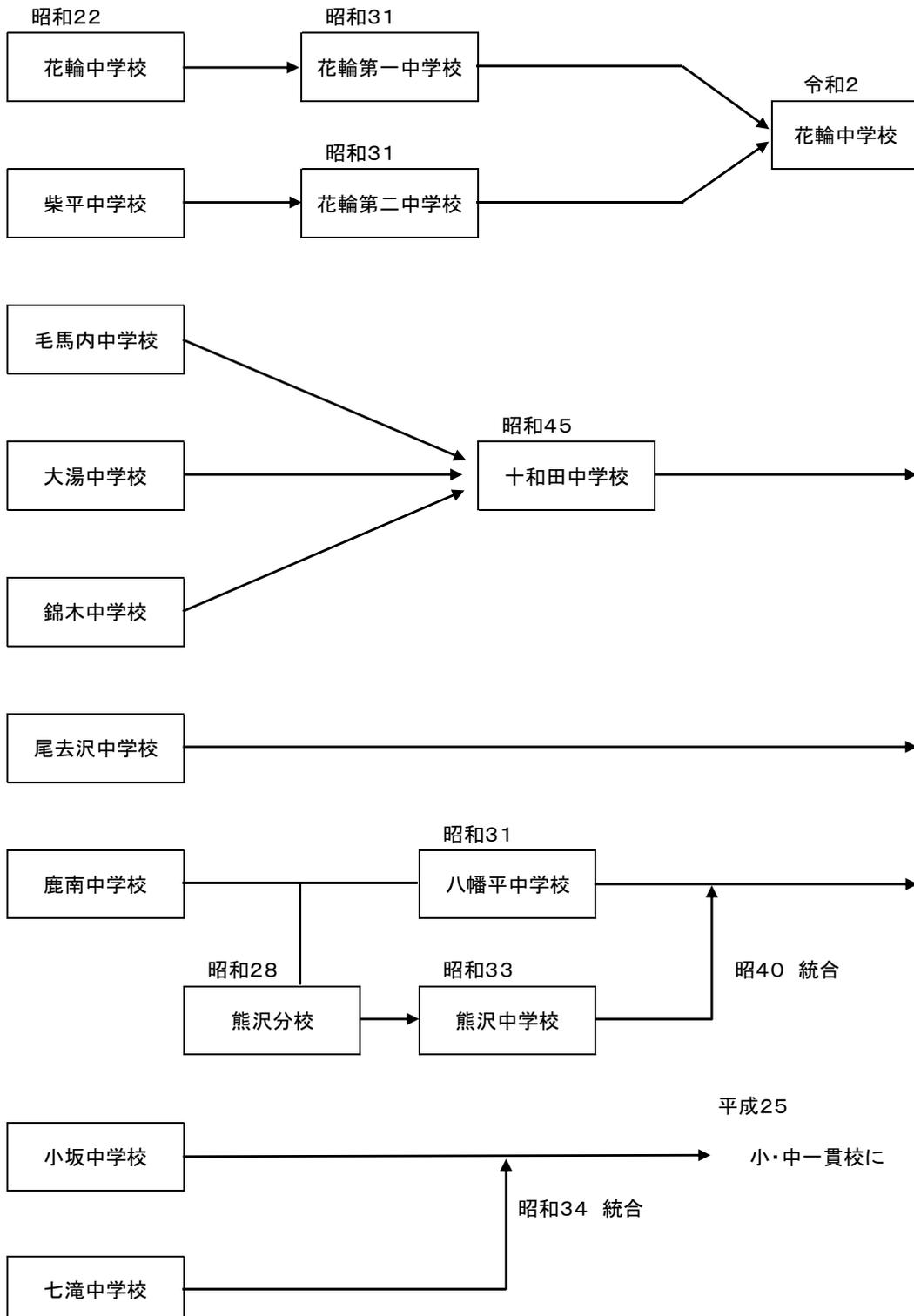


○ 小学校 (小坂地区)



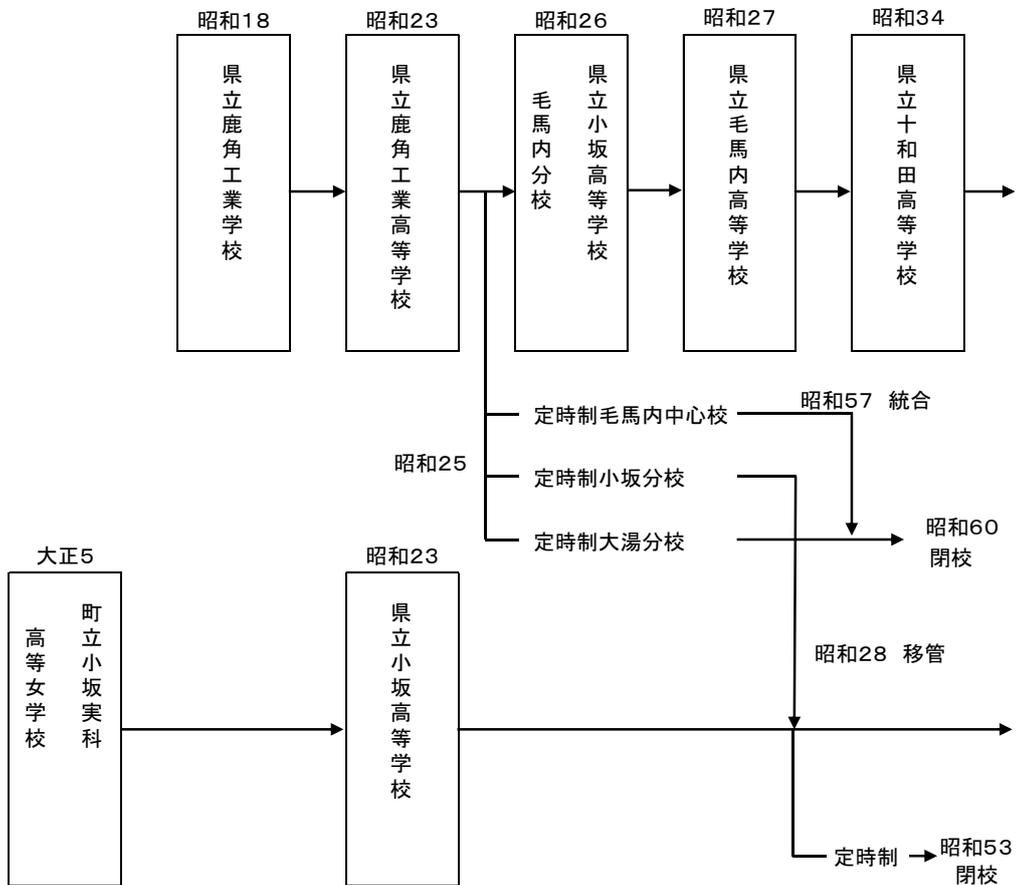
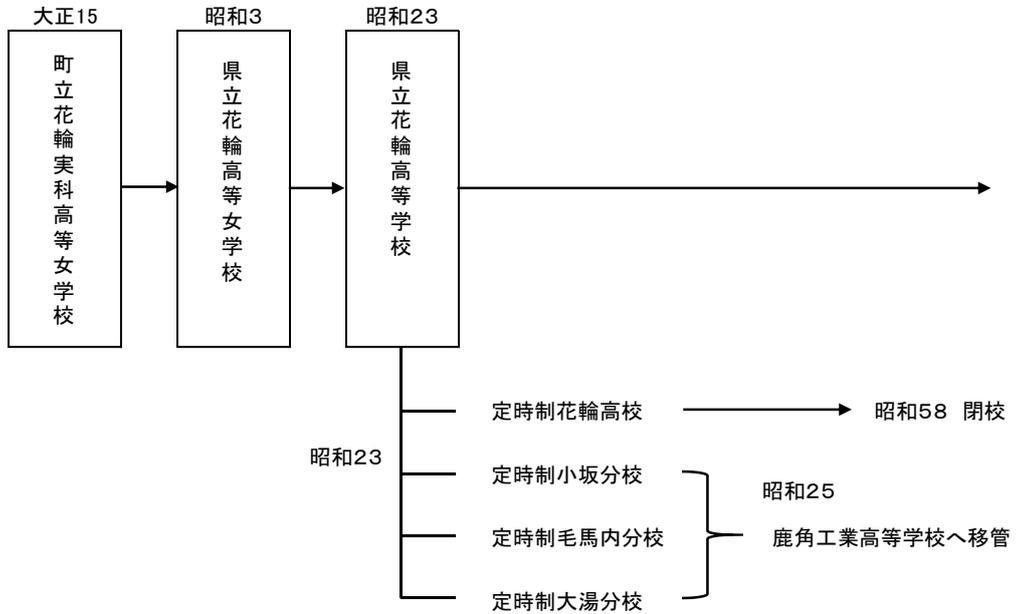
○ 中学校

[1947(昭和22)年4月 新制中学校発足]



○ 高等学校

[鹿角3校の変遷]



西暦・年号早見表

(1)

西暦	年号	西暦	年号	西暦	年号	西暦	年号
1551	天文 20	1601	慶長 6	1651	慶安 4	1701	元禄 14
1552	天文 21	1602	慶長 7	1652	承応 1 慶安 5	1702	元禄 15
1553	天文 22	1603	慶長 8	1653	承応 2	1703	元禄 16
1554	天文 23	1604	慶長 9	1654	承応 3	1704	宝永 1 元禄 17
1555	弘治 1 天文 24	1605	慶長 10	1655	承応 4 明暦 1	1705	宝永 2
1556	2	1606	慶長 11	1656	明暦 2	1706	宝永 3
1557	3	1607	慶長 12	1657	明暦 3	1707	宝永 4
1558	4 永禄 1	1608	慶長 13	1658	万治 1 明暦 4	1708	宝永 5
1559	永禄 2	1609	慶長 14	1659	万治 2	1709	宝永 6
1560	永禄 3	1610	慶長 15	1660	万治 3	1710	宝永 7
1561	永禄 4	1611	慶長 16	1661	万治 4 寛文 1	1711	宝永 8 正徳 1
1562	永禄 5	1612	慶長 17	1662	寛文 2	1712	正徳 2
1563	永禄 6	1613	慶長 18	1663	寛文 3	1713	正徳 3
1564	永禄 7	1614	慶長 19	1664	寛文 4	1714	正徳 4
1565	永禄 8	1615	元和 1 慶長 20	1665	寛文 5	1715	正徳 5
1566	永禄 9	1616	元和 2	1666	寛文 6	1716	享保 1 正徳 6
1567	永禄 10	1617	元和 3	1667	寛文 7	1717	享保 2
1568	永禄 11	1618	元和 4	1668	寛文 8	1718	享保 3
1569	永禄 12	1619	元和 5	1669	寛文 9	1719	享保 4
1570	元亀 1 永禄 13	1620	元和 6	1670	寛文 10	1720	享保 5
1571	元亀 2	1621	元和 7	1671	寛文 11	1721	享保 6
1572	元亀 3	1622	元和 8	1672	寛文 12	1722	享保 7
1573	元亀 4 天正 1	1623	元和 9	1673	延宝 1 寛文 13	1723	享保 8
1574	天正 2	1624	元和 10 寛永 1	1674	延宝 2	1724	享保 9
1575	天正 3	1625	寛永 2	1675	延宝 3	1725	享保 10
1576	天正 4	1626	寛永 3	1676	延宝 4	1726	享保 11
1577	天正 5	1627	寛永 4	1677	延宝 5	1727	享保 12
1578	天正 6	1628	寛永 5	1678	延宝 6	1728	享保 13
1579	天正 7	1629	寛永 6	1679	延宝 7	1729	享保 14
1580	天正 8	1630	寛永 7	1680	延宝 8	1730	享保 15
1581	天正 9	1631	寛永 8	1681	延宝 9 天和 1	1731	享保 16
1582	天正 10	1632	寛永 9	1682	天和 2	1732	享保 17
1583	天正 11	1633	寛永 10	1683	天和 3	1733	享保 18
1584	天正 12	1634	寛永 11	1684	貞享 1 天和 4	1734	享保 19
1585	天正 13	1635	寛永 12	1685	貞享 2	1735	享保 20
1586	天正 14	1636	寛永 13	1686	貞享 3	1736	享保 21 元文 1
1587	天正 15	1637	寛永 14	1687	貞享 4	1737	元文 2
1588	天正 16	1638	寛永 15	1688	貞享 5 元禄 1	1738	元文 3
1589	天正 17	1639	寛永 16	1689	元禄 2	1739	元文 4
1590	天正 18	1640	寛永 17	1690	元禄 3	1740	元文 5
1591	天正 19	1641	寛永 18	1691	元禄 4	1741	寛保 1 元文 6
1592	文禄 1 天正 20	1642	寛永 19	1692	元禄 5	1742	寛保 2
1593	文禄 2	1643	寛永 20	1693	元禄 6	1743	寛保 3
1594	文禄 3	1644	正保 1 寛永 21	1694	元禄 7	1744	寛保 4 延享 1
1595	文禄 4	1645	正保 2	1695	元禄 8	1745	延享 2
1596	文禄 5 慶長 1	1646	正保 3	1696	元禄 9	1746	延享 3
1597	慶長 2	1647	正保 4	1697	元禄 10	1747	延享 4
1598	慶長 3	1648	正保 5 慶安 1	1698	元禄 11	1748	寛延 1 延享 5
1599	慶長 4	1649	慶安 2	1699	元禄 12	1749	寛延 2
1600	慶長 5	1650	慶安 3	1700	元禄 13	1750	寛延 3

西暦・年号早見表

(2)

西暦	年号	西暦	年号	西暦	年号	西暦	年号
1751	寛延 4 宝暦 1	1801	享和 1 寛政 13	1851	嘉永 4	1901	明治 34
1752	宝暦 2	1802	享和 2	1852	嘉永 5	1902	明治 35
1753	宝暦 3	1803	享和 3	1853	嘉永 6	1903	明治 36
1754	宝暦 4	1804	享和 4 文化 1	1854	安政 1 嘉永 7	1904	明治 37
1755	宝暦 5	1805	文化 2	1855	安政 2	1905	明治 38
1756	宝暦 6	1806	文化 3	1856	安政 3	1906	明治 39
1757	宝暦 7	1807	文化 4	1857	安政 4	1907	明治 40
1758	宝暦 8	1808	文化 5	1858	安政 5	1908	明治 41
1759	宝暦 9	1809	文化 6	1859	安政 6	1909	明治 42
1760	宝暦 10	1810	文化 7	1860	安政 7 万延 1	1910	明治 43
1761	宝暦 11	1811	文化 8	1861	文久 1 万延 2	1911	明治 44
1762	宝暦 12	1812	文化 9	1862	文久 2	1912	大正 1 明治 45
1763	宝暦 13	1813	文化 10	1863	文久 3	1913	大正 2
1764	明和 1 宝暦 14	1814	文化 11	1864	文久 4 元治 1	1914	大正 3
1765	明和 2	1815	文化 12	1865	慶応 1 元治 2	1915	大正 4
1766	明和 3	1816	文化 13	1866	慶応 2	1916	大正 5
1767	明和 4	1817	文化 14	1867	慶応 3	1917	大正 6
1768	明和 5	1818	文政 1 文化 15	1868	慶応 4 明治 1	1918	大正 7
1769	明和 6	1819	文政 2	1869	明治 2	1919	大正 8
1770	明和 7	1820	文政 3	1870	明治 3	1920	大正 9
1771	明和 8	1821	文政 4	1871	明治 4	1921	大正 10
1772	明和 9 安永 1	1822	文政 5	1872	明治 5	1922	大正 11
1773	安永 2	1823	文政 6	1873	明治 6	1923	大正 12
1774	安永 3	1824	文政 7	1874	明治 7	1924	大正 13
1775	安永 4	1825	文政 8	1875	明治 8	1925	大正 14
1776	安永 5	1826	文政 9	1876	明治 9	1926	大正 15 昭和 1
1777	安永 6	1827	文政 10	1877	明治 10	1927	昭和 2
1778	安永 7	1828	文政 11	1878	明治 11	1928	昭和 3
1779	安永 8	1829	文政 12	1879	明治 12	1929	昭和 4
1780	安永 9	1830	文政 13 天保 1	1880	明治 13	1930	昭和 5
1781	天明 1 安永 10	1831	天保 2	1881	明治 14	1931	昭和 6
1782	天明 2	1832	天保 3	1882	明治 15	1932	昭和 7
1783	天明 3	1833	天保 4	1883	明治 16	1933	昭和 8
1784	天明 4	1834	天保 5	1884	明治 17	1934	昭和 9
1785	天明 5	1835	天保 6	1885	明治 18	1935	昭和 10
1786	天明 6	1836	天保 7	1886	明治 19	1936	昭和 11
1787	天明 7	1837	天保 8	1887	明治 20	1937	昭和 12
1788	天明 8	1838	天保 9	1888	明治 21	1938	昭和 13
1789	天明 9 寛政 1	1839	天保 10	1889	明治 22	1939	昭和 14
1790	寛政 2	1840	天保 11	1890	明治 23	1940	昭和 15
1791	寛政 3	1841	天保 12	1891	明治 24	1941	昭和 16
1792	寛政 4	1842	天保 13	1892	明治 25	1942	昭和 17
1793	寛政 5	1843	天保 14	1893	明治 26	1943	昭和 18
1794	寛政 6	1844	弘化 1 天保 15	1894	明治 27	1944	昭和 19
1795	寛政 7	1845	弘化 2	1895	明治 28	1945	昭和 20
1796	寛政 8	1846	弘化 3	1896	明治 29	1946	昭和 21
1797	寛政 9	1847	弘化 4	1897	明治 30	1947	昭和 22
1798	寛政 10	1848	弘化 5 嘉永 1	1898	明治 31	1948	昭和 23
1799	寛政 11	1849	嘉永 2	1899	明治 32	1949	昭和 24
1800	寛政 12	1850	嘉永 3	1900	明治 33	1950	昭和 25

西暦・年号早見表

(3)

西暦	年号	西暦	年号
1951	昭和 26	2001	平成 13
1952	昭和 27	2002	平成 14
1953	昭和 28	2003	平成 15
1954	昭和 29	2004	平成 16
1955	昭和 30	2005	平成 17
1956	昭和 31	2006	平成 18
1957	昭和 32	2007	平成 19
1958	昭和 33	2008	平成 20
1959	昭和 34	2009	平成 21
1960	昭和 35	2010	平成 22
1961	昭和 36	2011	平成 23
1962	昭和 37	2012	平成 24
1963	昭和 38	2013	平成 25
1964	昭和 39	2014	平成 26
1965	昭和 40	2015	平成 27
1966	昭和 41	2016	平成 28
1967	昭和 42	2017	平成 29
1968	昭和 43	2018	平成 30
1969	昭和 44	2019	平成 31 令和 1
1970	昭和 45	2020	令和 2
1971	昭和 46	2021	
1972	昭和 47	2022	
1973	昭和 48	2023	
1974	昭和 49	2024	
1975	昭和 50	2025	
1976	昭和 51	2026	
1977	昭和 52	2027	
1978	昭和 53	2028	
1979	昭和 54	2029	
1980	昭和 55	2030	
1981	昭和 56	2031	
1982	昭和 57	2032	
1983	昭和 58	2033	
1984	昭和 59	2034	
1985	昭和 60	2035	
1986	昭和 61	2036	
1987	昭和 62	2037	
1988	昭和 63	2038	
1989	平成 1 昭和 64	2039	
1990	平成 2	2040	
1991	平成 3	2041	
1992	平成 4	2042	
1993	平成 5	2043	
1994	平成 6	2044	
1995	平成 7	2045	
1996	平成 8	2046	
1997	平成 9	2047	
1998	平成 10	2048	
1999	平成 11	2049	
2000	平成 12	2050	

干支(かんし)順位表

1	甲子	きのえね	カツシ	31	甲午	きのえうま	コウゴ
2	乙丑	きのとうし	イツチュウ	32	乙未	きのとひつじ	イツビ
3	丙寅	ひのえとら	ヘイイン	33	丙申	ひのえさる	ヘイシン
4	丁卯	ひのとう	テイボウ	34	丁酉	ひのととり	テイユウ
5	戊辰	つちのえたつ	ボシン	35	戊戌	つちのえいぬ	ボジュツ
6	己巳	つちのとみ	キシ	36	己亥	つちのとい	キガイ
7	庚午	かのえうま	コウゴ	37	庚子	かのえね	コウシ
8	辛未	かのとひつじ	シンビ	38	辛丑	かのとうし	シンチュウ
9	壬申	みずのえさる	ジンシン	39	壬寅	みずのえとら	ジンイン
10	癸酉	みずのととり	キユウ	40	癸卯	みずのとう	キボウ

11	甲戌	きのえいぬ	コウジュツ	41	甲辰	きのえたつ	コウシン
12	乙亥	きののとい	イツガイ	42	乙巳	きのとみ	イツシ
13	丙子	ひのえね	ヘイシ	43	丙午	ひのえうま	ヘイゴ
14	丁丑	ひのとうし	テイチュウ	44	丁未	ひのとひつじ	テイビ
15	戊寅	つちのえとら	ボイン	45	戊申	つちのえさる	ボシン
16	己卯	つちのとう	キボウ	46	己酉	つちのととり	キユウ
17	庚辰	かのえたつ	コウシン	47	庚戌	かのえいぬ	コウジュツ
18	辛巳	かのとみ	シンシ	48	辛亥	かののとい	シンガイ
19	壬午	みずのえうま	ジンゴ	49	壬子	みずのえね	ジンシ
20	癸未	みずのとひつじ	キビ	50	癸丑	みずのとうし	キチュウ

21	甲申	きのえさる	コウシン	51	甲寅	きのえとら	コウイン
22	乙酉	きののととり	イツユウ	52	乙卯	きののとう	イツボウ
23	丙戌	ひのえいぬ	ヘイジュツ	53	丙辰	ひのえたつ	ヘイシン
24	丁亥	ひののとい	テイガイ	54	丁巳	ひのとみ	テイシ
25	戊子	つちのえね	ボシ	55	戊午	つちのえうま	ボゴ
26	己丑	つちのとうし	キチュウ	56	己未	つちのとひつじ	キビ
27	庚寅	かのえとら	コウイン	57	庚申	かのえさる	コウシン
28	辛卯	かののとう	シンボウ	58	辛酉	かののととり	シンユウ
29	壬辰	みずのえたつ	ジンシン	59	壬戌	みずのえいぬ	ジンジュツ
30	癸巳	みずのとみ	キシ	60	癸亥	みずののとい	キガイ

あ と が き

先人顕彰館では毎年鹿角市の先人を顕彰・展示して30年余になるが、今後の先人選定の一助になればと企画したのが、本書の『鹿角人物事典』である。当初3年計画での完成を目指し、プロジェクトがスタートしたのは2013（平成25）年からであった。

まず基本資料とした『鹿角市史』から500名ほどの人物を抽出し、これに各分野から補足した人物を加えながら、生没年と功績のタイトルを付して取捨選択を繰り返すという作業が続いた。ところが、これに何と丸々2年を費やしてしまった。さらに研究員10名に各地域の人物を割り当て、本文作成と両親名・生没年の確認・精査という段階で、大きな障害が待っていた。突き当たったのが両親名と生没年が分からない人物が多いという点であった。しかも文献調査だけで事蹟が不十分という人物も少なくなかった。子孫・親族などの関係者が見つからないという人物も多かった。今日の核家族化と少子高齢化に加え、個人情報保護法の壁が大きく立ちふさがったと言うほかはない。しかし、月2回の作業を毎週日曜日まで増やし、墓地調査をするなど各地の関係機関をたずね、あらゆる関係者に話を聞きながら、2020（令和2）年に入って、ようやくこぎつけることができた。

本書は鹿角市先人顕彰館の小田嶋隆一館長と石井加奈子・鶴目陽両氏による献身的な協力と、鹿角市教育委員会の懇切なご指導によって発刊できたといっても過言ではない。厚く御礼申し上げる次第である。もとより完璧なものには程遠く、漏れた人物や本文の事蹟不十分や誤りが多々あることは否めない。今後の指針とすべく、ご意見・ご教示を切に請いたい。本書が鹿角市内外の小・中・高の児童や生徒および学生や市民の皆様にも、少しでも活用していただけるならば望外の喜びである。末尾に本書の編集・執筆者と協力者を掲げておく。

編集・執筆者（順不同）

高木 英子 上関 光世 豊口 裕 畠山 一男 三上 芳子
阿部 安男 駒ヶ峯 茂 金澤 文三 関 厚 田中 忠美

協力者(順不同)

奈良東一郎 小田島哲夫 三上 豊 豊口 秀一 木村 大作(故人)
斎藤 長八(故人)

このほか、鹿角市立花輪図書館・十和田図書館をはじめ、多くの関係機関や個人の皆様にご協力いただきました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

2020年3月

鹿角市先人顕彰館研究員一同

鹿角市先人顕彰館調査資料

『鹿角人物事典』

発行日 令和2年3月31日

編集 鹿角市先人顕彰館研究員

発行 鹿角市教育委員会

〒018-5292

秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1

電話 0186-30-0294

FAX0186-30-1140